
俺はレズになりたくなかった

ぴーせる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺はレズになりたくなかった

【Nコード】

N2960M

【作者名】

ぴーせる

【あらすじ】

16歳未満は読んじやダメだからねっ！ 絶対なんだからねっ！
ここの記述は、あらすじの準備が出来次第変更させていただきますので、ご了承ください。

2011/03/23 追記：最新話投稿にあたって「章管理」機能を使うため、本作全体の体系的な構成を変更しました。内容に変更はありません。読みにくくなったなどのご意見があれば知らせていただけると幸いです。

01（前書き）

執筆開始日：2009/04/02
小説家になろう初公開日：2010/06/30

ゆうなと付き合ってから三ヶ月はあっという間だった。

俺から告白したのが六月、梅雨もあけて夏を感じ始めた頃。

それからデートを重ね、俺の部屋に呼んだり、ゆうなのお家に遊びに行ったり。

定番の映画館や遊園地、夏だからプールにも海にも連れて行って、ラブホにだって行った。

思い返せば止まらないほど色んなことをしてきたのに、あれだけ緊張した告白が三ヶ月も前のことだなんて思えない。

楽しいことというのは、やっぱりそういうことなんだ。

ゆうなのことを思うだけで、俺の心はぬくもりに溢れる。

百六十に満たない身長に、程よく締まった体。

肩まで伸びた茶髪はふわふわで、撫でるとこちらの指まで綺麗になっような錯覚さえ起きる。

整った顔は綺麗で、柔らかい雰囲気をもっているのに強い芯を持っているようで、自慢の彼女だ。

ゆうなの隣を歩くだけで誇りに思い、負けないようちゃんと胸を

張れる。

そんな俺を「あきらは、いじらしくて可愛いね」なんて言われてしまつて、少しばかり恥ずかしい。

でも釣り合わないなんて思われたくないから、俺はいつだって姿勢を良くするんだ。

同じ大学に通っている俺たちは、学科こそ違えど、学年は同じ。

互いの空き時間で会うこともあるし、週に二回は遊べるように工夫もしている。

付き合つて三ヶ月が危ないとはよく聞くけど、今の俺たちにそれはなかった。

順風満帆。

いくら顔を突き合わせも笑顔は絶えず、冗談混じりでも結婚の話が上がるのは悪いことじゃないと思う。

だから、俺は疑いもしなかった。

俺たちが歩く道は明るいと思じていたし、蹴躓いたって手を取り合えば平気なんだって。

喧嘩もしたことなくって、いつも笑い合える関係が続くんだって。

そう思っていた。

九月十二日、俺の誕生日。

その日もいつものように、いつも以上に楽しくなるって。

疑うはずがないじゃないか。

……今思えば、疑えるはずなんてない。

俺の誕生日に、俺が女に成ってしまうなんて予想できるわけないんだから。

九月十一日、水曜日。

もう間もなく日付が変わるところ。

俺は携帯電話のディスプレイを眺め、まだかな、まだかな、と木曜日に変わる瞬間を待ち望んでいた。

というのも、明日九月十二日こそ俺の誕生日。

彼女のゆうなはなかなかマメな性格で、誕生日になった瞬間、何かしらのお祝いをしてくれると俺は知っていたからだ。

なにせ、ゆうなは隠し事をするのが苦手。

一昨日デートしたときに、これでもかとしつこく言っていた「誕生日になるまで起きててね」の言葉。

これから考えるに、誕生日になった瞬間に何かしようという目論みは明白だ。

まさかこの終電のなくなる時間に、彼女の家から数駅離れたうちに来るはずもない。

だから、おそらくお祝いメールか、お祝いの電話をくれるのだろう。

そう踏んで、俺はじつと携帯電話とにらめっこをしていたのだ。

今か今かと待ち望む気持ちを抑え、俺はじつと携帯電話のディスプレイを見つめる。

電波と電池が十分であることを確かめ、一度メール画面を開いた。その受信メールの中から、一番最後に届いたメールを見る。

『明日はあきらの誕生日だね！ プレゼントは何がいい？ なんでもあげちゃうよー！』

今日の夕方届いた、ゆうなからのメールだ。

ゆうなは今時の女子には珍しく、絵文字や顔文字など、文章を装飾するものを使うのが苦手らしい。

初めは文章のみのメールに物足りなさを覚えたが、今となっては慣れを通り越し、俺もゆうなと同様に絵文字や顔文字を使うことがなくなった。

そんなゆうなのシンプルメールを見て、思わず表情をほころばせてしまう。

なんと嬉しいメールだろうか。

何よりも、『あげちゃうよー！』の『よー！』が可愛らしい。

ビックリマークが二つもついてる『よ!~!』なんて、どれだけ気合を入れてくれているんだろうか。

ゆうな可愛いよ、ゆうな。

その可愛いメールを読み直し終えたころ。

俺の誕生日へのカウントダウンが、もう間もなくというところになっていた。

ヤバイ。めっちゃドキドキしてきた。

祝ってくれるのは、いつもの愛らしいメールか。

はたまた可愛い声の聞ける電話か。

どちらにせよ嬉しいことに違いはない。

それに、明日の誕生日デートはどこに連れて行ってくれるのだろう。

『あきらの誕生日なんだから、デートプランは私に任せて!』

と豪語していたゆうなの言葉を思い出し、期待に胸を膨らませる。

ああ、こんなにも楽しみにしている誕生日なんて、何年振りのことだろう。

いつもはさらりと流していた誕生日がこんなに幸せと思えるだなんて、全部ゆうなのおかげだ。

明日のデートで、撫でられるのが好きなゆうなも嫌がるぐらいたくさん撫でてやろう。

でへへ。ニヤニヤしてきた。

そうこうしている間に、携帯電話のディスプレイに表示されている時計が日付変更のすぐ手前まで刻んでいた。

五十、五十一、と進む秒数に、思わず固唾を飲む。

残りの秒数が両手から片手に収まるまでになり、心拍数が上昇していく様が手に取るように分かった。

そして秒数表示が繰り上がり、すべての数字が零に並んだ瞬間

俺の髪の毛が、何かが爆発したかのようにぶわっと伸びた。

「うわっ……！」

視界の左右を占める大量の髪の毛の存在を視認した瞬間に、思わずあげた自身の声。

それに俺はぎょっとして、もう一度声をあげかける。

あまりにも高い声。

女性の声と取るにふさわしい高さのそれが、間違いなく俺の喉から発せられたのだから。

それに反応して喉元に手を当てると、俺はさらに驚いた。

常にその存在をかたく主張し続けていた喉仏が、全くといっていいほどなくなっていた。

突如長々と伸びた髪の毛と、女性らしい声への変貌。

一秒にも満たない時間の中で繰り広げられた劇的变化に、戸惑わざるを得ない。

（な、なんで、こんな……っ）

が、それに驚いていられる暇はなかった。

なぜならこのとき、俺の家のドアからガチャガチャ鍵の開けられる音がしたからだ。

突然聞こえたその音に、ドキリと心臓が跳ね上がる。

ワンルームタイプである俺の家の玄関は、部屋の中央にいる俺から何が起きたのかを見ることが出来る。

つまり、それだけ間近で何者かに部屋の鍵を開けられようとしているのだ。

こんな状況で、こんな時間に誰が……。

そう思って玄関先に振り向くと

勢いよくドアを開けた彼女の、ゆうなの姿が俺の視界に入ってきた。

「あかり誕生日おめでとう！」

俺の部屋に乗り込んできた彼女が開口一番に言った言葉。

それがこれだった。

たしかに彼女にはうちの合い鍵を渡してある。

まさか終電のなくなるこの時間にうちへ訪問してくるとは思わなかったが、だからこそそのサプライズとも言えるだろう。

いきなり部屋の鍵を開けられたときには誰かと思ったが、それが彼女だったのなら納得だ。

だが、

（あかりって……誰だ？）

今日、ついさっきをもって誕生日を迎えたのは、他ならぬ俺、あきらだ。

その俺の部屋に「誕生日おめでとう！」と乗り込んできたのにも

関わらず、その矛先は誰とも分からぬ「あかり」という名前。

わけが分からなくて閉口していると、靴を彼女用のスリッパに履き替えたゆうなが、俺のすぐ目の前まで歩み寄ってきた。

そして座り込む俺に視線を合わせるようにしゃがみ、間もなく

「大好きだよ、あかり！」

微笑む彼女に、俺は抱きしめられた。

抱きしめられたことにより、むにゅ、と柔らかく潰れるゆうなの胸と……小さな、もう一つの胸。

合わせて四つの柔らかい感触にぎょっとし、反射的に視線をそれへと向けた。

するとどうだろう。

Cカップの大きさを誇るゆうなの胸が、“俺の小さな胸”と押し合っているではないか。

その小さな胸の方は、ゆうなのそれと比べるのもはばかるほどの薄い膨らみしか持っていない。

が、淡くも確かに俺の胸として存在を主張しているのだ。

あまりのことに視線が釘付けになり、また、ろくに思考も巡らな

い。

そこにある、という視覚の確認しか、俺の頭には出来なかった。

「もう、どこ見てるのよ。あかりのエッチ」

すねるような、どことなくからかいの色を含んだゆうなの声が頭上から降り注ぎ、自然と視線がそちらに向ける。

……が、俺の視線がゆうなのにやけたそれと交わったのは、顔をだいぶ上に向けてから。

つまり、お互いに座っていないがらして、俺よりも身長が低いはずのゆうなを見上げているのだ。

「な……なんで……っ?」

「ん?」

無意識に出したしどろもどろの、俺の女みたいな高い声に、ゆうなは可愛らしい仕草で小首を傾げる。

……いや、身長が高いだけじゃない。

いつもは俺に“抱きつく”程度にしか密着できていなかったゆうなが……。

なんで今や俺を包み込むようにして“抱きしめて”いるんだよ!?

わけが分からない。

なんで？

なんでゆうなが俺よりも大きく

いや、それよりも……。

なんで俺は女みたいになってるんだよ！？

茫然自失、とはこのことだろう。

あまりに分からなすぎる状況に、俺の頭はオーバーヒートのちにショートを起こしそうになる。

「あかり、どうしたの？　なんか変な顔してるよ？」

ハテナでいっぱいに埋め尽くされた脳髓に響いてきたゆうなの心配そうな声。

そして、また「あかり」。

だから、誰だよ……。

「あかりって誰なんだよっ？」

「へ？」

甲高く怒鳴った俺の声に、ゆうなはきょとした顔を向ける。

「誰って……あなたのことよ？　他にあかりって名前の女の子、いないでしょ？」

「は？」

さも当たり前のように答えたゆうなに、今度は俺がきょとんとしてしまう。

俺の名前は、言わずもがな「あきら」だ。

彼女だってそれを知らないわけがないし、間違えるはずだってないのに……。

俺が、あかり？

しかも、女の子っ？

「はああああっ！？」

「ちょっと、やだ。いきなり大声出さないでよ」

「い、いやいや！　それどころじゃないでしょー！」

顔をしかめて耳をおさえるゆうなの肩を揺さぶる。

すごく迷惑そうな顔をされたが、それどころじゃない。

「俺があかりってどういうことだよ？　しかも女の子って！」

「だからあ、いつも言ってるじゃない。その「俺」って言い方やめ
てっ。もっと女の子らしい言い方あるでしょ？」

「そうじゃなくてえ〜！」

ついこの間まで小さく華奢だと思っていた、今は大きく感じるゆ
うなの肩を揺らす。

同時に栗色のゆうなの髪の毛も大きくなびき、密着しているとい
ってもいいほど近い位置にいる俺に、その毛先がチクチクと触れた。

その間もなく、怒ったようにゆうなは眉尻をつり上げた。

「もうっ、さつきからどうしたの？　私が急に来たことがそんな
に嫌だったっ？」

「い、嫌ってわけじゃ……」

「ならなんで？　あかり、ちょっとおかしいよっ」

おかしいのはそっちだよ！

なんて、そんなこと、とてもじゃないけど言えるような状況じゃ
なかった。

ゆうながこうして怒る姿を見たのなんて、最近はいつも仲が良か
ったせいか、かなり久々かもしれない。

そのせいで、こうして間近で怒鳴られると気持ちが萎縮してしまう。

「まったく、なんなの？ さっきからいきなり大声出すし、わけ分かんないこと言い出すし」

加えて、逆転した身長差というものもあるかもしれない。

いつもと同じく、小さくて華奢なゆうなら、怒られたことに反省するにせよ、ここまで萎縮することはない。

「誕生日だからビックリさせよう、って遊びに来たのに、なに？ 私への当てつけのつもりなの？」

だが、今はなぜか俺たちの身長差が丸々入れ替わったような状況なのだ。

「ちょっと、聞いてるのっ？」

自然と逆らうことのできない目上の人に叱られているような気になってしまって、恥ずかしいことに肩がビクリと震えてしまった。

うつ、なんだか情けない……。

「……あ、ごめん。大丈夫？」

俺の肩が震えて間もなく、不意にかけられた優しい声。

思わずうつむいていた俺が顔を上げると、途端にゆうなが目を見開き、驚いたような表情になった。

「え、嘘。泣いてるの？」

……はい？

いやいや、泣くつて。

そんな子供じゃあるまいし、怒られたぐらいで泣くわけが……。

つて、あれ？

すう、と頬を流れた一筋の感触。

まさか、と思ってその跡を指先で撫でると、確かにそこには何かしらの水分が通っていた。

……え、ええええっ！？

「あゝん、ごめんねごめんね！ 強く言い過ぎちゃったよ！ 謝るから泣かないでえゝ！」

逆にそっちが泣いているのではないかと思うほど悲壮の色を含んだ言葉と共に、ゆうなはさっき部屋に上がってきた時と同様、俺を強く抱きしめてくる。

全身を包まれるような大きな抱擁に、その不慣れからぞわりと嫌な気持ちをする。

いや……。

なんで俺泣いてるんだよ。

ぎゅう、と後頭部に手を回されながら抱きしめられ、ゆうなの首元に顔を押し付ける形になった。

ゆうなに抱きしめられている、という状況だけ考えれば、今の状態はなかなか嬉しいものであっただろう。

だが、それだけでないのだ。

なぜか女みたいな体になってしまっているし、当たり前のようにゆうなからは女の子扱い。

俺が縮んだのかゆうなが大きくなったのかは分からないにせよ、逆転した身長差で抱きすくめられるようになっていて。

拳げ句の果てに、まったく意図していないにも関わらず、俺の頬に涙が流れたのだ。

こんなわけの分からない状態で、素直に嬉しがれるはずがないだろう。

誰か……。

誰でもいいから、今のこの状況を分かりやすく説明してくれ！

「うつ……」

彼女に怒られただけで泣き、その彼女に慰められる俺。

なんと情けないことだろう。

情けなさすぎて、こうして抱きしめられながらゆうなの鼓動を聞くことしかできない。

頼むから、こんな嘘みたいなこと、夢であってくれ……。

*

ゆうなに抱きしめられてからどのくらい経っただろうか。

しばらく抱きしめられ続けたあと、身を離されるなり、

「うん、だいぶ落ち着いたみたいだね」

と、ほればれとするような可愛らしい微笑みをこぼしながら言われた。

元から取り乱したつもりはなかったが、ゆうなから見ればそう見えたのだろう。

泣いたことさえ俺の範疇外の出来事だったのだから、落ち着いたように見えるのもまた俺の意識外かもしれないし。

まあそんなことより。

「ゆうな、聞いてほしいことがある」

「ん？ 聞いてほしいこと？」

俺の言葉をおうむ返しするようにして小首を傾げるゆうな。

その仕草があまりに可愛すぎて思わず抱きしめたくなったが、どうせ今抱きしめようとしたところで逆に抱きすくめられるのが落ちとして見えているし。

なによりそんな状況じゃない、と自分を戒め、俺は一度立ち上がって傍にあるベッドに腰掛けた。

これなら、なぜか開いてしまった身長差を埋め、またいつものように俺がゆうなを見下ろすことが出来るだろう、という目論みだ。

……まあ、それに反して、ゆうなは俺の隣に腰掛けてきたのだが。

俺は隣に座るゆうなを見上げ、これから話すことを考える。

その内容は、もちろん今のおかしな状態のこと。

これまでの状況から判断するに、どうやら俺の誕生日になった瞬間、俺は女になってしまったらしい。

しかも比較的小さいゆうなよりも背が低く、貧しい体型の女に。

名前はあかり、だったか。

もちろん、こんな馬鹿げたことを丸々信じているわけじゃない。

だが、何よりもこれが事実なのだ。

何度見下ろしても体は華奢になっているし。

ゆうなに抱きしめられれば、ゆうなの胸に俺の薄っぺらい胸が押し潰される。

そんな状況の中では、無理にでも信じざるを得ないだろう。

そして、だからこそううなに話そうと思ったのだ。

この不思議極まりない現状を。

「話したいことって、なに？」

俺が黙っていることに痺れを切らしたのだろう。

優しく促すような言葉をゆうなに投げかけられ、俺はゆっくりと頷いた。

そして口を開き、話し出す。

俺はあかりという名前ではなく、あきらだということ。

つい昨日まではれっきとした男であったこと。

そして、誕生日を迎えた瞬間にこうなってしまったこと。

そのすべてをだ。

「と、いうわけなんだ」

「う、うん……」

数分に渡った話を終え、それに対しゆうなは戸惑いを見せながら頷いた。

やはり、一度に理解するのは無理というものだろう。

ほんの一瞬の内に女体化してしまったなど、当事者である俺でさえ、素直に信じるのには抵抗があるほどだ。

いくら最愛の彼女と言えど、いきなり信じるなんて

「分かった、信じるよ」

……どうやら俺は、ゆうなを見くびっていたようです。

思わずその頭を目一杯撫でてやりたくなるような笑顔で、ゆうなは俺に向け強く頷いた。

「し、信じてくれるのか？」

「もちろん。私はあかり……じゃなかった。あきらの彼女だもん。信じるに決まってるよ」

か、可愛すぎるぜ……！

なんと健気な言葉だろう。

あまりに嬉しい言葉を受け、俺の頬は完全に緩みきってしまう。

はたから見たら、きっと気持ち悪いぐらいニヤニヤしているに違いない。

ああ畜生、「信じてくれるのか？」なんてゆうなの気持ちを疑うような言葉を投げかけてしまった過去の俺を殴りたい。

組み伏せて再起不能になるまで顔面を殴打してやりたい気分だ。

「ありがとう、ゆうな。そう言ってくれると俺は……」

「水臭いこと言わないで。私、あきらの彼女でしょ？」

ゆ、ゆうなたああんっ！

なんと出来た彼女だろう、と思わず感慨深くなってしまふ。

まったく、俺には過ぎた彼女だ。

そんな、言われた途端に嬉しすぎて抱きついてしまうセリフを、さも当たり前のように言つてのけるなんて。

やはり、ゆうなは最強だ。

「もう。あかり……じゃなくて、あきらは甘えん坊さんだね」

そう言い、ゆうなは自身の胸に飛び込んだ俺を優しく包み込んでくれた。

いや、本当は抱きしめようとしたんだけど、体格の差でそれが出なかったんだ。

つつか、大学三年の俺を「甘えん坊さん」呼ばわりかい。

「それにしてもビックリだなー。まさか“レズビアン”の私に彼氏がいたなんて」

「れ、レズビアン……?」

不意に投げかけられた言葉に、反射的に聞き返してしまった。

「うん、レズビアン。女の子しか愛せない女の子のことだよ」

レズビアンって、ゆうなの彼氏である俺は男で……いや、そうか。

なぜだかは分からないが、ゆうなは俺のことを「あかり」という名前の女だと思っていた。

そして、その「あかり」の恋人だったのだ。

つまり女同士の、ゆうなの言うとおり、レズビアンということになる。

……いや、男の俺と付き合ってたけどね？

ここで俺は思考を始める。

ゆうなは、昨日までは確かに俺と交際していた。

そのことは、ついこの間行った「付き合って三ヶ月記念デート」の記憶が鮮明に残っている以上、揺るがない。

しかし、ゆうなは「あかり」と付き合っていたと言う。

加えて自身をレズビアンと言ったのけたのだ。

隠し事が下手なゆうなの性格や、先ほどまでの言動を統計すればその事にも嘘はない。

だが、それらをそれぞれ立たせたのでは、事が矛盾してしまう。

確かにゆうなは男の俺と付き合っていた。

なのにも関わらず、自分のことをレズビアンだと言い切り、また、ゆうなの中では「あきら」の代わりに「あかり」がそのポジションにいる、だなんて。

明らかに筋の通っていないこの状況。

だが、まさかゆうなが俺を騙し、レズビアンであることを隠して二股していたわけはあるまい。

そんなことをする理由など塵もないし、隠し事が苦手なゆうなが今まで隠し通せているという見解には無理がある。

また、男の俺と付き合ってきた事実自体が無根で、ただの妄想才子というはずもない。

それならゆうなが俺の家まで来るはずもないし、たとえ妄想だったとしても、俺が「あかり」になってしまっている今の状況の説明がつかないのだ。

しかし、これならどうだろう。

パラレルワールド、という説は。

「IFの世界」や、「もしもの世界」など。

呼び方はいくらでもあるが、要するに今とは違った選択肢を選んだもう一つの世界、ということ。

その選択肢に大小はない。

例えば、夕食のカレーがシチューだったら、とか。

もし大学受験に失敗していたら、とか。

選ばれなかった選択肢のその後の世界こそが、パラレルワールドと呼ばれるものなのだ。

それを、今の俺の状況に当てはめるならこういうこと。

『もしも俺が女だったら』の世界の「俺」と入れ替わった世界。

……まあ、電波臭いけど。

だが、俺の脳みそで弾き出すことの出来る答えの中で、最も適当
と思えるのがこれなのだ。

たとえ電波臭くとも、もしそうなら、一つ一つのことに納得がい
く。

俺が誕生日の零時ちょうどにパラレルワールドの「俺」と入れ替
わったとしたら、今俺がいるここは、『もしも俺が女だったら』の
世界。

この世界のゆうなは「あかり」と付き合っているため、レズビア
ンだという彼女の発言に嘘はない。

また、世界が入れ替わったのだから、男だった俺がゆうなと付き
合っていた事実も、同じように真実だ。

矛盾していた事柄がピッタリ当てはまった。

過剰表現だが、そうとも言えるだろう。

だから、そこから導き出される答えは一つ。

俺は、パラレルワールドの住人である「あかり」と、人格が入れ

替わってしまった、ということだ。

*

「パラレルワールド？」

「そう、パラレルワールド。もしもの世界だ」

小さく首を傾げたゆうなに、俺は強く頷いた。

「それならいろいろと納得がいくと思うんだけど、どうかな？」

頭の中で考えただけの意見など、所詮は独りよがり過ぎない。

自己完結したそれも、他者から見れば取って付けたような違和感のあるものだったり、結論付けた過程に穴があることを発見するかもしれない。

一人の意見とは得てしてそういうものだ。

そして、それを防ぐためには他者の手助けが必須。

そう思い、俺は、俺の考えたことをゆうなに打ち明けた。

……なぜかゆうなに撫でられながら。

「うん、そうねえ……」

ベッドの淵に座り、どこか虚空を見上げながら呟くゆうな。

じっくり考えているのかそう言ったところで言葉を切り、また俺の頭を撫でる手を止めた。

というか、何で俺はゆうなに撫でられているんでしょう。

普段は撫でる側だったのに。

「理屈は分かったけど、あんまじっくり来ないなー。原因は分かる？」

「いや、さっぱり」

「だよね」

首を横に振り返答する俺に、ゆうなは人差し指を口元に当てた。

「でも、なんだか神様からの誕生日プレゼントみたいだね」

まあ、誕生日プレゼントと言えばそうなのだろう。

なにせ、俺が誕生日を迎えると同時に入れ替わり現象が起きたのだから。

「そう考えると、ちょっと素敵かも」

いや、思いつきり最悪なんですけど。

「それにしても、」

隣に座る俺の頭を撫でながら、ゆうなはふと思いついたような声をあげる。

「入れ替わったにしては性格があんまり変わってないね。あかりとそっくりだよ」

「そうなの？」

「うん。「俺」って言い方も一緒だし、雰囲気もそっくり。あかりは、あかりよりちょっと口を悪くした感じかな」

ちよつと、ねえ。

主語が「俺」や、口調が男のそれと変わらない女って……。

一体どんなんだよ、「あかり」ってやつは。

「なにより、ちっちゃくて可愛いのに、自分はそんなじゃないぞ、って言いたげな強がりっぽさがよく似てるよ」

だからどんなやつだよ、「あかり」は。

っていうか、その「あかり」に俺が似ているんかい。

「まあそのおかげで、中身が男だって分かってても、こうして可愛いなあ、って思えるんだけどね」

「可愛いって言われても嬉しくない」

「あはは、そういうところも似てるよ」

ころころと笑うゆうなは、俺の頭を撫でる感触を楽しんでいるようだった。

だから、なんで俺はゆうなに撫でられているんだよ。

撫でたいのは俺の方なのに。

「なあ、ゆうな。俺もゆうなを撫でたい」

「だーめ。ナデナデするのは私の特権だよ？」

そう言っつて、ゆうなは俺の頭頂部から後頭部にかけて撫で下ろし、また頭頂部から撫でる。

まるで猫でも愛でるような撫で方にそれほど悪い気はしなかったが、それでもやっぱりゆうなの髪を撫でたい欲求は収まらない。

あのふわっふわの髪の毛を指に絡め、そつと触れるように撫でたいのだ。

「うー、撫でたい撫でたいー」

わきわきと両手をゆうなに向けて伸ばしたが、それをいなすようにゆうなに振り払われてしまった。

「めっ」

ガキ扱いかい。

すっかりゆうなからお預けを食らってしまい、堪えた衝動を、ベツドに腰掛けて空いた足をバタバタさせる他に解消法がない俺。

無理に撫でようと手を伸ばしても軽くないなされてしまうし。

撫で続けるゆうなから逃れようとすれば、腕をしっかりと掴まれ、結局撫でられてしまう。

……納得いかない。

「もう、そんな仏頂面しないの。せつかくの可愛い顔が台無しよ？」

「じゃあ撫でさせ」

「めっ」

だーからー。

「ほら、誕生日プレゼントあげるから機嫌直して」

「誕生日プレゼント？」

「うん」

可愛すぎて心臓が飛び跳ねてしまうような笑顔でゆうなが頷くと、自身のジープンのポケットに手をつ突っ込んだ。

鼻歌が聞こえてきそうなほどご機嫌な笑みを浮かべ、中を探る。

と、その中から、銀色に輝く ネックレスを取り出した。

細いひものようなチェーンに、一つ、五センチほどの銀のプレートがくっついているそのネックレス。

それを、ゆうなは俺の首にかけた。

そのチェーン部分が首元に直接触れ、ひんやりとする。

「まさかこんなことになるとは思わなかったから、名前が違っちゃったけどね」

「名前？」

やや気まずそうに笑うゆうなに聞くと、

「うん。ほら、そこに名前彫ってもらったんだけど」

そう言いながら、俺の首にかけられたネックレスのプレート部分を指差した。

ひんやりと冷たいそれを手に取り、指されたその箇所を見ると

「『Akari』って彫ってあるでしょ？」

ゆうなの言うとおり、そこには筆記体のローマ字で『Akari』

と薄く彫られていた。

確かにこれでは、今の俺からしたら名前の間違いだ。

だからゆうなは少し気まずそうにしたのだろう。

そんなこと、俺と「あかり」が入れ替わることを予知でもできない限り、防ぎようがないのに。

「いいよ、全然。あかりにあげるつもりだったんだから、しょうがないって」

「ありがと。そう言ってもらえると助かるよ」

えへへ、と小さく笑うゆうな。

照れと嬉しさが混じったその表情があまりに可愛くって、抑えたいはずの撫でたい衝動が巻き起こる。

ああもう、いっぱいナデナデしたいなああ！

「ねえ、撫でちゃダメ？」

「ナデナデして、っておねだりしてくれたら撫でてあげるよ？」

話題を微妙にすり替えないでください。

やんわりと撫でることを拒否された俺は、仕方なしに手に取って

いたネックレスのプレート部分を見る。

流れるような筆記体で彫られている『Akari』という名前。

もしパラレルワールドなんかに来なかったら、これが『Akira』と彫られていたのだろうか。

そう思うと、プレゼントをもらえた嬉しさはあるにせよ、なんだか惜しい気がする。

どうすればいいのかなんて分からないけど、元の世界に戻りたいなあ……。

そうして、そっちの世界のゆうなからもらったはずであろうネックレスに彫られた『Akira』の文字を見て

……あれ？

「ああーっ！」

「え、なに？ どうしたの？」

突如あげた俺の声に驚いたゆうなが、ビクリと弾かれたように俺を見る。

そのゆうなに向け、俺はネックレスのプレート部分を見せた。

「これ、そっくりなんだよ！」

「そっくり?」

「うん!」

小首を傾げるゆうなに対し、俺は強く頷いて見せた。

そしてネックレスのプレートに彫られている『A k a r i』の文字を指差す。

「俺の名前は「あきら」だろ? それをローマ字で書くと『A k i r a』。で、「あかり」はローマ字で書くと『A k a r i』になる。その二つを比べると……」

「あつ、本当! そっくりだよ、それ!」

俺の言わんとしていることに気づいたらしいゆうなは、自身の胸の前でパン、と両手を合わせた。

『A k i r a』と『A k a r i』。

その二つの違いは『a』と『i』の位置だけであり、他の『A』や子音はまったく一緒。

そのことに気づいた俺は、これをそっくりだと思ったのだ。

『a』と『i』の入れ替わり。

「あきら」と「あかり」の入れ替わり。

俺はその二つに近視感を覚え、ゆうなにそれを報告したのだった。

「すごいすごい！　　なんだか運命みたいだよ！　二つ合わせて『愛』だつて！　素敵！」

まあ入れ替わった『a』と『i』を合わせるとそうなるけど……。

なんだか気恥ずかしいからそう言うのはやめてくれ。

でも、こんなところに俺と「あかり」に共通点があるとは思わなかった。

まさか名前自体にあるだなんて。

……いや、もしかしたらこれだけでないかもしれない。

なにせ、俺たちはパラレルワールドの「俺」同士なのだ。

恋人が同じ時点で、他に共通点がないとも言いきれない。

友人関係も変わらないかもしれないし、もしかしたらホクロの位置が一緒だったりするかも。

そう思うと、なんだかそれを探すのが楽しみになってきた。

もっとも、元の世界に戻る方法を見つけるまでの暇つぶしにいいかな、程度のもの。

それぐらいなら、方法を探すのに支障は出ないだろう。

はてさて。

「あきら」と「あかり」。

別世界の同一人物だった俺たちに、一体どんな共通点があるのやら。

「ところで愛ちゃん」

「あだ名にしないでくれるっ?」

「じゃあ、あきら」

じゃあつてなんだよ……。

俺と「あかり」の共通点が見つかって間もなく。

はし、と両肩を掴まれ、俺は無理やりゆうなと正面に向き合う形になった。

ぐっと強い目つきで見つめられる。

「お願いがあるの」

そう口を開くゆうなからは、先ほどまでののどかな雰囲気は感じられなかった。

むしろ切羽詰まったような、圧迫感のあるオーラを身にまとっている。

それほど今から話すことは大事なもののだろうと、その雰囲気から察することが出来た。

「あの……ね」

一言ひとことを大切に噛みしめるかのように、ゆっくりと言葉を紡いでいくゆうな。

その独特の空気に飲まれ、俺までもが握る拳に力が入り、緊張してしまふ。

なんだ？ 何を言い出すつもりなんだ？

まさか、今までのほのぼのとしたそれとは打って変わって別れ話などと言われたら

「今日、泊まってもいい？」

……はい？

「え……なに？ ごめん、もう一回言って」

「だからあ、今日、あきらの部屋に泊めてもらっていい？ 終電なくなっちゃったし、タクシーで帰るなんて馬鹿らしいし」

……どうやら俺の聞き間違いではなかったようです。

彼氏の家にお泊まり。

胸の前に両手を合わせて懇願するゆうなが、つい先ほど発した言葉だ。

……とやかく言つまい。

いや、とやかく言うわけにはいくまい。

彼女は俺の部屋に泊まりたいと言ってきた。

しかも、れっきとした己の意思での言動だ。

上辺では「終電がなくなった」などとのたまっているが、それは否！

もし、たまたま終電がなくなったなどと言うのであれば、俺はこつ返そう。

終電のなくなる時間に來たのはどこのどいつだ！ と。

それはそうだろう。

自分の意思で終電のなくなるこの時間にうちへと訪問し、さらには「泊めて」とまで言ってきたのだ。

これを誘っていると思わず、なんと思えばいい。

くそう、粹なことをしてくれるじゃないか、俺のゆうなたん！

まさか誕生日サプライズがここまで及ぶとは、男心を非常にわきまえてらっしゃる。

さらには、翌日……いや、日付的には今日だろう。

今日はゆうなが企画した誕生日デートの当日なのだ。

もしかせずとも、こうしてお泊まりすることさえも、そのデートの一環として組み込まれているに違いない。

ヤバイ。そう考えたらめっちゃテンション上がったきた。

今の気持ちを一言で表すならこれしかないだろう。

みなぎってきた！！

「もちろんですともっ！」

俺はゆうなの肩を掴み返し、自分でも現金だなあと思い返してしまつぐらい元気に頷いた。

それを認めたゆうなが、目一杯の可愛い笑顔を弾けさせる。

「ありがと、あきら」

いえいえ、こちらこそ！

誕生日にあなたの体を捧げてくれるなど、俺の方こそ感謝せねばなるまい。

もちろんゆうなとの経験は、これが初めてというわけではない。

俺とて一端の男だし、恋人として付き合っている以上、俺から誘ったことは何回もある。

だが、それとこれとは話が別なのだ。

ゆうなが企画し、ゆうなから誘う誕生日計画。

そのすべてがゆうなによる愛情であるというならば、これを嬉し
がないわけがない。

おおお、俺は幸せものだあー！

もう、ゆうなたん大好きっ！

「じゃ、先にお風呂入ってきてもいい？ 来る途中で汗かいちゃっ
て」

まだまだ残暑が厳しい九月ですからね！

もはや自分のことが分からなくなるほどテンションの上り詰めた
俺は、

「ゆっくりしていつてね！」

「うん。行ってくるね」

小さく手を振って風呂場に向かうゆうなを、満面のニヤニヤ顔で
見送った。

ゆうなが風呂場に向かってからほどなくして。

キュ、キュ、とシャワーの蛇口をひねる音が、ベッドに座りながらそわそわしている俺の耳に届いた。

ああ、今ゆうなは俺の部屋でシャワーを浴びているんだ。

そう思うと胸の奥がさわさわとざわめいて、いてもたってもいられなくなってくる。

ヤバイよ、マジヤバイ。

このまま期待通りの展開になれば、あと三十分としないうちに俺たちは体を重ねることになる。

俺の誕生日に！

それもゆうなに誘われて！

腰の辺りからうずうずとした感じを覚え、俺はベッドに思い切りよく倒れ込んだ。

そのまま枕を胸に抱き、ベッドの上をゴロゴロと何往復も転がる。

たまんねえー！ マジゆうなたまんねえーっ！

今にも叫び出したい衝動を抑え、抱いていた枕を壁に投げつけた。それでもって行為の邪魔にならないよう掛け布団も部屋の隅へと

投げ捨て、動き回れるだけの空間をベッドの上に確保する。

これで完璧っ。

「んふふ」

嬉しすぎて、つい気色の悪い笑みが漏れてしまっ。

ああもっ。今から興奮してきてしょうがない。

頼むぜ、マイサン！

ゆうなが望むなら、中に出したって

「えっ……あ……！」

勢いが余って己の愚息の様子を見ようと股間に手を触れた瞬間。

舞い上がっていた俺は ようやく思い出した。

「マイサンがいねえええええええええっ！」

俺が今、あかりという女だっことに。

おお、イチモツよ。死んでしまっとは情けない。

どうしてお前はこんな一大イベントに限って役立たずに……！

いや、役立たずどころではない。

その存在そのものが消失してしまっているのだ。

なんと悲しきかな、我が息子。

ジープンの上から股間部分に触れても、そこに感じられるのは喪失感という名の愚息の名残のみ。

くそ……これじゃあゆうなとのにゃんにゃんが元の世界に戻るまでお預けになってしまう。

ナデナデを封印されただけでも狂おしいほど苦痛なのに、エッチまで出来ないとなったら、俺はもう……！

落ち込みに落ち込んで膝をつこうとしていた、そのとき、

「あかりっ！……じゃなかった。あきらっ、どうしたのっ？」

濡れた体にバスタオルを巻いただけのゆうなが、慌てて風呂場から飛び出てきた。

いきなりの登場と、そのあまりに刺激的な姿に、俺は驚いて固まってしまう。

すると、ゆうなは濡れた状態を構う様子もなく、ものすごい勢いで俺のそばまで駆け寄ってきた。

って、谷間がごっつ見えてるんですけどっ。

「どうしたの？ いきなり「何とかさん！」って叫び声が聞こえてきたんだけど、平気？」

「え？ な、なに？ 「何とかさん」？」

状況が飲み込めず曖昧に聞くと、ゆうなは間髪入れずに頷いた。

「うん。お風呂の中で聞いたからはつきりとは聞こえなかったけど、確かに「何とかさんがいねえ！」って」

あ……ああ、なるほど。

俺の悲痛の叫び、「マイサンがいねええええ！」の「マイ」が、風呂場にいたゆうなには聞こえなかったのだろう。

……いや、だからって「何とかさん」はないと思うけど。

まあ勘違いだったにせよ、こうしてすぐさま駆けつけてくれたゆうなの気持ちはすごく嬉しいものだ。

彼氏である俺の安否を気遣って、風呂場から慌てて出てきてくれるなど、相手のことを思っていなければ出来ることではない。

それなのに、ゆうなはそれをさも当たり前のことかのようにやってのけて見せたのだ。

こんなに素晴らしく出来た彼女なんて、本当に俺にはもったいなさすぎる。

俺と付き合ってくれていることに、全身全霊をかけて感謝せねばなるまい。

「あきら、大丈夫？」

「うん、ありがとう。何でもないから」

……でも、感謝はしても恥をかくことはないよね。

心配そうに眉尻を下げて俺の肩をさするゆうなに、俺は軽く笑いながら首を横に振った。

だって、まさかこんなに心配してくれている彼女に、

『いやあ、女になってたことを忘れて思わず「マイサンがいねええええ！」って叫んじゃったよ。H A H A H A』

なんて恥ずかしいこと、言えるわけがない。

だから俺は、何でもなかったかのようにごまかしたのだ。

「そう……なら良かった」

「う、うん」

心の底から安心したように息をついたゆうなの仕草を見て、罪悪感がチクリと胸を刺す。

うつ、ごめんよ、ゆうな。

世の中には言わなくても良いことがあるって言うし、勘弁してくれな。

「でも、なんでもなかったんなら大声出さないでよ。ビックリするじゃない」

「あ、ああ。ごめんな」

すねたように頬を膨らませるゆうな。

それに対し、俺は長くなった髪をかきながら、これまた高くなつた声で返事をした。

うう、この女の体が憎らしい。

こんな体じゃ、ゆうなと夜の営みが出来ないじゃないか。

こうしてゆうなはバスタオル一枚という非常に刺激的な姿でいるというのに、今の俺ではそれを食う資格もないとは……。

添え膳食わぬは男の恥。

それをまざまざと実感させられていた。

「……あれ？　なんだか暗い顔してない？」

「え、そ、そうかな？」

不意に俺の顔を覗き込むゆうなにドキリとしながらも疑問符を浮かべると、ゆうなは不満そうな顔で頷いた。

「うん。なんだか全然楽しそうな顔じゃないよ」

それはそうだろう。

せっかくのゆうなからのお願いなのに、それをこなせるマイサンを元の世界に置いてきてしまったのだから、悔しくないわけがない。鏡を見たわけじゃないからどんな顔をしているのかは分からないが、それでも最低限楽しそうな顔をしているはずはない。

って、「ゆうなから」のお願い？

不意に自身が浮かべた言葉が脳裏によぎり、唐突な違和感を覚える。

だって、俺を女だってことを視認しているはずの彼女が、俺を誘う理由が不適格なのだ。

俺が男の体だったとしたら、こうやって男女の営みを誘う理由は分かる。

だが、今の俺は「あかり」という女なのだ。

その女である俺に対し、誘いをかけるなど……。

もしかしたら、彼女は本当に汗をかいたからシャワーを浴びたかったのかもしれない。

そうだとするなら、俺がこうしてやきもきしている懸案は俺の妄想。

つまり、鼻息をふごふごいわせた俺の勘違いだった、ということになる。

まあもちろんそれはそれで悲しい限りなのだが……。

どうしてだろう。

決して俺の勘違いではない気がする。

それは彼女の言動から？

彼女がシャワーを借りるとき、「先にお風呂入ってきていい？」と、「先に」を強調するように言っていたから？

……いや、それだけじゃない気がする。

もちろん先に述べたそれらもこの引っかかりに影響を与えているようだが、それ以上の何か。

何か大事なことを忘れているような気がするのだ。

はたして俺の忘れた何かとは。

それは、疑問符の根元であるゆづなの口から語られることになった。

「もう。これから「女の子同士」でするのに「

唇を尖らせながら言った彼女の言葉。

その中に含まれた「女の子同士」という単語が、俺の忘れていた事実を思い出させてくれたのだ。

それは、俺が女でありながら誘われた理由であり。

また、俺が勘違いしていなかった根拠にもなる。

つまり、俺の彼女は

レズビアンだったんです。

パタンつと扉を後ろ手に閉め、俺は凝り固まった緊張をほぐすように深く息を吐いた。

目の前にあるのは脱衣所の洗面台の鏡と、それに写る「あかり」。

そう、俺は女になり、また彼女も女なのだ。

男として彼女と体を重ねたことはあれど、女としてしたことはない。

もちろん、それは世間一般的に考えれば当たり前のことなのだが。

『じゃ、ベッドの上で待ってるね』

俺が風呂場に向かう最中に言われた言葉だ。

そんなことを妖艶な笑みで言われれば、俺が男だったなら即行で風呂場に向かったことだろう。

または体を洗うことも忘れてベッドに押し倒したかもしれない。

だが、今の俺は「あかり」という女なのだ。

嫌という気持ちはないが、こればかりは初めての経験なので緊張せざるを得ない。

少しの待望と、多くの不安の気持ちをその小さな胸に抱えながら、俺は脱衣所の中央へと歩いた。

もちろん、今身にまとう衣服を脱ぐためだ。

服を脱ぎ去るために脱衣所の中央まで来たところで、俺は洗面台の鏡に写る自身の姿を見て。

思いがけず目を見開き、小さく声をあげた。

「あかり」の姿が、予想以上に可愛らしかったのだ。

小さなゆつなをさらに一回り小さくしたような背丈に、肩まで届く黒々とした真っ直ぐな髪の毛。

それに示し合わせたように漆黒の瞳を携えた目がほどよい程度に大きく、逆に肌はすべすべと白く抜けるようで。

また、小さくとも可愛らしさを示している鼻と、少し薄めの唇が、顔のバランスを整えているようだった。

非常に可愛い容姿は、その背の低さもあってとても大学生には見えない。

せめて高校生、いや、中学生に見られてもおかしくないぐらいだろう。

「お、おお……」

無意識の内にあげてしまった感嘆の声も、こうしてその姿を見ながらだと様になっている。

声だけ聞いたときは、高いだけでなんだか気持ち悪いかも思ってたぐらいなのに……。

しかし今着ている服装は、その可愛らしい容姿に反して、ずいぶんと質素なものだった。

裾がよれよれになってシワになっている半袖シャツに、ダメージと呼ぶにはあまりに酷すぎる、ただ生地がすり減っただけのボロジーンパン。

そう、俺が普段着にしていたそれを、そのまんまあかりに合うサイズに縮めただけのような状態なのだ。

男女差別をするわけじゃないが、男でこの格好はまだしも、女でありながらそれは……。

おい、あかりよ。

お前、どれだけ男臭い性格してるんだ。

「やれやれだぜ……」

嘆息をつきながら、俺ははいていたジーンパンを脱ぎ始める。

容姿は合格点だが、やれ主語が「俺」だの。

やれ性格は俺とそう変わらんだの。

レズとは言え、ゆうなはこんな女のどこに惚れたのだろう。

まったくもって難解である。

風呂から上がったらゆうなに直接聞いてみようか、と思い始めていたころ。

脱いだジーパンの下に、白い三角地帯が俺の股間に広がっている様が見えた。

……え？

お、女物のパンツ……？

その光景に、俺は思わず自分の股間を凝視してしまう。

華奢な体に見合った細い太ももの付け根が合わさったその股間。

そこに見られる物は、他の何物でもない女物のパンツだ。

ハイレグのそれが太ももの付け根に合わせてピッタリ締まっており、またゴム部分には花を模したレースがつけられている。

そんないかにも女の子らしいパンツを、俺がはいているのだ。

いや、まあ確かにあかりは女だし、こんなパンツをはいてても不自然さはないけど……。

上に着ていた男物の服装から、どうせ女らしいものを身につけていないと踏んでいたのだ。

だから、まさかこんな可愛いそれをはいているだなんて……。

（あ、もしかしたら　　）

不意に浮かんだ思いに、俺はすぐさま着ていたシャツを脱ぎ去った。

そうして鏡に写った俺は……。

上下ともに女物の下着を身につけていた。

「お、おおっ……」

病的なまでに白い肌に、薄桃色に着色されている女性用下着。

パンツと同じくレースのついたそのブラジャーが、俺の胸につけられていた。

（っ、これは……）

下着のみを身につけた、裸に近い格好。

それを見て、俺は

まったく興奮しなかった。

いやだって、まず胸がない。

まだ中学生の方があるんじゃないかと思うそれは、もしかしたら人差し指ほどの厚みもないのではないか、というほど。

たったそれだけの小さい胸、略してちっぱいに加え、ただただスレンダーなだけの体型なのだ。

ウエストは細めにしても、尻まで小さいし、出るところ出ずに引込んだ風を受ける。

そんなちっぱいのちっこい女を見て、可愛さは覚えども、エロスはまったく感じられなかった。

まあ……つるぺた、だよな。

これが自分の姿なのかぁ、と思い、がっくりと肩を下ろす。

別世界の自分とはいえ、それは一応ながらも自分なのだ。

それがこんな貧相な体をしているとなると……不憫でならない。

この体の持ち主であるあかりと、その恋人であるゆうなに。

何が悲しくて、こんなちっぱいのあかりと付き合っているんだか……。

あとで聞くべき懸案が増え、ちよつと頭が痛くなった。

さて、と気持ちを切り替えて下着を脱ぎにかかる。

これから風呂に入ってシャワーを浴びるのだ。

いつまでの脱衣所で長居している場合ではない。

なにしろ、これからゆうなと「女の子同士」とやらをするのだから。

七割楽しみ、三割不安の気持ちでブラジャーを外そうと背中に手を回した、ちよつどそのとき

その音にさえビックリするような勢いで、ゆうなが脱衣所に乱入してきたのだ。

下着姿で。

「わっ……」

あまりに唐突すぎるゆうなの登場に、俺は振り向きながら驚きの声をあげる。

すると、なぜかゆうなも俺を見て驚いた表情を見せた。

「あれ？ まだ入ってなかったの？ そろそろ入ったところかなあつて思ったんだけど」

と、言いながら。

確かにかなりもたついてはいたけど……。

なにその、俺がすでに風呂に入っていることを前提にしていたよ
うなセリフ。

しかも下着姿で入ってきて、それじゃあまるで

「せっかく一緒に入ろうと思ったのに」

「おい」

俺の考えていたことを継ぐように唇を尖らせたゆうなを見上げて、
俺は肩を叩いて突っ込んだ。

なんやねん、風呂に乱入って。

これからベッドの上でにやんにやんするといつのに、フライング
で風呂場にまで来るとは。

どんだけ我慢足りないんだよ。

「それにしても」

突っ込まれたことを軽く笑い流したゆうなは、俺の体のつま先からつまみまでを舐めるように見て、言う。

執拗なそのねちっこい視線に、なぜか鳥肌が立つほどの怖気がした。

そんな俺の気持ちに気づく様子もないゆうなは、ゆっくりとした動きで自身の唇を舌なめずりする。

「そんな格好で待ってたってことは……誘ってる？」

……い、いやいやいや！

「な、なんでそうなるんっ？」

「だって、こんなあられもない格好で私を待ってくれてるなんて」

「脱いでただけだから！ シャワー浴びるために脱いでただけだから！」

っていつか、なんかゆうなのキャラ変わってないっ？

俺がそう言うなり、ゆうなは「あらそう」と、お預けされた子犬のような甘ったれた顔になった。

可愛いには可愛いけど、その全身から滲み出る「襲いたい」オーラのせいで欲情してこない。

むしろそれに危機感を覚えて、俺は無意識の内に後ずさりをしていた。

（ゆうなって、こんなキャラだっけ……？）

すねるように唇を尖らせている下着姿のゆうなを見て、俺は元の世界のゆうなを頭の中に思い浮かべる。

元の世界のゆうなはもっとおしとやかで、どちらかというと受け身体質だったはずだ。

あの頭を撫でる行為だって、たまに興味本位で俺の頭を撫でることとはあれど、あれほど好んで撫でるということはなかった。

ということは、この世界でのゆうなは

「もしかしてゆうなって、S？」

「いやあ、Sってほどでもないよー」

……どうやら予想は的中したようです。

この世界のゆうなは、間違いなく攻め手。

そして、あかりは受け手側だったのだ。

だからゆうなの性格は微妙に改変されているように感じ、またあかりがそういう立ち位置だったのだから、別世界の同一人物である

俺に対しても同様の対応を見せたに違いない。

これは……ひょっとしてまずいかも？

いや、まあ女の方から襲ってくるシチュエーションは、それはそれで味があると思うよ？

年上の女性に押し倒されて、その熟練された技術で骨の髄までしゃぶられるようなめくるめく世界。

それに対し、一度ならず魅力を感じたことはあるさ。

でも、それを今から実践だなんて……。

しかも相手はタメであるゆうな。

普段の関係を逆転して行うなど、とてもじゃないが気持ちがついていかないのだ。

そんな気持ち置いてけぼりの性交など、不安こそ感じれど、興味の類はこれっぽっちも湧かない。

「さて」

俺がゆうなに対して怯えを感じていたせいだろうか。

その俺たちの間に流れていた妙に緊迫した空気を払拭するように、黒の下着を身につけたゆうなはパン、と胸の前で手を叩いた。

「せつかくだし、お風呂でしょっか」

……は、はい？

「はあああつ？」

「だから、あんまり近くで大声出さないでよ。耳痛くなる」

顔をしかめて耳に手を当てるゆうなの仕草を無視して、俺は、俺の肩よりも高みにあるゆうなのそれを揺さぶった。

「お、落ち着けゆうな！ 俺はMじゃない！ あかりと同じにするな！」

「もう、あきらこそ落ち着いて。それに、あかりだってMじゃなかったよ？」

「……へ？」

あかりがMではない、というゆうなの一言を受け、俺は間の抜けた声を疑問符とともに投げかけた。

Sに近いゆうなの恋人だったあかりのことだから、てつきり相性ピッタリのMだと思っていたのだが……。

では、あかりは何なのだろう。

もちろんすべての人間がSかMかで大別出来るなどと酔狂な思考を持っているわけではないが、あかりはこのゆうなの恋人なのだ。

おそらく、このゆうなの手練れ具合から見て、あかりへの接し方は毎度こんなものだったのだろう。

そして、その相手は当たり前のようにあかりだった。

だから、こんな接し方をされているあかりが、何の変哲もないごくごく普通であるはずはないのだ。

もし俺が毎回こんな風に接せられるのであれば、それこそ嫌になるかMになるかの二択だろう。

それなのに……。

喉のそこまででかかった俺の疑問。

それは、俺が直接口にするまでもなかった。

ゆうなが、余裕を多分に含んだ笑みで驚きの一言を言ったのけたからだ。

「だって、嫌がるあかりを無理に押し倒してたんだもん」

お、お前……。

どSじゃねえかあ ツ!!

誰か助けてください。

俺の愛しの彼女は、この世界ではただのどSのようです。

お願いします。

誰でもいいですから、この彼女の皮を被ったどSを成敗してください。

「じゃ、私のことも分かってくれたみたいだし、早速……」

もはや無信仰者である俺がどこぞの神様にでも彼女討伐の願いをしようとしていたとき。

俺が討伐したいと願っていた彼女は、まるでそのことを忘れさせ、彼女が天使ではないかと錯覚してしまうほどの笑顔を俺に向けながら、俺の右腕をガツチリと掴んだ。

右手首を掴むそれは、万力に匹敵するかのような力で掴みて、いだだっ！

「痛い痛いっ！」

「あんまり暴れない方がいいよ？ あかりは、本気を出しても私には勝てなかったんだから」

そう妖艶に微笑む彼女が告げるのは、実質の死刑宣告。

その言葉の意味を理解した俺は、自分でもありありと分かるほど

全身の血が引いていった。

つまり……逃げられない。

「まっ、待って！ たんまたんま！」

「たんまなし」

ニツコリと、本当に嬉しそうに弾ける笑顔とともに言ったそれが最後だった。

俺は、まるで人外の何かに引きずられているのような錯覚を覚えてしまうほど強靱な力で、ずるずると浴室へと連れ込まれていく。

「い、嫌だああああっ！」

それほど、あかりの体とゆうなには力の差があるのだろう。

段差に足を引っ掛けては外され、取っ手に手を掛けては引っ剥がされる行為を何度か繰り返しながら、俺はそんなことを考えていた。

全身を濡らそうかという勢いで冷や汗がダラダラと流れていく。

片足が浴室への敷居をまたぎ、ほとんど間もなくもう片方も越えた。

そうして、あまり広くない浴室の真ん中に放り出されて、したたかに尻餅をつく。

「ふふふ」

艶やかな笑みをたたえながら、ゆうなは浴室の戸を後ろ手に閉めた。

……お、終わった。

まるで羊を捕まえた狼のように爛々とした瞳で俺を見下すゆうなを見て、そう思った。

「さあて、又ギ又ギしましょうねえ」

子供に向けるような言葉とともにゆうなはしゃがみ込み、俺の背中へと手を回す。

パチン、と金具の外れる小さな音がした。

それとほぼ同時に、俺の身につけていたブラジャーは自由落下運動をして見せ、ちっばいが外気に晒される。

これはそのせいなのか、それともゆうなに対する怯えなのか。

ぶるっ、と一度肩が大きく震えた。

それを視認したゆうなは口端を三日月のように持ち上げ、俺の股の間に自身の太ももを食い込ませていく。

そして、覆い被さる形で俺の上へと乗り出してくるゆうな。

左右の手が俺の真横を奥に向かって進んでいき、そのたびにゆうなと俺の距離が縮まっていく。

徐々に縮まっていくそれ。

彼女の吐息が顔にかかるかという距離にまで近づいたとき。

不意に俺の太ももを撫でる感触。

とっさに見下ろすと、ゆうなが人差し指一つで、道筋を作るようにゆっくり膝から太ももの付け根に向かってそれを滑らせていた。

あまりになめらかな動きに、固唾を飲んでしまう。

背筋にぞわぞわとした鳥肌が立った。

まるで産毛が総毛立つような感覚。

加え、なんだか頭までぼう、としてきた。

そして、ゆうなの指が太ももの付け根まで行き着く。

その進行方向は、俺の股間へと向けられた。

それが少し動いた瞬間

ビクリ、と肩が震えた。

「あ……ゆうなあ……っ」

無意識の内に出た声。

そのあまりに色っぽい声に俺自身が驚いていると、ゆうなは優しく笑ってから俺に口づけし

（省略されました。続きを読みたい方はわっふるわっふると叫んでください。）

気がつくと自分の部屋の天井が見えたなんて、どれだけ陳腐な気の失い方をしたのだろう。

窓から差す明かりから見て、俺が風呂場でゆうなに襲われたのは昨晚のことで、今はその翌朝というところ。

朝独特の澄み切った空気が部屋を満たし、ときおり小鳥のさえずる鳴き声が閉め切った窓を通して聞こえてくる。

さて、そんなおり、俺は昨晚の途中から一切記憶がないわけだが……。

とりあえず一旦起きようと思い、上体をベッドから起こすと

「んん……」

間違いなく、ゆうなの悩ましげな声が隣から聞こえた。

そちらを振り向くと、そこには俺の横で就寝しているゆうなの姿。

ほどよく乱れた寝間着と、口端にかかった髪の毛がなんとも色っぽくて

じゃなくてっ。

こうしてゆうなが隣で寝ているということは、昨日は一緒に寝た

ということ。

また、俺の記憶が途切れる直前のゆうなの攻めの性格を考えると……。

もしかして俺、ゆうなに一晩中にゃんにゃんされてた？

「おう……」

英語表記にしたら間違いなく「oh」とされるであろう発音で、ため息をつく俺。

そのため息すらも、女のそれと大差ないほど、いやほそのものの高さを持っている。

ということは、当たり前のように俺は女のままということ。

掛け布団を剥いで股間を確かめてみるものの、そこには何もなく、感じるのは喪失感と絶望感。

いや、さすがに朝目が覚めたら元に戻ってるなんて、さすがに都合が良すぎるとは思っていたけど、現実を見せられると……。

やっぱりへこんだ。

はあ、ともう一度ため息をつこうかと思った、そのとき。

「ひゃいつ？」

不意に腹部に触られた感じがし、くすぐったさもあって思いがけず変な声を出してしまう。

何だ、と思つて見ると、そこには

「あかりい……」

寝ぼけたゆうなが、俺の腹に抱きついている姿が見えた。

あまりに気持ちよさそうな寝顔を見て、自然と頬が緩くなつてしまつた。

そうそう、ゆうなはよく寝言で俺の名前を呼んでくれたっけ。

……いや、今は「あかり」つて言つてたけどね。

まあ、だからといってとかく言つつもりはない。

なにせ、ゆうなからしてみれば、今まで「あかり」は「あかり」だつたのだ。

それが昨日の日付変更と同時に「あきら」へと変わってしまっただけなのだから、無意識下で呼んでしまう寝言で「あかり」と言うのも無理はない。

本音言つと、赤の他人に浮気されてるようで、少し悲しいのだが。

「ゆうな」

そつと起こさないように彼女の名前を呼び、まだ俺の腹に抱きついていっているゆうなの頭をなでた。

細く繊細な手触りの髪の毛が指に絡み、それでいてなでるとすつと抜ける。

俺が好きないつもの感触だ。

なでなで分、チャージっと。

なにせ、今日はまだ一度もゆうなの頭をなでることができないでいた。

あれだけ拒否していたゆうなの頭を、こうして寝ているときになでるといふのは不意打ちみたいで忍びない。

だが、その気持ち以上になでたい欲求が勝ったのだ。

むしろゆうな中毒の俺が、ゆうなを前にしてあれだけの時間、なでるのを我慢していたこと自体奇跡と言えるだろう。

もう少しでもお預けを食らっていたら、きっと何かしらの禁断症状が出ていたに違いない。

だから、今のうちにチャージしなくちゃ、っと。

「
」

ご機嫌のあまり鼻歌を漏らしながら、ゆうなの頭をなでる俺。

天頂部付近でなでる手を往復させたり、後頭部に向けてなで下ろしたり。

ゆうなが起きたら、またお預けを食らうのは目に見えていることだ。

だからこそ、余すことなくなでまくりんぐ。

手の大きさが男のときより小さいせいで若干感触に差異を感じるが、取るに足りないこと。

そんなことよりも、なでてなでてなで倒す作業でしょ！

上からなでてもよし。

両手でわしわししてもよし。

ぐりぐりしちゃってもバンバンオッケー！

もう、マジでいいわぁー！

*

ゆうなをなで始めてからどのくらいの時間が経過しただろうか。

しばらくされるがままだったゆうなが、いまだに俺の腹にすぎる

ような形で抱きついたまま目を覚ました。

「ん……?」

おそらく寝起きで、どうしてこんな状態になっているのかが理解できないのだろう。

そんな小首を傾げて小さくあくびをするゆうなに、俺はなでる手を離して

「おはよう、ゆうな」

と声をかけた。

すると、寝ぼけ眼のゆうながこちらを見上げ、

「おはよ、あかり」

「いや、あきらだって」

「あきら……?」

やっぱり寝ぼけているらしい。

寝言で「あかり」と呼ばれ、寝起きでも「あかり」と呼ばれ。

この調子でいくと、ばつちり目が覚めても「あかり」と呼ばれそうだ。

「今は「あきら」なの。分かる?」

「あ……ああ、そっか。今は「あきら」なんだっけ？」

うーん、と首をひねらせて考えていたゆうなにしびれを切らして声をかけると、ようやく思い出してくれたらしい。

「ごめんね、あきら。改めておはよ」

「うん、おはよう」

謝ってくれたり、あきらとして挨拶しなおしてくれるのはいいけど……。

まだ俺の腹に抱きついたままなんですな、ゆうなさん。

「ゆうな、そろそろ離れてほしいんだけど……」

ゆうなの頭をなでているときはさほど気にならなかったが、こうして起きて会話しながらと……。

意識的かどうかは知らないが、ときおり抱きつくゆうなの手が、むにむにと俺の腹を触るのだ。

その触られ方が緩いおかげでくすぐられている感じはしないが、妙にこそばゆい。

ゆうなと密着してるのは、嫌ではないけれど……。

「えー、ダメー？」

「うん、ダメ」

「あきらちゃんのケチ」

「誰があきらちゃんだ！」

なんでちゃん付けだよ、と軽くゆうなの額を叩く。

いたっ、と小さくうめいて、ゆうなは膨れっ面になった。

「もう……女の子はそんなに暴力的じゃいけないんだよ？」

いやいや、昨日、俺を思い切り襲ってきたのはどこのゆうなですか。

「とにかく離れて。くすぐりたい」

「やあだ。むにむにするのー」

むにむにするのはわざとだったのかよ！

「離れろー！」

「やだあー」

両手でゆうなの肩をぐっと押せども、まったく微動だにしない。

ゆうなに風呂場で襲われたときから分かってはいたが、やはり今の俺とでは力の差が歴然としているとは……。

「んっ！」

「えへへ、頑張るねえ」

必死に腕を突っ張っても、ゆうなはニヤニヤとした笑みでこちらを見ているだけ。

な、なんつう一方的差だよ……！

力みすぎて腕がぶるぶるしてきたのに、向こうは全然余裕そうでむしろむにむにする速度が上がっているぐらい。

「はっなっれっろっ！」

この際やけど、とゆうなの肩に、寝間着の上から爪を立てた、そのとき。

「あひゃあっ！？」

脇腹をくすぐられた。

「ちよっ……や、やめれ！」

「あん、あきら可愛いよお」

「人の話を聞 あはははっ！ 待つ、無理っっ！」

横っ腹を指で軽くつままれるようにくすぐられ、笑いたくもないのに声をあげてしまう。

肩や腰がビクツと震え、足をバタバタさせても、くすぐったくて笑いが漏れてしまうのだ。

「や、やめんかいつ！」

「いたっ」

さすがに怒ってゆうなの頭をひっぱたく俺。

予想以上にうまい具合に入って、パシンと乾いた音が高く響いた。

「もー……」

よほど痛かったのか、ゆうなはくすぐる手を止めて叩かれた患部を押さえた。

強く叩きすぎたらしい。

ゆうなを叩いた俺の手も、じんじんと軽い鈍痛がした。

「えっと……ごめんな？」

ちよっとやりすぎたかなあ、と謝りつつも、とりあえず立ち上が

り、ゆうなから距離を置く。

無意識的にゆうなの逆襲を恐れていたのだろう。

……だが、その警戒に意味がなかったことを、俺は思い知る。

「まったく……しつけが足りなかったみたいね」

ぞつと背筋が凍るような声色。

それと共に顔をあげたゆうなの表情は

まるで捕食者のようだった。

「し、しつけって……」

しつけ、という言葉の意味は知ってるし、またゆうなが発した意味するところも分かる。

だが、ゆうなの逆鱗に触れてしまったことを理解しなくなかったのだろう。

ただでさえ高い声がさらにつわずり、語尾が震えてしまった。

「まだ大学まで時間はあるし……うふふ」

淫靡に笑みを含むゆうなの言葉に反応して壁掛け時計を盗み見ると、時刻は七時ちよい過ぎというところ。

今日は午後から授業が始まる日だから、ゆうなの言つとおり時間は十分にあるわけで……。

「あ、あの、ゆうなさん？　目が相当いっちゃってますけど……」

「えへへ」

まるでねずみを捕らえんとする猫のような目。

そのねずみに値するのは、言つまでもなくこの俺。

……ま、またこの才チなわけ？

「ゆうなのばかぁ……」

「まあまあ、気持ちよかったからいいでしょ?」

全裸でベッドに寝転がりながらぼやくと、下着姿のゆうなはくすくすと笑いながら返してくる。

それが図星、というか本当のことだったので、俺は何も言えずに押し黙ってしまった。

代わりに起き上がり、その辺に放り投げてあった俺のパンツを手にとってそそくさとはく。

さすがに全裸はまずいなあ、と思つてのことだ。

しかし……このぴったりと張りつくような感じが、なんだか嫌だ。男のときはトランクス派だっただけに、ブリーフにすら慣れていない俺にはちょっと……。

「あきら、ブラの付け方分かる?」

パンツの感触に嫌悪感を覚えていると、不意にゆうなから声がかかった。

そちらに振り向くと、そこには俺の、というかあかりのブラジャーを手に持っているゆうなの姿。

ふりふりと振り、挑戦的な笑みを浮かべている。

「まあ、平気じゃね？」

差し出されたブラジャーを受け取り、俺は軽く返答する。

当たり前のようにブラジャーをつけた経験などないが、脱がした経験なら何度もある。

脱がすことができるのだから、着ることなどそう大差ないだろう。
シャツやズボンだって、着るのと脱ぐのは逆の手順をたどればいいのだから。

そう思っていたのだが……。

「……………あれ？」

ブラジャーの肩紐をかけ、金具を留めようと背中に手を回したところで

俺は固まってしまった。

「もしかして、うまくつけられないの？」

「う、うん……………」

ブラジャーのホック部分がうまくかからない俺に、軽く上から視線でニヨニヨ笑ってくるゆうな。

軽く言ってしまった手前気恥ずかしいが、出来ないものは出来ないのだと、俺は小さく頷いた。

「ほら、こうするとつけやすいわよ」

ゆうなはそう言うと、俺の胸にあてがわれていたブラジャーを俺の首元にまでたくし上げる。

何をするのかと思って黙って見ていると、さらにゆうなはブラジャーを回し、背中のホック部分を俺の正面に持ってきた。

「はじめに前で留めて、それから胸に合わせて下ろすの」

俺の眼下でブラジャーのホックがゆうなの細く白い指によって留められ、もう一度くるりと回し、元のようにパッド部分が前にくる。

そしてそれを少し胸の方に下ろし、薄い膨らみしか持たない俺の胸がパッドの中に納められていった。

なるほど、この方法なら後ろ手に留め金をつけずに済むし、何より楽そうだ。

俺には思い付かなかった発想に感心していると、

「このやり方覚えておくといいよ。お腹の方で留めてから着ける方法もあるけど。あかりは不器用で後ろで留められなかったからね、どうせあきらま不器用なんでしょ?」

どうせってなんすか、どうせって。

「うん、やっぱり下着姿も可愛いよ」

軽く図星だったことへの愚痴を内心ぼやいてみると、自身の胸の前でパチンと手を叩いたゆうなが楽しそうな表情に変わった。

「また襲ってもい」

「よくないから」

「えーっ」

「えーっ、じゃありません」

元の世界では、ゆうなはもつと真面目な子だったのに……。

すっかり「性欲持て余す」のワードがお似合いになってしまったゆうなをいなしつつ、俺はケータイを開いて時刻を確認する。

そろそろ、か。

「じゃ、着替えたら大学行くからな」

俺は携帯電話を閉じ、元の世界と同じ配置にあったタンスの中から着替えを探し始める。

すると、俺の背中に体重を預けてきたゆうなが、肩越しに唇をとがらせた。

「えー、もう一回戦しようよー」

「んなことしたら授業に間に合わないって」

「もう……あきらのいけず」

……元の世界では真面目な子だったんです。

とにかく俺だけでも、と心の内で意思を固くし、俺は着替えを続行することにした。

昨日までより幾分か高く感じるタンスの引き出しの中に手を伸ばし、なにか簡単に着れる服はないかと探す。

軽く見、目に付いたのは、

「ワンピース……」

肩紐が細く、全体的に細身のワンピースだった。

俺はそれを取り出し、肩紐のところを掴んで全体を見られるように広げる。

肩口からスカートの裾にかけて徐々に桃色の染色が濃くなっているのが特徴のワンピース。

逆に言えばそれ以外にめばしい点がなく、その淡い色合いもあった。なんだかほんわかとした雰囲気にするシンプルなものだった。

「あ、それ私があかりにプレゼントしたやつだ」

「ゆうなが？」

「うん、そだよ。二週間ぐらい前に、だったかな」

自身の唇に人差し指を当てながら俺の背中に寄りかかってきたゆうなの言葉。

これがちよつと意外だった。

何もゆうながケチということではない。

俺と、というよりあきらとゆうなの間柄では、俺からゆうなにプレゼントをあげてばかりだったからだ。

一応アルバイトをしてある程度の収入があるためその点に不満はないが、やはりプレゼントはもらってみたいもの。

だから昨夜にもらったネーム入りのシルバーネックレスはすごく嬉しかった。

なのにあかりは他にもゆうなにもらっていたと言っ。

……なんだかずるい。

「あきら？　どうしたの？」

「へ……？」

肩越しに伸びていたゆうなの顔がこちらに向き、掛けられた声で視線があつた。

「なんか、不満そうな顔してるよ？」

「ん……まあ」

不満そう、と言ったらそうだろう。

元の世界のゆうなからあまりプレゼントをもらえていなかった俺に対し、あかりは誕生日でもないのにワンピースをもらっている。

そのことに嫉妬しないわけがない。

世界やそれぞれの立場は違えど、ゆうなはゆうなのだ。

同じゆうなののに、あかりだけがプレゼントしてもらえて……。

まるで俺だけ不遇されているような、惨めな気持ち。

「あんまり悲しそうな顔しないで」

「そんなこと言われても……」

同じゆうなの恋人なのに、俺はゆうなを愛し、あかりはゆうなに愛されている。

その違いが浮き彫りにされたようで……。

「ずっとそんな顔だと、脱がしちゃうよ?」

……いやいや。

ゆうなさん、それ落ち込んでる人に言うセリフと違いますよ?

「それにしても酷いわねえ」

一瞬だけ目の色を艶に変えたゆうなだったが、それと間もなく、今度は打って変わってほう、とため息をついた。

酷い、と言われても、俺には特に思い当たることがない。

ゆうなの視線から見ると、その対象は俺が手に持っている薄桃色のワンピース。

だが、それに対して俺は別段「酷い」と思うようなことを感じない。

まさか、俺の心の内を読んでの言動ではないだろうし……。

そう疑問に決着をつけられないでいると、不意にゆうなの手がこちらに伸ばしてきた。

何事かと思つて身を強ばらせたが、どうやらその目標は俺が手に持ち広げているワンピースだったようだ。

ゆうなは薄桃色のワンピースに触れるかどうかという距離にまで手を伸ばしたところで、その手でワンピースの布地をなで始めた。

その動きは、そう。

「人がプレゼントしたワンピースをダンスにしまうなんて、シワが出来ちゃうじゃない」

畳まれていた際に出来た折りジワを伸ばそうとしているものだった。

「まったくもう……」

よく見るとワンピースに刻まれたシワはなかなか深い。

こうしてゆうなに言われるまで気づかなかったことがおかしいくらいだ。

そのシワを少しでも伸ばそうとワンピースをなでているゆうなが、再びため息をもらす。

「いくら気に入らないからって、こんな扱いないじゃない。見た感じ、一回も着られてないみたいだし……」

「気に入らない？」

唇をとがらせながら眉尻下げるゆうなの言葉に引っかかりを覚えた。

あかりが、このワンピースを気に入らないという点だ。

もちろん人の好みを否定するわけではない。

だが、男の俺から見ても可愛いと思えるデザインであるこのワンピースを気に入らないとは。

しかも、たったの一度すら着ていないなんて……。

せつかく、ゆうなからもらったプレゼントなのに。

「気に入らない、って言うより嫌いみたい、この服。もったいないよね」

もったいないどころの話ではない。

ゆうなの善意をむげに扱うだなんて……。

最低だ、あかりのやつ。

「あゝあ、せつかくあげたのになあ」

まるで逃がした魚の大きさを悟ったときのようなセリフ。

悔しい気持ちと焦れたい歯がゆさを漂わせるように薄く笑った
ゆうなは、ワンピースのシワを伸ばす手を止めた。

本当に、このままではゆうなが可哀想だ。

俺ではないやつにプレゼントをしたというのは癪だ。

だが、それをちゃんと受け取ってもらえず、寂しそうにするゆう
なに同情を抱かないわけではない。

ちゃんと受け取ると言うのは、プレゼントしてくれた相手への感
謝の意を持ち、律儀に扱うこと。

それなのに、あかりはゆうなに感謝する段階にすら達していない。

本来は着られる目的で作られたはずのワンピース。

それを、さも着ることを想定しないかのように、シワが出来るこ
ともいとわず、平気でダンスにしまっていたのだ。

俺は女物の服については詳しくないからよく分からないが、こう
してゆうながこの扱いを嘆いている様子を見る限り、とても雑なも
のだったことは知れる。

なんてことだろうか。

これではあまりにもゆうなが不憫すぎる……。

「まあ、しょうがないんだけどね」

そう軽口で笑うゆうなの顔が酷く痛々しく感じる。

この世界のゆうなはこんなにもあかりのことを愛しているというのに……。

ゆうなに愛されているあかりへの嫉妬や、あかりに冷たくされているであろうゆうなへの同情がないまぜになる。

どっちつかずの感情がぐちゃぐちゃになった。

俺は、こういうときにどうしたら

「ま、あかりが絶対に着ないような服をあげた私が悪いんだけどね」

「絶対に着ない……？」

あっけらかんとした表情で言うゆうな。

「うん。だって、あかりがこんな女の子っぽい服を着てるとこ、付き合ってから一度だって見たことないもの」

え、なにそれ……。

そんなものをプレゼントしたの……？

頭の回転が追いつけていない俺。

それをまったく介さないように、ゆうなは、今俺が手に取っているワンピースの入っていたタンスの引き出しを指差した。

「ほら、見てよ。タンスの中、み〜んな男の子が着るような服ばかり」

つられて中をのぞき込む。

そこに見られたのは、元の世界の俺が着ていたような男物のシャツがいくつも並んでいる様子だった。

それを見て俺は納得した。

なんだ、ワンピースはゆうなに押しつけられただけだったのか、と。

「もしかして、あかり、これもらうときに嫌がってなかった？」

そう言ったところで、いい加減持ちっぱなしだったワンピースをフローリングの床に置く。

シワが出来そうな置き方ではなく、なるべく床に広げる形に。

「あ、分かる？ すっごく嫌そうな顔して「いらない」って突き返してきたのよ、あかり」

やっぱりだ。

それは、俺があかりと体が入れ替わったとき。

あかりは男の俺が普段着として着るような服を部屋着にしていたときからそう薄々と感じてはいた。

あかりは、このワンピースみたいに女の子の子した服が苦手なのではないかと。

そして、先ほどのぞいたタンスの中身。

男物の服の数々。

垣間見た程度だが、タンスの引き出しいっぱいには男物のそれが見えたあたり、おそらく他の引き出しも似たような有り様だろうと思う。

別に異性装について言及するつもりはない。

が、あかりはこれほど徹底的に女物の服を拒んでいるのだ。

男装癖。

男装、ないしはそれに近い服装を好むこと。

あくまで想像にすぎないが、経緯から察するに、あかりがそれであることはほぼ間違いがないだろう。

なぜそうなのか、までは予想もつかないが。

そして、その苦手である女物の服を着せようとしたのは、他でもない。

この世界のゆうなだ。

「ゆうな、やっぱりそういうのは良くないと思う」

「そういうのって？」

「あかりにこういう服を着せることだよ」

こういう服、の言葉に当てはめるよう、俺は床にしかれたワンピースを指差す。

「俺はあかりのことよく分かんないけど、何か理由があると思うんだよ、女物の服を着ないのは」

それが俺の思ったような男装癖であれ、そうでなかれ。

嫌がるのには、何かしらの事情があるはずなのだ。

「だから、そこら辺」

「わかった！」

俺が言い終わるか、というより言い始めてそう経たないうちに食ってくるゆうな。

それに少なからずむっとしたが、まあ分かってくれるのならそれ

で

「つまり、あかりじゃなくてあきらに着せればいいのね！」

何を理解したんだよっ！

「そついうことじゃ うひゃあっ!？」

ゆうなに反論しようとしたとき、自分でも情けなくなってしまうぐらい甲高い声が出た。

ゆうなが俺の横腹をつついたからだ。

「ほらほら、着替えましょうねえ」

「ちょっと……やめ……っ」

途端に力が抜けてしまった俺の両腕をつかんだゆうなは、それを下から持ち上げた。

抵抗する間もなく天井に向けて両腕を伸ばす形にされてしまう。

そこから先は、まるで幼児に服を着せてあげるお姉さんのような手つきだった。

あのワンピースを床から拾い上げたゆうなは、そのスカート部分の裾を広げ、俺の頭に覆い被せる。

俺の視界が真っ白に染まったかと思うと、すぐにそこから抜け出す。

そして上げられていた両腕が肩紐の下を通されて……

「はい、出来上がり」

につこりとした笑顔で完成宣言されてしまった。

神業、というのはこういうことを言うのだろう。

ゆうなが俺にワンピースを着せるとき、俺の上げられた両腕はフリーだった。

それを振り下ろして抵抗しようとするれば出来たはず。

俺の両腕を押さえるべきゆうなの手が、ワンピースを着せる作業に回されているのだから当然だ。

だが、出来なかった。

いや、する間もなかったと言っのが妥当だろう。

俺が抵抗しようとする思考すら働かない段階で、全ての事が片付いていたのだから。

「んふふ、やっぱり可愛い。すっごく似合ってるよ」

美人でなければ気持ち悪い印象しか与えないであろうはしたない笑いを見せるゆうな。

エロオヤジばりのニヤニヤとしたそれに、恐怖から悪寒を背筋に覚えた。

おそらく本能的に、ではなく後天的に植え付けられたのであろう、あかりの体から伝えられる危険信号。

それを背中に流れる冷や汗で感じ取ったとき、俺はこう思ったのだ。

いくらなんでもあかりいじりのプロフェッショナルすぎるだろう…、と。

「ほらほら、とにかく鏡見てみて！ 絶対あきらま可愛いつて言うから！」

「わっ……ちょっと！」

今の俺のそれより幾分か大きいゆうなの手が、俺の華奢で白い二の腕をつかまえ、ぐいっと引っ張った。

行き先は、脱衣場にある鏡台。

もちろん我が安アパートにバリアフリーなんてオシャレな構造をしているわけではない。

ゆえに部屋と部屋にはガツツリと段差が出来ている。

そこを無理やり引つ張られながら、もたついた足で踏み越えるとなると……

「あでっ！」

当たり前のようにつまづくわけで。

（は、鼻からぶつけた……）

「だ、大丈夫っ？」

鼻骨に染み渡るような鈍い痛覚を感じる。

他からの痛みを感じないところから、ぶつけたのは鼻だけだったのか、ぶつけたとしてもそれほどでもなかったのか。

どちらにせよ、フローリングの床に鼻を強打したのは辛すぎる……。

ゆうなが引っ付かんでいた俺の腕を離し、駆け寄ってきたが、今の俺にそちらを振り向く余裕はなかった。

鼻が痛いのだ。

なによりも。

「つぁぁ……！」

なんとか片腕で床を突っぱね、仰向けの体勢になった。

痛みからか、意味のないうめき声が漏れ出す。

鼻骨の一番出ているところを、トンカチで叩かれたかのような痛み。

もうだめだ。

鼻が痛くて、痛くて……その、なんだかんだで死ぬわ、これ。

「んもう、あきらったらドジっ子なんだから」

……いや、ドジっ子って。

おそらくぶつけて赤くなってしまうであろう鼻を両手で押さえている俺。

仰向けに寝ているそのすぐ横でゆうなが膝をついた。

何をするのだろうと思ってゆうなの微笑みを見上げていると、不意に鼻を押さえている手を退かされた。

すると、ゆうなの笑みが深くなり、

「あは、やっぱり涙目だ。萌える！」

いやいや、あんた萌えって。

先ほどから、いや、この世界に来てからゆうなのキャラ崩壊が激しすぎる気がする。

まあ、それだけ俺の世界のゆうなと、この世界のゆうなが似通っていないということなのだが……。

あまりに俺のゆうなのイメージを逸脱する発言に、俺は呆然とするしかなかった。

反論する気力すら湧かない。

……あ、鼻の痛みも薄れてきた。

「あれ、どうしたの？」

おそらく俺の心境が顔に出ていたのだろう。

いくらおかしなゆうなでもそれを汲み取るだけのKY力（空気を読める力）があつたらしく、首を傾げた。

仰向けに寝ている態勢のまま、俺は嘆息する。

「もういいよ。早く学校行こ」

「ダメよ。その前に鏡を見なくちゃ」

鏡イベントは強制ですか、そうですか。

「分かったよ。じゃあ、ちょっとだ」

「よし！ 見よう！」

なぜあなたは人の発言を食うのかしら。

ちょっとだけ見たらすぐに学校へ行こう、と言いたかったのに。

ともあれ、俺がこれだけ大学に行きたいのには理由がある。

普通、パラレルワールドなんて訳の分からない世界に飛ばされてしまったら、大学がどうこうなどと言ってられないだろう。

だが、俺の飛ばされたこのパラレルワールドは元の世界に酷似している。

そして、あくまで元の世界での話だが、俺にはそれらしい“あて”があるのだ。

環境的にはあまり変化のなさそうな世界で、可能性を見出している。

それならば、それに向かおうとするのが道理だろう。

だからこそ、俺は大学に行つて

「へ？」

不意に右の二の腕をつかまれた感触がして、声が漏れる。

もちろんこの部屋にいるのはゆうなと俺だけであり、ともすれば俺の腕をつかむのはゆうななわけで。

「さ、早く見ましょ。あきらだって、絶対見惚れちゃうんだから」

あ、そういえば強制イベントの途中でしたね。

思案をしている内に忘れてしまっていたが、俺はゆうなの強制で鏡を見なければいけなかった途中。

鏡を見るというのは、つまりワンピース姿になったあかりを見るということ。

でも、と思う。

（そんな大した差はないと思うんだけどなあ……）

あかりの容姿なら、昨晚に脱衣場の鏡で見たし、ワンピース単体も先ほど観察したばかり。

どちらかというと少女に近い容姿だが、あかりは可愛いと思うし、ゆうなの選んだワンピースのデザインは決して悪くない。

だが、それを組み合わせたところで劇的な変化が訪れるとは思えないのだ。

だから、正直めんどくさいという気持ち先行していた。

それよりも、俺は早く大学に行きたいというのに。

まあいくらめんどくさいと言っても、これは強制イベント。

とてもじゃないが、今の体でゆうなに反抗できるとは思えない。

それに、したらしたで恐ろしい展開に持ち込まれるだろう。

一端の男として情けない限りの発想だが、従うしかないのだ。

この世界のゆうなには。

「ほら、起きて起きて」

いつまでも仰向けで寝ている俺に痺れを切らしたのだろう。

ゆうなはつかんだままだった俺の二の腕を引き寄せると、意図も容易く俺を起きあがらせた。

ほら、こんなにもゆうなは強い。

身長差だって、今の俺はゆうなの鎖骨に届くかどうかというところなのだ。

それなのに、無理に逆らおうとすれば、力づくで押さえられてしまつのは火を見るよりも明らか。

蟻が一匹で猛獣をかみ殺そうと言つようなものだろう。

無謀。

その一言に尽きた。

そして、俺とゆうなの力の差はこんなところにまで及んだ。

「……あ」

俺を起こすとき、ゆうなが勢いよく引つ張りすぎたため、俺の顔がゆうなの胸にぶつかってしまったのだ。

ゆうなに体重を預ける形で寄りかかっている。

黒いレース状の下着で包まれたゆうなのふくよかな胸。

ちょうど俺が倒れかかった際に、ぽふっと軽い音がして、その下着で綺麗に形作られた谷間に頭が埋もれてしまった。

……まあ、こんな目にあつても、たつべきものがないわけで。

ふと、頭上のゆうながくすりと笑った。

「可愛いなあ、あかり」

そして谷間に挟まれたまま、頭をなでられる。

(……はあ)

元の世界のゆうなだったなら、少なからず顔を赤らめただろう。

きゃっ、と小さな声を上げながら。

「いいから、早く鏡を見るなら見よう」

ゆうなの肩を両手で押し返し、離れる。

そして先導されるまでもなく、俺は脱衣場の鏡の前に立った。

だが、そこで俺は驚くことになる。

あかりのワンピース姿

透き通るような白い肌の華奢な体に、清涼感溢れる薄着のワンピース。

上から下まで一切の障害なく流れる流線型には感嘆するほかなく。またあかりのメメな性格なのかそういう体質なのかムダ毛たるものが一つもなく、それがワンピースの涼しさを煽っている。

加え、あかりの背の低さとシンプルなワンピースのデザインの相乗効果で、少女らしさを

……いや、これでは足りないだろう。

もはや、なんと表現するのが適しているのかも分からない。

俺の語彙が乏しいというのもあるが、それ以上。

伝える要素が見当たらないほど、素晴らしく綺麗にまとまった可愛らしさだったのだ。

「どう？　可愛いでしょ」

啞然としている俺の後ろ。

まるで愛犬自慢をするように笑うゆうなが、俺の背中にぴったりくっついてきた。

身長差から、俺の頭の少し上にゆうなのあごが位置している様を鏡で見て取れる。

「まあ……うん。可愛いな」

「でしょでしょ！　あかりは、世界で一番可愛いだよ！」

曖昧に頷く俺に、ゆうなは満面の笑みを浮かべて飛び跳ねた。

それほど、自分の恋人であるあかりが誉められて嬉しいのだろう。

鏡の中の俺が、微妙な表情になっているのにも気づかないほどに。

この気持ちは……なんだろう。

戸惑い。

嫌悪。

そして、嫉妬。

俺はあかりに対して、はっきりとしない負の感情を抱いている。

釈然としない心持ちで鏡の中のあかりを見つめ、思ったのだ。

（なんで、お前はそんなに可愛いんだよ？）

自虐趣味など持ち合わせているつもりは毛頭ないが、これだけは言える。

あかりは、俺なんかよりずっと容姿で優れている。

間違いない。

相当偏った趣味　それも突飛で凝り固まった美的センスを持った人間以外、そう感じるだろう。

年齢不相応の童顔とはいえ、これだけ可愛いやつが、この世界の俺の立ち位置にいるなんて……。

このあかりなら、同性愛どころは抜きに、容姿の良し悪しではゆうなとお似合いなことだろう。

一般人から見れば美人と美少女に見え、同じ性癖の人からは羨望の目で見られるに違いない。

だが　俺はなんだ？

なぜ俺があかりと同じ立ち位置で世界に存在していたのか。

その答えを求めて頭の中を探ったとき、俺は気付いたんだ。

俺では、絶対にあかりに勝てないって。

もし俺があかりに勝てると言ったら、身長と筋力ぐらいなもの。

身長は直接比べるまでもなく、圧倒的にあかりの方が低いし。

筋力で言えば、ゆうなに抑圧されてしまう程度なのだから、俺に勝てるはずもない。

だが、それがなんだと言っただ。

平均身長を見れば、男の方が女よりも身長が高いのは当たり前。

筋力だつて、男の方がつきやすく出来ている。

そんな決まりきったことを取り上げて小さな優越感に浸るうなど、その後に来る劣等感の足しにしかない。

……何にもない。

何もないんだ、俺には。

「……もう行こう」

両肩に置かれたゆうなの手を振り払い、俺は脱衣所を後にする。

なにやら後ろから声が聞こえるが、今はどうでもいい、という気持ちで優先していた。

俺は、ゆうなに相応しくなんかない。

「あきら！」

これから白のスニーカーをはこうと玄関でしゃがみ込もうとしたとき。

呼びかけと共に右腕をぐいっと引つ張られた。

その勢いに流され、ゆうなの正面に向かされる。

返事もなくゆうなを見上げると、ゆうなは眉尻をつり上げていた。

「待つてよ。私、まだ着替えてないんだから」

少し視線を落とした先にゆうなの黒い下着姿が見え、頷いた。

「なら早く着替えて」

すると、ゆうなは怒ったように、

「んもつ、急かさなくったっていいじゃない。そんなに学校行きたいの？」

「……まあ」

学校に、というよりも会つべき人が学校にいるから。

でも、それをゆうなに言う必要はないだろう。

学校に行きたいと言ったところでそれほど語弊はないし、もし言えは「誰？」と聞いてくるに違いない。

それが、今はどうしようもなくだるく思えた。

元の世界のゆうなならまだしも、この世界のゆうなは……。

「まもなく一番線に電車が参ります。黄色い線の内側に」

決められた、いつもと変わりのない駅の音声案内。

それを聞き流しつつ、ふと隣に佇むゆうなの顔を見上げた。

こちらの視線には気付いている様子はなく、ただ口をへ字に曲げて前を向いているゆうな。

「もう、なに怒ってるんだか……」

そう愚痴をこぼされ、ちくりと胸の内から針を刺されたような痛みに襲われた。

俺が大好きでたまらなかったはずのゆうなが見せる、ほんの少しのぼやき。

その姿を見て、なんだか目にこみ上げてくるものがあつた。

……この体は、本当に涙もろいらしい。

それを耐えるように、視線を正面に戻す。

線路を挟んだ向こう側に、コンクリートで固められただけの壁がある。

そこには、いくつかの広告が貼り付けられていた。

美容整形や、俺とは関係のない大学、専門学校の案内に、携帯電話会社のロゴが大きく載せられたものなど。

彩りの華やかさで言えば申し分のない広告群。

だが、少なくとも今の俺が見たところで、楽しさもなければ何の利益もなかった。

ふと隣で、今度はゆうながこちらを見ているような視線を感じた。

どうやら先ほどの俺の視線に気付いたらしく、こちらを向いたらしい。

だけど、俺はそれを横目に見ることもない。

家を出てから、俺はほとんど無言で通してきた。

日差しが焼け付くように照りつけていることが不快なものもある。

ワンピースのスカートが短くて、なんだか落ち着きないのもある。

だがそれよりもずっと。

ずっと、ゆうなと話すのを躊躇っている自分がいたのだ。

俺は、何をやっているのだろう。

今日は俺の誕生日。

二十一回目の俺の誕生日だ。

俺の彼女はそれを祝ってくれた。

今、俺が首にかけている名前入りのシルバーネックレスをプレゼントしてくれて。

本来なら、少なくとも今のような暗い気持ちになっていることはないはず。

なのに、俺は何をやっているのだろう。

彼女に話しかけてもらっているというのに、それには何の言動も返さない。

しまいには、彼女に対して躊躇いさえ覚えてしまっている。

なぜだろう。

そう考えても、今の俺ではもっともらしい答えが思い浮かんでくることはない。

唯一あるのは、ゆうなに話しかけにくくなってしまった思考のみ。だからといって、思い切って話しかけようなどとも思わなかった。躊躇っている気持ちに流され、怠惰に無視をし続けている。

最低なのは分かっている。

分かっているけど……。

そう考えていた、次の瞬間。

突風が、左に駆け抜けた。

「わっ……」

ビクッと肩を震わせて我に返り、ようやく気がついた。

俺たちの乗るべき電車が着たことに。

電車がホームに滑り込む音にすら気づかないほど、俺は思考にふけていたようだ。

突風が、髪を激しく暴れさせる。

細くしなやかなそれが風に煽られ、強く俺の頬を打ちつけてきた。

毛先がちりちり頬を刺し、痛みを満たない程度の感覚を与えてくる。

あまりの煩わしさに右手でそれを押さえるも、長くはためくそれは抑制という拳動を知らないようだった。

(うざい……)

押さえた先から、また別の生物であるかのように毛先が大きくはためく。

ただただ暴れ馬のように風になびき、俺の頬を刺す髪の毛。

それが自然におさまったのは、目の前の電車は停止してからだった。

「……ふう」

どうやら、女の長い髪の毛というのは扱いが難しいものらしい。

電車がホームに滑り込んだときの風でこれだけなびいてしまっただ。

ある程度の強風が吹けば、それだけで惨事だろう。

あかりの体でなければ、今すぐにでも切ってしまいたいところ。

まあともあれ、先ほどまで狂ったようにはためいていた髪の毛はその毛先を垂らし、何事もなかったように地を向いている。

風さえ止めば、やはり髪の毛は髪の毛だ。

でも、髪の毛全体を見たら何事もなかったわけではないらしい。

「あら、髪の毛乱れてるわよ」

ゆうなが、不意に俺の頭に手を伸ばす。

そして、天頂部からなで下ろすように俺の髪を手ぐしでおしてきた。

指先が乱れた髪に絡む感触。

頭皮に触れた微細な感覚に思わず身震いしかけ

下唇を噛んだ。

俺はゆうなの手を振り解くように、今開いたばかりの電車の中に乗り込む。

乗り込むのが困難なほどの乗車率でも関係なかった。

俺はただ何も言わずに下唇を噛み、電車の内側を背に向け、乗り込む。

ドアの縁に手をかけて、右足から車内の床を踏む。

そして、それをつつかえに、腰を引いて体全体を電車内に押し込む。

満員電車に乗るための、いつもの所作だ。

割と強引で、他の乗客を押し込むような乗り方。

だが、乗車率が十割を超えるような満員電車では、こうして無理やり詰めてもらう形で乗らなければならない。

みんな、たとえ狭い車内だろうと、より広い範囲を確保しておきたいはず。

ともあれば、次に乗り込む人がいようといまいと、それ以上自分の居所を狭くしてやろうと動く人は滅多にいないわけで。

仕方のないことだ。

多少強引にやっってしまうと申し訳ないと思うのだが、そうでもない電車に乗ることが出来ない。

だから、今日もそうして力任せに乗り込もうとしたのだが……。

こうして、腕と足で体を電車内に押し込むという作業にはそれなりの力がある。

全力とは言わずとも、押し込む一瞬には少なからず力まなければならぬ。

だが、今はその力がいつもより数段劣っていることを、俺は忘れてしまっていた。

「あ……」

そのことに気が付いたとき。

俺の体が前方に傾いていた。

電車から押し出されていた。

僅かな力で踏ん張って腰を引いた結果、車内の人々からの反作用を受けて押し出されてしまったのだ。

今の俺は、非力なあかりの体。

そんな、筋肉がまともについているのかさえ怪しい細い腕でドアの縁を掴み。

少女のそれと同程度としか見えない細さの足でつつかえたところで、人の大群を押し込むだけの力が生まれようはずもない。

まるで金属の鎧につまようじで挑むようなもの。

挑む間もなく負ける。

それが固く揺るぐことのない結果だ。

瞬く間に俺の体は前傾に倒れ、視界がホームのアスファルトに近づいていく。

重力に従い、次第に加速していく転倒。

もうダメだ……。

そう思ってまぶたを閉じようとした、そのとき。

視界が急激な停止を見せた。

俺の右腕を引っ張るゆうなだった。

「あきらっ、大丈夫？」

俺の右の二の腕を掴み、車内から支えているゆうな。

非力さ故に転びかけた俺を助けてくれたらしい。

返事をする間もなく、ゆうなに引っ張られて電車に乗り込む。

すぐに目の前で扉が横にスライドしていった。

間一髪のところだったらしい。

「電車に乗るときは私にくっつかなきゃ危ないでしょ？ 勝手に乗っちゃダメ」

まるで子供をたしなめる母親のように言っが、その言い分には納得できた。

満員電車に乗り込もうにも、いつもの具合で力を込めただけではダメなほどだ。

おそらく、全力をもってやっとというところ。

たったそれだけの力しかないあかりなのだから、一人で満員電車に乗るのはさぞ困難なことであろう。

だからこそ、満員電車に乗ろうとすれば、ゆうなの助けが必要になる。

それは必然的な考えだ。

だが……そうは思っても。

「……別に平気だし」

俺の口はへの字に曲がっていた。

視線をドアの窓ガラスに貼られている広告に向けると、頭上のゆうなからくすり笑いがこぼれてきた。

「ふふ、強がりなところもあかりに似てるね」

あかりと似てる、ねえ……。

今の俺は電車のドアを目の前にし、ゆうなはその後ろから俺を覆うような形で並んでいる。

隣にはややふくよかなサラリーマン風のオヤジと、同じくサラリーマン風の若い青年の肩が触れ合うほど近くにいた。

そのため、前に傾く揺れは壁で、左右は後ろのそれは人によって

支えられ、かなりの安定を保つことが出来ている。

これから先、大学の最寄り駅に着くまでこちら側のドアが開くことはない。

開閉するのは、すべて反対側のドアだ。

だから、うちの最寄り駅から大学に向かう際には、一度自分の場所さえ確保出来れば、人の乗り降りに関係なく保持することが出来る。

加え、ゆうなが壁として頑張ってくれているのか、電車の揺れによつて生じる乗客の圧迫もさほど感じなかった。

あかりの体では、この満員電車で人の間にのまれたのでは潰されかねない。

それゆえに、今のこの安定した配置は好ましかった。

ただ、横の乗客を除いては。

横の客。

このオヤジが目下の問題だった。

いや、問題と言うには失礼かもしれない。

だが……。

(臭い……)

刺激臭にも近いそれが俺の鼻を突く。

臭いが、耐えられそうになかった。

オヤジ特有のなんとも言えない加齢臭と、夏場にはつきものの汗臭さ。

そのコンビネーションは語るに尽くせない。

ひたすら醜悪としか言えないほど、鼻腔に不快感を与え続けているのだ。

さらに加えるべきは、ゆうなから漂う甘い香水の匂い。

これ単体で言えば、何一つ苦情を持ち出そう思考さえ湧かないものだが、他と混ざり合うなら別。

甘みの混じった臭さほど、気持ちの悪いものはない。

刺激臭に近いものに、ねっとりとした甘ったるさが加わったと言えればいいだろうか。

ひたすら、我慢に耐えられるようなものではなかった。

(どろっしょっ……)

これからのオヤジの動きについては分からないが、下手すれば俺の降りる駅までずっと一緒かもしれない。

先述の通り、これから先、こちら側のドアは大学の最寄り駅まで開くことはないのだ。

ともすれば、それまでの間、俺はこの臭いを我慢しなければいけないことになる。

（う、それは嫌だ……）

もしこれから数十分もこの臭いと格闘しながら電車で揺られなくちゃいけないとすれば、それは地獄。

耐え難い地獄に他ならない。

だが、まさか本人の目の前で鼻をつまむわけにもいくまい。

つまみたい気持ちは山々なのだが……。

と、不意に電車のブレーキ音が耳に届いてきた。

オヤジの臭いと奮闘しているうちに次の駅に着いたらしい。

耳に残る金属音を軋ませ、ドア窓からホームの景色が流れ込んでくる。

あまり大きくはない、もう少しでも規模が小さければ無人駅でも不思議ではないような駅。

まさかこんな駅で降りないだろう。

そう踏んで、最低大学の最寄り駅まで頑張ろうと気を入れ直したとき、思いがけないことが起きた。

オヤジが、電車が到着すると同時に降りていったのだ。

満員電車の人ごみの中に消えていったオヤジを見送る。

ちよつとした肩透かし。

オヤジの格好は、ビジネス街を歩けば見つけれない方がおかしいくらいの普遍的な夏のスーツ姿だった。

なのに、パツと見てもビジネスするようなところではない駅に、サラリーマンらしき人物が降りるとは……。

この田舎駅に何かあるのだろうか。

そう思ったのだが、まあ正直なところ、それはどうでもよかった。

まだ臭気は残るものの、その元凶がいなくなればいつかは消え失せるもの。

憂いの元凶がなくなったのだから、喜ばざるを得ない。

その喜びがあれば、オヤジのことなんてどうでもよかった。

「臭かった……」

何はともあれ、苦難は取り除かれた。

その安心感から、僅かな声量でつぶやきが漏れ出した。

本当に小さな独り言。

だが、それは俺の後ろにはギリギリ届く程度のものだっただけ。

「本当にね。すごい臭いだったよね」

そうゆうな返事をされたのだから。

「あ、う、うん……」

何の気なしにつぶやいた独り言を返されてしまい、思わず小さく頷いてしまう。

それが、さらに続くきっかけになった。

「窓ガラスにあきらの嫌そうな顔が写ってて、大丈夫かなあって心配だったんだよね」

今はゆうな正面を向けているが、先ほどまではドアに向いていた俺。

ちょうど電車のドアの窓ガラスが正面にあつたため、そこに写った俺の表情がゆうなに見えたのだろう。

「そ、そっか」

俺のいる方とは反対のドアが閉まり、小さな揺れと共に電車がオヤジを降ろしたホームから滑り出す。

「うん。で、平気？ 具合悪くなってない？」

「いや……まあ、平気」

いくら臭いとはいっても、たかだか数分では体調不良に陥るはずもない。

他の乗客の迷惑にならないよう小さな声で、俺は返答した。

このときの俺はすっかり忘れていた。

ゆうなへの躊躇いから、まったくゆうなと会話をしていなかったことを。

そして、気付けなかった。

ここから徐々に広がった会話の輪によって、俺の口が少しずつ緩くなっていったことを。

オヤジが微かに残り香を置き去ったあと。

俺たちは周りの客の迷惑にならない程度に話をした。

とは言っても、初めはゆうなが話を振り、広げ、俺は相づちを打っただけ。

先ほどのオヤジに対する愚痴から始まり。

この前、ゆうなが女友達と成り行きでドリアンを食べることになったこと。

臭いがあまりにきつくて食べれなかったこと。

そういえば、あのオヤジの臭いがドリアンと似ていたかもしれない、など。

そうしているうちに、だんだんと俺も口を開くようになっていった。

あれだけ躊躇っていた口も、相づちという形で踏み切りはついていたのだ。

ゆうなの話の間に一言挟み始め、次は二言、三言。

気が付けば、ゆうなと同じくらいの量を話すようになっていた。

どうしようもないほどのくだらない世間話。

だが、ゆうなどのそれは非常に楽しいものだった。

先ほどまでの雰囲気は払拭されたかのよう。

ゆうなは、俺が無視していたことを気にしている様子はないし。

俺も、さっきまでの会話への躊躇はなくなっていた。

だから、こんなにも楽しく感じるのかもしれない。

気が付けば、もう一駅で大学の最寄り駅に着くというところ。

この時間経過の早さが、ゆうなどの会話がどれだけ楽しかったのかを証明してくれているような気がした。

「そつえば、あかりは通学どうしてたんだ？」

すっかり調子を取り戻し、電車のドアに背を預けている俺は、目の前のつり革に掴まっているゆうなを見上げ、聞く。

俺の問いに、ゆうなは優しく笑った。

「いつも私と一緒にだよ。あかり一人じゃ、この電車は心配だから」

「なるほどね」

俺がかけているショルダーバッグの中には、うちの最寄り駅から大学までの定期が入っている。

一方、先ほど俺が身を持って体験した通り、あかりの体力では満員電車を使い切るのは厳しいものがある。

身長のみならず、体力面でも二十歳越えとは思えない程度なのだ、あかりは。

通常であれば、あかりの体力で電車通学は無理を極めるだろう。

健常時であればさほど難はないだろうが、問題は別。

何かしらの理由で体調を崩しているときだ。

俺が先ほど電車から放り出されそうになったときでも、割と力を使って体を押し込もうとしていた。

結果、あの様である。

それなのに、体力が著しく低下するであろう風邪でもひいた日にはもう……。

それに、風邪でなくとも様々な場合が考慮されなければならない。

眠気で呆けていたら？

疲れてへろへろだったら？

筋肉痛で力が入らなかったら？

きつと、目も当てられない結果に違いない。

だが、それでもあかりは電車の定期を持っている。

その答えは、今ゆうなが述べた通り。

ゆうながあかりを助けていたからこそ、あかりは電車通学が出来たんだ。

ゆうなと二人で電車通学。

これで胸のつつかえが取れた。

俺が電車から押し出されてしまったときの、ゆうなの慣れた対応。

それから発した「電車に乗るときは私にくつつかなきゃ危ないでしょ？」という言葉。

あかりを壁際に配置し、その前にゆうなが立つことによって乗客からの圧迫を削減していた件。

それらすべては、ゆうなとあかりによって築かれていたものだったのだ。

「なんだか、うらやましい」

思いを胸の内から取り出し、口の中で滑らせる。

「俺の世界だと、ゆうなと会うのは昼休みか、講義が一緒のとき。あと大学が終わってから遊ぶときぐらいだったんだ」

「そうなの？」

「うん。だから、毎朝一緒に通学できるなんてうらやましいよ」

「あら……」

ゆうなは眉尻を僅かに下げ、つり革を掴むそれとは逆の手で自分の頬に手を当てた。

俺は自嘲的に笑い、続ける。

「この世界じゃあかりは愛されてるみたいだけど、向こうでの俺はどうなんだろうな。ちっとも愛されてなかったりして」

後に俺は思う。

何を饒舌に自分の不幸を嘆いたのだろうと。

そして、なぜ。

なぜ俺はこんなことを言ってしまったのだろうと。

「愛されてない……？」

そう聞き返すゆうなに、俺は頷く。

怪訝そうな表情を見落として。

「ああ。あかりと比べて、俺はそう思ったんだ」

電車がガタツと揺れ、俺たちはその衝撃を身に吸収する。

俺はドア脇の手すりに掴まって。

ゆうなはつり革に掴まって。

「この世界でも同じだと思うけど、俺たちは付き合い始めてから三ヶ月と少しというところだ」

「……ええ」

「その間、あかりはゆうなからワンピースをもらい、今日はこのネックレスをもらった」

白いワンピースを着た胸元にある銀色のネックレスを指差す。

直接もらったのは俺だが、「Akari」と名前が彫られている時点で、これはあかりへのプレゼントであることは明白だ。

「だけど俺は、俺の世界のゆうなからまだ何ももらったことがない。服も、ネックレスも」

女々しいと思われるかもしれない。

女からのプレゼントを欲しがり、もらっていないならもらっていないと愚痴をこぼす。

そんな男なんて。

でも、滑らかになった口と、溜まっていた思い。

それが合致した今、発言を取り消そうなどという自分はいなかった。

「それに……俺はあかりに勝てない」

視線をゆうなから外し、自分の足元に泳がせる。

淡く桃色の染色がされたワンピースのスカート裾から白くて細い足が二本伸びている。

くるぶしまでの靴下とスニーカーを履いた足。

……比べるまでもない。

「ゆうなは見ただことないだろうけど、俺は普通の男なんだ。あかりみたいに可愛らしいところもなければ、優れた容姿もない、ただの男」

車内にアナウンスが流れ、まもなく大学の最寄り駅に着くことが知らされる。

「そんな俺でも、ゆうなから愛されてると思ってたよ。俺がプレゼントをあげて、頭をなでて、エッチもして」

次第に電車は停車せんとスピードを落とし始める。

「でも、そんなのあかりと比べたらへでもなかった。何分の……いや、何十分の一だって思い知ったよ」

歩くほどの速度まで落ちた電車は、僅かな揺れと共に停車した。

「だから、俺は愛されているに満たなかったのかもしれない」

俺は背中をドアから離し、踵を返してドアの正面に向き直る。

そして、目の前のドアが横にスライドし、開いた。

「……なにそれ」

ゆうなの言葉と共に。

「……え？」

あまりに不機嫌そうなゆうなの物言いに、俺は思わず振り向きながら問い返した。

そして俺が見上げた先。

見えたのは、眉間にシワを寄せているゆうなの顔だった。

「ど、どうし　　うわっ」

最後まで声に出す暇はなかった。

電車のドアは開いている。

大量の学生とおぼしき人波に押されながらその場にとどまるのは不可能で、当然の流れで俺たちは電車からホームへと押し出された。

そこで俺はゆうなの手を引き、人波を避けるように階段の裏側へと回ることにした。

この駅は改札が二階にあり、ホームは一階にある。

そのため、ホームから降りた乗客は階段、またはエスカレーターなどを利用して二階の改札口へと向かう必要があった。

だから人波にのまれないようにするのなら、誰も行く必要のない場所に回ればいいはず。

そして、そこなら人の邪魔にもならず、そして邪魔もないだろう。

そういう算段で思い立ったのが、階段の裏手だった。

無論、さっさと改札口を出るのも選択肢の内ではあったと思う。

だが、何よりもゆうなの言葉が気になった。

「……………なにそれ」

低い、あからさまに不機嫌な言葉。

俺は、それが気かりでしょうがなかったんだ。

階段の裏手に着いてみれば、案の定そこに人はいなかった。

ベンチも自販機なく、そこにあるのは埃まみれの時刻表のみ。

乗る人は乗り、降りる人は降りたばかりのホームで、こんなところに用があるのは俺たちぐらいなものだろう。

だから俺は人の流れに気兼ねなく、そこに着くやいなやゆうなに振り返った。

見れば、まだ不機嫌そうな顔をしている。

先手を打ったのはゆうなだった。

「ねえあきら、」

凜とした表情で、真っ直ぐ見つめられる。

「なんで愛されてないなんて言うの？」

問うようなものではない。

はつきりと、俺を責める口調だった。

「い、ごめん」

俺は真っ先に謝ることを選択する。

「あんなタイミングで自虐するなんて、どうかしてたよな」

せつかくぎこちなさから解放されたばかりなのだ。

俺に原因があるというなら謝る。

あんなギクシャクして、ろくに会話もしづらい状況になんて戻りたくなかったから。

でも、ゆうなはそれをよしとしなかった。

「そういうことじゃないわよ」

ばっさりと言い捨てた。

否定され、俺は戸惑った。

ゆうなが怒っているのは、何の気なしに気の落ちるような話をしたからだと思っていた。

だが、ゆうなはそれを違うと言う。

「なら何だよ？ 何で気を悪くしたんだ？」

問う俺に、ゆうなが向けた視線。

それに若干の侮蔑の色を感じた。

「やっぱりあきらも男ね」

やれやれ、と言わんばかりに深いため息をついた。

「自分のことしか考えないで、相手の気持ちはおざなり。自分はこ
うだ、こうされたからこう思った。そればかり」

胸の下で腕を組み、俺を見下ろす。

「どうせエッチじゃ、自分は出すだけ出してはい終わりなんでしょ
？ 相手を感じてようがいまいが、出せば気が済むものね。これだ
から男は」

「……あ？」

正直腹が立った。

何が原因かは分からないが、俺が責められる立場にあるのは分か
る。

だが、だからといってどうしてここまで責められなくちゃいけな
いんだ？

しかも、俺がした所業ならまだしも、男というくくりで勝手に罵
ってくる。

訳も分らず見下されて、怒らないわけがなかった。

「今のあなたじゃ、にらんでも怖くないわよ？」

「黙れよ」

イライラが止まらなかった。

「いきなり何なんだよ？ ネガったのは悪かったって謝っただろうが」

「あら、そういうことじゃないってさっき言ったの、もう忘れたの？ ずいぶんにとりみたいな頭してるのね」

「何だよその言い方！ 俺は何でキレてんのかって聞いてんだよ！」

一度滑り出した口は止まらなかった。

「怒ってるのはあなた一人じゃない。なに勘違いしてるの？」

「んなわけねえだろ！ お前が勝手にキレたのが事の発端なんだよ！」

今となつては後悔してやまない。

「ちょっと、何よお前って！ あきらが悪いのよ！ 愛されてないなんて言うから！」

「だから、そのどこが悪いんだよ！　ネガったのは別にいいって言っただけだよ！」

なんで俺は言葉を尖らせたんだろう。

なんでゆうなと痴話喧嘩してしまったんだろう。

どうして、もっと穏やかにゆうなに聞いてやれなかったんだろう、って。

「あんたが愛されてないって言うなら、私も愛されてないってことだからよ！」

後悔してしまうんだ。

俺が愛されてないというなら、ゆうなも愛されてない。

そう言うゆうなの言葉が、俺には理解できなかった。

「……なんだよ、それ？　意味分かんねえ」

言葉を飲み込む代わりに問うと、ゆうなは人を小馬鹿にするように肩をすくめた。

「そのままの意味よ。あなたがそっちの世界の私に愛されてないって言うなら、私もあかりに愛されてないってこと」

「は？」

これだから男は。

そうぼやきながら、ゆうなは先ほどの口論中に乱れた髪を手ぐしでとかした。

「私とあきらの境遇はそっくりなの。恋人との行動はいつも自分から。プレゼントはいつもあげるだけあげるのに、もらえることはない」

ゆうなは俺から視線をそらし、すつとどこか虚空を眺める。

「私だって普通の女よ。私よりも綺麗な女なんていくらでもいるし、あかりの可愛さならどんな美人だってつり合う。私なんて、たまたま付き合えたからってあかりを束縛してるだけ」

一度口を閉じ、また開いた。

「似てるでしょ？ だから、あなたが愛されてないと否定したら、それは私のことも一緒に否定してることになるのよ」

ゆうなは俺の返答なんて待ってなかった。

「でもね、私は愛されてると思ってた。うつん、今でも思ってる」

ただ一人ごちに、言葉を紡いでいくだけ。

「いっぱいデートの約束をして、いっぱい楽しんで。たくさんプレゼントして、たくさん思い出作って」

思えば、周囲からの視線は売るほどあった。

痛いほど向けられていた。

「私は同性愛者だから。結婚はもとより、いつまでもこの関係が続くとさえ思ってた」

視線を向けられるのも当然だ。

大声で怒鳴り合ってた。

見れば女同士の痴話喧嘩で。

「だから、付き合ってる今だから目一杯楽しんでるの。許されない恋だからこそ、今を楽しむしかないの」

痛い。

「なのに、私はあなたに侮辱された。私と同じその境遇を、馬鹿にされたのよ」

痛い……。

「最低よ、あなた」

すごく、痛かった……。

いたたまれなくなって、俺はうつむいた。

ジーパンをはいたゆうなの足と、ワンピースから伸びる俺の足。

駅ホームのアスファルトを踏む四足のそれらが、酷くにじんで見えた。

ぐつ、と自身の拳を握りしめる。

「ごめん、ゆうな……」

そんなつもりはなかった。

ゆうなを侮辱するつもりなんてなかった。

ただあかりと俺の差が許せなくて、つい愚痴をこぼしただけ。

その差別で寂しくなって愚痴をこぼしただけ。

それだけなんだ……。

「もういいわよ」

許す意味での言葉ではなかった。

「もういい」

それは、

「あかりに戻る方法が見つからなかったら、二度と私に連絡してこないで」

俺との干渉を拒否する言葉だった。

「じゃあね」

別れるときの、また会おうねという意味のそれではない。

確実に俺の心をえぐり取るよう、冷たく言い放たれたゆうなの言葉。

俺はそれに何の返答も、何の行動も出来ずに視界から消えていくゆうなの足を見ていることしか出来なかった。

まぶたをぎゅっと閉じ、微かに震える拳を強く握りしめる。

今の俺の心境を支配している感情の正体が掴めない。

ゆうなを傷つけてしまったことへの後悔なのか。

ゆうなとの恋を罵ることしか出来なかった自分への怒りなのか。

それを整理できずに拳を握りしめることしか出来ないのは、きつと混乱しているから。

大好きで大好きでたまらなかったはずのゆうなと、こんな形で喧

嘩してしまうとは思わなかったからだ。

「何やってるんだ、俺は……」

頭を両手で抱える。

かきむしる。

がりがりと、爪先に思いを託すようにかきむしる。

何も判断することの出来ない頭は、ただオーバーヒートをして頭皮にかゆみしか与えなかったから。

しばらくその場から動かずにそうしていると、次第に人足の音もまばらになってきていた。

電車が到着してからしばらく経ち、なおかつ次の電車来るまでしばらく時間があるからだろう。

まぶたを開くと視神経に苦を感じるほどのまばゆさを感じ、次第に視界が戻ってきた。

聴覚の判断通り、辺りに人はほとんどいない。

いるとしても時刻表と睨めっこしている人や、次の電車をのんびりと待つ人だけ。

もちろんその中にはゆうなの姿はなかった。

(……何期待してるんだよ)

「ごめん、さっきのは私が悪かった」

そう謝ってくれるゆうなの姿を一瞬でも想像してしまった自分に嫌悪を感じる。

俺が悪いのに、何で向こうから謝ってくる妄想なんか……。

再び頭皮をかこうと手が動き　すぐにやめた。

かきすぎで痛みを覚えたのと、こんなことをしてもどうしようもないと実感したから。

俺は完全にゆうなに振られてしまった。

だから、そんな俺が何をしたところで意味などないのだ。

それも、ゆうなの愛するあかりの体を傷つけるなど……。

やめよう。

そう思い、俺は視線を駅のホームに向けなおす。

そして、改札のある二階に向かって歩き始めた。

だいぶ使い古した元は白色のスニーカーでホームのコンクリート

床を叩き、ワンピースのスカートをひるがえす。

今の俺からすれば大きな歩幅で。

元の俺からすれば限りなく小さな歩幅で。

俺が動き出す目的は一つ。

それは俺が当初から見定めていたものであり。

また今は嫌われてしまったゆうなの望むことでもある。

元の世界に戻る方法。

その手がかりを探すために、俺は大学へと向かう。

そこに俺のあてにしている人物 オカルト研究部部長がいるの
だから。

オカルト研究部。

その名前を聞く限りでは、いかにも不可解な怪奇集団を思い浮かべるかもしれない。

俺も初めはそうだった。

UFOや幽霊なんてものを信じるつもりはないし、それをどうこう考えるなんてのはもってのほか。

そんな考えを持っていたから、俺はオカルト研究部に対してあまりいい感情を抱いていなかった。

胡散臭えとか、根暗そうとか失礼なことを。

だが、それはある事によって覆されることになる。

大学一年当時はオカルト研究部に入っただけ、現在では部長の任を勤めている人物。

菅原たくやと講義の席が隣になったことがきっかけだった。

*

「隣の席空いてる？」

最初に話しかけたのは俺。

確か入学間もないころだったか。

二百人分の席はあろうかという広い講義室を用いる一般教養の授業が、最初の出会いだった。

「うん」

特に何のリアクションも見受けられない、単調な肯定。

固定された木製の席に座っていたたくやの返事は、たったそれだけだった。

当時の俺は地元から一人で進学してきたため、大学周辺には一人の友達もいなかった。

だから俺は一刻も早く友達が作りたくて、同じく一人でいたたくやに話しかけたんだ。

早く一緒に昼飯を食べる友達がほしい。

馬鹿話や愚痴をこぼせる友達がほしい。

そんな心境で。

だが、たくやから返ってきたのは淡白な頷きのみ。

この反応は、ちょっと意外だった。

俺が講義室に入ったとき、たくやは何かを探すように辺りを見渡していた。

背筋を伸ばし、首を左右にキョロキョロと。

そんな様子を見て、たくやも友達になれそうなやつを探してるのだと踏んでいたのだ。

こいつも俺と同じか。

そう思って。

入学当初はみんなそんなものだろう。

一人は寂しいから、話す相手がないから友達がほしい。

そういった考えで友達作りに励むのが、学校入学当初における定番だと思っている。

だから俺は辺りを見渡しているたくやの仕草を見て、友達になれるかも、と近づいた。

同じ目的なら互いに打ち解けようと努力し合うだろうし、もし気が合わなければそのときはそのとき。

友達を作ろうと思ったら、自分から行動するのが一番の近道なのだ。

だからこそ俺は、

「横、座っていいか？」

そう、そのときはまだ名前も知らないたくやに問うた。

「別に」

しかしたくやの返答はひたすら淡泊なもの。

お前は沢尻エリカですか、と突っ込みたくなったが、初対面でそんなことをするわけにもいかない。

もっとも初対面の相手に沢尻エリカ返答をするたくやもどうかと思っただが、当時の俺はめげなかった。

「じゃあ遠慮なく」

そう言ってカバンを肩から下ろし、隣の席に腰掛ける。

古くなっていたのか、俺が座ると木製の椅子と金属の留め金が軋みを上げた。

「ところで名前」

「あ」

言葉が途切れる。

まず最初は名前を知ることだろう。

そう思って話しかけるなり、たくやは消え入らんかという小さな声を上げた。

おかげで行き場を失った言葉が宙をさまよう。

出会って数秒で沢尻エリカをされ、その数秒後には言葉を食われ。今に至っては、俺に対してそっぽを向いてしまった。

そっぽを向いているというか、「あ」と声を上げたと同時に虚空を見つめた、という表現が正しいのだが。

それでも話しかけた俺を無視し、よそを向いているのに変わりはない。

もしかして俺、こいつに嫌われてる……？

いやそれはないだろうと首を振り、自分の意見を否定する。

たったの数十秒。

たったの二回しか言葉を交わしていないのだ。

それだけ僅か時間で嫌われることが出来るほど、その手の才能に恵まれてはいないはず。

そう自分に言い聞かせ、どこか上の空になっているたくやに話しかける。

「どこ見てるんだ？」

「おばあちゃん」

……頭痛がしてきた。

たくやの見やる先を、俺も同様にして眺める。

そこにいるのは、授業開始前ということで木製の机の上に買いたての教科書を並べている学生や。

出来たばかり、または進学前から仲の良かった連中がつるんでおしゃべりしている姿。

もちろんそれらはすべて十代後半から二十代の連中。

だが目の前のこいつは「おばあちゃん」を見ているという。

見た目からの判断だが、こいつは俺とタメ程度。

この年齢でおばあちゃんと言えば、六十代から七十代にかけてのはず。

だが眺める先に見えるのは、どいつもこいつも背筋が伸び、肌にも張りがある年代。

その中のどこを探しても、こいつの言うおばあちゃんは発見できそうになかった。

……からかわれているのだろうか、俺は。

人とコミュニケーションを取ることにおいて。

そこに己と相手の性格が反映されるのは言うまでもないだろう。

会話を盛り上げようとするやつもいれば、相づちばかり打つものもいる。

馬鹿みたいなことをして笑いを誘おうとするやつもいるし、ついていけない人もいる。

様々な性格差が生まれるコミュニケーション。

そこに合う合わないが生まれることも、先ほどと同様に言うまでもないこと。

苦手な人種が存在する。

つまりそういうことだ。

そして、俺はこう思う。

(こいつ、苦手かも……)

コミュニケーション開始早々この事態。

相手をどうこう判断できるほど会話を交わしていない、というより交わせない。

会話しようと話しかければ淡白に返され、さらに続けられぶつり途切れさせられる。

コミュニケーションのこの字も達成できてやしない。

俺は話の会うやつが好きだ。

一緒に馬鹿騒ぎ出来るようなやつが好きだ。

だがこいつは……。

そう俺は、半ば諦めた気持ちで未だに「おばあちゃん」を見ているこいつを見ていた。

この時、俺の脳内には二つの案があった。

一つは、めげずに名も知らないこいつに話しかけること。

せつかく話しかけたのも何かの縁。

合う合わないの判断は一旦置き、短くともこの講義中は話してるのもありだと思う。

よくよく付き合ってみれば第一印象とまるで違った、というやつも山ほどいるのだ。

もしかしたらこいつもその内の一人かもしれない。

そしてもう一つ。

こいつをとっと見切り、他の候補を探すこと。

まだ講義開始まで数分を残しているから、他に友達になれそうなやつを探すことぐらい出来るだろう。

先に第一印象云々について述べたが、逆もしかりだと思う。

第一印象と違うやつもいればまんまのやつもいる。

つまりこれは二択だ。

我慢してみるか、諦めるか。

その選択を見極めんと今一度目の前のこいつを見たとき、

「菅原たくや」

いきなり名乗られた。

「……はい？」

いろいろと思案している最中に名前だけぽつりと言われ、誰がそれを自己紹介だと判断できるだろうか。

もちろん俺とてそれをすぐさま理解するには至らず、少しの間をおいて問い直した。

しかしその返答は、

「菅原たくや」

俺はこいつの主語を聞き取る能力がないのだろうか……。

「ああ、名前ね……」

ただ言葉を漏らしたようにしか聞こえない呟きに、ようやく俺はこいつの名前が菅原たくやであることを知る。

先ほど俺が

『ところで名前』

と言いかけたことから、たくやは名乗ることを選択したのだろう。

名乗り方は決して良いものではないが……。

まあとにかく、だ。

相手が名乗ってくれた。

それに合わせるなら俺も、

「あきらだ。よろしく」

「よろしく」

割にあつた返事がきて、少し嬉しい気持ちが出た。

俺はようやくたくやとまともに会話出来たと、半ば上げかけていた腰を座席に据え置く。

選択肢は一つにしぼられた。

そう思つて。

そして、改めて相手の容姿を見る。

先ほどまでこいつの突飛な性格にばかり気を取られていたせいで、あまり容姿たるものを意識してなかったからだ。

パツと見で言うなら、体軀はかなり華奢だろうと思う。

男の割りには線が細く、耳の中程までかかるストレートの黒髪。

身長は、たくやが立っているところを見ていないから分からないが、隣に座っている限りでは低く見える。

座高が特殊でなければ、百六十程度だろうか。

低めの身長に、細い体。

そんな容姿から、後ろ姿を見る限りでは女と間違われそうだな、
と思った。

「ところでさ、」

俺からの切り出し。

それに応じ、たくやがこちらに首を向ける。

「さっきの「おばあちゃん」って、なんだ？」

それは疑問。

俺の中で解決し得ないものなど、聞くほかない。

まるで“俺には見えないものが見える”ような物言いに、どうし
ても納得出来なかった。

そんな、まさか幽霊でも見えるわけじゃあるまいし。

そう思って、

「守護霊」

長いまつげを向けたたくやは、淡々と告げてみせた。

「しゅ、守護霊？」

守護霊って言うと、やっぱり幽霊の類で……。

「おばあちゃんとおじいちゃんが憑いてる」

「そ、そうなんか」

なんというかかんというか。

ただ曖昧に頷くことしか出来ない俺を、誰が責められよう。

俺は決して幽霊否定派ではない。

真夜中に怪談話をされれば相応に怖がるし、その後に風呂やトイレに行くのは躊躇われる。

鏡を覗いたら……。

ドアの隙間から……。

そう思うと、夜、布団の中にいることさえ嫌になることだってある。

だがそれと今回は別だ。

真っ昼間の、幽霊の「ゆ」の字だって出てこないようなこの時間に幽霊話。

しかも怖がらせる目的ではなく、ただの事実として伝達された言

葉だ。

それをどうして素直に受け入れられるというのか。

決して否定派でもなければ頑固たる肯定派でもない俺に、どうすればいいというのか。

はなはだ疑問ではあったが、この数分後、俺は思い知らされることになる。

たくやが、本当の本当に祖父母連れであることを。

*

その数分後というのは、教授が講義室にやってくる少し前のこと。

たくやがいきなりノート類をしまい出したのが発端だった。

「え、なんで片付けてんの？」

今まで机の上に出していたノート類を手提げの鞆に入れていくたくやを見、俺が疑問の声を挙げる。

それはそうだろう。

普通ならば授業前にノートなどを出し、それを片付けてるのは終わってから。

それが定型的であるのにも関わらず、この男は教授の顔も見ない内にそれを行ったのだ。

疑問視せざるを得ない行動に対し、張本人はこう言う。

「抜き打ちテストがあるから」

「……はい？」

「今日、抜き打ちテスト」

リピートを求めたわけではなかったが、意図せずとも二度繰り返されるたくやの言葉。

抜き打ちテスト？

可能性で考えれば、なくはない。

入学したばかりのこの時期。

一般教養という授業柄、学力を測る意味で最初の授業に抜き打ちのテストを行う可能性は多々にあるう。

だから可能性で考えればなくはない。

だが、何故たくやは“抜き打ち”をあらかじめ知っているような口をきくんだ？

抜き打ちと言うからには、学生側には何の連絡もされていないのが当たり前だ。

だってあらかじめ知り得ていたのなら、それはただのテストと変
わりない。

だからこそその抜き打ちテスト。

なのに……。

「どうして抜き打ちテストがあるなんて分かるんだ？」

対し、たくやは無表情で答える。

「おばあちゃんが教えてくれた」

おばあちゃん何しとるんっ！

思わず見知らぬおばあちゃんに声を挙げそうになったが、次第に
紡ぐたくやの言葉に俺は聞くほかなかった。

たくやの小さく短い言葉を繋ぎ合わせるに、事のあらまはこ
うらしい。

まず、たくやが講義室の席に着くと守護霊であるおばあちゃんの
姿が見えなくなった。

普段はたくやの周囲におじいちゃんと共にあるらしく、不審に思
ったらしい。

そこで辺りを探すたくや。

俺が話しかけたのはこの辺りだ。

するとどこかに行っていたおばあちゃんが戻ってきた。

ここが俺が無視されたと勘違いしたところ。

聞くに、おばあちゃんは教授がどんな人かを探りに行っていたらしい。

可愛い可愛い孫のために。

そしてその時に教授が大量のテスト用紙を持ってくる姿を発見。

戻ってきたおばあちゃんはそれをたくやに伝え、抜き打ちテストがあることを知る結果になった、というわけだ。

まあ、正直に言おう。

胡散臭え……。

守護霊のおばあちゃんが勝手にさまよって、教授が大量のテスト用紙を運ぶ姿を見た？

これを一言で済ますなら

「ハハッワロス」

流さざるを得ない。

だってそんなオカルチックなことを淡々と申されましても、一般ピープルの俺としましては返答に困るわけで。

まあ話の流れは分かった。

その中には俺が講義室に入ってきた時に辺りをキョロキョロと見渡していた理由もあった。

俺の話を遮って「あ」と呟いた経緯もあった。

虚空を眺めて俺を無視していた理由だってあった。

で、それが後付けにならない根拠は？

つまりそういうことである。

こんなの考えればいくらでも嘘がつけるし、どうしても言える。

つじつまなんてのは後から付け加えればそれっぽさなど山のよう
に付加されるのだ。

信じる、信じられない。

その選択肢で言うなら、俺は笑い捨てる。

そんな心境だった。

教授が大量のテスト用紙を重そうに運んでくるまでは。

「……うそーん」

バーコード頭に脂汗をびっしょり滴らせながら、小太りの教授が大量の用紙を教卓の上に置く。

（い、いや、まだ紙だ。テスト用紙と決まったわけじゃない）

動揺が抑えきれない心を落ち着かせるように、俺は心の中で呟く。

教授が持ってきたのは、あくまで大量の紙。

もしかしたら何かのアンケートかもしれないし、連絡用の紙……いや最初の授業だから、その手の紙かもしれない。

まだテストがあるなんて決まったわけじゃない。

下手に回る頭で導き出さんとする解答は、

「早速だが君たちにはテストをしてもらう！」

バーコードハゲの教授の一声によって、粉々に砕けた。

抜き打ちテスト。

たくやが言ったように、これは抜き打ちテストだったから。

そっだ、よくも考えてみる。

これがテストであるかないかなんて問題ではない。

たくやは、大量のテスト用紙を運ぶ教授、と言っていた。

つまり、たくやが言っていたことは真実。

それがテスト用であろうがなかるうが、大量の用紙を持ってきている事実に変わりはなかったのだ。

（守護霊が、マジ……？）

不意にたくやと目が合う。

今まで無表情しか見せることのなかったたくやが、この時ばかりは口端を上げた。

そして紡ぐ。

「ね？」

短い言葉に、鳥肌が立った。

「オカルト研究部、か」

記憶にあるそれよりも高い位置にある「オカルト研究部」と書かれた表札と、そのすぐ傍らにある扉。

それを見上げ、思う。

前に来たのはいつのことだったか。

その部長であるたくやに触れ合う機会なら幾度もあれど、部室に
来たことはあまりない。

一年の頃からたくやと付き合いがあるというのに、確かここへの
訪問は今回が五回目。

たくやに関わってる時点で、オカルトに対する興味があるのは間違いない。

でもそれは己から湧いて出たタイプの興味ではなく、たくやのすごさにつられてのものだ。

だからそれはサークル活動として勤しみたいというほどあるわけではなく、話のネタの一環、と言えいいだろうか。

俺の中でのそれは、たくやと会話してればそれに関する好奇心は満たされる程度のかなり浅いものに過ぎない。

故にたくやとの交流はあれど、オカルト研究部そのものにはないのだった。

だから、こうしてオカルト研究部の部屋を目の前にとすると、慣れない気持ちが先行してしまう。

まあ、それでも行くしかないのだが。

「行こう」

中にはオカルト研究部部长であるたくやがいる。

行かねばならなかった。

今の時刻は昼時を過ぎ、午後の講義が始まるころだろうか。

そんな時間に、俺はオカルト研究部の部室前にいる。

有り体に言えば、午後の講義をサボったからだ。

別に講義を蔑ろにしているわけではない。

ただ、今のゆうなと同じ講義に出なくちゃいけないのが嫌だったというか、そんな心境じゃなかったというか……。

……ああもう。

とにかく、だ。

この時間にたくやが部室にいるのはあらかじめ知っていたこと。

俺の中でのたくやはマメなイメージがあっただが、本人からすると割とルーズらしく、選択制の時間割はほとんど空けているらしい。

そのため午後に丸々講義がない日があり、その日は昼を食べ終えたとすぐに部室にこもるのだとか。

曰わく、

『おばあちゃんが拗ねる』

講義ばかり受けてると、孫に構ってもらえないと言って拗ねてしまうのだそう。

まったくもって可愛らしいおばあちゃんだこと。

そしてその話を聞いたときに、今日がたくやの午後のない日であることを知ったわけで。

だから、俺はわき目も振らずにたくやの元に来たんだ。

たくやなら、オカルト研究部部长であるたくやなら何か知ってるだろう。

そう踏んで。

「失礼します」

二度のノックの後、外開きのドアを開け、中を確認する。

相変わらず小さな部屋だ。

五畳ほどの部屋に机や椅子、棚などが所狭しと並べられており、それらの圧迫感は異常のレベルにまで達している。

部屋の中を歩こうとするなら、横歩きその他選択肢が見つからない始末だ。

確かオカルト研究部は総勢六人だったはずだが、それにしてはさすがに狭すぎるだろう。

見ればもつとも空間を使っている机ですら四つしか並べられておらず、内一つは対になる椅子さえない。

もしこの部屋にオカルト部員の全員が集合しなければならなかった場合、少なくとも三人は起立したまま活動する必要があるわけだ。

いや、その前に誰かが机の上に乗らなければ六人も入りきらないか？

そう憂いてしまうほど、窮屈な空間がそこにあった。

まあ弱小サークルに部室が与えられているだけましというものか。

そんなことを考えながら俺は正面に、発見した。

奥の机に座り、窓の外を眺めているただ一人の人物を。

窓から差し込む光の逆光。

その中で窓際に座っている人物を見

あれ？ と首を捻った。

肩口まで伸びる長い黒髪。

腕や体から分かる線の細さ。

すらっと伸びた手足に、程高い座高

……あれ？

それらに覚える違和感。

俺の知っているたくやの特徴と相違していることに気付く。

もしかして部屋を間違えたのかと思ったが、もう一度確認した表札の文字は「オカルト研究部」。

間違いない。

そして一番奥の席はたくやの定位置であると、本人から聞いたこ

ともある。

なのに明らかにたくやとは別である人物がそこにいるのは……。

「ああ、あかりか」

その人物が発する、耳に心地良い高い声。

「こんな時間にどうしたんだい？」

それは女の声だった。

窓際にいた女はすつと立ち上がり、狭い通路を難なくこちらまで歩み寄ってくる。

そして目の前にまで来たとき

「背エ高っ！」

女は、ざっと見ても百八十はあった。

「おやおや、割と久しぶりに会ったと言うのに開口一番がそれかい？　なかなか傷付くこと言ってくれるね」

「い、いや、まあ……」

目の前の人物の言葉なんて耳に入らなかった。

半歩踏み出せば体をぶつけるような至近距離に女はいる。

デカ女がそびえてる。

顔を見ようと首を持ち上げると、もみあげから何から髪の毛が後ろに流れる。

喉の皮が突っ張る。

気道の確保がされる。

まあつまり俺との身長差は異常と言えるほどであって。

「し、身長は？」

「この間測ったときは百八十四センチだったね」

高え
！

え、何、男の俺よりめっちゃ高いじゃん。

日本人の成人男性における平均身長を上回ったぐらいの俺なんか比べるよしもないじゃん。

しかも、しかもだよ？

今のあかりの体で、首を上に向けずに真っ正面を見てみるわけよ。

するとき、胸元だよ胸元。

目の前にあるのはあかりとはれるぐらい薄い胸だけど、視界の真っ正面にあるわけよ。

何これ。

ねえ何これ。

何なの、この低身長と高身長の代表を並べてみましたみたいなこの差は。

いや、もうマジで。

あまりの身長差に啞然としてしまう。

気持ちはまだ男のままである俺からすれば、こんなに見上げなければならぬ相手は二メートル以上の巨人クラス。

そんな、万国ビックリショウじゃあるまいし。

それにここまで背の高い女なんてあまり見たことがない。

テレビで女子バレー選手の身長を数値で見たときは単に感心したものだが、それが実物となると……。

こいつあすげえや。

「どうしたんだい？ 今日のアかり、なんか変だよ」

いや俺あかりじゃないから、あかりとして変も何もないわけで。

不意に声を投げかけられて首を高みに向けて上げ、そこで我に返る。

俺が会いに来たのはたくやであって、この女ではない。

その事実には。

「あー……ちやうねん」

思えば初対面で身長を尋ねるなんていささか失礼だったか。

なんだか罰の悪いような気がして、なんとなしにエセ大阪弁が口をつく。

……あれ、でもこの人、まるであかりを知っている風だったようにな……。

「えっと、たくや……オ力研の部長に会いに来たんですけど」

その言葉に、背の高い女はくすりと笑った。

「何を言ってるんだい。オ力研の部長なら私じゃないか」

「……はい？」

「だから、オ力研の部長はこの私、菅原ゆたかだよ。もしかしてか
らかってるのかい？」

……マジで？

「ええと……」

自身の言葉を皮きりに、思考を開始する。

目の前にいるデカ女は、さも当然であるかのように自らをオカルト研究部の部長であると名乗った。

が、俺の知る限りでは、今年度におけるオカルト研究部の部長は菅原たくやのはず。

友人としてそのことは把握していたし、実際にたくやが部長として振る舞う姿も幾度か確認したのだ。

間違いであるはずがない。

つまりここが相違点であり、俺に違和感を覚えさせる矛盾点である。

これは同時に存在し得ない事象だ。

部長が二人。

片方が副部長であるならまだしも、両方が部長を名乗るなんてありえない。

仮にどちらかが“自称部長”であったとしても、その理由はなん

だ？

それに、過去にたくやはこう言っていた。

『仕方ないから部長になった』

それはたくやと同学年以上の部員がいなかったから。

そもそもたくやは、自ら部長をかって出るような積極的な性格ではない。

ただでさえ守護霊のおばあちゃんがすねると自由な時間の保持に苦心しているたくやが、それを削ってまで部長業に勤しむ理由がないのだ。

だから、運悪く唯一の最高学年になったたくやは渋々部長の役職を受け入れたに過ぎない。

なのに……？

ああ、混乱してきた……。

両立し得ない事柄が同時に起きているということ。

それはつまり、何かしらに嘘があるということだ。

この眼前にそびえる高身長女が嘘をついているのか。

はたまたたくやが嘘をついていたのか……。

（分かんねえ……）

後頭部をがりがりとかく。

長い髪が指にまとわりついて、なんだか不快だった。

（ 長い髪？）

背中まで長く伸びた髪は、俺があかりと入れ替わった印。

「あっ」

俺はそこにヒントを得た。

いや、ヒントなどこの巨大な女が名乗った時にあったのだ。

菅原たくやと菅原ゆたか。

同じ姓を持つ両者。

が、注目すべきは名前の方。

ローマ字表記で『Takuya』と『Yutaka』。

構成要素は『T』、『K』、『Y』、『U』が一つずつに、『A』
が二つある。

あきらとあかりのそれに酷似しているその関係。

結論を言おう。

たくやとゆたかは、パラレルワールドにおける同一人物なのだ。

「どうしたんだい？」

遙か上から不思議そうな表情をしたゆたかがこちらを見下ろしてくる。

先ほどの俺の声に反応したものだろう。

だから俺は首を目一杯反らし、ゆたかの顔を見上げた。

「実はゆたかに相談があつて来たんだ」

「おや、あかりから相談なんて珍しいね。なんだい？」

もし俺の想像通り、ゆたかがたくやと同位置にある人物なら、本人が持っている性質もさほど変わらないだろうと思う。

だから俺はゆたかをたくやと同様に親しみを込めて呼び捨てにし、たくやで果たそうとしていた目的を達成しようとする。

もちろんそれは現状の脱出。

パラレルワールドから帰還し、元の世界に戻ることだ。

だが……と思う不安要素もある。

たくやが持っているのは、自身の能力から分かるようにオカルト方面でも幽霊に関しての知識。

だから、もしかしたら俺の求める答えを知らないかもしれないのだ。

だが、一応ながらたくやは部長という立場であり、長いことオカルト研究部に在籍していた人間。

全くの無知である俺よりは幾分もましであるに違いない。

そう思い、

「あまり驚かなくてくれると嬉しいんだが……」

前置きのあと、俺は話し始めた。

俺の現状と、その予想を。

「つまり、君にとってこの世界はIFの世界であり、私は君の友人である菅原たくやと同じ立場にある、というわけだね」

俺の話を要約したゆたかの言葉を確認し、頷く。

事情は話した。

眉根を詰めて真剣に考えるようなゆたかの表情を見る限り、この説明で大体は分かってくれただろうと思う。

だから、あとは待つだけ。

考えてくれているゆたかの邪魔をせず、答えが導き出されるのを期待するだけだ。

そうして待つこと数分。

「はあ」

不意にため息を漏らしたのはゆたか。

強ばらせていた表情を崩し、力の抜けた顔になった。

「やはり滅入りそんな命題だね、平行世界というものは」

「そうなの？」

「うん。君の話を聞く限りだと、この世界は完全な反転世界ではないようだからね。君とあかりは性格が似ているようだし、君の彼女は性別が変わらず、私は霊能力の保持が共通項だ」

えっと、それはつまり……。

「この世界は君の世界にとって、ところどころを反転させただけの中途半端な出来にすぎない、ということさ」

互いに椅子に腰掛けて隣合っている状態の俺たち。

部屋が狭いから仕方がないが、どうしても距離が近づいてしまい、ゆかたの顔を見上げるのに首をそらさなければならなかった。

「中途半端、か」

「うん。もし完全に反転している世界ならあかりは上品な言葉遣いだろうし、君の彼女は彼氏のはず。私は幽霊を見るところか、その存在すら認めていないだろうね」

ゆたかの言葉を聞き、なるほどと思った。

この世界の定義が「反転」であるならゆたかの言うとおりだし、「性転換」であるならゆうなの存在が浮いてくる。

それに、ゆたかの性格がたくやとかけ離れている点も気になるところだろう。

たくやはクールというより寡黙な性格だったが、ゆたかはその逆。語り口は雄弁の表現が似合い、表情もコロコロ変わるのだ。

俺とあかりの性格が似通っている点を考えると、世界としての共通項にはならない。

「それにね、」

細く長い腕を上げ、慣れた手つきで俺の頭を撫でるゆたか。

「今のところ、原因も分からないな」

頭皮に触れた指先が、小さくブレた。

「分からない……？」

「うん。正直に言うと、どうしていいのかも分からない。手詰まりだよ」

頭をなでる指先が柔らかくつむじをなぞり、こそばゆい。

その感覚が、酷く煩わしかった。

原因が分からない。

ゆたかの発した言葉。

過度な期待こそしていなかったが、それでもそう言われたらショックを隠しきれない。

それが、俺の中で抱いていた唯一の希望だったから。

「あー……マジかよ……」

たった一つのアてだったたくや、もとい今はゆたかがなくなった。つまりそれは元の世界に帰れる可能性が消失したことを意味しており、絶望に繋がる。

元の世界に帰れない。

事実が脳裏に反芻する。

「俺……ずっとこのままなのかな？」

「厳しいことを言うようだけど、そうなるだろうね。私の力じゃどうにもならないよ」

……信じられない。

いや、信じたくなかった。

俺は今まで元の世界に帰れると信じて、入れ替わってから十二時間以上も過ごしてきた。

しっかりと自我を保って。

それは可能性を見いだせていたから。

光を望み続けられていたからに過ぎない。

だが……。

「なあ、どうしても帰れないのか？」

こんな小さい体なんて嫌だ。

こんな非力な体なんて嫌だ。

俺は男であきらで、あかりじゃない。

戻るのなら戻りたいし、戻れないとしても絶対に戻りたい。

「どんなことでもするからさ。頑張るから。だから」

「私じゃ無理だよ」

すつと振り下ろされた言葉。

断ち切られた。

頭に触れていた指が離れ、ゆたかが立ち上がる。

遥か高みからこちらを見下ろす視線が、酷く痛かった。

「全ての物事には原因がある。それが現実的であれ、超常的であれ、ね」

頷くと、長い髪が揺れた。

「だから、物事を解決するには原因が必要になる。理屈は分かるよね？ 解決には原因を取り除くのが一番」

何か事象を解決ため原因を取り除こうとするのに、その原因が分からないんじゃない？ 元も子もない。

スタートラインにすら立っていないような状態と言っても過言ではない。

そんな状態で、一体何が出来ようというのか。

そう、ゆたかは言う。

「さらに原因を探ろうにも、君の置かれている状況が曖昧すぎて測りかねるんだ。さっき言った中途半端な世界、というのがこれにあるね」

「……そっか」

ゆたかに負けないくらい高い声が返事をする。

いい加減慣れたと思っていたそれが、頭に痛く残った。

「落ち込まないで、なんて軽々しい言葉は言わないよ。今の君に言っても無粋だろうしね。ただ、事実を受け入れてほしいんだ」

「うん……」

返事をして、それが何に対するものなのかが分からない。

意識がちつとも会話に回らないんだ。

考えるのは、現実。

潰えた希望について。

元の世界に戻れない。

この世界に続けなくちゃいけない。

ゆうなに嫌われたままになる。

嫌だ……。

そんなの嫌だ。

俺はこんなことを望んじやいない。

考えたことだってない。

なのに……なんでだよ。

女に性転換なんて、他にいくらでも望むやつがいるだろう？

腐るほどいるはずなんだ。

なのに……選ばれたのは俺。

こんなの苦痛でしかない。

俺が奪われた。

あきらの存在が俺とイコールではなくなった。

こんなにも悲劇的なことなのに……。

誰一人として、あきらを知るやつなんていないんだ。

ああ、今さら思うよ。

なんて悲劇に巻き込まれたんだ、ってな。

机の上で拳を握りしめる力さえ湧いてこない脱力した体。

思うのは悲しみでも憤りでもなく、喪失感だった。

「……」

天井を見上げ、無機質な明かりの蛍光灯に目がいく。

前に来たときには、もつと近くに感じたっけ……。

そろそろ寿命がきているのか、時折ジジジ、と小さく鳴る蛍光灯。

その無表情さに、下唇を噛み締めた。

これから、この小さな体で生きていかなくちゃいけない。

街を歩けば人の肩が視線にあり、電車に乗れば非力さを痛感させられる。

男の俺だったら、ありえないことだ。

なのに、それが日常になっていくなんて……。

……認められるかよ。

ふざけんな。

何で俺がこんな目に遭わなきゃいけないんだ。

褒美をくれたなら、俺はこんなの欲しがっちゃいない。

罰だったとしたら、他にもつと与えるべきやつがいるだろ。

理不尽だ。

ありえない。

だから、認めたくない。

認めてしまったら、何かを失ってしまう。

そんな気がしたから。

なんとか……。

「なんとかしなくちゃ……」

認めないのなら何かしなければいけない。

時間の経過は、優しくも残酷だ。

抉られた傷は癒やしてくれるが、覚えた違和感までも綺麗に整えてしまう。

なのに、俺の口をつくのは曖昧な言葉だった。

具体案が出てこないのは、俺に知識がないから。

そもそもパラレルワールドの発想自体、元はたくやからの受け売りだ。

いつも心霊に関する知識を教えてくれていたたくやに、たまには別の話も聞いてみたいと言ったことがきっかけだったと思う。

IFの世界。

人は生きてるうちにいくつもの選択肢に巡り合う。

選ぶということは、選ばなかったものを捨てるということ。

パラレルワールドは、その捨てられた選択肢の世界だ。

それを聞いた当時の俺は、そんな考え方もあるのか、と感心したものだ。

たくやから色々と現実離れた話を聞いてるうちにそれらに対して免疫がついていたから、純粹に受け取れた。

だから、俺はあかりと入れ替わって間もなくパラレルワールドの可能性に行き着くことが出来たわけだ。

……まあ、それが分かってても、それだけだからなあ……。

「もしかして、元の世界に戻る方法を考えているのかい？」

見上げ、蛍光灯の逆光でまばゆいゆたかの顔に向ける。

返事は、肯定だ。

上に向けて頷いた直後、背の高い彼女の顔が途端に晴れた。

「それはよかったよ」

胸の前で手を打ち、視線を合わせるためか隣の席に着いた。

「いやあ、諦めないでくれてよかった。表情がだいぶ陰っていたから、もしかしたらって心配だったよ」

その言葉に、やや疑問。

「さっき「無理だ」って言うといいて？」

責めるつもりはないが、事実として希望を絶ったのは他ならぬゆたかだ。

なのに、諦めないでくれてよかった？

いまいち読めない思考に、ただゆたかは微笑む。

「人の管轄出来る力の範疇を超えたものに挑むわけだからね、結論を言うなら「無理」。だから嘘を言ったつもりはないよ」

けど、と挟む。

「君は あきらは意思の有無に関わらず、一度その「無理」を超えた。一度超えられた「無理」なら、決して超えられない「無理」じゃないんだよ」

それはつまり……

「俺を試したのか？」

「言葉の棘を考えずに言うならそうだね。決して超えられない「無理」でも、生半可な覚悟じゃ超えられっこない。せめて「無理」で

ある事実くらいは受け入れてもらわないと、ね？」

いや、そんな大きな体で可愛く「ね？」と言われても……。

まあ超長身女の可愛らしさの是非は置いておいて。

ゆたかが始めに可能性を否定するように言ったのは、単に俺の覚悟を試すためだろう。

先に言った通り、パラレルワールドの世界を移動すること
は「無理」なことなのだ。

「無理」でなければ、どこの誰でも世界間を行き来しているはず。
が、現状はそうではない。

人々は己の選択した世界で、何の疑問もなく生きている。

むしろ、その存在さえ知らない、認めない人もいるかもしれない。
つまり俺に起きた現象は、それだけ現実離れたこと、ということ。
と。

その現実離れを、自ら引き起こそうというのだ。

だから、ゆたかは覚悟を求めたのだろう。

そんなありえないことに挑むのだから、最低限の覚悟がなければ

ならない。

そして、それを持ってようやくスタートラインに立つことが出来る。

要は試したのだ。

俺のそれが、口だけの否定で折れるような弱い意思だったのかどうかを。

まあ試したことに対して思うことはあれど、逆に仕方ないとも思う。

そこにこだわるよりは、話を先に進めた方がよっぽど有意義なことだ。

そう思うと、先に切り出したのはゆたかだった。

「さて、あきらには色々と聞かなくちゃいけないことがあるんだ」

「聞かなくちゃいけないこと？」

繰り返した言葉に、ゆたかは仰々しく頷く。

「君の世界について聞いておきたい。空は青いかどうかなどの簡単なことから、日本という国の位置づけ、あと世界の常識など、あらゆることを聞きたいんだ。軽く聞いた限りではこちらとそれほど違いがあるとは思えないけど、あくまで想像。それだけだと判断しか

ねるからね」

視線を合わせるためか、隣の席に腰を下ろすゆたか。

「理由は知識の補完。それを知ったところで原因究明に直接繋がるとは限らないし、まったく同じで徒労に終わるかもしれない」

でも、と続ける。

「知らないに越したことはない、と私は思うんだ。無知によるトラブルはあれど、逆はそうない。前者が不可抗力なのに対し、後者は事前に防げるものばかりだからね」

耳にかかる細く黒々とした髪の毛を指でかきあげる。

「だから教えてほしいんだ。分かってくれたかい？」

「あ、ああ」

納得して頷くも、思ふことが一つある。

なんでゆたかは、妙に芝居がかった風にしゃべるのだろうか？

別に気に障るとかいうわけではないが、なんというか。

あのたくやと同位置付けにある人物と認識しているためか、どうも違和感が……。

癖、なのかな？

「それで、一つ確認しておきたいことがあるんだ」

とん、とゆたかが左肘を机の上に置く。

その表情は神妙。

空気が変わった気がして、俺も改めて向き直った。

座つてもなお高い位置にある薄い唇が、ゆっくりと開く。

「あきらは、彼女と喧嘩してるんだったね？」

「……ああ」

それは、出来れば思い出したくないこと。

先ほどゆたかに話したそれを言われ、なんとも言えない焦燥が胸に湧く。

なんで今、そのことを？

「先に言った君の聞きたいことの内に、君の人間関係についても含まれている。世界に限らず、君についても把握したいからね。そして、もちろんその中には君の彼女も含まれている」

つまり、ゆうなも含まれている、と。

「嫌だったら構わない。私には無理強いする権利も必要もないから

ね」

一息空け、

「でも、出来ることならできるだけ詳しく教えてほしい。事情が把握しきれない以上、何があるか分からない。だから、無理のない範囲で話してほしいんだ」

……なるほど。

原因の糸口すら見当たらない現状。

探るなら、もはや暗中模索。

そんな状況なら、知れるものをすべて知っておきたいのは当然の考えだ。

むしろ、友人ではあるものの、他人の俺に対してここまで真面目に考えてくれることがありがたいこと。

「話してくれるかい？」

だから俺は、

「ああ、分かったよ」

労を費やしてくれる友人に、最大の協力を。

それが、俺には必要なんだ。

結論から言うと、俺の話のほとんどは徒勞に終わった。

俺の世界とゆたかの世界、そして俺の周りの人間関係も非常に酷似していたからだ。

日本は日本だし、民主主義で兵役はないし、議会もある。

大学で取ってる授業も同じだし、制度も何も変わらない。

聞く限りでは、まったく違いを感じられなかった。

が、決定的な例外が一つ。

「あの木田が　女？」

「あの、と言われても私には分からないけどね」

少し困ったように眉尻を下げて笑うゆたか。

その一方で、俺は酷く驚いていた。

木田、というのは大学の教授のこと。

担当教科は一般教養。

あの、俺とたくやが初めて会った時の講義の教授だ。

俺の記憶を辿って出てくるのは、薄茶のよれよれスーツを着た、メタボリック体型の油ぎつしゅオヤジの容姿。

それはどこからどう見ても典型的な小太りオヤジで、間違いなく性別は男性。

なのに、女？

「なかなかスマートな女性だよ。あの若々しい見た目で四十代後半というんだから驚きだね」

ゆたかが告げるのは木田の容姿。

俺の記憶とは相違するものだった。

いや、なんていうか……マジで？

そして話を聞くと、どうやら違うのは木田だけじゃないらしい。

「実におかしな話だね」

相変わらず芝居じみた口調で話すゆたかに対し、頷く。

本当におかしな話だ。

ゆづな以外、全ての人間の性別が逆転しているなんて。

聞けば聞くほどおかしな気がしてくる。

元の世界では男友達の方が多かった俺が、あかりでは女友達ばかりいて。

いつも世話焼きだったたくやのおばあちゃんは、ゆたかの世界ではおじいちゃんの方が世話焼きだと言う。

挙げ句には、日本の首相は歴代全てが女性だったという話ではないか。

驚いたことに、かの織田信長や坂本龍馬、ペリーなども、名前を相応に変えて女性だったらしい。

……まったくもって頭が痛くなりそうな話だ。

「男女の立場が逆転している世界とは実に興味深いね」
けど、

「一番気掛かりなのは君の彼女　　ゆうなが存在だよ」
俺もそう思う。

全ての存在が逆転している世界の中でただ一人。
ゆうなだけがそれに逆らっているのだから。

ゆうなだけが例外に値する。

その事実をそのまま飲み込むのなら、

「ゆうなが何かしらの鍵を握っているだろうね」

「俺もそう思う」

代弁するようなゆたかの言葉に頷く。

唯一の例外ならば、そこに何かがあると考えるのは道理。

単純な思考かもしれないが、これはたった一つの光明。

原因の解明、そして解決に繋がる糸口かもしれないのだ。

わらをもすがりたい気持ちの俺に、光にすぎる選択肢以外ありえない。

だが、

「ゆうなが例外だからって……どうしたらいいんだ？」

思った疑問を口にする。

さらに噛み砕いて言うならこうだ。

ゆうなが例外？

だからどうしたの？

ってこと。

例えゆうなが今回の原因に関わっていたからといって、それをどうすればいいのかが分からない。

これが、ゆうなが超常的な力を持っているなら別だ。

もしゆうなが俺とあかりを入れ替わらせた張本人なら、何かしらのアクションをもって説得すればいい。

元凶が分かり切っているからこそ起こせる行動だろう。

が、現実はそうではない。

ゆうなは、今さら考えるまでもなく普通の人間だ。

世界間の入れ替わりをさせるところか、超能力の類だつて持ち合わせていない。

現に、悲しいことながら、ゆうなは喧嘩の捨て台詞に「あかりに戻れるまで連絡しないで」と言ったのだ。

もしゆうなが何かしらの超常的な力を持ち合わせていたのなら、そんなことを言うはずがない。

俺なんかに任せるよりも、自分で行動した方がよっぽど早いのだから。

だから、そう言い捨てたゆうなは普通の人間。

そんな普通の人間に、どうすればいいと言うのか。

まさか元に戻せと詰め寄ったところで……ねえ？

だからこそ俺は悩む。

例えゆうなが原因に関わっていたからといって、ゆうなが直接何かをしたというわけじゃないだろう。

恐らく、何かしらの理由で原因の一因として巻き込まれただけに過ぎないのだろうと思う。

そんなゆうなに、俺はどうすればいい？

先に考えたように、元に戻せとゆうなに直接詰め寄ったところでどうにもならないのは目に見えている。

じゃあゆうなの周りに直接的に手を出した人間がいるんじゃないかと張り込むか？

いや、こうしてゆたかと考えた結果、例外がゆうなだけだったのだ。

そんなやつがいるとは思えないし、仮にいたとしても理由は何だ？

何故ゆうなを原因に見せかけ、俺とあかりを入れ替わらせた？

そんな疑問が湧いてくる。

つまり取り留めがないのだ。

ゆうなが原因に関わっているであろうことが分かってても。

「私も分からないな」

そう切り出したのはゆたか。

俺と同じことを考えていたのだろう彼女は、困ったように眉尻を下げていた。

「出来ることなら、あきらまもあるべきところに戻るのが望ましいと思う。君の事情や、私があかりの友人である私情を含めてね」

机に両肘をついたゆたかは、自身の顔の前で指を絡めた。

「でも、私じゃ力不足感が否めない。聞いてて分かるだろう？ 私にはパラレルワールドの知識がない。ある人から聞いたことを浅いままに、現状を聞いて推測しているに過ぎないんだ。このままじゃ君の求める解答にたどり着けない気がする」

だから、

「その専門家に助けを請おうと思う。出来れば頼りたくなかったけ

ど……」

「頼りたくなかった？」

それはどうして？ と首を傾げる。

「正直、私の苦手な人種でね。あまり関わりたくないんだよ。先生には」

「先生？」

投げかけた問いに対するものは、頷きだった。

「このオカルト研究部顧問、菊地原先生だよ」

菊地原先生。

ゆたかが口にした人名を脳裏に反芻させ、記憶の中に該当しないことを確認する。

オカルト研究部の顧問だという話だが、初めて聞く名前だ。

俺がオカル研に顔を出す機会が少なく、またたくやからも聞いたことのない名前だから仕方ないのかもしれない。

ゆたかが苦手と言うのだから、たくやも菊地原先生のことは苦手だろうし、それなら話題にも出さないだろう。

だから質問を投げかける。

「菊地原先生ってどんな人？」

すると、困ったようにゆたかは苦笑いを浮かべた。

「本人のいないところでこう言うのは好かないんだけど……典型的であり、そうではない中年男性、かな。癖がなかなか強くて」

だから苦手なんだ、と言ってさらに苦笑した。

よくは分からないが……どうやらよっぽど苦手な人らしい。

その白くてきめ細やかな肌を持った顔に、ありありと「呼びたくない」の意思が表れているのだ。

それがなんだか気の毒になって、

「嫌だったら呼ばなくても」

「いや呼ぶよ。仕方ないことだからね」

言葉を食うゆたかは、やはり苦笑いを浮かべていた。

なんだかゆたかに無理を強いてるようで申し訳なくなる。

だけどせつかくの申し出だ。

それを断るのはゆたかの気持ちをむげにするような気もあるし、そこに可能性があるというなら任せたい。

そういう気持ちだが、今の俺には強かった。

「じゃあ、お願いしていいかな？」

「もちろん」

相変わらず苦い表情をしているゆたかは一度頷くと、傍らに置いてあった自身の物であろう小さなバッグから携帯電話を取り出して

って、携帯電話？

「ゆたかつて、ケータイ持ってるの？」

「当たり前じゃないか。今の時代、持っていないと不便でならないよ」

いや、それはもう持ってる身として十分理解しているんですが……。

それよりも俺が詰まったのは、ゆたかが携帯電話を持っているという事実。

その理由は、記憶の相違からだった。

たくやは携帯電話持ってないような気がしたんだけど……。

そもそも俺が今日こうしてゆたかの元に訪れたのも、直接会う他連絡手段がないと思っていたから。

たくやは携帯電話を持っていない。

それが記憶の一片としてあったからこそ、俺はこんなに小さくて不便な体ながら、頑張って大学敷地内にあるここまで足を運んだのだ。

なのに、ゆたかは携帯電話を持っていた。

つまりそれは骨折り損ならぬ、俺とゆうなの喧嘩損なわけで……。

別にゆたかのせいにするわけではない。

だがゆうなと喧嘩したのは大学に向かう道中のこと。

もしゆたかへの連絡が携帯電話一本で済んでいたら違う結果になったかもしれないと思うと、なんだかやり切れない思いが胸の内を満たした。

そうした思考で頭を抱えたい気持ちになつているとき、

「あ、そう言えばアドレス交換してなかったね」

ゆたかに、それを遮られるようなことを言われた。

えつと……。

不意にゆたかの言ったことが飲み込めずにいると、それを発した張本人は微笑んだ。

「ケータイを買ってからあかりとはまだ会ってなかったからね。知らないのも無理ないよ」

つまり、その携帯電話は最近買ったばかり。

「そもそも買ったのはあかりに勧められたからだよ。いい加減ケータイ持たないと一生使えないままだぞ？　って脅されてね」

ああ、そういえば。

そこに俺とあかり、たくやとゆたかの違いはあれど、その記憶は確かにある。

思い返せば、今年度が始まった辺りだろうか。

たくやとの連絡手段が大学内で会うしかなく、それを不便に思った俺が言ったんだっけ。

『いい加減ケータイ買ったらどうよ。使えると便利だぞ？』

『なくても平気』

『なんか、ずっとそんなこと言って死ぬまで使わなそうだな』

『……かもしれない』

って。

別に脅したつもりはなかったんだが、まあそれで買う気になってくれたのなら良かった。

良かったとは思うけど……。

さっきのことを思うとタイミングが良かったような悪かったような……。

まあとにかく。

頭を軽く振って意識を切り替える。

終わったことをぐずぐず言ってもどうにもならないし、良い気持ちもしないだろう。

それなら話を進める方がよっぽど有意義。

そしてゆたかが携帯電話を持っているとあらば、進めるべき方向は一つ。

「メアド、交換しない？」

せっかく連絡手段が確立したのだ。

それを利用しない手などあるまい。

菊地原先生への連絡は少し後回しにしてもらうとしよう。

「もちろん」

返しは笑みをたたえた頷き。

認め、俺は持ってきたバッグの中から携帯電話を取り出した。

バッグに入れるときにも確認したが、俺とあかりのは同じ機種だ。

だから手慣れた動きで操作し、赤外線モードを起動させる。

現れたのは二択。

受信か送信か。

そのどちらを選択すればいいのか、どちらにでも合わせるつもりでゆたかに聞こうと顔を上げ

「あ、えっと……ん……」

携帯電話を両手に、あせあせと困った様子のゆたかが目に映った。

これは……、

「もしかして手間取ってる?」

「あ、いや違うんだ。変なところを触っちゃったら変なものが出てきちゃって……」

その何が違うんでしょう。

ってか変な、変なつて。

とりあえずわたたしながら言い訳がましく言葉を重ねるゆたかが手間取っているのは分かった。

まあ買ったばかりとのことだし、うまく扱えないのは仕方ないだろう。

たくやと同じ境遇なら、生まれて初めて携帯電話を買ったのだ。

もしそれで意図も容易く扱えたのなら、これからこいつを「ケータイ神童」と呼ぼう。

にしても、と思う。

「ご、ごめんね。今頑張ってるんだけど、なんかケータイがアプリを探そうとか言い始めて……」

相変わらず口ばかりがぺらぺらとつくが、それでも動作は初々しいもの。

たくやと知り合ってから。

そしてゆたかと会ってから落ち着いた様子しか見たことのない俺は、それがすごく微笑まじし光景に見えた。

いやあ、ゆたかつてこうして見るとなかなか可愛いなあ。

……体の寸尺は置いというて。

こうして考えている間も携帯電話相手に孤軍奮闘を続けているゆたか。

見ている分には微笑ましくて良いのだが、あまり時間をかけすぎるのはよろしくない。

せっかくだ。

教える意味も込めて、手助けするべきだろう。

そうした考えのもと、

「ほら、貸して。やってあげるから」

ゆたかの側へと寄り、両手を差し出して求める。

が、ゆたかの両手で握られた携帯電話は応じることなく、その薄い胸元へと引かれた。

「い、いいよ。さすがにそれは申し訳ない」

「いいからいいから」

「そ、そうかい？」

少し迷ったように身じろぎを見せたゆたかの手の行く先は、ゆつくりとこちらの両手へ。

なんだか罰の悪そうな顔をしているゆたかの表情が印象的だった。

さて、とおずおずと渡されたゆたかの携帯電話を見る。

受け取ったとき、それがやや手に余るほどのサイズで大きい携帯電話だなと思ったが、なんてことはない。

あかりの手が小さかったからそう感じたただけだ。

まさか手のサイズだけで体の違いを実感させられるとは思わなかったが、まあ置いといて。

思考を切り替え、折りたたみ式のそれが開かれた状態の画面を見る。

そして、ゆたかが詰まっていた原因はすぐに分かった。

何故かオセロのアプリゲームが起動していたからだ。

どうしてアプリゲームなんか開いて……。

そう思って携帯電話の操作盤を見、納得した。

操作盤上部中央にある決定ボタンのすぐ近く。

そこに、アプリ起動用のボタンがあったからだ。

恐らく赤外線モードを開こうと携帯電話を操作したとき、何らかの拍子でアプリ用ボタンを押してしまったに違いない。

そしてそれが運悪く起動。

俺の携帯電話と同じ仕様なら、アプリは終了するのに一度確認画面が表示されるはず。

終了しますか？ はい、いいえのそれが。

だから安直に電源ボタンを押しても終了出来なくて、慌てていると操作したのだろう。

結果、アプリが開かれたまま、オセロが妙に進められた状態で止まっているわけだ。

「このオセロ、終了しちゃっても大丈夫？」

まさかアドレス交換のときに自らの意思でオセロゲームをしているわけないが、念のため確認。

返事は当たり前のように、

「もちろんだよ」

俺はそれを認め、一度電源ボタンを押す。

次に出てきた選択肢の中から「はい」を選び

噴いた。

アプリ終了後に開かれた待ち受け画面が、他ならぬ俺、あかりの写メだったのだから。

俺がゆたかの待ち受け画面に噴いたのは、何もその写メがあたりだっただけではない。

「あつ、それは」

慌てて手を伸ばしてきたゆたかを避け、確信した。

これは明らかに盗み撮りした写メなのだ。

普通、携帯電話などで写真を撮られるときにはそちらを意識するのが当たり前だろう。

撮られることを承諾しているのなら、カメラに視線を合わせるなりするはずだ。

が、このあかりの写メはそうではない。

ワンピースの入った白いＴシャツに藍色のジーパンといったシンプルな服装を身につけたあかりが、カメラの方向ではないところに向いているのだ。

どこかに向かって歩いている途中なのだろうと推測出来る構図だが、果たして撮影の許可を得た人物がわざわざそんなシチュエーションで撮るだろうか。

加え、解像度の低くなったそれ。

恐らく遠くから撮ったためズーム機能を使用して、画像が引き伸ばされた結果なのだろう。

そうでなければ、この新しい機種でこんなにも画質の粗い写メになるわけがない。

さらには、先にゆたか自身が言っていた、この携帯電話を買ってからあかりに会っていないという事実も踏まえると、もう揺らぎようがなかった。

「ゆたか、お前……」

「違うんだっ」

荒い一息。

「これはたまたまあかりを見つけたから撮っただけで、他意は何もないんだっ」

その発言と共に、ゆたかは素早く長い手を伸ばして、今度こそ携帯電話を奪取する。

過剰反応が、確たる裏付けになっていることも知らずに。

盗撮は良くないことだと、他人ごとながら思う。

何も肖像権云々を語ることもない。

ただ、本人の意図しないところで勝手に写真を撮るのは、いささかモラルに欠けると思うのだ。

それにゆたかなら、

「何も盗撮しなくても」

「盗撮じゃないっ」

……まあそうしておこう。

「別に遠くから撮らなくても、本人に頼めば一枚くらい撮らせてくれるだろ？」

「そ、それは……」

どもるようにゆたかは言葉を詰まらせた。

そもそも、ゆたかとあかりは友人なのだ。

知らない人相手じゃあるまいし、写メの一枚や二枚くらい撮らせてくれるだろう。

俺なら構わない。

その立場と同じくするあかりなら、拒むとは思えないのだ。

だから理由を聞かんとしてゆたかの顔を見上げたとき、

「……可愛いから」

「……え？」

その目は、爛々と妖しく光って、

「可愛いからに決まってるじゃないか！」

「うわっ!？」

思い切りの力で抱き寄せられた。

(だ、抱き……!?)

いきなりすることに頭がついていかない。

俺は……抱き寄せられている……？

椅子からこぼれている状態に、今の俺はある。

座ったまま抱き寄せられたからだろう。

椅子から前のめりにゆたかに引き寄せられ、椅子に向かって腰を突き出したような態勢。

そして、目の前にはゆたかの薄い胸。

カップはあかりのそれに同等、いやAに達しているかどうかさえ

怪しい程度。

つまり極薄。

「うっう……この抱き心地……っ」

何か悦に入ったようなゆたかの声に、ハッと我に返った。

こんなまな板を見ている場合じゃない。

「は、離せって！」

両手でゆたかの肩を押す。

が、

「あかり可愛いよあかり」

背中に回されたゆたかの長く細い腕は力強いまま。

離れる気配は、まるでない。

むしろ押し倒さんばかりの勢いでハアハアしていて

（押し倒される？）

ゆたかの甘い息が耳にかかって、ぞわっと嫌な感が巡る。

このパターンはもしかして……

「あかり、可愛いよお……」

耳たぶを噛まれた。

火事場の馬鹿力というものの正体をご存知だろうか。

本来、人間はその細胞に余計な負荷を掛けないために筋力をセーブしている。

力いっぱい出しても、三十パーセント出ればいい方らしい。

もしそれ以上を出し続けようものなら、力に耐えきれなくなった筋肉細胞が破壊されてしまうからだ。

が、やはりセーブしてあるものには使いどころがある。

それが咄嗟のとき。

身を守る本能が本来の限界を破り、思いもよらぬ力を発揮することが出来るようになる。

人はそれを火事場の馬鹿力と呼ぶのだ。

だから、ゆたかに耳たぶを噛まれたとき。

「うぎゃああつ！？」

鳥肌の大寒波と共に、

「わ……っ」

予想を遥かに超えた力でゆたかを突き飛ばした。

瞬間、聞こえたのはゆたかの小さな声のみ。

が、それはすぐに破られる。

この部室は狭い。

入室当初に感じた事実。

故に突き飛ばされたゆたかはそのまま棚にぶつかり、衝撃。

「あ……」

それはどちらの声だったか。

事実認識の目前。

本棚から、様々な物がゆたかの上から降り注ぐ。

プリント。

ノート。

そして分厚い辞書。

それらが自由落下を見せ

激しい騒音を巻き立てた。

「ゆ、ゆたかつ!？」

本棚の内容物、その三割がゆたかに向かって落ちた。

激しく、重い音を立て。

それが意味することに、悪寒。

「大丈夫かつ!？」

乾いた埃の舞う中、棚に背を預けて座り込んでいるゆたかに駆け寄る。

辺りに散らばった辞書の類が視界の隅に映り、嫌な予感が巡った。

「お、おい!」

両肩を揺らす。

が、様子はぐったり。

足は投げ出され、頭も垂れ。

力のいちるも入っていないように見えて

「ん……」

反応があった。

「いたた……」

どうやらぶつけたらしい後頭部に手をやり擦るゆたか。

それを見て、安堵の息を漏らす。

「良かった……洒落にならないかと思った……」

気が抜けて、緩んだ声帯から思いがそのまま溢れ出した。

対して、ゆたかは大したことのないように笑う。

「いやあ、あかりにそんな力があつたなんて思ってもみなかったよ。驚いた驚いた」

俺としても、ゆたかを突き飛ばせるとは考えもしなかったわけで。

過失とはいえ、ゆたかには危ない目に遭わせてしまった。

それを詫びようと

「ゆたか、本当にごめ」

言いかけて、はたと気付く。

「んって謝れ変態っ！」

原因がゆたかだったことに。

「ほ、本当にごめん……」

勢い良く振り下ろされた俺の右手が、清々しい音を立ててゆたかの頭を叩いたからだろう。

珍しくきよとした顔になるゆたか。

それに可愛らしさが垣間見えたが、それよりも。

「何、人の耳噛んでんだ！ お前はカニバリズムか！」

「いやあれは甘噛みで、どちらかというと性的な意味の」

「どっちも嫌だよっ！」

再び右手が炸裂。

でも、スリッパで叩いたような音がするのは何故だろう。

「とにかく！」

未だに座り込んでいるゆたかの眼前で、腰に手を当てて仁王立ち。

そこから大口を開けて、

「何であんな暴走をしたのか詳しく説明し、て……」

尻すばみに詰まる言葉。

理由は、俺が目を向けた視線の先。

ゆたかが自身の正面を　俺の脚を見て息荒く、

「あ、あかりの生足……」

「暴走禁止っ！」

「いたっ」

本日三度目の右手が披露された。

「痛いなあ……」

ゆたかが患部の頭を擦るが、さすがに二の舞を演じるわけにはいかない。

学習した俺は、ゆたかを椅子に座らせることにした。

「さあ話してもらおうじゃねえか」

脅しの意味も含め、座ってこちらを見上げているゆたかに一歩、歩み寄る。

「強気ぶる姿もなかなか……」

一歩下がった。

「はは、冗談だよ。もう頭を叩かれるのはこりこりだ」

冗談には聞こえなかったんだが……。

「まあ、さっきは本当に済まなかったと思う。ケータイで撮った写真を見られて、動揺してしまっただけね」

ジーパンに包まれた長い脚を組むゆたか。

「そこに可愛らしく責められてしまったものだから、つい理性のたかが」

「いや、可愛らしく責めてなんか」

「すごく可愛らしかったよ？」

可愛らしかったとか、笑顔で言わないでくれ……。

「それで、結果的にこんなことになってしまった。謝るよ。ごめん」

そう言って、ゆたかは一礼。

「まあいいけど、」

原因はゆたかであれ、突き飛ばした俺にも責は少なからずある。

だからそれは両成敗として済まそうと思う。

でも、思うことが一つ。

「もしかして、ゆたかつて……レズ？」

疑問は、口について出た。

「レズとは失礼だな」

むすっとむくれたように眉尻を上げるゆたか。

ありや、もしかして禁句に触れたかなと思ったが、

「せめてビアンと呼んでくれ」

「どっちも変わんねえよっ！」

突っ込みのつもりだった。

が、振り上げた右手は、ゆたかの真摯な視線によって止められる。

「変わるんだよ。レズは、私たちからすれば蔑称に近い表現だからね」

「そ、そうなのか……？」

「ああ。例えるなら、日本人を黄色人種と呼ぶようなものかな。気

にしない人もいれば、過剰に嫌悪感を示す人もいる」

振り上げた右手は行き場を失い、おずおずと体の横におさまった。

「まあ君がそういうつもりで言ったのではないことは分かってるよ。でも、どうしても好かないんだ」

「そうか……なんか、ごめん」

ゆたかの表情が緩んだ。

微笑み。

「ううん。分かってくれたらいいんだ」

「うん……」

俺はレズビアンについて詳しいわけではない。

現に略称は「レズ」で正しいとばかり思っていたし、「ビアン」と呼ぶなんてことを、今初めて知った。

無知を盾に知らぬ振りを通すつもりはない。

ただ、申し訳ないと思った。

俺……ゆうなに「レズ」って言わなかったかな……？

「さて、話を戻そうか」

話を区切るように、ゆたかは脚を組み直す。

「たしか、メールアドレスの交換の途中だったね。悪いけどやってくれるかい？　またおかしいことになったら嫌だからね」

「ああ、分かったよ」

差し出されたゆたかの携帯電話を受け取る。

二つ折りのそれを開くと、先ほど見たあかりの写メの待ち受け画面になっていた。

が、これ以上の言及はしなくていいだろう。

きつと、後先考えずに勢いで撮ってしまったのだ。

先ほど見せた暴走のように。

俺はその待ち受け画面から操作し、赤外線モードに切り替える。

俺の携帯電話はさつき準備しておいたままの状態だ。

だから互いに送受信のモードを合わせ、開始。

その終わりは、途中までのごたごたと反してあっさりとしたものだった。

「はい、出来たよ」

「ありがとう」

携帯電話を手渡すとき、不意にゆたかの手を見る。

細く女性らしい手だが、やはり身長に見合うだけの大きさ。

男の俺の手と比べても、あまり大差はないだろう。

対して俺の、あかりの手はかなり小さい。

普通からしても小さいのだろうが、ゆたかのそれと比べればさらに顕著だ。

手のひらだけでも分かるこの体格差。

それだけのものを、さっきの俺はよく突き飛ばせたものだなあ、と今さらながら思った。

「次は菊地原先生への連絡だったね」

「あ、そういえば」

「ふふ、忘れていたのかい？」

「ま、まあ……」

ゆたかは、基本的には落ち着いた性格同様、思考もしっかりとし

ているらしい。

その返答の通り、俺は菊地原先生へ連絡すること自体を忘れていた。

自分のことなのに……と情けなく思うが、まあ色々あったのだ。

ゆたかが携帯電話を持っていることに驚いたとか。

その待ち受け画面が盗撮されたあかりだったとか。

レスビアンであることのカミングアウトをされたとか。

……まあ、そんな自分への言い訳。

「じゃあ連絡するね」

情けない気持ちが顔にも出てしまっていたのだろう。

おかしそづくにくすくすと笑ったゆたかは、少しの操作の後、携帯電話を耳に当てた。

電話はすぐに繋がったらしい。

「もしもし先生ですか？ 菅原です。実はお願いがあるんですが」

そう切り出し、少しの間。

「ええ、事情は部室で。じゃあお願いします」

おそらく二つ返事で決まったみたいだった。

あつという間に通話を終えたゆたかは、こちらに向けてにっこり微笑んだ。

「すぐに来てくれるって」

アドレス交換と同様、ためた割りにはあっさりだったなあ。

さて、菊地原先生への連絡が済んだとあれば、優先すべきことがある。

「部屋、片づけなくちゃな」

先ほどゆたかを突き飛ばした時の後処理がまだだ。

ゆたかが菊地原先生に連絡しているときから気にはしていたのだが、こうして見るとあまりに酷い。

文庫本やハードカバー、ページ数の厚さに様々な差のある本が散乱しているこの状況。

その数、十数冊。

ただでさえ狭いオカルト研究部の部室にこれだけのものが散らかされれば、余計に狭く感じて仕方ない。

だから片付けようと近場に落ちていた「怨霊と守護霊の見分け方」入門編」という表題のついた本を拾い上げて、

「あきら、窓を開けてくれるかい？」

……Why?

「何を藪から棒に突拍子もないことを唐突と」

「意味の三段重ねはいいから、とにかく開けてほしいんだ」

何故そんなに開けてほしいのだろうか。

俺は今し方己の口から片付けをすべきであるという意味の言葉を発したはず。

まさか一メートルに満たないゆたかとの距離間で特殊な言語変換が行われたはずもあるまいし、ゆたかが片付けの有用性を理解できない類の人間ではないだろうと思う。

それだったら今までゆたかと会話していた事実は何？ となるし、この部屋はゴミ屋敷になつて使用不可になっているはずである。

が、それが現状と相違であることを確認して、

「どうして今窓を？」

今一度問うてみたのだが、

「とにかく急いで」

何故か急かされた。

もしかして、ゆたかは暑いのだろうか？

見れば、ゆたかは藍色のジーンズと、黒地に白文字で「I'm

born（私は骨であり、骨は私である）」と斬新な解釈の但し書きまでプリントされたＴシャツを一枚着ているだけで、とても暑がる要素は見受けられない。

もつともゆたかがＴシャツの但し書きに赤面しているのであれば色んな汗で暑がるのも無理はないと思うが、今までの言動から見るとそれはないだろう。

が、思い返せば俺はワンピース姿なのである。

室内では風が吹かないから楽なのだが、屋外では泣きたくなくなるほどスカート裾が短いのだ。

生地もそれほど厚いものとは言えないし、涼を得るのに適しすぎていると言える。

そんな服装の俺は感じなくても、プリントされたそれ以外は普通の服装をしているゆたかは暑いのかもしれない。

そう解釈してとりあえず窓を開けたのだが、

「次はファブリーズだ。消臭力は私が持つてくる」

何故、そこまでひたすら消臭性能を高めようとしているのでしょうか。

開け放たれた窓から涼しさを感じる風を受けながら、自然とゆたかを見る目まで涼を得る。

が、ゆたかはそれを察するまでもなく、

「あきら、急いでくれないか？ 取り返しのつかないことになっても知らないよ？」

ものすごく真剣な顔付きで、ものすごく理解しがたいことを述べた。

*

最終的に、この部屋はとてつもなくフローラルな香りに包まれた。置くタイプの消臭剤は、計六つ。

どこから取り出してきたのか知らないが、気が付いたときにはゆたかがそれだけの数を、この狭い部屋に持ち込んでいた。

現状、それらは部屋の入り口に一番近い机の上にまとめて置かれている。

窓を開けているからそれらは風下に位置しているが、もし風上に置かれていたら大変なことになっているに違いない。

なんだかんだで消臭剤のにおいもキツイし。

次に、ファブリーズを代表する吹き付けるタイプ。

これらは三種類、それぞれの香りがこの部屋に放たれた。

普通、このタイプは布地のものに吹き付けるだけだろう。

臭いの染み着きやすいものに吹き付け、その臭いを取る。

そう思って今まで生きてきたのだが……どうやら俺は大変な勘違いをしていたようだ。

俺は今、ゆたかの指示で本棚にファブリーズを吹き付けている。

それがハードカバーだろうが文庫本だろうが関係ない。

どんな本に対しても遠慮なく、一冊ずつ手にとってシュ、シュと吹き付けていた。

「さて、こんなものかな」

一通りファブリーズによる行使を終えた辺り、ようやくゆたかの一声が掛かった。

それまで無言でファブリーズプレイをさせられていただけに、安堵せざるを得ない。

「あとはマスクがあれば完璧だったんだけど……」

……俺は何対策をさせられているんだろう。

「さあ、休もうか」

作業が一段落したということで俺とゆたかは座って休むことにした。

作業時間は、約二十分ほどだっただろうか。

とにかく解せない作業を強制させられていただけに、体感時間は何倍にも思えたが……。

まあファブリーズを吹き付ける過程の中で、床に散乱した本の片付けも出来たから良しとしよう。

「で、何でこんなことを？」

ここにきてようやく理由を聞いたです。

先ほどまでも何度か聞いたのだが、そのたびに「急がないと」と流されていたのだ。

作業らしい作業を終えた今なら、聞いても支障ないだろう。

そう思っただけ聞いたのだが、

「まあいざれ分かるよ」

「まだぼかすんかい」

いい加減答えてくれればいいのに、と思う。

まあ直接答えてくれなくても、それなりに予想は出来るのだが

と、その時。

ガタツと椅子を引き、ゆたかが立ち上がった。

「来るよ……」

小声で囁かれた言葉。

ゆたかは部室の入り口を睨みつけるように見つめていた。

何事かと、俺もそちらに視線を向ける。

と、

「いやあ、お待たせお待たせ」

ガチャリとドアノブを回す音と、しゃがれた男の声。

それらと共に、開いたドアから一人の中年男性が現れた。

「お待たせ」と発した男の言葉から察するに、この人が菊地原先生なのだろう。

オカルト研究部の顧問であり、半時ほど前にゆたかが呼んだ人物。

それが、ようやく現れた。

服装は、使い古してか、よれてくたくたになっている紺色のスーツ。

さすがにこの時期ともなれば暑いらしく、上着は右腕に掛けられており、これまたよれたワイシャツと赤いネクタイが目についた。

また、それらが包むのは男の肥えた体。

ビール腹というにはいささか出過ぎたウエストに、それと見合うだけ全身も皮下脂肪、内蔵脂肪を蓄えた体型だ。

なるほど。

ゆたかが「典型的な中年男性」と称したのも頷ける。

この人以上にオヤジのテンプレートを貫き通している人など、そうはいまい。

ただ、同時に「典型的でない」とも言っていたような気が……。

「遅かったですね、先生。もっと早く来るものかと慌てちゃいましたよ」

そう“鼻声”で発したのは、俺の隣に座るゆたか。

鼻声……？

ふとした疑問に、俺はゆたかに視線を向け、ぎょっとした。

ゆたかが鼻をつまんでいる。

（な、何を……？）

一瞬鼻頭をかいているのかとも思ったが、それは違う。

しっかり親指と人差し指の二本を使い、鼻の穴を左右から押し潰して外気を遮断しているのだ。

かいているなどとは程遠い。

ましてや遠慮がちにつまんでいるわけでもない。

ガチで、ゆたかは鼻をつまんでいた。

「お、おい、ゆたか……」

そつと小さな声で囁き、ゆたかのシャツの裾を指でちょいと引く。

さすがに直接鼻をつまむのは失礼だろう。

そう思っでの行動。

いくらゆたかに話を流され続けていた俺でも、今までの行動から、先ほどのフローラルプレイの理由くらい察しがつく。

菊地原先生が臭うのだ。

さすがに中年男性。

見れば四十歳は越えてそうな外見だし、加齢臭もあるのだろう。

確かにそれには耐え難いものがあるが、本人の目の前で鼻をつまむのはどうだろうか。

顔をしかめるまでは自然にそうなってしまっていることがあるため仕方ないとしても、さすがにそこまですると……。

が、ゆたかは

「なんだい？」

こちらに首を傾げるだけで、その声は鼻声のまま。

まるで当然のように鼻をつまみ続けているゆたかに、慌てて視線を菊地原先生に向けた。

が、その表情は怒るでも不快に感じているようでもなく、

「いやあ、少しばかり道に迷ってしまっただけ。慣れない土地を探索していたものだから」

ただ、先ほどのゆたかの言葉に言い訳をしていた。

(え、えええ……)

鼻をつまんでいるゆたかに対して、怒るでもなければ気にしている様子すら見せない菊地原先生。

普通なら何かしらのリアクションをするだろうに、という予想に

反して、なんだか肩の力が抜けてしまった。

勝手に慌てた自分が馬鹿らしいといつかなんというか。

ゆたかはゆたかで、当たり前前に鼻をつまみ続けているし。

菊地原先生は菊地原先生で、ただ遅くなったのを詫びているだけだし。

何も事情を知らない人がこの不可思議な現状見たなら、何事かと思うだろう。

……訳わかんね。

「ところで、」

不意に菊地原先生が発言。

ふつくらと丸みを帯びた頬と共に、顔がこちらに向いた。

「ゆたか君の言う相談とは、君に関することかね？」

君、というところでの視線の先は俺。

確か、ゆたかは菊地原先生へ電話したとき「相談したいことがある」としか言わなかったはず。

ならば菊地原先生は一切事情を知らないわけで、部屋に着いてみれば呼び出したゆたかの隣に見知らぬ人物、つまり俺がいたのだ。

順当に考えれば、当然の思考だろう。

そもそも事情は今から話すのだ。

菊地原先生がそう質問するのも当たり前のこと。

だから俺は頷きと共に返答しよう

そこで、はたと気が付いた。

先ほどまで異臭に分類されんばかりに漂っていたフローラルな香りが明らかに弱まっていたこともある。

が、それ以上に、

（この人、どこかで見覚えが……）

菊地原先生の顔を見、そう思った。

はて、どこで見たのか。

覚えた既視感に首を傾げる。

菊地原先生と過去に会ったことはあるか？

記憶をたどる。

菊地原という名字を聞いたのは、今日が初めてのこと。

過去に聞いたことがあるのなら、今のようになんてデジャヴ感に襲われているはずだし、菊地原という名字は、佐藤や鈴木に比べればあまりポピュラーなものではないため、一度聞いていれば少なからず印象に残っているはずだ。

が、やはり俺の記憶は「菊地原」を初めてだと返す。

すると、どこかですれ違った程度なのだろう。

正直な話、俺はあまり記憶力が良い方ではない。

暗記をモットーとする授業は平均弱がやつとで、人生経験上、俺はそれが苦手であると認めているくらいだ。

そんな俺がすれ違った程度で既視感を覚えるとなると、割と最近に菊地原先生と会ったことになる。

(……最近?)

この菊地原先生はこの世界にしかないはず。

先刻のゆたかとの話に基づいた世界のルールなら、俺の世界の菊地原先生は女性のはずなのだ。

まさか性別を超えてデジャヴを覚えるはずもなく、となれば会ったのは今日に限定される。

だが、ゆたかが鼻をつまむことから分かるとおりの特徴を持つ人だ。

そんな人、今日会っていたならすぐに思い出して

鼻を、つまむ？

「あーっ！」

ようやく思い出した。

その答えは菊地原先生を指差すと共に、

「あの時のドリアンオヤジ！」

言葉となって吐き出た。

「ど、ドリアン……?」

戸惑ったゆたかの鼻声に、はっと我に返った。

俺、今なんと……?

咄嗟に口をついた言葉。

それを思い出し、

「あつ、う、ごめんなさい!」

なんてことを言ってしまったんだ、と後悔の念に急かされて頭を下げた。

膝に手をやり、腰はほぼ直角に。

(バカだろ俺……!)

何であんな言葉を発してしまったのだろう。

ドリアンオヤジなんて、どう考えても悪意にしか取られないじゃないか。

菊地原先生が臭い。

これはゆたかが鼻をつまんでいる様を見ても平然としている時点で本人も認識済みであることは明白なはずだ。

それなのに「ドリアン」などと、悪臭の代名詞と言える単語を吐くなんて……。

確かにゆうなが「ドリ안의臭いに似てた」とも言ってたけど……。

菊地原先生がどんな人なのかは分からない。

だが、俺の発言は目上の人に対してあまりにも失礼なものだったであろう。

しかも指まで差して……。

咄嗟の時に声を出してしまう自分を恨めしく思った。

が、

「それぴったりだよ、あきら」

頭を下げていた俺に降りかかったのは、ゆたかの納得したような鼻声だった。

「……はい？」

今、ゆたかは何と言ったのか。

顔を上げると、ゆたかの手が俺の肩を叩く。

そして、鼻をつまんだままこちらに笑顔。

「まさにあきらの言う通りだよ。前から何かに似てるなっと思ってたんだ。いやあ、今のでスッキリした」

そんな喉に引っかけた小骨が取れたような顔をされても……。

というか、これは本人の前で行われているのだ。

俺としては、まさかのゆたかの同意よりもそちらに戦々恐々なわけ。

「君、」

菊地原先生から投げられ掛けた声。

どきりと跳ねた心臓と同時にそちらを見やる。

眉間に寄せられたしわに、がっちりと組まれた太い腕。

難しい表情の菊地原先生と目が合った。

（あ、やばい……）

これは確実に怒ってる。

じつとこちらの顔を見る菊地原先生の顔は、とてもじゃないが明

るくは見えない。

ましてや俺が発言したのは、失言とはいえ悪意百パーセントのものだ。

切られる以外に何があるうと言っのか。

菊地原先生の表情が怒りに歪むのを想像し、思わず首をすくめてしまう。

と、

「もしかして、電車で転びかけた子かね？」

「え……あ、はい」

向こうもこちらを覚えていたらしかった。

菊地原先生があのだリアンオヤジであれば、俺を知っていても何ら不思議ではない。

彼は俺の隣の乗客であり、俺が電車から押し出されて転び掛けた様を間近で見ているはずなのだ。

俺が臭いで菊地原先生を覚えていたように、彼もまたハプニングで俺を覚えていたよう。

「電車で転び掛けた？」

聞くのはゆたかの鼻声。

そうか、ここについては詳しく話してなかったな、と思い、

「今日の昼前、ここに来る途中で」

「わざと転んでお姉さんの気を引こうとしたんだね？」

まさかの菊地原先生。

「……はい？」

一瞬、ふざけているのかと思った。

わざと転ぶとか、どこにお姉さんがいたのかとか、不可解なことばかり。

が、見れば菊地原先生の表情は至って真面目。

たくやのように冗談を言っても全く表情が変わらないわけではないことは、先ほどまでの菊地原先生の言動から把握している。

なのに真面目な顔をしているのだ。

ということとは、

「あの、お姉さんって誰のことですか？」

わざと、の件はそう見えたのならそう見えたんだろつとも考えら

れる。

だが、お姉さん？

「違うのかい？ 君の隣にいて、転び掛けた君の腕を引っ張っていた茶髪の女性のことだよ」

ゆうなのことっすか……。

俺はあかりの容姿を知っている分、そう見られてもおかしくないことは把握している。

それだけあかりの姿は、幼く見えても仕方ないような体型なのだ。

だが、否定すべきところはする。

「それ、お姉さんじゃなくて俺の彼女です」

「俺」？ “彼女”？」

眉根を詰め、ふと険しい表情になる菊地原先生を見、しまったと思った。

何も俺が男であつたことを隠すつもりではない。

むしろ菊地原先生には指導を請うために説明しなければならないが、今はその前。

何の説明もしていない段階だったのだ。

そんな状況で、見た目だけなら少女一直線である俺が「俺」や「俺の彼女」などという発言をし、理解されるわけがない。

発言の順序を間違えたか。

と、菊地原先生が自身のあごに手をやり、

「もしかして、この子はゆたか君の同類なのかね？」

「ど、同類？」

疑問に、問いかけられたゆたかを見上げる。

返答は、鼻をつまんだまま首を振ることだった。

「恋愛対象の性別は同じですが、性質は全く別物です。それと、先生はもう一步下がってください。ドリアン染みた体臭の脅威によって消臭力の効力が薄まってしまいます」

「言い方キツくね!？」

思わず突っ込む。

正直、鼻をつまみ続けているゆたかの姿には見慣れてきた感があるが……。

ゆたかつて、こんなに毒舌だったん？

「いやあすまないね」

しかも菊地原先生はそれを嫌とも思わないように謝るし。

「さつきからその子がおかしなことばかり言うから、何なのだと思いますが先行してしまつてね」

おかしなことって……。

いくら「ドリアンオヤジ」だの、見た目少女で「俺」や「彼女」ばかり発言していても。

さすがに今のゆたかよりは……ねえ？

「事情はこれから話します」

そう言うのは、やはり鼻声のゆたか。

相変わらず鼻をつまむ姿が目につくが、いかんせん対象の菊地原先生が何も言わないのに俺がどうこう言うのもあれだし。

ゆたかの言うとおり、事情を説明すればこの件については落ち着くだろうと思う。

だから、賛同の意味で俺も頷いた。

「ということは、やはりゆたか君が話していた相談というのは、その子のことなのかね？」

「はい、この子のことです」

代名詞とは言え、「この子」だの「その子」だの、子供扱いされている気が……。

俺と同じく、あかりだって二十歳を超えているはずなのに。

まあ、しょうがないか。

「それでは、一から説明をしますね」

ゆたかの鼻声に、まあこのことも事情の説明によって分かることだろうと考える。

そして、どうやら説明係はゆたかを主とするらしい。

俺はそれを汲み、サブとして説明あたることにした

「なるほどねえ……」

ひとしきりの説明を終え、最初に口を開いたのは菊地原先生だった。

今回説明したのは、ゆたかに話したこと。

プラス、ゆたか向けに、菊地原先生と会った電車内のことについてだ。

さすがにゆうなに襲われた細かな内容までは話せないが、念のためにと事に及んだ、という事実までは話してある。

つまり、今俺がすべきことは終わり。

後は菊地原先生の意見を待つべきだと、固唾を飲んで様子を見ることにした。

「うつむ……」

やはり考えることが多いのだろうか。

たるんだあごに手をやり、顔をしかめてうつなる菊地原先生。

もし、解決法がないと言われたら。

不意によぎる不安。

これだけ一緒に考えてくれたゆたかが、渋々ながら頼んだ先生だ。
この人に対する不安はないが、それでも脳裏こべりつく、

『分からない』

ゆたかが前に発した言葉。

あれは俺の覚悟を試すためだったか……。

ゆっくりとした動作であごを指先でなでている菊地原先生を見、
気持ちが急く。

出来ることなら早く結論付けてもらいたい。

いや、早く解決法を教えてください。

こうして待っている間。

期待を裏切られる不安に、押しつぶされそうだったから。

緩やかに流れる時間。

執拗に思える静けさの中、鼓膜を刺激するのは菊地原先生の唸る
声と、風の音。

時計が秒を刻む音すらないこの部屋で、その静寂さは耳に痛かった。

「あの」

「先生、どうですか？」

俺が口を開くが早いのか、食うように発言したのはゆたか。

相変わらず鼻をつまんだままの態勢だが、それに似合わず表情は真面目。

俺の意思と同様、結果を急くものだと伺い知れた。

だから、ゆたかと共に菊地原先生を見る。

その顔は、どこか穏やかに見えた。

「現状で結論を出すのは早計とは思っが」

そう前置きし、

「少なからずヒントを見つけたよ」

琴線を弾かれたようだった。

その発言が耳に届くや否や、無意識に前のめりになり、

「ほ、本当ですかっ！」

「ああ。可能性としてだがね」

頷きを見れば、心が踊るようだった。

ヒントを見つけた。

それは俺が待ち望んだもの。

まだ内容を聞いてすらいらないというのに、俺はその事実だけで体内から活気が湧き出るような感覚に包まれた。

（元の世界に戻る方法が　　）

一つ、渴いた喉に些細な水分をと、ごくりと喉を鳴らす。

「その、ヒントって……？」

恐る恐るといった、俺の高い声。

様々な感情の混ざるうち、一番は緊張。

そして待ちきれない気持ち。

今か今かと、俺の問いへの返答を待ちわび、

「君は、確かあきら君と言ったかな」

「は、はい」

問われ、思わず嚙みそうになってしまった舌を慌てて収める。

「そのヒントだが、」

また、一つ喉を鳴らす。

待ちわびたそれに、俺の薄い胸の下にある鼓動が高まるのを感じた。

そして、一言。

「君は、レズビアンについて詳しく学びたまえ」

……？

一度、思考が止まる。

（俺は今、何て言われた？）

自問。

（レズビアンについて学べ、と言われた）

自答。

そこまでして、俺はようやく言葉の意味を理解する。

「あの……何ですか？」

当然の疑問だと。

話がそらされたものだった。

が、菊地原先生は何でもないように口を開く。

「それがヒントだからだよ」

「ああ、なるほど」

隣のゆたかが、何故か納得していた。

「な、何で……？」

菊地原先生は何でもないように言うし、ゆたかは気付かされたように頷いている。

なのに、俺にはそれを理解に至らない。

俺が、レズビアンについて学ぶ。

それが、どうして元の世界に戻るヒントになりえるのか分からなくて。

「俺、分かんないんだけど」

言つと、頭に感触。

ゆたかが、大きな手のひらを頭に乘せていた。

「それは君の彼女、ゆうなが関係してくるからだよ」

「ゆうなが……？」

ゆうなが関係している。

それは、前にゆたかと話して導き出した可能性。

この世界と俺の世界。

両者において、ゆうなだけが異質だと。

そう結論付けて

（それまでだったはず）

結論から導き出されることなく、停滞。

ゆうなが異質な存在だから、それがどうしたというのか。

異質は所詮異質であり、とてもじゃないが一般人であるゆうなに
元凶を求められるようなものではない。

そう考え、それについては終わったものだと思っていた。

なのに、またゆうなが絡んでくる……？

「そう、やはりゆうなが重要人物だったんだ」

言うのはゆたか。

なめらかな手つきで俺の頭をなで、髪の毛の感触がこそばゆい。

「ゆうなが重要人物と言われても……」

前述のように、それは分かっていることだ。

それを今さら言われたところで、どうと言うのか。

加え、菊地原先生の言葉。

レスビアンについて学べ。

それをゆうなに絡ませて考えるなら、確かにゆうなはレスビアンだ。

本人から直接聞いたから間違いない。

だから、レスビアンについて学ぶ上でゆうなを絡ませるなら

「……あ」

ふと、思考に違和感。

絡ませる？

いや、違う。

ゆうなは、ゆうな自身がレズビアンなのだ。

無理に絡ませていく必要などない。

それは、既に。

（レズビアンについて学べ、か……）

そして気付く。

学ぶのは、単にレズビアンそのものではない。

この世界のゆうなの特徴である、レズビアンを学べと言うのだ。

272

なんとなくだが、この二人が言わんとしていることが見えてきた。

俺の世界のゆうなは異性愛者である。

が、この世界ではレズビアン、同性愛者となっている。

そう考えてみたとき、浮かぶのは異性愛者か同性愛者かの違い。

両世界において変化のない唯一の人物が見せる、たった一つの変化。

俺が元の世界に戻る方法のヒントとして、十分なほどに浮かび上

がる点だ。

だから菊地原先生は、ゆうなの性的指向であるレズビアンについて学べと言い。

ゆたかはゆうなが関係している、と言った。

なるほど。

やはりこの二人に頼って良かった。

俺だけでは、きっとこのヒントを見つけることは出来なかっただろう。

ゆっくりと考える時間があるならまだしも、ゆうなと喧嘩していることもあるし……。

第三者からの視点というのは、実に心強いな、と思った。

が、ここにきて疑問。

「なんとなくは分かったけど……一つ、いいですか？」

「なにかな？」

反応を示した菊地原先生を見、

「レズビアンについて学ぶのはいいんですけど……それが元の世界に戻る方法に繋がるんですか？」

仮に、俺がこれからレズビアンについて学ぶでしょう。

近くにはレズビアンのゆたかもいるし、頑張つてその手の社交場にも顔を出してみる気もある。

直接ゆうなに聞かずとも、知る、学ぶことだけなら方法は多数だが、疑問はそれ以降。

俺がレズビアンについて熟知したからといって、それがどうなるのか。

ただ知識幅を広げ、経験を深くするだけで、世界間を渡る方法を見つけられるのか。

それが、俺の脳裏に浮いた疑問だった。

「確かにレズビアンについて学ぶのは、ゆうなを知る上で必要なことだとは思ってます」

未だになでられ続けているゆたかの手を感じながら続ける。

「でも、それが元の世界に戻ることに繋がるんですか？ ゆうなが唯一のヒントであるのは分かるんですけど……」

「まあ、そうだろうね」

菊地原先生の返しは頷き。

「一見して、レズビアンについて学ぶだけでは平行世界の秘密に近付けるとは思えないのが意見だろう」

剃り方が荒いのか、少しの剃り残しのひげを気にするように顎に手を当て、

「私も、必ず解決法に繋がるとは考えてないよ」

無責任な発言をされた。

「え……」

漏れるような、驚いた俺の声。

発するつもりがなかったそれが耳に届くが早い、俺は声を上げた。

「か、解決法に繋がらないってどういうことですか？」

何かしらで繋がると思っていた。

この人は、俺よりもずっとその手のことについて詳しい。

オカルト研究部の部長であるゆたかが勧めた人物だ。

その点については疑う由もなく、ただ、俺の知らぬ知識を用いて解決法まで導いているものだと思って。

だから、何だろうと質問したのに……。

「まあまあ、落ち着きたまえ」

ひげを触る動作を続けながら、菊地原先生は言う。

「必ずしも繋がるとは限らない。私はそう言ったんだ」

「必ずしも……?」

ああ、と頷く。

「あくまで可能性に過ぎないことなんだ」

そう言われ、ああそういうことかと分かった。

「もしそれが必ずというのであれば、私は今頃平行世界間を行き来しているよ」

かもしれない。

「そしてもう一つ」

人差し指を立てる菊地原先生を、ゆたかに頭をなでられ続けながら見る。

表情は固い。

「可能性として、君の世界に帰れないことがあるのを知ってほしい」

……それか。

「……」

出来ることなら聞きたくない話。

最悪のケースだ。

もしものそれを想定し、俯きがちになる。

が、なでるゆたかの手がぽんと一叩き。

「立ち向かう覚悟は、逃げない覚悟。ね？」

……また難しいことを。

でも……決めなくちゃ。

決めなくちゃ、こうして助けてもらってる意味がなくなる。

逃げてちゃ、スタートラインに立つことだって出来ない。

だから俺は、

「……知るだけなら」

受け入れる覚悟は出来ないけど。

それでもなんとか。

なんとか、向き合うようにしよう。

そう思った。

「いい返事だ」

意思を汲んでくれたのか、菊地原先生が笑う。

丸みを帯びた体型もあってか、柔和な印象を受けた。

「それでは話そう」

俺は、自身の体の前で両手を握りしめ。

ゆたかは、俺の後ろから頭と肩に手を置き、聞く。

「偶然。その可能性を」

「……はあ」

菊地原先生の帰ったオカルト研究室。

そこで、俺は部長用の椅子に腰掛けてため息をついていた。

本来この席に座るべき人物は、先ほど「飲み物を買ってくるよ」と出掛けたばかり。

だから、今の俺は一人だった。

「はあ……」

そうして、もう一度ため息。

ふと開け放たれたままの窓を見れば、空はこれから紅に染まるんかという頃合い。

夏が過ぎ、残暑厳しいこの季節。

日の長さで考えれば、午後五時を過ぎたくらいだろうか。

本当なら今すぐにも行動すべきなのに、気持ちがついていかない。

頭と心の離れる違和感を、この身にひしひしと感じていた。

俺がどうするべきなのか、分かっているはずなのに。

なのに……俺は待ってしまっている。

一階上の自販機まで飲み物を買いに掛けたゆたかが帰ってくるまで、行動を控えようとしている自分がいる。

ただ先延ばしにしているだけなのに。

言い訳にすら、なりはしないのに。

（ああ、もう……）

綺麗に切りそろえられている爪で、無闇に髪をかき上げ、頭をか

なんで……。

（何でゆたかとセックスするはめに……）

逃げたくてたまらなかった。

「あああ……」

凝り固まる思考を霧散させんと、頭を抱え、かく。

逃げちゃダメだ、逃げちゃダメだ、と言い聞かせる。

これは必要なこと。

だから逃げちゃダメなんだ。

一心に気持ちを言葉にシフトし、没頭する。

そんな自分を、まるでエヴァンゲリオンの主人公みたいだなと思う反面、他に考えの及ばない余裕のなさ。

刻一刻とくる切迫感に、胸が苦しかった。

苦しむほど、この体は胸がないのに。

と、ドアの開く音。

「ただいま」

すらっと伸びた人影に、ドキリと鼓動がはねる。

ゆたかが戻ってきたところだった。

視線が合うと、柔らかな微笑みが返ってくる。

「おまたせ。ダイドーの自販機なかったからジョージアにしたけど、大丈夫だったかい？」

「う、うん……」

べったりと喉に張り付くような感覚のする中、差し出された缶コ

ーヒーを受け取った。

プルタブを開け、一口煽る。

ほのかな苦味と後味に残る甘さが、口に広がった。

（ゆたかは、どう思ってるんだろう……？）

傍らに佇むゆたかを見上げようとして　すぐに止めた。

意識してしまっている。

その自分の表情を見られるのは、すごく恥ずかしいように思えて
ならなかったから。

だって……友達とセックスするなんて、そんな……。

*

菊地原先生が最初に切り出したのは、話の切り口のように、最悪
のケースから。

最悪こそ一番に話し、必要なことは後でじっくりと。

そついう算段らしかった。

対し、俺とゆたかはそれに反論なく、話は進む。

最悪のケース。

それは、俺がパラレルワールドに来たことが、全くの偶然であること。

菊地原先生が言うに、それが最も危惧しなければならないケースであり。

もしもそうであった場合、どうにもならないケースだと話していた。

どういうことなのか？

そう問いかけたところ、返ってきたのは冷淡な口調で一言。

『偶然を人に操ることは、絶対に出来ない』

そう言っていた。

偶然とは、直接的な原因に結び付かない、間接的な理由にのみ影響される事象のことだ。

例えば、渋谷のスクランブル交差点で人通りの多い昼間に旧友とばったり再会したとする。

これが偶然であるのは、言うまでもないことだろう。

自分がいつ渋谷のスクランブル交差点を通行し、旧友がいつそこに来るのか。

示し合わせてもいないそれが起こるなど、確率で表せばとんでもなく低い数値であるのは想像に容易い。

仮に示し合わせていたとしても、渋谷のスクランブル交差点でばったり会うなんて、相当な難易度だ。

これは人通りの多い昼間、というのがネック。

人の流れというのは、非常に強い力を持っている。

例えば俺があたりではなく、あきらだったとしても、人波に逆らって進むのは非常に億劫だ。

それ故に、もし示し合わせて渋谷のスクランブル交差点で落ち合おうとするなら、まず人波をかき分けられる力。

次に、再会しようという相手を人ごみの中から発見出来る身長。

そしてうまく渡り歩ける運が最低条件となる。

もっとも、現実にはそんなことをする意味なんてないが。

だが、この例えで分かることがある。

偶然を模倣するだけでも、膨大な労力を必須とする。

そう、菊地原先生は言っていた。

そして、着目すべき点はもう一つ。

そうまでして得られるものは、所詮模倣に過ぎないということ。

これは当たり前のことであり、最も重要であると、菊地原先生。

先の例で言おう。

渋谷のスクランブル交差点で、旧友との再会。

その偶然を模倣するために、前もって旧友と二人で計画をする。

現地の渋谷のスクランブル交差点を下見もすべきだろう。

さらには人の流れを確認すべく、何度も模倣を行う必要もある。

そして、多くの時間を掛けて実行。

遂に成功に至ったとする。

が、疑問。

果たしてそれは“再会”と言えるのだろうか。

この場合、再会は計画を練る時点で成っているだろう。

では、成功に至ったときは？

その時には既に再会を果たしている。

となれば、どうなるか。

『再会を装った、ただの顔合わせに過ぎない』

偶然を模したものは、偶然と同じ巡り合わせになるとは限らない。

むしろそれは絶対にはないのだと、菊地原先生は言っていた。

人は偶然を作り得ない。

その解釈で考えた時、出る最悪のケースが先に述べたもの。

原因が全くの偶然であった場合だ。

もし何年かに一人、いや何十年間に一人、今の俺のような現象になる人間がいたとする。

遺伝ではなく、環境でもなく、条件でもない。

ただ、宝くじの一等を連続で当てるような超低確率でそれが決められた場合。

引き当てられた人間は、どう対処すればいい？

何の理由も原因もなく、ただの運で当てられ、どうすればいい？

再び引き当てるのを待つのは不毛だ。

ただでさえ尋常でない確率で当てられたに過ぎないのに、それが二度連続当選？

ありえない。

その一言が結論になりえる。

つまりそれが最悪のケース。

俺は、「ゆうなだけが例外の反転世界」に来てしまった。

理由は、ただの偶然。

俺にもゆうなにも関係なく、ただただ容赦なく選ばれただけとすれば……。

それは絶望。

元の世界に返ることなど、到底叶わないだろう。

それこそ、奇跡が起きない限り。

だからこそ、願うべきは必然性。

何かしらの理由を持って、この世界の自分と入れ替わってしまった。

その可能性だ。

先述により、それが単なる偶然である場合、人が叶えるのは不可能に近いと明らかになっている。

だから、取るべきはその逆。

『人が作り出した事は、必ず人が作り出せる』

その当たり前のことが、背理によって確たるものとなっているのだ。

それはそうだろう。

人は所詮人としての力しか持ち合わせていない。

故に人が作り出した現象は、必ず他の人も成し遂げることが出来る。

それが簡単なことであれ、難解であれ、間違いない。

だから、菊地原先生はこう言った。

『ゆうな君が犯人であることを望もう』

それは悪としてではない。

間接的な原因をゆうなが作り出してしまったがために起きた事故。

そうであることを望もうと言ったのだった。

それがどういうことか。

例えば示すなら、ゆうなが俺とあかりが入れ替わることを望んでいた場合。

ゆうなを見れば、実際そうでないのは一目瞭然だが、仮にそうだと考える。

まず、ゆうなが俺とあかりの入れ替わりを願っていたとする。

が、それは願っただけ。

ゆうな自身はそれ以上のことをしていない。

なのに、叶った。

どういった経緯か、理由なのかを知るのに意味はない。

ただゆうなは願って、それが叶ってしまった。

結果が、現状。

ならば、ゆうなにもう一度願わせるのが解決策だろう。

俺とあかりの人格が元あるべき場所に戻るよう。

そう望ませる。

それがもう二度と叶わない可能性は孕めど、叶う可能性だってあるのだ。

仮にも一度は叶った願い。

一度も叶えられていない人物が願うよりは良いだろうし。

もし本人の気づかぬところで、ゆうなが叶えられる力を持っていたとしたら确实。

どういった形であれ、ゆうなが絡んでいれば、ゆうなを通して解法に近づける。

また、ゆうなでなくとも同様だ。

人が絡んでさえいれば、対処のパターンが生まれる。

それに沿い、行動すればいいのだから。

だから菊地原先生は言っていた。

俺に、レスビアンについて学べ、と。

理由は、何らかの形でゆうながレスビアンであることが関わっている可能性が高いから。

ゆうなは、俺の世界とこの世界を比較したとき、世界間のルールから外れた唯一の存在だ。

他が全て性転換しているのにも関わらず、ゆうなは例外。

ただ一人性別を変えることなく、あかりの彼女として、いた。

加えて目につくのが、ゆうなの性的指向の変化。

ゆうなは、俺の世界では異性愛者であった。

なのにこの世界では、まるで恋人である俺の性転換に合わせたように、同性愛者になっていた。

これらが示すことの意味は分からない。

が、あからさまに浮いているのは誰の目にも明らかだ。

だからこそ、そこが一番可能性があるかと踏み、行動すべき。

菊地原先生がそう言い、ゆたかも同意。

俺も、反論はなかった。

「だから、可能性は二つある」

菊地原先生がそう言うが、次句を待つ必要もない。

今までの説明を受けていれば、容易に想像がつく。

一つは、原因が偶然であること。

そして、誰かの手が加わった必然であること。

偶然と必然。

そのうち、俺が望むべきは後者一つである。

俺がそう告げると、菊地原先生は満足そうに頷いた。

「そう、その通りだよ、あきら君。なかなかこの手の話にも理解があるようだね」

まあオカルト系の話は、元の世界でたくやから散々聞いていたから、少なくとも拒否するつもりはない。

だから、理解ある方と言えばそうなんだろうな。

「もし良かったら君もオカルト研究部に入らないかい？ ゆたか君も一緒だよ」

それは結構です、と断ると、菊地原先生は小さく笑った。

控えめに眉尻が下がり、残念そうな表情で。

「勧誘ならあかりにどうぞ」

「それもそうだね。失礼した」

俺は、これから元の世界に戻るために動く。

なのにこの世界のオカルト研究部に入るなど、考えるまでもなかった。

もつとも、向こうのそれに入る気もあまりしないのだが。

「さて、これからについてだが、」

言うのは菊地原先生。

これからについて、と言うのは、やはり俺のことだろう。

相変わらず鼻をつまんでいるゆたかを横目に苦笑しながら聞くと、

「君たちにはセックスをしてもらいたいと思う」

……。

……えっと？

「今、何て……？」

「だから、君たちにはセックスをしてもらう。当然同性愛のセックスだな」

……これは、何だ？

意味の分からない冗談？

それともオヤジのセクハラ？

前者だとしたら死ぬほど笑えないし。

後者だとしても、例え両者共に貧しい胸元であることを加味しても、十分に訴えられるレベルであって……。

ほら、ゆたかだって絶対に引くか軽蔑するかの表情を浮かべて

「先生、たまには良いこと言いますね」

皮肉交えて賛同しちゃってるーッ！？

予想外のゆたかの言葉に、菊地原先生はそうだろうそうだろうと頷いている。

が、俺は口をあぐり。

（な、何を言っているんだ、ゆたかは……）

俺の想像の斜め下をいくゆたか。

もはや菊地原先生に対する尊敬の念がないのは定番だが、何故。

何故ゆたかは、菊地原先生の意味の分からない意見に賛同を……？

「先生、今から訴えるんでそこを動かさないでください。もちろん近

づくのは二つの意味でダメです。やめてください』

そう言うものばかり思っていたのに……。

「ゆたか、お前……マジなのか……？」

「私は真面目さ。少しセクハラ臭がするけど、概ね同意だよ」

少しどころのセクハラ臭じゃないと思うのだが……。

そもそも、

「何でそんなことする必要があるんですかつ」

自然と語尾が荒くなった。

「レズビアンについて知るなら話を聞くだけで十分じゃないですか。なのに、いきなり実践なんて……」

菊地原先生がそう言ったのは、おそらく俺が言った通りの理由だろう。

目指すところが、レズビアンについて知ることなのだ。

納得はいかないが、知ることへの行為の一つであるのに間違いないが……。

それも友人であるゆたかと、なんて……想像出来なかった。

が、菊地原先生は言う。

「そうしなければ、間に合わないかもしれないからだよ」

「間に合わない……？」

菊地原先生の言う意図を理解できずにいると、

「先生、それはどういうことですか？」

隣の高い位置から、ゆたかの疑問が聞こえてきた。

どうやらゆたかも解せないことらしい。

間に合わないとは、一体何のことだろう？

そう勘ぐり入れようとするが早いか、菊地原先生は口を開いた。

「あきら君が元の世界に戻るのに、だよ」

「え……」

声を漏らしたのは俺だった。

「ま、間に合わなくなるんですかっ！？」

菊地原先生が言うのは、制限。

つまり、時間の限りがあるということだった。

そんなこと、俺には初耳で、

「いつですかっ！？ 何時に戻れなくなっちゃうんですかっ！」

「まあ、落ち着きたまえ」

菊地原先生がそう言うのと、肩にゆたかの手が置かれたのはほぼ同時。

俺をなだめかせようという二つの意思に、渋々ながらも閉口した。
代わりに次の句を繋ぐのはゆたか。

「制限時間なんてものがあるんですか？」

「ある」

頷きの返答。

「それを逃せば、戻る確率が大いに下がってしまう制限時間がね」

制限時間。

そう菊地原先生が話すのは、一つの可能性。

もしも、の場合だった。

そもそも、どうして俺は平行世界間を移動出来た？

誰がしたとか、その理由とかではない。

単純に、どのようにして移動出来たのか、ということだ。

それについて、菊地原先生はこう語る。

『世界は完璧なものではない。時に歪み、それを直さんと動く巨大な細胞のようなものだ』

世界には、膜のような全体を覆うものがあるのだと、菊地原先生は言う。

それは数え切れない幾多の平行世界同士を阻む壁。

一つ一つの選択によって切り分けられた世界は、まるで何かの細胞のよう。

例えば、この地球を細胞核と仮定する。

それは世界を構成する源。

DNAを所有し、細胞全体、ひいてはその生物そのものを左右する重要な部分だ。

もしも、という可能性で世界を分岐しているのだから、これに当てはまるだろう。

このもしもがあるから、まるで細胞分裂のように世界が増えるのだから。

次に、そこを包むようにあるのは、細胞で言うなら細胞質。

宇宙だ。

もしもを生み出す地球を核としたとき、包む側にあるのは宇宙であり、細胞質同様、核にとってなくてはならないものである。

細胞質がなければ細胞核が存在し得ないように、地球もまた宇宙ありきの存在なのだから。

そして、それを一個としてまとめるのは細胞膜。

先に述べた、世界を覆う膜のようなものがその同義にあたる。

便宜上、菊地原先生はこれを「世界膜」と呼んでいるようなので、俺もそれにならう。

この世界膜、こうして新たに言葉を作るように、決して認知されているものではない。

目に見えるかどうかの問題ではない。

その存在があまりにも大きすぎるために、把握のしようがないのだ。

宇宙をも包む巨大な膜なのである。

これを巨大と言わずに何と言おう。

故に矮小な存在たる人間がそれを認知するなど、ありえないのである。

が、それは確かに存在する。

何故なら、それが宇宙にとって不可欠な存在だからだ。

と言うのも、宇宙だけではあまりに不安定すぎるから。

例えば細胞質が単体で存在していたとしたらどうなる？

答えは単純だ。

何も支えてくれるものがない細胞質は、ただ壊れてしまう。

それだけなのである。

細胞膜とは細胞質、そして細胞核を守るための防壁。

それを無くしてどうして存在出来ると言えるのか。

あらゆる細胞にその三つの要素が備えられている点からも、この考えはあながち間違っではないだろう。

つまり、宇宙は単体で存在することが出来ない。

細胞膜と同じ役割である世界膜に包まれることによって、初めて存在出来るのだ。

故に、例え見えずとも、世界膜は確かに存在すると言える。

さて、こんな表現を聞いたことがあるだろうか。

『細胞とは小さな宇宙である』

まさにその通りなのである。

細胞とは小さな宇宙の模型のようなもので、調べれば調べるほど共通項は多い。

先に述べた点だけでも、十分な共通点と言えるだろう。

未知なところが多い点も、その構成においても。

「時間があれば、もっと話せるのだが……」

そう菊地原先生は口惜しそうに言っていた。

俺的には熱く語られすぎたせいで、話の半分も分かれれば良い方だけど……。

さて話を戻そう。

俺がどうして平行世界間を移動出来たのか。

これには、世界膜の存在が関わってくる。

先に述べたように、世界膜とは、平行世界同士を区切る壁のようなもの。

平行世界が、隣接する世界と交わらないようにするためである。

イメージ的には、先と同様に細胞を考えてもらえば分かりやすい。

細胞単体ではなく、複数で。

単体の細胞が寄り添うように集まっている様子。

それが世界にも共通する。

もし俺が存在しない世界だったら？

もし俺が事故に遭ったら？

などの可能性が生まれる度に、まるで細胞分裂のように、新しい世界が生まれるのである。

故に世界は複数集まり、隣接する。

だから平行世界間の移動には、その壁である世界膜が影響してくるのだ。

そう菊地原先生に説明され、俺は手を上げる。

「それってつまり、俺は世界膜を通り抜けて移動したってことですか？」

「簡単に言えばそういうことだね」

菊地原先生は頷いた。

「その世界膜には、時折歪みが発生することがある」

「歪み？」

「そうだ。細胞壁ではなく細胞膜と例えるくらいだからね。その形は一定ではなく、常に変化している。故に偏り、歪みが生まれることがあるんだ」

ええと、と考えてみる。

世界は膜で包まれている、と言っていた。

菊地原先生は細胞で例えていたけど、やや分かりにくい。

水風船で考えてみても平気だろうか。

周りの風船部分が膜で、中の水が世界にあたるところ。

膜は風船だからいくらでも変形する。

でもそれによって膜の薄い部分、厚い部分ができる。

それが歪み……かな。

そう菊地原先生に聞くと、首を縦に振ってくれた。

「語意に多少の違いはあるがね。君が分かりやすいなら、そう考えてくれても構わないだろう。大まかな把握は出来ているようだし」

把握しきれているかどうかは微妙だけど……。

とりあえずこれでいいようなので、頷いておいた。

「そして、重要なのはその歪み　君で言うなら、風船の薄い部分だね」

膜の薄い部分。

そこが重要と言われ、はっと気がついた。

「その薄い部分を、俺が通ってきたんですか？」

「その通りだ」

一度の頷き。

「世界はその形を変えていく上で、稀にその膜が非常に薄くなってしまう箇所がある。平行世界の影響を最も受けやすい場所。呼び方は様々だが、私はそこを「ミステリースポット」と呼んでいるよ」

ミステリースポット。

そこに、

「ミステリースポットというのは、非常におかしな現象の起きやすい場所だね。例えば、君のように平行世界間を移動する人間がいたり、ね」

そこに、俺がいた？

「単純なことだよ。君のいたミステリースポットは、人間が通れるほど世界膜が薄くなっていて、そこに君の精神が吸い込まれた。また同時期にあかり君にも同様のことが起きた」

だから、

「だから君たちは入れ替わった。予測ではあるが、これに大差はな

いだろう」

菊地原先生の言ったことを反芻し、理解しようとする。

俺が入れ替わった場所は、俺の部屋。

ベッドのすぐ横だ。

そこが、菊地原先生の言うミステリースポット？

そうだとすると、あかりも同様だと言うなら……あかりもそこにいたことになる。

同じ時間、同じ場所にいた二人。

そこがミステリースポットになって、俺たちは精神が入れ替わった。

こういうことだろうか？

そう聞くと、菊地原先生は肯定。

「うむ。なかなか飲み込みが早い子だ」

子、って言い方はやめてほしいのだが……。

あかりの見た目だけに、洒落になってない。

と、ふと疑問。

「俺とあかりが同じ時間に同じ場所にいた、って……“偶然”じゃないんですか？」

それは前に聞いた、最も危惧すべき事態。

偶然は人に真似することの出来ない事象だ。

だから、それが理由で入れ替わったとなると……

「そう、それがネックなのだ」

菊地原先生の表情が、固くなる。

「もしそれが完全に偶然であつた場合……我々にはどうしようもなくなる」

「どうしようもなくなる、ですか……？」

「ああ、手の打ちようがないんだ。それが偶然だつたとしたら、だがね」

菊地原先生の肯定的な返事に、少し緊張感が増す。

「ミステリースポットとは言っても、そこにいるだけで怪奇的な現象が起きるわけではない。きっかけが必要なのだ」

きっかけ、と話すのは、前にも言っていた偶然的ではなく、必然的な事柄。

ゆうなが何らかの形で今回の件に関わり、それが原因で起きてしまった、という可能性のことだ、と菊地原先生は言う。

「ゆうな君が関わってそれをきっかけとしたのなら、次に入れ替わりを起こすためには、同様のきっかけを起こせばいい」

ゆうなが俺とあかりの入れ替わりを望んだのなら、今度も同じように入れ替わりを望ませて。

他のことを願ってそうだったので、元に戻るように願いを変えればいい。

だが、

「もしきっかけが偶然であった場合、我々は、またその偶然を待たねばならなくなるのだよ」

たまたま発生したミステリースポットの中で、たまたま起きる偶然を待つ。

それは酷く絶望的なことだと、菊地原先生は眉尻を下げて言っていた。

「あの、ちょっといいですか」

ひとしきり菊地原先生が話し終えたところで、俺は小さく手を挙げながら言う。

何だね？ と発言権を得たので、俺は続けた。

「偶然じゃダメってことは散々言われて分かったんですけど……話、脱線してませんか？」

俺がそう言ったのは、どうにも話が進んでいないように感じたから。

求めるのは、

「先生が言った制限時間とか……その、ゆたかとセックスしなきゃいけない理由とか、繋がってこないんですけど」

「セックス発言の前に少し間を置く恥じらい、可愛らしいね」

今までその存在をなくしていたように静かだったゆたかが食いついてきたが、無視。

つつか頭をなでるな。

慣れてきた感あるけど、あんまり好きじゃないんだぞ。

「そう結論を急がないでくれたまえ」

菊地原先生の言葉に、視線をそちらへ向ける。

「物事には順序というものがあって」

「それは分かりますけど」

菊地原先生の発言に食うのは、ひたすら俺の頭を後ろからなでているゆたか。

「先生の話はそれでも長いです。飽き飽きします。そろそろ単刀直入に言ってください」

……ゆたかは菊地原先生に恨みでもあるのだろうか。

なんだか気にしなくてもいいことが不安になってきた。

「まったく、ゆたか君は相変わらず厳しいなあ」

対する菊地原先生は、ゆたかの刺々しい毒舌にも慣れた様子で苦笑い。

その後咳払いを一つして、

「それでは単刀直入に 制限時間というのは、世界膜の歪みが直るまでの時間。つまり、ミステリースポットがなくなってしまふ時間のことだよ」

「な、なくなるんですか？」

問うた俺への返しは肯定。

「世界膜が動いた結果、薄い部分が出来てそこがミステリースポットとなった。ならそこが薄くなくなるなら可能性はどこにあるというのだね？ 動的に膜が薄くなったのだから、そこが薄くなるのは当たり前のことだよ」

世界膜が薄くなくなってしまうえば、ミステリースポットはミステリースポットでなくなってしまう。

そうなってしまったら……俺は、元の世界に帰れない？

「他のミステリースポットを探すのは不可能だろうね。世界中のどこに、いや宇宙中のどこに、何日後、何ヶ月、何年後に出来るのかも分からないんだ。それを探すとなったら、無謀としか言えないね」

偶然が続くなどありえない。

そのことは、菊地原先生がさっきから何度も言ってきたことだった。

「だから今のミステリースポットがなくなるまで、それが制限時間となる。そこまでは理解出来るね？」

「はい、なんとか……」

ここで見栄を張る意味などなく、だから俺は正直に答える。

分からなくはない。

でも一気に詰められたら情報を完璧に理解するには至らないわけ
で……。

「まあそれで十分だ。理解を放棄しなければ構わんよ」

菊地原先生は頷いていた。

「そして、君たちがセックスしなければいけない理由、だったね？」

「は、はい」

出来ればセックスともろに言うのはやめてほしい。

俺がウブだとかそういうのではない。

気分的には、高校生くらいの保健の教科書でマスターベーションなどの言葉を朗読させられたときのよう。

その単語を知らないわけじゃないし、それ自体に恥じらいを感じるわけでもないのだが……ただ、慣れない。

そんな感じだった。

「その理由は単純明快」

次ぐ菊地原先生の言葉に、

「セックスした方が手っ取り早いからだよ」

一度、思考が停止した。

「そ、それだけ……？」

「ああ、それだけだが何か？」

いや、何か？　ってさも当然のように言われても……。

手っ取り早い？

それは、俺がレズビアンについて知る意味で？

そりゃあレズビアンのゆたかとセックスしたら、その手の知識を実体験で叩き込まれるだろう。

今朝、ゆうなに襲われて否応にも知ったことはいくつもあるのだ。それを教えようという意味で行ったなら、効果は何倍にもなるに違いない。

が、

「セックス……しないとダメなんですか？」

それはそんなに軽々しいものじゃない。

そう思う俺は、何か他に手段があるんじゃないかと思った。

っていうか、よくもまあこのオッサンは軽々しくセックスしろだ

の言えるものだ。

同性だから生殖行為にこそならないにしろ、それは性的な行動。

それも友人に対して、だ。

もつとも、ゆたか自体は今日出会ったばかりのあかりの友人だが、その存在は俺の友人であるたくやと同位置のもの。

別人として考えるにはあまりに共通点が多いし、正直言って無理だ。

こうしてゆたかと普通に話せるのも、相手にたくやの面影みたいなものが見えているから。

もし全くの初対面だったら、ここまで親しくは話していなかっただろう。

だからこそ、俺はゆたかをたくやと同義の友人として見ているし。

その友人とセックスだなんて……。

ぶんぶんと首を振る。

「無理むり！ 絶対無理だつてば！」

「そんなに私が嫌なのかい……？」

「あ、いや……」

いきなりしょんぼりとした声をゆたかから掛けられ、焦る。

正直な感想、ゆたかは可愛いさ。

すらっと伸びた手足に、無駄な肉の見られないスマートな体型。

モデルとしても通用しそうなそれに、顔も鼻筋の通ってしっかりしているときた。

唯一非の打てる薄い胸も、全体のフォルムを考えれば、なくてはならないバランスを担っている。

つまり、かなりヤバイ。

迫られれば、そう簡単には断れないほどだ。

でも……でもなあ……。

ゆたかとセックスするにあたって、やっぱり色々なことが引っかかる。

俺が男ではなく女のあかりの体であるのもあるし。

ゆたかがその同性であるものあるし（逆に男でも嫌だっただろうが）。

友人であるのも引っかかる。

それに、俺にはゆうなという恋人がいるのも要因の一つだろう。

今は喧嘩してしまっただけとはいえ、交際が解消されたわけではない。

だから俺とゆうなは、俺の知っているゆうなとは違えど付き合っているのは変わらないわけで。

となればゆうな以外の人とセックスするのは……。

「私は構わないんだよ？　むしろ望むところなくらいで」

「あー、うん。そうだろうね」

俺に襲いかかろうとしたくらいだしな。

「でも……」

「そうも言ってもらえないだよ、あきら君」

割って入ってきたのは、菊地原先生。

「制限時間の件、忘れたわけではあるまい？」

「あ……」

そつえばそうだった。

「その制限時間って、具体的にはどれくらいなんですか？」

聞くのは俺。

こつも菊地原先生が急かすのだから、その制限時間はそれなりに差し迫ったものなのだろうと思う。

一ヶ月？

いや、一週間？

まさか一日しかない、なんてことは、

「一日だよ。君が入れ替わってからね」

そのまさかでした。

って

「それまずくないですかっ!？」

「うむ、まずいな」

一日って言ったら、相当時間がない。

今は四時に差し掛かる頃で、俺が入れ替わったのは夜中の零時。

となると残りは八時間なわけで……って、

「……あれ？」

「どうしたのかね？」

「八時間、ですよ？ 残り時間は」

「単純な引き算でそうなるね」

だとすれば、

「八時間って、微妙に多くないですか？」

一日の内の三分の一。

急に聞かされたときは焦ったが、意外と多いような気がしないでも……。

「多いなんてことはない」

ぴしゃりと、菊地原先生ははっきり言いのけた。

「考えてもみなさい。例えば私のプランで行うとすると」

まず、俺とゆたかが今からまっすぐラブホテルへ向かったとすれば、その到着時間は五時過ぎ。

同性の入室が許可されるラブホテルは少ないため、どうしても大学から遠いところになってしまつらしい。

その休憩時間は、理解を深めなければいけない点を考え、多めに二時間。

事が終われば、俺が向かうのはゆうなの元だ。

ゆうなは地元に戻っている頃だろうから、まず行くのは大学の最寄り駅で、その到着が早くて八時。

そうしてゆうなの家の最寄り駅まで電車で行くのに、ネックはあかりの体となる。

行きの前例があり、夜の八時過ぎと言ったらまだまだ帰宅ラッシュの真っ只中である。

ちゃんと最短時間で向かえるか、いや無事にゆうなの家の最寄り駅に降りられるかさえ危ういだろう。

そのため、念のために着くのを九時と設定しても、そこからゆうなの家までは歩きで三十分ほど。

あかりの体だから、やや多めに考えて四十分だ。

つまり、ゆうなに会うまでに五時間強掛かってしまうのである。

しかもレスビアンについて学べる機会は、たったの一回。

ゆたかとのセックスだけ。

そう菊地原先生に言われて、ようやく分かってきた。

やっぱりきついかも、という事実。

02（前書き）

章整理のために分割しただけなので、以前にお読みになられた方の再読の必要はありません。

「先生、質問です」

ひょい、と小さく手を挙げる鼻をつまんだゆたかが鼻声で言う。

「制限時間の一日って言うのは、どこからきたものですか？ はつきりしてくれないと先生の戯言にしか聞こえません」

「ああ、すまないね」

後半のそれさえなければ普通の質問なのに……。

菊地原先生も普通に謝ってるし……。

ともあれ、前半のそれには俺も共感出来た。

菊地原先生の言う一日とは、何を根拠としているのか。

それを知りたい気持ちが、少なからず俺の中にもあった。

まあ菊地原先生の言うことだから、俺のオカルト知識の浅さではその正誤をはかりかねるだろうけど。

「ごほん、と菊地原先生が一つ咳払いをする。

「一日とは、これ即ち世界がリセットされる最小単位である。この考え方は分かるかね？」

振られたのは俺だったので、素直に首を横に振る。

「そうだね……なら、地球の自転で考えてくれたまえ」

俺が首を傾げると、菊地原先生の説明が始まった。

世界のリセット。

そのことについての話が。

地球が世界の核である、というのは先述の通りだ。

地球に住む人間が「もしも」を生むことによって、世界は分裂していく。

故にこの地球は、核と言っただけあって、世界の中心として捉えられるのである。

そして、今さら言うまでもなく、地球は一日に一回転、地軸を中心に回る自転運動を行っている。

昼や夜があるのはそのためだし、その一周によって「一日」という単位が決められているのも今さらなことだろう。

が、今回はそれが大きく関わってくる。

世界の核たる地球が、一度くるりと回るのである。

一日という時間を掛け、一周、地球は昨日の同じ位置まで自らを回転させる。

それは、ゴールとスタートが切り替わるということ。

『零時から始まり、零時で再び始まっていく　これこそがリセットだ。そう思わんかね？』

世界のリセット、つまり世界の歪みを直す過程というのは、その規模から把握しきれないものらしい。

が、それは確かに存在する。

ならそれはいつか、と考えたとき、当てはまる区切りに思い浮かぶのは「一日」。

これではないだろうか。

と菊地原先生は言っていた。

「だから制限時間は一日だと、先生は思っんですね？」

「ああ。我ながら安直な考えとは思うがね。相手が掴み所のない存在である以上、推測の域を出ることはないんだ」

そうお茶を濁すように、菊地原先生は苦笑いを浮かべる。

これだけ事細かに説明出来るだけよく考えたものだと思いが、
本人的には「お恥ずかしい」と添えられる程度のものらしい。

そういえば、ゆたかは初めに菊地原先生のことをこう言っていた
っけ。

その手の専門家、と。

だからこうまで詳しいし、推論だけで話すのはプライドが許さない
のだろうか。

素人の安易な勘ぐりではあるけど……。

と、その菊地原先生が口を開く。

「他にも一週間、一ヶ月と候補はあるがね、それぞれ一日よりは根
拠が薄くなるんだ」

一週間と一ヶ月は、あくまで人間が決めた区切りである。

そのため、大きな流れに沿うものではないので、原因としての根
拠はあまり強いとは言えない。

「だから次の候補は一年となるが……」

語尾を落とす菊地原先生。

一年、これは公転周期に合ったためある種の区切りであるのは間違
いないだろう。

だから候補になりえる。

が、

「そちらに期待せど、一日しかない可能性は常に孕んでいるのだ。念には念を。そう押すべきところで下手に樂觀するのは、愚というものだよ」

制限時間が一年である可能性はあるけど、一日しかない可能性だって十分にある。

だから、悪いケースを想定して動くべきなんだ。

そう、菊地原先生の言葉から受け取れた。

「はあ、だから一日なんですか……」

「そうとも。分かってくれたかね？」

「まあ、なんとなくは」

本当はほとんど理解してもいなくせに、なんだか分かったような返事をする自分に、内心苦笑。

やっぱり、こういう系苦手かも。

たくやの体験談を聞くくらいが精一杯だ。

なんて、せっかく説明してくれた先生に対してむげなことを思ったりしたり。

「つまり！」

不意に声高になる菊地原先生。

腕を振りかざし、こう語る。

「こうしている時間をもつたいない！」

「まあ、それもなとな」

「そう！ 君たちは今すぐにでもセックスを、行為をするべきなのだよ！」

……いや、まあ理由は分かるよ？

制限時間が一日な可能性が高いつてことは聞いたし、だから時間がないことも分かる。

聞いた限りだと、現段階でもかなり厳しいみたいだし。

でも……、オッサンが熱く「セックス」なんて言わないでくれ。

「行為」なんて言わないでくれ。

普通に気持ち悪

「セクハラするなら死んでください。または社会的に死んでいただ

いても構いません」

だから、ゆたかは先生に敵しすぎない!?

鼻をつまんで猛毒を吐き出すゆたかに突っ込もうかと思ったが、撤回。

今のはどう考えてもセクハラ臭い。

俺を抜きにしても、ゆたかみたいな女の子に先の発言はいただけないだろう。

だから代わりに、

「……」

俺も鼻をつまむことにした。

だって、その……さっきから先生が熱弁を奮ってたせいでフローラルな香りが消えたっていうか、ほのかにドリアンっていうか……。

とにかく、軽蔑してますよって意味も含めて。

そんな感じを前面に押し出して菊地原先生を見ると、

「君たちは時間が押していることが分からないのかね? 早く行為に及ばなければ」

全く気にせずセックス推奨していた！

むう、この人、打たれ強いな……。

俺がそっちの立場だったら、今すぐデパートの香水コーナーに買い求めに行くのに。

もつとも、この耐性はゆたかのせいみたいだけど……。

「あ、そうそう。いい加減気付いてるだろうけど、一応言っておくね」

何かを思い出したように言うのは、やはり鼻声のゆたか。

もはや話を聞く気にもなれない行為談義をしている先生をしり目に、一言。

「先生、無類のピアノ好きだから」

……うわ。

先生の株がめっちゃ下がったんですけど……。

「ゆたか君、根も葉もない話をしないでくれなにか。私の印象に関わるではないか」

むっと眉根を詰めた表情でこちら側、ゆたかを見る菊地原先生。

対して、ゆたかは鼻をつまんだまま呆れた声を上げる。

「根も葉もびっしり生え放題ですよ。もうお祭り状態です、先生」

今だけでも分かりやすい挙動ではあったしな。

続け、ゆたかは言う。

「むしろどうして否定出来ますか。私がレズビアンであることをカミングアウトした次の瞬間からですよ、先生が私をひいきし始めたのは」

「え……そうなの？」

隣を見上げて問うと、ゆたかは仰々しく頷く。

「そうなんだよ、あきら。それまでは鼻をつまんだだけでも怒られたくらいなのに、以降はこの通り。いくら罵っても、暖簾に腕押ししているような手応えのなさだよ」

いや、だからって罵りまくっていいわけじゃあ……。

と思いつつも、現状、俺だって鼻をつまんでるし、何か言ってもやりにたくなるくらいの辛さがあることは分かる。

あれだけ部屋中がフローラルな香りに包まれていたにも関わらず、今ではそれも失せ、最たるはドリアンに似た香り。

加齢臭にタバコの臭い、汗臭さなどが折り混ざったこの臭いは、下手をすればそれをも凌ぐかもしれないと思うほどだ。

それをこうして間近で強制的に嗅がされている状態なのだから、
せめて鼻をつままなければやっていられない。

改めてキュツと鼻をつまみ直すと、ほぼ同じタイミングでゆたか
が言う。

「ちなみにあきらが鼻をつまんでも怒られないのは、私の友達だから……いや、見た目だけで言うならレズビアンと同じだから、かな」
「だから、違うと言っているだろう」

不機嫌そうに菊地原先生は言い放ち、一息挟む。

そして、

「私はレズビアン好きではない。 私は、同性愛を愛しているのだ」

一瞬、空気に亀裂が入ったような感覚。

「……先生？ それ、初耳なんですが」

割って入ったのは、珍しく言葉を詰まらせたゆたかだった。

ただ呆然とするしかない俺の前に、菊地原先生は前髪をかきあげる仕草をする。

「滅多なことがない限り言わないようにしているからね。ゆたか君の前ではこれが初めてだ」

初めて言うから初耳であるのに間違いない、と菊地原先生は言う。

「それに、今の表現ではまだ不足だね。こう言うと大それているようではばかられるのだけれど、私が寵愛しているのはレズビアンだけでなく、同性愛だけでもない。言うなれば、少数派。数少ない、マイノリティと呼ばれる人たちだよ」

それはカミングアウトの一種だったと思う。

自分の思いの丈を打ち明ける行為。

菊地原先生が行ったのは、それで間違いないだろう。

けど、流暢に話されたそれについていけるほど、俺の頭は柔らかくないわけで……。

現に、少しの間を置いてからゆたかが反応を示した。

「……つまり、先生はレズビアンをマイノリティ、と？」

それは、訝しく相手を探るもの。

急に低くなったゆかたの声に見上げれば、明らかに機嫌を損ねんとする表情があった。

それに、菊地原先生は取り繕うように首を横に振る。

「違うぞ、ゆたか君。何も私は侮蔑の意味でレズビアンをマイノリティと言ったわけではない。事実、ノンケに比べれば数が少ないであろう?」

「まあ否定はしません……けど、納得できる表現ではありませんね」
レズビアンである人を少数と言ったこと。

それが、ゆたかが目くじらを立てる要因らしかった。

「ゆたか君は自身がマイノリティであることを嫌がっているようだが、こう考えてみてはどうかね?」

案を提示する前置きに、続けて言う。

「それは希少価値である、と」

「希少価値、ですか?」

問うゆたかに、頷く菊地原先生。

「マイノリティとは少数派であることを示す言葉であると同時に、社会的弱者、という意味も含んでいる。これは民主主義が主流である現状、少数派の意見は無視されやすいためだ」

これは分かるね? と聞くと、ゆたかは頷く。

それを認めたらしい菊地原先生は、こう続ける。

「だが少数であることが社会的立場にまで及ぶという考えは、私にとって非常に不可解なことである。何故ならそれは、例え少なくとも受け入れられるべきであり、自由意志だからだ」

拳を握り、力説。

「マイノリティには様々あるが、例えるなら同性愛だろう。正確な統計ではないだろうが、現在、異性愛者の割合は九割以上と見込まれている。つまり同性愛者は十人に一人いれば良い確率であり、その相手を探すとなれば二十人に一ペア。しかもそれはあくまで“出会うため”の確率であり、必ずしも互いの好みであるとは限らない。その好みを互いに合う 恋人になることの出来る可能性を考えれば究極に狭まっていくのは改めて言うまでもないことだろう。さらに」

「もう大丈夫です、先生。ビアンがどれだけ希少であるか分かりましたから」

「うむ、そうか？」

まだ語り足りないと言わんばかりの菊地原先生に、ビシッと手のひらを前に出して制止させるゆたか。

「っていうか菊地原先生、おたくなあ……」。

大学の教授だけあって、講義よろしく語るのが好きなのだろうか。

「それに、希少かどうかは経験でよく分かっていますから。可愛いなあって思った子に限って、ノンケどころかビアン嫌いであることもよ

くありますし」

へえ、レズビアン嫌いな子かあ……。

マンガなんかでは女の子同士が……なんて展開があるけれど、実際はそうでもないのだろうか？

確かに異常にイチヤイチャしている女子なんてあまり見かけたことないし、そんな噂も滅多に聞かない。

「例えばね、あきら」

不意にゆたかの語りかけるような言葉。

そちらを向くと、淡い笑みが返ってきた。

「あきらが友達の男の子に好意を持たれたとする。友達としてではなく、恋愛対象として。それをどう思う？」

「ん？ んー……」

少し考え、

「応える気はないから、まあ傷つかないように断」

「それが男性ホルモンむんむんのボディビルダーだったら」

「断るわ！」

つつかそんな友達いねえよ！

「さすがに今のは過剰だけど、同性愛に対する認識は男も女もそんなものだよ。男ならレズビアンに対しては寛容で、ゲイには拒否反応を示すケースがよくあるように、女もその逆に当てはまるのがほとんど。異性同士は良くては、同性同士はダメ。極端に言うとなんか感じかな」

「そうなのか。まあ、本人同士が良ければそれで良いって感じだけだな、俺は」

「ふふ、あきらもありみたいに寛容的で良かったよ」

いや、あかりみたいかどうかは知らないけど。

っていうか、

「何で俺の疑問分かったん？」

俺が聞こうと、いや聞こうと思うことさえ間もなく答えを出してくれたゆたかの対応の早さに首を傾げる。

それに軽く笑ったゆたかは、何でもないように言う。

「あかりみたいに顔に出てたからね。え、そうなの？　みたいな表情が」

え、マジで？

「今のは、え、本当に？　って感じだよ」

だ、大体合ってらっしゃる……。

「はあー、顔に出やすいのかあー……」

自分の頬を片手で触り（もう片方は鼻をつまんだまま）、ため息。
ポーカーフェイスを気取っていたわけではないにしても、顔に出やすいというのはあまり嬉しくない情報だ。

こつもありありと伝わるほどこころ表情が変わってたなんて……。

「ちょっと恥ずいかも」

「すまないが、話を戻していいかね？」

ごほんつと、菊地原先生の小さな咳払い。

そちらに視線を向けると、先生はやや不機嫌そうだった。

「あれ、まだ続いてたんですか？」

「当たり前だよ。まだ同性愛の希少性について話したただけだ。話はまだまだこれからだよ」

ま、まだまだ話すの……？

「ほら先生、あきらも先生の趣味には興味なさそうな顔ですよ?」

「人の表情を代弁しないでいいからっ!」

つつか毒が過ぎるわ!

いつそのこと顔を両手で覆い隠そうかとも思ったが、その前にゆたかが俺の頭に手を置き、一撫で。

そして言う。

「それに先ほど時間がないと仰ったのは他ならぬ先生です。そんなくだらない話をしている暇なんてありません」

「む……ゆたか君の言うとおりだ。確かに私の息子がブーツフェチであるが故にマイノリティを愛さざるを得ない私の事情を話す時間も惜しいか……」

えっ、何その新しい情報?

菊地原先生が子持ちで、その子がブーツフェチで……えっ?

つつか何でそんなことを父親が把握してるの?

そんなに情報開示に協力的な家族なの?

マジでオープンなの?

「先生、あきらを混乱させるような発言は控えてください。あまり

にも愛くるしい表情に理性が保てなくなりそうです」

「本当なんだがなあ……」

なんだかよく分からなくなってきた……。

「それでは、これまでの話を簡潔にまとめよう」

えへんっ、と菊地原先生は少し齒切れの悪い咳払いをする。

この人がマイノリティオタクで、息子がブーツフェチ……。

構わず菊地原先生は続ける。

「あきら君が元の世界に帰ることの出来る推定時間は一日、あと八時間弱あるかどうかというところだ」

「はい、そうですね」

先の話に気を奪われっぱなしの俺に代わってゆたかが返事をする。

「そしてこれから取るべき行動は二つ。一つはゆたか君と身を重ねてレスビアンについてよく学ぶことであり、もう一つはゆうな君と接触し、原因を探ること」

「後者はなかなか難しいことですね」

「ああ。だが最たる任務はそちらだ。前者はあくまで原因を探りや

すぐするためのものである。それを忘れないように」

「はい、菊地原先生に言われなくても承知してますよ。あきらも、ね？」

ブーツフェチってことは、やっぱり主に脚なのか……。

それともブーツを主体としているのか……。

「あきら？」

……あ、今、話振られた？

え、えつと……

「ぶ、ブーツも悪くはないと思いますけど……」

「いや、そっちでなくてね？」

ぼんぽん、と頭を優しく撫でられる。

「とにかく、あきは頑張って元の世界に戻らなくちゃいけないんだ。どんな方法でもいいとわずに、ね？」

「あ……う、うん。そうだな」

そうだ、頑張らなきゃ。

時間は少ないみたいだし、やらなきゃいけないことはさっさと済ませるべきだ。

だから、

「ブーツなんて気にしてる場合じゃない」

「いや、ブーツはもういいって……」

最後に菊地原先生に訳の分からない息子の話をされたせいであぐだしてしまっただけ、菊地原先生との話はそれまで。

教授としての業務もまだ残ってるこのことで、菊地原先生は教員室に別れることになった。

『君たち、絶対にセックスするんだよ？ 絶対にだからね？』

そんな一言を残して。

あの人、やっぱりただのレズビアン好きなんじゃないだろうか……。

本当、臭い以外掴み所のない人だったと思う。

よく分からないところも多かったし。

はあ、と椅子に腰掛けながらため息。

菊地原先生のこともある。

差し迫ったゆたかとのセックスもある。

二つの意味で、今の俺は気が重かった。

「あきら、大丈夫？」

不意に投げかけられた言葉にドキッと胸が跳ねる。

「顔色良くないけど……何か不調があるのかい？」

「い、いや、大丈夫」

視線を手元の缶コーヒーに固定したまま返事。

ああもっ、やばい……。

めっちゃゆたかのこと意識しちゃってんじゃん、俺……。

どうしよう……。

マジでどうしよう……。

恥ずかしい気持ちが急いて、慌てて缶コーヒーを煽る。

半分ほど残っているそれを飲み干そうと一気に いや。

ふと思い直す。

傾きを緩くして、飲む量は最小限に。

俺はゆっくり、出来る限り時間を掛けて飲むことにした。

理由は……逃避。

さっきは、ゆたかに飲み物を買ってきてもらつことで時間稼ぎをした。

今は、その買ってきてもらった缶コーヒーを飲んで間を溜めている。

こく、こく、とゆっくり缶を傾けて、少しでも飲むのを遅くする。

飲んでいないと何か話を振られそう。

あまりに意識してしまっていることを悟られるのが嫌。

だから俺は、これ以上缶コーヒーから口を離すことなく、ただちびちびと飲んでいた。

「……」

それを、ゆたかは俺の傍らに立って見ている。

目をそちらに向けてはいない。

でも、確かにゆたかの視線を感じる。

きっと、自分の飲み物を飲み終えたのだろう。

あとは俺が飲み終えるのを待つだけ。

……俺、弱いな。

女のゆたかは真摯に受け止めているのに、俺ときたら……。

こんな些細な時間稼ぎなんて、意味がない。

むしろ残り少ない時間を削っている、本来なら避けるべきことだ。

なのに、俺は缶コーヒーをゆっくりと飲み続ける。

味も分からなくなるくらい。

喉が潤うのも分からないくらい、ゆっくり、ゆっくりと。

情けない。

そう分かっているでも缶コーヒーの傾きが増すことはないし。

待ち続けているゆたかを見もしない。

差し迫った事実を目を背けてしまう自分が、嫌になった。

ただ、そうしていても、時間の流れは確かなもので。

「……あ」

どのくらいの時間が経ったのかは分からない。

でも、ゆっくりと傾けていた缶コーヒーがなくなるだけの時間は過ぎていた。

空になった缶コーヒーをそばの机の上に置く。

コト、と小さな音と共に、ゆたかの声が降り注いだ。

「飲み終わったかい？」

「う、うん」

優しい触りのゆたか。

さっきまで普通に話せていたその声でさえも、今の俺には心臓に悪いものを感じる。

嫌ではない。

でも……良くもない。

しなきゃいけない自分と、しなきゃいけない自分。

ゆたかと、セックス。

「ごちゃごちゃにせめぎ合う複数の感情は、こんな少しの時間でほどけるわけもなく。」

ただ、思考のはっきりしない様を呈していた。

「ねえ、あきら」

ふと、前に微風。

はっとしたときには、ゆたかの顔が目の前にあった。

「私とセックスするのが、そんなに嫌なのかい？」

……気付かれていた。

いや、気付かれない方がおかしかったのだろう。

意識しているのがばれないように目を合わせないで。

少しでも延ばそうとみっともないことをして。

だから……だから、ゆたかはこんな顔をしているんだ。

悲しげで、儚げな困った表情を。

「……ごめん」

何よりも俺の口をついたのは、謝罪の言葉だった。

「嫌って思っていないけど……嫌じゃないって否定も出来ない。自分がどんな風に思っているのか、よく分からないんだ」

言い訳にもならない、都合の良い言葉だな、と思った。

でもそれが俺の真実。

まとまらない感情は、固い結び目で絡まっていた。

「混乱しているのかな？」

「かも、しれない」

それさえもよく分からない。

と、不意に笑み。

ゆたかが、こちらに小さな笑みを浮かべてきた。

「じゃ、やめよつか？」

「……え？」

それは唐突なもの。

ゆたかの口からは発せられないと思っていた、予想だにしない言葉だった。

「い、いいの？」

「うん。先生が言うにはセックスは必須らしいけど、それは合意の上でのこと。無理にやったって、何の意味もないからね」

レズビアンを理解するためにすることを、嫌々やったところで理解出来るはずもない。

だから意思の合意は必須で、さもない方がいい。

そう言うゆたかは、さらに続ける。

「私はしたい。でも、あきらがしたくなかったら諦める。理解を深める方法は、他にもたくさんあるからね」

言って、ゆたかは俺の頭を撫でた。

細く長い指で俺の長い髪を絡め、上から下に撫で下ろす。

そんな、優しい動きで。

これに、俺は甘えてもいいのだろうか。

嫌だと突っぱねたわけでもなく。

ただ分からないと言っただけの俺。

撫でられ続け、甘えるだけで、俺は楽な方に流されていく。

そんな俺なんて……。

……良くないこと、なんだろうな。

頭で考えてまとまらないときは、口に出せばいい。

どこかで聞いたそれを実践してみるくらいなら……やってみよう。

「俺……友達とセックスなんて、考えたことなかった」

口で、紡ぎ出す。

「セフレなんて言葉はあるけどさ、俺の中じゃ、そんなのはなかった。セックスするのは恋人同士がするもので、それ以外はありえないって」

「うん」

ゆたかの小さな頷き。

「別にそういうやつらを否定したいわけじゃないけど……俺は、そういうのを考えられなかったんだ。変な理想かもしれないけど、そんな軽いものじゃないって思ってる」

「古風な考え方ではあるね」

「かもしれない。だけど、古いからってすぐ考えを切り替えられないんだ。こういうもの、って俺の中で決まっちゃってるっていうか、なんていうか……」

一息。

「とにかく、ダメって考えが優先されてる感じ。さっき先生に説明されて、しなきゃいけないってことは分かってる。けど……って、渋ってるんだと思う。今の俺は」

「なるほどね」

ゆたかが一度頭を撫で、手が離れる。

隣にあった椅子を引いて座り、俺に寄り添った。

俺の両手を、優しく握ってくる。

ほのかな体温が手の甲に伝わり、温かい。

見上げると、優しく微笑んだゆたかの顔。

窓からのそよ風が、ゆたかの髪をさらりと揺らす。

「私は素敵な考えだと思うよ。今時、逆の考え方ならいくらでも氾濫しているからね。それに流されていないのだから、すごく立派だよ」

「そう、かな？」

そうだよ、とゆたかは頷く。

「正直に言うと、私は立派じゃない方の人間だ。だからそう思うのかもしれない」

「そうなの？」

「ああ。私は、あかりをセフレにしたいとすら思っていたくらいだからね」

喉の奥がきゅつと締められたら感覚。

意外なことを言われて、言葉がついてこなかった。

それを認めてか、ゆたかは、ふふ、と小さく笑う。

「驚いたかい？ 私がそんな風に思っているなんて」

「ま、まあ……」

そう頷きかけて、

「いや、さっき襲われたのを考えるとそうでもないかも」

「はは、これはなかなか痛いところをつくね。それは謝るよ。本当にごめん」

過ぎたことだから構わない、と首を振ると、またゆたかは小さく笑む。

「それで、私があかりをセフレにしたいと思っていたのは事実だよ。もちろん第一希望は恋人だったけど、残念なことに、その席は埋まっているからね」

ゆつなに取られちゃった、と小さく笑う。

「そんなに、あかりのことが好きなのか？」

「もちろんだよ。それを反対していたおじいちゃんを説き伏せるくらいには、好きでいるつもりさ」

俺の世界では、おばあちゃんがたくやを溺愛していた。

となると、この世界でゆたかを溺愛するのはおじいちゃんのはず。

それを説き伏せるくらいだから……

「かなり頑張ったんだな」

「うん、一年近く掛かったよ。認められた恋人関係にはなれていないけどね」

一年、か……。

すつ、と俺から視線を横に流したゆたかの瞳に帯びた憂い。

恋い焦がれやまない様が見て取れて、ゆたかの気持ちが伺い知れた。

「あ、このことは他の人に言わないでくれるかい？」

はつと我に返ったように言うゆたか。

少しの焦りを帯びたそれに、首を傾げる。

曰わく、

「まだあかりに直接思いを告げていないんだ。だから、私が言うま

であかりには聞かれたくないんだよ。誰から伝わるとも限らないし、誰にも言ってほしくない。分かってくれるね？」

なるほど。

盗撮気味のあかりの写メがあるくらいだから、相応にシャイらしい。

それを待ち受けにしているくらいだから、いつばれてもおかしくないだろうが。

ま、黙っておくに異論はないし、

「分かった。誰にも言わない」

そもそも、この世界に俺の顔見知りなんていないから、心配無用だろうけど。

俺の解答に安堵を得たのか、小さく息をつくゆたか。

握られっぱなしの両手が、少し汗ばんでいる気がする。

と、ゆたかが口を開いた。

「まあ、実は一度、さりげなく告白はしているんだけどね」

「え、マジ？」

両手が少し強く握られ、ゆたかは頷く。

「うん。二年のときに一度。大学でしか会えなかったあかりに、初めて飲み誘われてね」

思い出すように視線を上に移すゆたか。

「二人つきりで飲んで、一時間したくらいかな。ほろ酔いだったけど、勢いに任せてさりげなく「好き」って言うてみたんだよ」

「あかりは何て……？」

少しの間を空け、ゆたかはこちらを見る。

困ったような、眉尻を下げた笑みで。

「あかりは「あたしも好き」、そう言ったよ」

「……え？」

ゆたかの表情とのかみ合わなさに、思考が少しの置いてけぼりを食らう。

あかりがそう言ったのなら、

「その返事なら、良かったんじゃないの？」

酔い任せとはいえ、告白して、承諾を得たのだ。

それに嘘がなければ、ゆたかは喜ぶはず。

なのに、ゆたかの表情は変わらない。

「私も最初は喜んだよ。片思いから昇華したんだ。喜ばないはずがない」

でも、とゆたかは挟む。

「でも、それは最初だけだった。話を続けていくうちに分かったんだ。あかりの言った「好き」は恋愛じゃない。友達としての「好き」だったんだ、って」

「……ああ、そっか」

「好き」の意味が違った。

ゆたかは恋愛感情での「好き」だったけど、あかりのそれは違った。

友達として。

そういう意味だったから、ゆたかはこんなにも困った笑みを浮かべているんだ。

「でも、よく考えてみれば当たり前だよ。私は女で、あかりも女。同性間の「好き」は、当たり前のように「友達として」なんだから」

まあ、そうだろう。

俺が男に「好き」と言われても、とても恋愛感情としては考えら

れない。

悪く取ってそいつがゲイだと避けるか、良くて「友達として」。

酒の席で、ゆたかはさりげなく告白したと言っていた。

なら、俺だったら後者だろうと踏む。

または前者に似せた冗談だろう、とでも。

「あかりがビアンだったら、受け取りようが変わっていたんだろうけどね」

「……はい？」

過去を後悔するようにぼつりと言ったゆたかの言葉に首を傾げる。

あかりがビアンだったら。

それが、俺の胸に引っかかりを覚えさせた。

あかりがレスビアンだったなら。

そう、ゆたかは仮定した。

とすると、あかりはレスビアンではない……？

「ゆ、ゆたか」

握られている両手を小さく振り、呼び掛ける。

「あかりって、レズビアンじゃないの？」

「あれ、あきは知らないのかい？ あかりがビアンになったのは最近のことだよ」

俺が知らなかったことを、さも意外そうにゆたかは言う。

「で、でも、あかりはゆうなと付き合ってるし」

「ああ、ちょうどその頃だよ。あかりがビアンになったのは」

あかりは、少なくともゆたかと知り合った一年の頃は異性愛者だったらしい。

格好も普通の女の子のそれで、今のようなワンピースも好んで着ていたと言う。

直接確認したことはないそうだが、立ち振る舞いで見る限り違った、とゆたかは語る。

だが、三年の六月頃。

梅雨に入るかどうかという頃合いに、あかりは変わった。

言動と服装の、それぞれが徐々に男っぽくなっていったらしい。

一人称を「あたし」から「俺」に変え。

それまで少女趣味だった服装を、男物に一変させた。

その様子を不審に思ったゆたかは、あかりに何があったのかを聞いたところ、

『俺、彼女出来たんだよ』

高く幼さの残るその声に似合わぬ口調で、あかりはそう言ったらしい。

「あかりはビアンも許容出来る“異性愛寄りのバイ”だったみたい。それが、ゆうなの告白で目覚めたんだと思うよ」

「そんなことがあるの？」

「うん。多いわけではないけど、そうやって同性愛者になるケースもあるみたいだよ」

異性愛者から同性愛者へ。

いや、ゆたかの言い方では、両性愛者へ、か。

そんなことがあるのか……。

俺は異性愛者で、同性に対して恋愛感情たるものを覚えたことは一度もない。

ガチガチの異性愛者、というやつだろうか。

そのためか、そのあかりの変貌は、とてもじゃないが理解し難いものがある。

「ちなみに、私はバイ寄りのビアン。女の方がいいけど、男でも大丈夫ってケースなんだ」

「そ、そうなの？」

「うん。だから、こうして中身が男だって分かってるあきらにも普通に接することが出来てるんだよ」

「はあ……」

なんだろう、よく分からなくなってくる。

あかりは、元は異性愛者だったけど、ゆうなに告白されてレズビアンに。

ゆたかは、基本的にはレズビアンだけど、男が嫌いってわけじゃない。

異性愛、同性愛。

そして両性愛。

大きく三つにカテゴライズされるこれらだけど、その境界は非常に曖昧で。

その内の一つしか知らない俺からすれば、ゆたかの話はすごく遠いものにしか思えないものだった。

「「ストレート」って言葉の意味、分かる？」

優しく問うゆたか。

恐らく単純な意味ではないだろうと思い、俺は首を振る。

「その気がない人、つまり同性愛者ではない人のことだよ。「ヘテロ」や「ノンケ」とも言うね。私がビアンなら、あきららはストレート。そういう呼称になるんだ」

混ざりっ気がない。

そういう意味合いでストレートと言うそう。

「ちなみに異性愛を「ノーマル」と呼ぶのは、同性愛に対しての差別表現だから。言わないようにしてね？」

「う、うん」

俺が頷くと、ゆたかは満足そうに笑った。

「そこらへんの話題はすごく繊細だからね。ストレートのあきらには、あまり理解出来ない領域かもしれない」

ゆたかは俺の両手から手を離し、俺の手の甲を軽く撫でる。

「細分化すればいくらでもパターンがあるからね。先天性、後天性。環境による一時的なものや、男性・女性恐怖症からの場合、性同一性障害が絡むこともある。その全てを理解するのは、私でも不可能だよ」

「そついうものなのか……」

そこまで言われると、本当によく分からなくなってくる。

言われたことがどんなものが、大体は分かる。

先天性などの意味も分かるし、性同一性障害もテレビで見たことがある。

でも、それを理解しているかという点、答えは限りなく否。

あかりやゆたかのケースも理解しきれないのに、そんな途方もない数を理解出来るはずもない。

ストレートの俺にはあまり理解できないかもしれないとゆたかが言ったのは、きつとこついうことなんだろう。

「こついうことは理屈じゃない。本人がそついうものだと思う感性で成り立つものなんだから、頭で考えちゃダメなんだ」

「頭で考えたら、ダメ？」

俺が首を傾げると、ゆたかは頷く。

「うん。例えば、どうしてあきらは自分のことをストレートだと思うんだい？」

「どうしてって……」

ゆたかに言われ、考えてみる。

俺が自分自身を異性愛者だと思う、その理由。

「えっと……男よりも女の方が好き、だから」

「じゃあどうしてそう思うの？ あきらは男性とそういう関係を持ったことがないよね？ 想像だけで、男はダメって決めつけているのかい？」

「まあ、想像だけになるけど……」

「なら本当にダメなのか分からないよね？ もしかしたらバイである可能性もある。そうは思わない？」

「え、えっと……」

俺が両性愛者……？

……想像も出来ない。

「はは、困ってるね。でも感性っていうのはそういうことなんだ。少しは分かったかい？」

そう笑うゆたかの表情は、なんだか楽しそうに見えた。

「中には自分の性的指向を把握している人もいるけど、大概はそうじゃない。『そういうものだ』って、頭じゃ理解出来ないところで理解している人が大多数なんだ」

俺も、恐らくはその内の一人なんだろう。

自分が異性愛者であることに微塵の疑問も抱いたことは一度もなかった。

それが普通だと思って、深く考える機会もなかったんだ。

だからこうして考えてみると、よく分からなくなる。

俺は、どうして異性愛者なんだ？

生物的にオスとメスがくつつくのが当たり前だから？

だったら、何で同性愛なんてものがあるのだろう。

両性愛者になる理由だってなくなるはずだ。

なのに、数は少なくともその二つは確かにある。

俺の目の前に、こうしてゆたかがいる。

自身をバイ寄りのピアンと称する彼女が。

なら、どうして俺は同性愛者でも、両性愛者でもないのだろうか。
それが当たり前、と言ったら失礼なことなんだろう。

異性愛者を「ノーマル」と呼ぶのは、他への差別になるとゆたかは言っていた。

つまり、異性愛を普通と呼べば他が異端ということになる。

それを差別だと、ゆたかは言ったのだ。

それはそうだろう。

自分が普通じゃない。

異端であると言われて、どうも思わないはずがない。

だから、異性愛が当たり前なんて言い方は、すごく失礼に値する。

それは分かってる。

けど……他に表現のしようがない。

俺の中ではそうだったんだ。

異性愛者であることが俺の当たり前だ、って。

02（前書き）

章整理のために分割しただけなので、以前にお読みになられた方の再読の必要はありません。

「　　当たり前、かあ」

「う、うん」

俺が先ほど思ったこと。

その丈をゆたかに告げた。

言い方が差別に近いことは分かっている。

けどそう思っていたのは事実だ。

だから、怒られる覚悟で言ってみた。

のだが、

「私もそう思ってるよ」

「……へ？」

想定外の返しに、少し声が裏返ってしまう。

「ずいぶん意外そうだけど、私もそうなんだ。自分がビアンであることを当たり前に思ってるよ。男性と付き合っても大丈夫なのは、自分のストライクゾーンが広い、って言い方にしているしね」

「す、ストライクゾーンっすか……」

両性含むなんて、ずいぶん広い範囲で……。

「でも、そんなものだよ。改めて聞かれると困ってしまうことばかり。それはきつと、みんなそれが当たり前だと思っっているからなんだ」

「なるほど……」

俺とゆたかには性的指向の違いがある。

が、その根底は一緒。

自分の恋愛対象に対して深く疑問を持つことなく、それはただの「当たり前」。

当たり前と思うからこそ、自分はその性別に恋愛が出来るのだと、ゆたかは言った。

「さすがに思春期の時は悩んだけどね。男の子が嫌いなわけじゃないのに、好きな子は女の子ばかり。こんなの変じゃないか、って」

それはもう過去のことなんだろう。

ゆたかの告げる独白は、良い思い出を語るような軽さがあった。

「でも気が付いたときにはそうだったから、今更変えることなんて出来なかった。女の子が好きなのは変わらないし、男の子と付き合っても全く不快じゃない。そんな自分を認めてからは楽だったよ。」

そついうものなんだ。それが私の当たり前なんだ、って」

一息吸って、ゆたかは微笑む。

「普通かどうかを考えるんじゃない。自分の中での当たり前は何なのか。それが自分の性的指向だと、私は思うんだ」

当たり前。

俺の言葉がそんな風に使われて、ああこれで良かったのか、と安堵した。

「だからかな、あかりみたいに潜在的な性的指向があるのは」

言ったゆたかは、眉尻を下げて笑う。

「本人が当たり前だと思ってる性的指向は、あくまで想像に過ぎない。さつきあきらに聞いたろう？　もしかしたらバイになる可能性があるんじゃないか、って」

「うん」

俺が異性愛者を当たり前と思っているのは、男との経験がないから。

試していないのだから、異性愛者であることは、あくまでも想像した上でのこと。

もしかしたらバイになることも、万に一つはあるかもしれない。

そう言っていたのを思い出し、頷く。

「そういうものは、何かきっかけによって覚醒するケースが多いんだ。あかりの場合は、たぶんゆうなに告白されて目覚めたんだと思う」

「だろうね」

今まで異性愛者だったあかりが、レズビアンとして目覚めたのだ。

それを強烈に意識させられる出来事

例えばゆうなに告白され、それを受け入れた自分がいたら。

それまで異性愛者だと思っていた自分が同性からの告白を受け入れたのだから、認識せざるを得ない。

自分は、両性愛者なんだと。

「だから……悔しいよ」

口を真一文字に結び、少しの間。

ゆたかは口惜しそうに語る。

「きちんと告白していたら、私があかりを目覚めさせられたかもしれないのに」

さし飲みの一応の告白ではなく、ちゃんとしたものをしていたとしたら。

そう考えて、ゆたかは後悔しているようだった。

まあ、さぞかし悔しいことだろう。

もしゆたかが先に告白していれば結果が違ったかもしれないのだ。
だからゆたかは悔しがって、

「ああ、あかりとイチャイチャしたかったなあ」

身をくねくねしないでください……。

「というわけで、私はあかりと　ひいてはあかりの姿をしたあき
らとセックスがしたい」

「というわけ、で集約するんすか……」

途中、話がわき道に逸れた気がするけど、ちゃんと戻ってくるわけね……。

「私は欲に忠実な人間だよ」

「……はい？」

いきなり何を言い出すかと思えば。

座ったまま、ゆたかはぐいつと身を寄せてくる。

思わず引いても、その分を確実に埋めて。

「知識欲のために勉強や読書は欠かさないし、このオカルト研究部に入ったのも、私の見える幽霊について少しでも語らえる人物を探すため。語り合いたい欲望を満たすために籍を置いているんだ」

「ちょ、ちよつと……」

わしつ、と俺の両手を掴み、自身の胸に引き寄せる。

薄いながらも、その胸に手を当てるように。

「あきららは、きっと不安なだけなんだよ。女の子同士のセックス……ゆつなと経験しただけじゃ分からない奥深さ。大丈夫、私は優しいよ」

爛々と輝いた瞳を向け、薄く潤った唇が開く。

「だから……私とセックスをしよう、あきら」

「……」

……あの。

なんか、めっちゃ迫られてるんですけど、俺……。

「ちょ、ちょっと距離置いて」

「嫌だ。今すぐにも抱きつきた」

「いいからっ」

両手を掴むゆたかを振り払い、押しとどめる。

ゆたかの両肩に手を置き、近付かないように突っ張って。

「ゆたかがどのくらいセックスしたいかは分かったから、とりあえず質問」

「私の胸のサイズかい？ 恥ずかしながらAだよ。Bに届く気配すらないけどね」

「それは聞いてないから！ 妙に誇らしげに言わなくていいから！」

つつか普通、もっと羞恥の色に染まるもんじゃないの？

胸のサイズを言うときって。

「と、とにかく質問」

「分かった、私の性感帯だね？ 本当はあきらの手で見つけてほしいけど、そうまでして聞きたいなら仕方がな」

「そうまでして聞きたくないから！ 言葉食ってまで暴走するのやめい！」

つつか女の子がそういうこと言っなよ。

いや実際は言うかもしれないけどさ、男の想像にそぐわないって
いうか……。

「はあ、もう……」

何で一つ聞きたいだけなのに、こんな熱烈を受けなきゃいけない
んだよ……。

「ところで、私からも質問していいかい？」

「俺の質問も終わってないのにつ？」

「あきらの」

あ、無視ですか。

まあ仕方ないかと思い、耳を傾ける。

と、ハアハアと荒い息遣い。

「パンツは何色だい？」

「……え」

刹那、下からの強風。

スカート捲り。

その要領で捲り上げられた、ワンピースからの風だった。

犯人は当然、

「あ、無地の白。すごいね。純粹無垢だね」

ニヤニヤ口元の緩んでいるゆたかに他ならなかった。

「お、お前……！」

慌ててスカート裾を押さえるも、後の祭り。

中は完璧に見られたし、あまつさえ、

「いやあすごい。座っているとところを捲るとなかなかの食い込み具合がまた」

めっちゃめっちゃ考察されてるし……！

「この……！」

とりあえず殴らりやな気が済まない腕を振り上げ

ゆたかの手に掴まれた。

振り上げられた二の腕を、ゆたかの細く長い指が掴む。

その力は、咄嗟には振りほどけないもので。

「二の腕も脇も、すごく可愛いよ、あきら。もう、舐めちゃいたいくらい」

それは実行に移された。

四の五のする間もなくゆたかの顔が俺の二の腕に寄せられ。

その中腹を、一舐め。

「うあっ……!?!」

「ふふ、実に愛くるしいね」

こそばゆい感覚にピクリと跳ねた俺を、ゆたかは笑う。

味わうように舌を唇に這わせ、艶に満ちた表情で。

「ば、バカ、やめ……っ」

「もうちょっと舐めちゃお」

脇から肘にかけて、ゆっくりと這うゆたかの舌。

生温かい。

そしてねっとりとした感触が、敏感に触れる。

「あ……だっ、やめ……っ」

悪寒めいた冷たさが背筋を這い回り、力を奪う。

首筋にぶるつと震え。

腰に言い知れぬ緊張が走る。

ゆたかの唇が耳元に寄る。

「もっと鳴かしたい。鳴かしてあげるよ、あきら」

息遣いが耳に触れる、甘い囁き。

気が付けば、掴まれた二の腕は解放されている。

両腕を垂らし、椅子の背もたれに体重を預けていた。

息は、やや肩が弾むほど。

体の芯に熱がこもっているような感じがした。

その俺を、ゆたかは身を寄せて笑う。

「あきらは、どんな味がするのかな？」

身を低く、頭を下げていく。

先は、俺の足の間。

股に位置するところで

って、

「それじゃあ、いただ」

「かれるかあああっ！」

思い切りチョップをかましてやった。

「いっ……たあ……っ」

あ、危ねえ……！

危つく大学内で襲われるところだった……！

「うっ……ここ、さっきたんこぶ出来たのに……」

頭を押さえるゆたか。

「し、知るかあほんだらっ！」

つつか、まず反省をしろ！

閉め切られてるとは言え、大学の教室内でありえない行動したんだぞ！

「この、変態バカっ！」

「あ、可愛い罵倒」

「う、うるせえよっ！ いっぱいいっぱいでそこまで考えられないんだっつうの！」

ああもう！

顔は火照ってるみたいに熱いしっ。

舐められ二の腕はすっごくかゆいしっ。

囁かれた耳元はむずむずしてたまんないしっ。

とにかく椅子から立ち上がって、ゆたかから距離を置く。

背に棚が当たるくらい、ギリギリまで。

弾む息に一度深呼吸をして、屈み込んでいるゆたかを見下ろし、言う。

「謝れ！ もう二度と襲いませんって神に誓いながら謝れ！」

ただでさえ力が弱くて、背も小さいこの体。

それを、百八十を超える長身のゆたかが襲ってくるなど、恐怖以外のなにものでもない。

「私、無神論者だけど」

「じゃあ何でもいいから！ とにかくもう二度とすんな！」

しょうがないなあ、と反省する気がまるで見えない様子で、ゆたかは立ち上がった。

頭の痛みはだいぶ引いたらしい。

軽く頭を擦りながらも、痛む様子はない。

そして、

「もう一回舐めてもいいなら」

引くのも躊躇うくらい清々しい微笑みを称え、そう言っただけだ。

「あんなにぶつことないじゃないか。たんこぶがたくさん出来て頭がすごいことに」

「うっさい。時間ないんだからキビキビ歩け」

「んもう」

綺麗に舗装された石畳の上。

俺とゆたかが横に並び、それぞれの靴を鳴らして歩く。

今は、ゆたかが知っているという同性同士で入室可能なラブホテルに向かう道すがら。

暦上では秋なのに、紅葉する気配を全く見せない銀杏の並木道。

講義棟の間を縫うように走るここは、大学の敷地内である。

俺たち以外にもちらほら大学生らしき人影が見え、おそらく下校中であろうことが見受けられた。

にしても……右手がじんじんする。

叩きすぎで鈍く痛い。

散々暴走し尽くしたゆたかを止める犠牲だ。

ゆたかは頭が痛いと言ったが、そっちは自業自得だ。

叩く方も痛いんだぞ。

頭なんて硬いところを叩きまくったのだから、当然のように赤く腫れてる。

もうやだ。

「にしても、結構時間経っちゃったね。日も落ち掛けてるよ」

「ゆたかのせいだからな」

「分かってるよ。ごめんね、あきら」

ゆたかが言うように、予定よりもだいぶ押している。

ケータイで時間を確認したところ、午後六時になる少し手前だ。

一時間近くあんな目を遭っていたのかと思うと泣けてくる。

はあ、こんなことで間に合うのだろうか……。

それにしても、と思う。

ラブホテルに向かう理由が、ゆたかに脅されて。

それはどうなんだろう？

事は、つい先ほど。

ゆたかの暴走が終局を迎える、その直前の頃合いだった。

興奮してやまないゆたかに落ち着くよう諭そうとして、

『あきらとセックスしたい！』

『……は？』

『セックスしてくれるなら襲わないから！』

『え、ちょ……』

『セックスしてくれないならこの場で襲ってやるっつー！』

『ま、待てえーっ！』

つつか大声でセックスセックスうるさいっつうの。

……まあ、することへの踏ん切りをつけるのにちょうど良かったけどさ。

ゆたかとセックスするのは必要なこと。

信じがたい面もあるが、菊地原先生はそう言っていたのだ。

元の世界に戻る方法の一も知らぬ俺からすれば、差し出された唯

一の手段。

すがらずにはいられないものだ。

だから、うだうだしているよりは、こうして半ば強制だと気持ち的に楽ではある。

もつとも、脅されてるという点では納得いかないし。

前にゆたか自身が「無理強いはしない」と言っていた気がするのだが。

と、不意に風が足元をくすぐる。

冷気を帯びた、背筋を震わせる風だった。

「う、さむ……」

自身を抱くように、両腕を擦る。

夕方にもなると、九月上旬とはいえそれなりに涼しくなる。

風が少ないのが幸いだが、それでもワンピース姿では少し肌寒い。

服のチョイス間違えたな、と今さらながら思うも、

（そっぴや、これもゆうなに着させられたんだっけ……）

強制だったことを思い出し、内心嘆息した。

もしかしたら俺、すっげえ立場弱いのかも……。

ゆたかには、この数時間だけで何回も襲われかけてるし。

ゆうなにだって、深夜帯に気絶するほど攻められた。

マゾっ気なんて、微塵もありはしないのに……。

あかりの容姿がそうさせているのか。

それとも俺の人格が入るとそうされるのか。

出来れば前者であってほしいなあ、なんて望みながら、まだまだ緑の銀杏の並木道を歩く。

さつきは俺がゆたかを急かしたが、どうやら遅いのは俺の方らしい。

百五十にも満たないであろう俺の低身長と、百八十を優に超えるゆたかの高身長。

それを比べれば、俺とゆたかの歩幅差など想像に容易いだろう。

彼女の歩く速度に合わせる彼氏宜しく、ゆたかは俺に合わせてゆつくり歩いてくれている。

俺、結構早歩きしてるんだけどなあ……。

それがなんだか癪に思えて、俺はさらに足を早めることにする。

「はは、大丈夫だよ、ゆっくり歩いても。下手に急いでも疲れるだけだよ」

笑われた。

「う、うっさいなあ」

なんかまどろっこしいんだよ、この体。

背が低いせいで歩くの遅いし、体力もなくて疲れやすいし。

普段の勝手が利かないのが、こつもイライラするものだとは思ってもみなかった。

ワンピースのスカートだって、ヒラヒラ足にまとわりついてうざったい。

いつそゆたかのジーンパンを奪って履いてやろつかとも思ったが、

「股下なげえ……」

どう考えても無理なので、俺は考えることをやめた。

「ん、どうしたんだい？ 私の股をそんなに凝視して」

俺の呟きが聞こえなかったらしいゆたかが、何故だか体をくねく

ねさせながら言う。

「もしかして今にも辛抱堪らなくな」

「なっていないから」

つつか公に下ネタ口走るのやめい。

そう突っ込むと、ゆたかは口をとがらせた。

「だってしょうがないじゃないか。念願だったあかりとラブホテルに行けるんだよ？ 中身はあきらでも、外見はあかりそのものだからね。興奮しないわけがないよ」

「いや、それなんだけどさ、」

「なんだい？」

歩きながら首を傾げるゆたかを認め、俺は言う。

「ゆたかとするの、ラブホテルじゃなきゃダメなの？」

「それはどういうこと？ 他にあてがあるのかい？」

「あてって言うか……」

これから俺がしなければいけないことは二つ。

ゆたかとセックスをして、レスビアンについての見聞を広げること。

そして、ゆうなに会い、どうにかして元の世界に帰る方法を模索すること。

それらを考えみたとき、ラブホテルに行くよりも効率的に思える場所が思い当たった。

そこは、

「俺んち、なんてどうかな？」

言った、その瞬間だった。

横を歩いていたはずのゆたかが急にこちらを向き、俺の両肩を鷲掴みしてきたのは。

驚く間もなく、ゆたかは爛々と輝く瞳を携え、

「それはお誘いだね？ 私を公認のセフレにしようという素晴らしいお誘いだね？ 答えはイエスだよ。選択肢、はいかイエスのイエスを選ぶよ」

あ、あの……。

何故、そんなにも興奮してらっしゃるのかしら。

ゆたかは興奮しすぎると、人の顔につばを飛ばすのもいとわなくなるらしい。

とりあえず取り出したハンカチで顔を拭き、頬を朱に染めている
ゆたかを見上げる。

「ゆたか、まず落ち着
」

「ありがとう。私はどこまでも君についていくよ。ああ一生涯の約束だ。破りはしない。例え世間に悪名着せられる愛人だろうと、私はいつまでも君の都合の良い人間であり続けるよ」

「いや、意味分からん……」

何の公約だよ。

俺、この世界に居座る気なんて毛頭ないし。

もう一度ハンカチで顔を拭き、ゆたかに言う。

「そついう告白はあかり本人に言え。な？」

「そ、それもそうだね」

どうやら今の一言が効いたらしい。

あかり本人に、と言った時から、妙に大人しくなってくれた。

その隙に話の続きだ。

「ラブホテルよりも俺んちの方がいいと思うんだけど、どう思う？」

聞くと、少し冷静になっただけらしいゆたかが首を傾げた。

「ああ、私はその方がすごく嬉しいよ。けど、あきらがそれを勧める理由はなんだい？ お金のことなら心配しなくても大丈夫だよ」

「いや、お金のことじゃなくて」

もしラブホテルに行くのなら俺が金を払う気ではいたけど、そこじゃない。

効率。

それを考えたときのこと。

「俺んちからの方が、ゆうなんちに行くときに近いんだよ」

大学から見て、俺の家とゆうなの家は同一方向。

俺の家の方が大学に近く、そこからもう三駅過ぎたところが、ゆうなのお家の最寄り駅だ。

対して、これから向かうとしているラブホテルは、それとは逆方向。

往復は徒歩必須であり、帰りはそこから大学の最寄り駅に行き、電車に乗って余計に移動しなければならない。

さっきまでは行くか行かないかで悩んでいたから気付かなかったが、時間がない現状、俺の家に行った方が幾分も良いだろうと考

えつく。

だから、俺はゆたかに進言したのだった。

「なるほどね。確かにそうかもしれない」

うんうん、とゆたかは頷く。

「私はゆうなとあかりの家の場所を知らないけど、あきらの話を聞く限り、ラブホテルに向かうのは非効率的だね。少しでも時間が惜しい今からすれば、私もあきらの意見に賛成だよ」

ゆたかはそう言って、にこやかに笑った。

相変わらず雄弁というか芝居がかつてるといっつか、妙な喋り方であるけど、とにかく賛成してくれて良かった。

未だ俺の両肩を掴んでいるゆたかの手を振り払い、

「じゃあ行こうか」

向かう先は、ラブホテルから大学の最寄り駅へ。

変更されたそれ相応に踵を返す。

と、不意に、

「あ、でも……」

ゆたかが声を上げた。

その声に振り向くと、ゆたかは何か思案しているような様子だった。

「ゆたか、どうしたの？」

何事かと問うと、

「い、いや、何でもないよ」

取り繕うように首を振り、ゆたかは少しの苦笑いを見せる。

「何だよ。気になるじゃんか」

「いや、本当に何でもないことなんだ」

どうやらひた隠しにするつもりらしい。

なんだか納得いかないけど……そこまで拒否するからには言う気がないのだろう。

それを問い詰めたところで吐きそうにもないし……まあ、いつか。

「じゃあ今度こそ行こうか」

「うん、行こう」

ゆたかの頷きを見、ようやく歩き出した俺たち。

向かう先は俺の家。

そこで

やっぱり、襲われるんだろっなあ……。

「おじゃまします」

「まあ狭いけどどうぞ」

ワンルームタイプのアパートに広さを求めるのはどうかと思うけど。

なんて思いながら、開け放たれたドアから家の敷居を跨ぐ。

そういえば、ゆうな以外の誰かを家に招くなんて久しぶりのことだ。

うちが大学から近くないのもあり、友達を呼ぶことはあまりない。

だからこうしてゆたかを家に上げるのは、なんだか新鮮な気持ちでした。

玄関に置いてある靴をサイドに退け、ゆたかのそれを置けるだけのスペースを空けてから上がる。

部屋の中央、ベッド付近まで歩みを進めて振り返ると、

「わあ、ここがあかりの部屋かあ」

ゆたかは家に上がりもせず、玄関先で我が家を様子見していた。

どうやらあかりの部屋を見て楽しんでいるようだが、あまり見渡されるのも気恥ずかしい。

ところどころ細部の違いこそあれ、ほとんどが俺の部屋と同じなのだ、あかりの部屋は。

だから手招きをして、

「ほら、そんなとこいないで上がってきなよ」

「あ、うん」

素直な返事で頷き、ゆたかは部屋に上がってきた。

きちんと踵を揃えて靴を脱ぐあたり、妙に礼儀正しい。

と、こちらを見るなり血相を変えた。

「そ、それはまさかあかりのベッドかい？」

「あ、勝手に寝転がるの禁止だから」

「えー、それはあんまりだよ、あきら」

だって「今すぐダイブしてくんかくんかしたい」って顔してるんだもん。

さすがにそれは、ねえ？

「まあ、あとのお楽しみにしておこうかな」

とりあえずはベッドインを諦めてくれたらしい。

あとの、の件が気になりはするが……。

と、

「それじゃあ嚴重に鍵を閉め……あれ？」

閉めたドアの方を向き直るなり、首を傾げるゆたか。

「チェーンが壊れているようだけど、どうしたんだい？」

「あ、それ？」

玄関付近にいるゆたかのそばまで歩み寄って、ゆたかの見ている先に視線を合わせる。

そこにあるのは、ドアに鍵をかけるためのチェーンだったもの。

チェーンの中ほどから千切れ、本来の役目をまるで果たせないなれの果てだ。

「なんだか無理に千切られたようだけど……もしかして誰かに？」

「いやいや、そんな大層なことじゃなくて」

ゆたかは心配そうにこちらを見てきたが、対して俺は首を振り、

ゆたかを見上げる。

「これ、老朽化してたみたいでかなりボロかったんだよ。それで、前にチェーンしてたのを忘れて思い切り開けようとしたときに」

あの時はビツクリした。

普段の勢いでドアを開けただけなのに、何故か一瞬の抵抗とチェーンがジャラツと鳴る音が一度。

何だろうと思ってドアを見たら、チェーンが途中から千切れていた。

先端部分が床に転げ落ちて、根元の方はぶらぶら揺れて。

こんなことあるんだなあ、と不思議と感心した覚えがある。

それが俺があきらの時に起こり、こうしてあかりの部屋にもあるということ、こちらでも同様のことが起きたのだろう。

「それはどれくらい前のことだい？」

「えっと、二週間くらい前だったかな」

九月初頭、今よりもっと平均気温の高い時期だったと思う。

チェーンの千切れた記憶のBGMにやたらセミの声が大きく残っているくらいだ。

聞くゆたかに答えると、驚いたように目を見開く。

「二週間もこのまま放置しているのかいっ？」

「ま、まあ」

この辺りじゃ空き巣の被害なんて聞かないし、チェーンがなくても不便しないうちで。

と、ゆたかが腰に手を当てて目くじらを立てる。

「ダメじゃないか、女の子の一人暮らしでこんなことじゃ！ 万が一にも何かあったらどうするんだい！ 安全管理がなってこそ一人暮らしだろうっ？」

ものすつごく責められる俺。

まあ悪いのは分かってたんだけど……。

「なんていうか……」

どうやら、責められると俺は極端に弱いらしい。

心が窮屈になる感覚を覚えながら、口ごもりつつゆたかを見上げる。

「その……大家さんに話したら意外とお金が掛かるって言われて、先延ばしに……」

「それでも安全に越したことはないよ！ 女の子の一人暮らしなんだよっ？ そこら辺の自覚はしっかりしなくちゃ！」

より怒られた。

「てか、俺は男の一人暮らしだったし……」

「あ」

そこで、ゆたかはふっと思い出したような声を上げる。

「ああ、そうか。そうだね、あきらに言っても仕方ないことだね。あかりに言うべきことだったよ」

どうやら気付いてくれたらしい。

良かったと思いつつも、ただ……。

ただ、あかりのことを少し羨ましく思ってしまう。

こんなにも自分を心配してくれる友人がいることを。

もしたくやだったら、どうだろうか。

頭の中で想像してみて、

『チエーン、どうしたの？』

『ああ、それ老朽化してて千切れちゃったんだよ』

『そう』

『うん』

『……』

これで終わりそうだな、と内心苦笑した。

そもそも口数の少ないたくやとゆたかを比べるのが酷だ。

だったらゆうなと比べた方が

考え、あつ、と思った。

そういえばゆうなはまだチェーンが壊れたことを知らないっけ。

付き合ってからというものの、ゆうなはそれほど俺の部屋に上がったことがない。

もちろん恋人だし、何回かは上げてはいる。

が、その時に合い鍵を渡してはいるものの、大抵はゆうなの家が上がってばかりだからだ。

俺の部屋がそれほど広く綺麗でないのもあるし、俺がゆうなの部屋がいいとせがんだのもある。

故に、ゆうながこの二週間に俺の家に来たのは今日だけで。

ドアについて触れる話題が一度もなかったことから、ゆうなはこ

れを知らないはずだった。

だから、思う。

ゆうなは、こうしてゆたかのように心配してくれるだろうか、と。

（心配してくれたら、いいな）

なんて曖昧に思うのは、きっと俺に自信がなくなっているから。

この世界のゆうなと喧嘩してしまつて。

世界は違えど、俺の世界のゆうなに対しても劣情を感じる節があつて……。

情けなくとも、それが俺の感情だった。

「あ、でも」

ふと、ゆたかが声を上げる。

慌てた様子はなく、ただ言い忘れたことを付け加えるような何気ない口調で、

「あきらめちゃんと直さなきゃダメだよ？ 何かあってからじゃ遅いんだからね」

ゆたかが心配してくれた。

なんだか心の内を読まれたような発言に、一瞬哑然としてしまう。

……けど、

「あはは、ありがとう」

嬉しい気持ちで笑ってしまっ

……。今日の俺は、何かとネガティブに考えてしまっ

分かってはいるけど、気が付いたときにはそうなっ

だからかもしれない。

それを少しでも救って発言をしてくれたゆたかが、すごくありがた

そして思っただけじゃなく、行動にも表そうと思っ

「ほらゆたか、早くシャワー浴びてきてよ」

ドアの鍵を閉め、ゆたかの背中を押す。

両手でぐいっ

えっ、と驚かれたが、とにかく笑顔を向けた。

「俺とするんでしょ？ だったら早くシャワー浴びて」

そう言って、

「早く、しょ?」

……って、さすがにこれはないか。

あかりの容姿を使ってぶりっ子してみたが、いかんせん初めてが原因かそもそも男の俺には無理なのか、結果としてイマイチだった気がする。

というかやった本人として恥ずかしすぎる。

(女から男を誘うときって、こんな気分なんだろうか……)

なんて思っ、ゆたかを脱衣場に押し込む直前。

「っ……!」

ふと、背中を押す手にぶるっと小さな震え。

元凶はゆたかの背中だ。

何事かと見上げると、ゆたかがこちらに血走った目を向けて

「あか、あかあか、あかあかあかあかあか……っ!」

オーバーヒートしてらっしやるっ!?

それはまさに暴走モード。

頬を真っ赤に染め、手を指をわきわきしならせて迫

「う、うわぁあっ！」

脱衣場に突き飛ばす。

思いのほか軽い手応え。

が、見送る暇もない。

脱衣場の扉を閉めるのは、次の一瞬。

ボタンと激しく扉を叩きつけ、背を扉に預ける。

そのままずるずると、開けられることのないように座り込んだ。

「あ、危なっ……！」

し、死ぬかと思った……。

襲われるどころか食い殺されそうな勢い

「あかりい！　今、今会いに行くからねえっ！」

「ひっ……！」

扉をガリガリ爪でかくなあ！

ホラー！

これ、めちゃくちゃホラーなんですけどお！

*

俺は脱衣場の扉に背中を預けて座り込み、ゆたかは爪でカリカリ、カリカリと求めるように内側から扉をかき続けることたっぷり十分強。

諦める気になってくれたのか、ようやく中からシャワーの流れる音がし始めた。

それを聞き、嘆息を漏らす。

「やっとかあ……」

長かった……。

ケータイで時間を確認したから経過したのが十分強だと分かったが、体感はその以上。

一時間近く背中中扉を押さえていた気さえする。

しかもその間、

「あかりい……あかりい……」

うわごとのような、呪詛のようなゆたかの呟きをひたすら聞き続

けたのだ。

精神をすり減らすというのはこついつことなのだろう。

生命の危機というか、性的な危機というか。

ある種のホラーに直面するとは思ってもみなかった。

だから、

「逃げちゃおっかなあ……」

そんなことを思ってしまう。

この部屋にゆたかを一人残して……なんてことも考えたくないけど。

「はあ……」

小さく嘆息して膝を抱える。

そこに顎を乗せて、目を閉じる。

考えるのは、さっきのこと。

（ゆたか、俺のこと「あかり」って言ってたなあ……）

やっぱりゆたかから見れば、俺はあかりの姿なんだろう。

それはそうだ。

今の俺は人格だけがあかりの体に入っているだけなのだ。

加えて性格まである程度似通っているという。

そこまで条件が揃っているのなら、間違えるのだって無理はない。

例えば事情を理解してくれているゆたかだとしても、だ。

それがあの暴走モードともなれば、判別つかなくなるのも仕方ない。

けど、やっぱりどこか寂しい気持ちもある。

呼ばれる名前は俺ではなく、「あかり」。

それがなんとも言えない焦燥を駆り立てる。

俺のいない世界。

それを再確認させられた気がして。

(でも、頑張るしかないんだよな)

この現状をなんとかするために、俺は動いているんだ。

ゆづなから原因を探るためにレスビアンについて知る必要があった。

それを知るために、こうしてゆたかを俺の家に呼んだ。

だから気合いを入れてゆたかと

その時だった。

部屋の鍵が開けられる、ガチャガチャという音がしたのは。

その音にぎょっとして玄関先に目を向ける。

と同時に、鍵の回りきる音と間もなくして開く扉。

この家の鍵を開けるという行為。

それを正当にすることが出来る人間は数少なく、そして現状、それは一人しかいないわけで

「……う、そ」

「あ……」

一つは俺の呟き。

もう一つは、驚いた様子の彼女のもの。

玄関のドアを開けて入るなり俺と目が合い、気まずそうにする彼女。

ゆうな。

その人が俺の家の玄関を開けた人物。

「ゆ、ゆうな……？」

栗色の柔らかい髪。

女性としてやや低めの身長に、物腰柔らかい印象を受ける彼女。

何一つ疑うこともない、正真正銘のゆうなだ。

そのゆうなが……玄関先にいる。

俺の家の玄関先、ドアを開け放って佇んでいる。

喧嘩しているはずのゆうなが、どうして……。

「ど、どうしてゆうながうちに……？」

困惑の一色を示す脳内から口をつくのはそれだけで。

ただ渴いたように張り付く喉がいがつき、たったの一言もどもらせた。

視線がゆうなのそれと合致する。

玄関先に佇む彼女は、ただ気まずそうに眉尻を下げる。

「その……謝ろうと思って」

……驚いた。

いや、驚く感情なら彼女が登場したときから渦巻いている。

けど、そうじゃない。

驚き、困惑し、疑問湧く今。

ただ、今のゆうなの言葉がひたすらに響いた。

「えっと、ごめんね。私がどうかしてたの。あんなところで怒るなんて……」

「い、いや……」

信じられない。

今起こっていることが信じられない自分がいて。

信じたい。

目の前にいるゆうなの言葉をそのまま受け止めたい自分もいて。

どちらが強い弱いでもなく、ただ渦巻くようにせめぎ合う。

混乱。

そう、俺は混乱していた。

「ゆうな……なんだよな？」

「うん？」

混乱する気持ちばかりが先行して、自分がおかしなことを聞いているのは分かっている。

けど……こんなの、確認せざるを得ない。

「俺、今、ゆうなに会ってるんだよな……？」

ゆうなは柔らかに微笑む。

「うん。今、私と会ってるよ」

ああ……ああ、そうか。

じわり、じわりと認識していく。

俺は、ゆうなに会えた。

仲違いしていたゆうなとこうして会えて、話をしている。

それは酷く難しいことだと思っていた。

何とかして元の世界に戻る方法を見つけ出して、喧嘩してしまつたゆうなに必死にそれを説明して。

そうして信じてもらえて、いや、元の世界に戻れてこそ、ようやくそこにまで至れると思っていた。

けど……こうしてゆうなに会えた。

ゆうなから俺に会いに来てくれた。

本来なら俺からゆうなの元へ行かなければいけないはずだったのに。

それなのに……。

「ゆう、な……」

声が震える。

名前を呼ぶだけの声が、震えてしまう。

けど、それは歓喜だ。

他の何物でもない、歓喜に震えているのだ。

体の芯から溢れる感情に、ゆうなに目を向けて

……どうしたことだろうか。

何故かその時、俺は感じてしまった。

ゆうな……いや、ゆうなが俺の家を訪ねてきた違和感を。

（何で、違和感なんか……）

これはもつと喜ぶべきことのはずだ。

ゆうなが俺と仲直りをするために、わざわざ俺の家まで出向いてくれたんだ。

それを喜びこそすれ、何故違和感など……。

もう一度、認識し直す。

今、ゆうなは俺の家の前にいる。

場所は玄関先。

靴を履いたまま上がる気配を見せず、ただ反省の色に染まった表情をこちらに向けている。

謝るという行為を考えれば、その表情に何ら不思議はない。

対する俺は、膝を抱えて座ったまま。

ゆうなのいる玄関とは少し離れるも、そちらを見れる脱衣場の前で

（脱衣場？）

はっ、としてそちらを向く。

あるのは脱衣場の扉と、隙間から漏れる中の明かり。

そして聞こえるシャワーから流れ出る水滴が弾ける音。

ゆたかが中にいる。

中にいて、シャワーを浴びている。

当たり前だ。

俺がゆたかを押し込んで入らせたのだから、いなかったらおかしいことになる。

でも……もつとおかしいのは今の状況で。

ゆたかがシャワーを浴びている最中に、ゆうなが俺の部屋に来ている。

いや、正確にはこうだ。

ゆたかとセックスしようと準備しているところに、彼女のゆうなが訪問してきた。

いわゆる浮気現場。

それに今の俺があるのだと、気が付いた。

「? どうしたの?」

「やっ!」

思わず上擦った声に、慌てて咳払い。

「な、なんでもないよ、うん」

「そう? なんか焦ってるように見えるけど……」

「そ、そんなことないよ」

明らかに訝しげな様子のゆうなから視線を逸らして、首を振る。

……どうしよう。

先ほど感じた違和感はこれだった。

一番ゆうなと遭遇してはいけない状況。

それに、ものの見事にゆうなが訪ねてきたのだから。

しかし……どうしたらいいというのか、この状況。

目の前には昼間のことを謝りにきてくれたゆうながいて。

風呂場には、今まさにシャワーを浴びて悶々しているであろうゆうながいて。

板挟み。

これは……まずい。

どう考えてもまずい。

ゆうなが謝りに来てくれるという、こんなにも望んだ状況。

それが繰り広げられているというのに、壊されかねんとしているのだ。

中にいるのが普通のゆたかだったらしい。

その場で状況を察して対応してくれるだろうと思う。

けど

「あれ？ シャワーの音？」

これは、どうしたらいいのだろう。

「ねえ、」

何か考えるように眉根を詰めているゆうなと目が合い、ドキリと心臓が跳ねる。

ヤバイ……！

嫌な汗が流れ、額に髪の毛が張り付く。

こんな状況でシャワーの音を聞かれるなんて……。

そう固唾を飲んだ、ゆうなの次句。

「シャワー出しっぱなしみたいだけど、平気なの？」

「え……？」

ゆうなは小さく笑う。

「ほら、シャワー出してお風呂場温めてたんでしょ？ 最近、夕方過ぎると寒くなってきたもんねえ」

「あ、ああ、そうだね」

曖昧に返事をするも、一抹の疑問。

シャワーが出しっぱなし？

ゆうなに言われたことを頭に反芻させて、あつ、と気が付いた。

ゆうなは勘違いをしている。

今、風呂場は無人だと。

シャワーの音は、俺が浴びる前にあらかじめ出しているものだ。

そう思っているらしいことが今の言葉から伺い知れた。

そうか、ゆうなからすれば俺の部屋にいるのはただ一人。

俺だけなのだ。

そこでシャワーの音が聞こえたからといって、必ずしも誰かが浴びているという思考には繋がらない。

その結果がこれだ。

この勘違い。

もしうまく使えれば、もしくは

「シャワー止めないの？ お湯、もったいないよ？」

「あ、うん。止めてくるよ」

そ、そうか、まずはシャワーを止めなくちゃな。

ゆうなが来ているのに風呂場を温めておく必要もない。

となれば、止めに行くのが自然だろう。

何よりも不審に思われないために。

俺はゆうなに向かって頷き、立ち上がって脱衣場に入ってしまった。

居間と脱衣場の敷居を跨ぎ、体をおさめる。

脱衣場の扉を閉めるのは後ろ手。

ガチャリと扉の閉まる音を背後に聞き、一息をつく。

風呂場に隣接しているための高く温かい湿気が、今の渴いた喉には望ましい。

「……ふう」

もう一息をついて、頭を小さく振るった。

そうして考える。

これからどうしようか、と。

隣接したそれぞれの部屋にいるのは、二人。

一人は何も知らずにシャワーを浴びているゆたか。

そして、俺がシャワーを止めに行っただろうと思っているゆうな。

それらに、精神的にも実質的にも挟まれた状況に今の俺はある。

これを何とか解決、ないしは打開しなくては……。

ゆたかとセックスする。

第一目標のようにしていたそれ自体、ほとんど浮気のようなもの

かもしれない。

けど、それは元の世界に戻るため。

少しでもこの世界における異質な存在であるゆうなを知るための行動だったんだ。

何も、それを大義名分に掲げようというわけじゃない。

だけど、何よりも俺の心境はそうであって。

ゆうなに嫌われてしまつては元も子もない。

元の計画であれば、ゆたかにレズビアンについて学んだあと、俺からゆうなに会いにいく予定だったのだ。

仲直りをして、ゆうなが元の世界に戻るキーパーソンである事情を伝えて。

そうして一緒に試行錯誤していけたら、なんて考えてた。

なのに、現状を知られたら……。

何とかするしかない。

いや、何とかしよう。

そう心に決めるが早いか、それはいきなりのことだった。

「あれ？ あきら、どうしたんだい？」

声に驚きそちらを見ると、ゆたかの姿。

体の前に開いたタオルを垂らして要所を隠しているゆたかが風呂から上がってきていた。

「まさか一緒にお風呂入る　むぐっ!？」

慌ててゆたかの口を押さえにかかる。

あまりの身長差にどうなるかと思ったが、目一杯腕の上に伸ばせば何とか足りた。

半ば背伸びをしながら右手でゆたかの口を押さえ、左手は人差し指を自分の口の前に立てて、しー、と声を殺す。

隣にはゆうながいるのだ。

シャワーの音でさえ聞こえるような壁の薄さで、人の会話が聞こえないはずがない。

だからもごもごしているゆたかに向けて必死に黙ってくれよう、自分の唇に立てた人差し指を当てる。

静かに、静かにして、と口パクで伝えながら。

そして、それは通じた。

事情が分からずに首を傾げている節があるにしろ、一応ゆたかが頷いてくれたのだ。

コクコクと小さく頷くゆたかを認め、そつとゆたかの口を押さえていた右手を離す。

すると「ぷはっ」と小さく息を吐いた。

「もう、苦しいじゃないか」

いきなりしゃべられて驚いたが、最大限に声量を抑えられたしゃべり方で安堵する。

喉から声を出さず、通る息だけで発音するそれだ。

俺もそれにならう。

「今、ゆうなが来てるんだ。隣の部屋にいる」

告げると、ゆたかは口に手を当てて驚いた。

「本当かい？ でも、どうしていきなり訪問なんて」

「喧嘩のことを謝りにきてくれたんだよ。ごめん、ってさっき謝ってくれた」

「おお。ということはちゃんと仲直り出来たんだね？」

「ま、まあ」

仲直りしたかと言うと……ゆたかがいることに焦ってたからなあ。

ちゃんと、言うには些か語弊がある。

けど、

「それは良かった。あきら、おめでとう」

笑顔でゆたかは祝ってくれた。

仲直り、か……。

考え、ぐつと噛み締める。

したい。

うん、絶対にしたい。

今はしたのかどうかよく分からない状況だけど。

でも、今を脱したら言おう。

謝ってくれてありがとう。

そして俺もごめん、って。

これからはちゃんとゆうなを傷つけることのないように気遣うと誓う。

そして元の世界に戻ろう。

俺には俺の彼女のゆうなを。

この世界のゆうなには、恋人のあかりを戻すために。

そうするのが一番の望みだから。

そして、嬉しい誤算がある。

ゆたかが思っていたよりもずっと落ち着いてくれていることだ。

もしかしたら好き勝手に暴走されて……なんてことを考えていたが、外れて良かった。

今の落ち着いたゆたかの様子なら、確実な味方になってくれる。

それも大変に心強い味方に。

「ゆたか、協力してくれ」

これはゆうなへの裏切りじゃない。

言うなれば未遂。

まだ行為はしていなかったんだ。

そうする気持ちはあったにせよ、何も起こっていないのもまた事実。

だから、ほんの少し。

ほんの少しだけ事実をねじ曲げて

「ねえ、何してるの？」

瞬間、時間が止まった気がした。

いや、もちろんそんなことはない。

むしろ時間が止まっていたなら、こんなことは起きなかったのだから。

「シャワー、止めに行ったただけなんだよね？」

不機嫌に低くなった声。

ゆうなの、その声。

ぎこちない動きで首をそちらに向けると、いるのはゆうな。

開け放たれた脱衣場の扉の前、胸の前で腕を組み、睨むように細くなった目をこちらに向けているゆうなの姿だった。

02（前書き）

章整理のために分割しただけなので、以前にお読みになられた方の再読の必要はありません。

「ゆ、ゆう」

「なに」

「うっ……」

端的に発せられた、たったの二音。

それだけのはずのゆうなの言葉は、酷く胸に詰まった。

目の前にゆうながいる。

表情は……見るまでもない。

怒ってる。

酷く、酷く、ひたすら酷く。

低い声音が何よりの証拠だ。

……恐ろしくて、目も合わせられない。

視線を下に逸らし、自分をかえりみる。

俺の置かれた状況

シャワーを止めに行くと言って脱衣場に入ったのに、そこにいるのは俺以外の人物。

全裸で、いかにもシャワーを浴びたと言わんばかりのゆたかがいた。

それを見たゆうなは、どう思う？

それを見られ、俺はどうしたらいい？

気が急ぐ。

早鐘のように鼓動が打ちつける。

浅い思考ばかりが回る。

動揺ばかりが頭を巡って

「あきら、お風呂ありがとう」

不意にゆたかの声。

見れば、いつの間にか体にバスタオルを巻き、俺に微笑みかけるゆたかの姿があった。

「え、えっと……？」

「いやあ悪いね、わざわざお風呂借りに来ちゃって。お風呂が壊れちゃったのに、近く銭湯がなくて困ってたんだよ。本当にありがとう」

な、何を……？

そう思ってゆたかと視線を合わせて、あっ、と気が付いた。

「う、ううん。困ったときはお互い様だからね」

（あきら、私に合わせて）

そう、目配らせでゆたかが言っていたから。

「お風呂が壊れて？」

そこに食いついてきたのは、他でもないゆうな。

少し怒りの引いた声に目を向けると、ゆうなが訝しげにゆたかを
見ているところだった。

対し、ゆたかは気まずそうに笑う。

「あ、失礼。裸ですまないね。お風呂から出たばかりで、着替える
時間がなかったんだ」

「それは見れば分かるけど」

ゆうなは一度言葉を切り、

「あなた、お風呂が壊れたからこの家に借りにきたって言ってたけ

ど、本当なの？」

ゆたかのアドリブと、疑うようなゆうなの問い。

それらを聞いて、ようやく理解を始める。

これは、ゆたかが俺の部屋に風呂を借りに来た設定だ。

事情は、何らかの理由でゆたかの家の風呂が壊れたため。

そこで友人たる俺が、ゆたかに風呂を提供するという流れだろう。

本当は借りに来れるほどゆたかの家は近くないはずだが、ゆうな
はそれを知らないはず。

それを見越しての設定だと把握した。

だから俺は、

「本当さ。ねえ、あきら」

「う、うん。そうだよ」

必要最低限にしか返事をしないようにする。

理由は単純明快。

墓穴を掘らないため。

あくまでこれはゆたかが考えたことだ。

打ち合わせの一切をしていない以上、俺が詳細を知る由もない。

だから俺は極力黙る。

黙って、聞かれたら既出の情報のみを利用して合わせる。

さもないければ、ゆたかとの食い違いや矛盾が生まれかねないからだ。

そこにゆうなの視線が降り注ぐ。

「本当？」

「あ、ああ、もちろん」

腕を組み、未だ表情を険しく固めているゆうなに頷いた。

「へえ、そうなの」

じつくりと、つま先から頭の先まで舐めまわすようにゆうなに見られる。

ゆたかから見られ、次に俺。

気のせいかな、ゆたかのそれより幾分と粘っこく見られた気がする。

と、そこで気が付いた。

今の俺は、両拳を目一杯握りしめてる。

もはや握った拳に手汗がびっしょりなるほどだ。

もし握手を求められようなものなら、それだけで嘘をついている見抜かれてしまう可能性を感じるほど。

拭こう。

そんなことないと思うが、念には念を、だ。

そう思っ てワンピースの裾に手を拭こうとした、その時。

「そっ いえばあかり、嘘をつく時に手を拭う癖があったよね」

「　　っ!？」

全身の筋肉が固まるかと思うほどの緊張。

「嘘をつく と手汗が酷くなるみたいだね。前から気付いてたよ、私」

毛穴という毛穴が引き絞られるような、総毛立つ感覚に襲われる。

(しまった……!)

俺にそんな癖なんてない。

けど、これはあかりの体。

反射的な行動だ。

それが引き起こしたことを読まれるなんて

「なんてね。嘘だよ」

先ほどより幾分もトーンの上がったゆうなの声。

「……へ？ な、なんて？」

それについていけず、ただ間抜けな声が抜けてしまう。

それにゆうなは少しだけ笑って。

「そんなの嘘。あかりにそんな癖なんてないよ」

よ……

（良かったあ……！）

表情に出ないよう細心の注意をはらいながらも、心の底から安堵する。

良かった……見抜かれたのかと思った……。

本当に、本当に良かった。

バレないように、いやバレたらいけないからこんな嘘をついてい

るんだ。

それを、ほとんど不可抗力のようなものだったさっきで見抜かれたら元も子もない。

協力してくれてるゆたかにも申し訳立たないし。

何より、ゆうなにどう詫びていいものか。

ただでさえ一つ、必要なこととはいえ、ゆたかとセックスしようとしていたことを隠しているのだ。

それを嘘の上塗り。

嘘を隠すための嘘についていることがバレてしまったら弁明のしようもない。

最悪のケースだ。

それだけは避けたのだと、安堵の息を、

「なんて、それも嘘だけど」

冷たく言い放たれたゆうなの言葉がせき止めた。

「……な、なに？」

それも、嘘？

そう言うゆうなの言葉が何を示すのか分からなくて。

ただ戸惑い聞いたら、

「嘘をつくなんて最低よ」

隠しきれない怒りを抱いたゆうなの言葉が、俺に叩きつけられた。

キツ、と強くゆうなに睨まれる。

何が起きているのか分からない混乱した感情。

それをも上回る恐れ of 感情。

何か心臓に爪を立てられたような、キリキリと痛む緊迫感に襲われる。

「ど、どうということだい？」

聞いたのはゆたか。

ゆうなは視線の先をそちらに向けなおすも、睨む強さは変わらない。

そこで口を開いた。

「あなた、オカルト研究部部長の菅原ゆたかさんよね？」

「あ、ああ、そうだとも」

ゆたかを知ってる……？

ゆうなとゆたかは面識があるのか？

……いや、口頭で俺からお互いの名前を出したことはあっても、直接の面識はないはず。

少なくとも俺の受けている授業では、ゆうなとゆたかがブッキングしているものは一つもない。

なら俺のいない授業で顔を知ったケース というのも考えたが、それはない。

今のゆたかを見れば分かる。

「どうして私の名前を？」

まるで分からないといった表情に、今の発言。

つまりゆうなは一方的にゆたかを知っているというわけで。

と、不意にゆうなが小さく笑う。

「どうしても何も、なかなか有名なもの、あなたの名前は」

「有名？」

「ええ。たった数人の小さなサークルに「部」なんて名称をつけて顧問を付けていることや、霊視が出来る発言。それにレズビ안의

カミングアウト。私の周りじゃ知らない子の方が少ないわよ」

「そ、そうなのか……」

本人、かなり意外であるように口元に手を当てていた。

ゆたかが有名……？

その節を探るも、いまいちピンとこない。

俺が知るのはたくやの場合だが、同位置にある人物だからさほど大差ないはず。

でも、そこまで有名とは思えなかった。

確かにたくやは異質だ。

幽霊を見れるなんてなかなかないし、なおかつ信憑性があまりにも高い。

しかもそれを隠す風もなく普通に話すから、たくやと話したことのあるやつならそれを知っているはずだ。

それに、オカルト研究部という弱小のサークルに顧問がいるというのも変な話である。

その手の小さなサークルは内輪だけで運営されるのが普通で、顧問がついているのはまあまあな異例だろう。

だが、その顧問である菊地原先生自身は、オカルトそのものに興味があるのだ。

話した限りでは、パラレルワールドなどについて俺では理解しきれないだけの知識を持っていた。

だから顧問として、というより一参加者として加わっているようなものだろうと思う。

が、それは本人に会わなければ分からないこと。

他から見れば、何かのひいき目で顧問がついているように見えな
いこともない。

これは俺の世界だろうが、こちらの世界だろうが同じことだろう。

まあ最後のカミングアウトの件は、たくやはゆたかと違って異性
愛者だったから違うだろうけど。

……いや、もしかしたら隠している可能性もあるか。

ともかく、それを踏まえても“誰もを知る”というほどではない
と思う。

どちらかと言うなら、“知る人ぞ知る”。

そんな印象を持っていたのだが……。

「それに、私の場合は私情も挟んでたからね」

ゆうなは言う。

「菅原さん。あなた、あかりを狙ってたでしょ？」

「な、何を……？」

「狙っていたのか、いなかったのか。それだけ答えて」

「ま、まあ、狙ってはいたよ」

「そう。ごめんなさいね、本人の前でこんな話をするのもあれなんだけど」

曖昧に頷くゆたかに、ゆうなは薄く目を細めた。

「きっかけは、あかりにあなたの話を聞いたこと。「幽霊の見えるすごい友達がいる」って、そんな感じだったわ。ね？」

「え、えっと……」

最後の「ね？」で俺に振られて焦るも、記憶をさかのぼる。

ええと……そういえば、

「う、うん。確かに話したことある」

そこに世界の違い、ゆたかとたくやの違いはあれど、話したこと

はある。

たくやのすごさは、それだけで話のネタになるのだ。

話し始めはみんな信じないものの、実際に抜き打ちテストを当てたこと。

またその後日の体験談を話すと、ナチュラルに驚いてくれる人ばかりだ。

いわゆる鉄板というやつだろう。

だから俺はたくやの話をそこその頻度でするし、逆にそんなリアクションがあった、とたくやに話すこともある。

そして記憶上、ゆうなにもそれがあった。

「初めは胡散臭いなって思ったわ。私、あんまりそういうの信じないタイプだから」

確かにゆうなの反応はあまり良くなかった。

俺の世界でそうだったのだから、こちらの世界でもそうなのだろう。

「でも興味は湧いた。恋人のあかりがすごく楽しそうに話すんだもん。それがどんな人なのか、気になったの」

「それで私を調べたのかい？」

「ええ、調べたわ。とは言っても変な方法なんて使ってない。ただあかりとあなたが一緒の授業に忍び込んだの。自分の授業をサボってね」

前にどの授業で一緒なのかあかりに聞いたからね、と付け加えるように言った。

「大学の授業ってそういうの楽よね。代返も簡単に出来ちゃうんだもん。百人近く学生が参加してる授業に一人くらい増えたって、全然バレなかったわ」

ゆうなが俺の受けていた授業に忍び込んだ。

それを頭の中に探るも、該当するものは一つもない。

つまりゆうなは俺に見つからずにゆたかを観察していたのか、それとも俺の世界ではそれがなかったのか。

どちらとも分らないが……とにかくこの世界のゆうなは、そうしてゆたかを見たと言う。

「そこで気付いたの。菅原さん、あなたがあかりと話す時のあなたの不自然な態度に」

「不自然な態度？ 私はあかりとは自然に接していたつもりだけど……」

思い当たる節がないように顔をしかめるゆたかに、ゆうなは小さ

く首を振る。

「そういうのは本人は気付かないみたいだけど、他人から見たら結構分かるものよ。特に、あなたと同種の人間ならね」

「同種というと……」

「レズビアン。忍び込んだ当時にも耳に挟んだことがあったわ。菅原ゆたかはレズビアンだ」って。ずいぶんと大っぴらにカミングアウトしていたみたいね、あなた。私はなるべくひた隠しにしていたけど」

「まあ隠すつもりはなかったから。偏見を抱いてそんな相手以外には、聞かれたらカミングアウトしていたんだ」

つまり、ある程度公表していたゆたかがレズビアンである事実をゆうなも聞いていた？

聞くと、ゆうなは頷く。

「ええ。だからこそ分かったわ。あなたのあかりを見る目。話し方。接し方。あなたたちの三つ後ろの席で見てたから分かるの。あなたがあかりをそういう目で見てるんだって」

「そ、そんなに分かりやすかったのかい？」

焦りを帯びた様子ゆたか。

対し、ゆうなは小さく笑う。

「ええ、私から見ればね。同種なんですもの。でもあかりには気付かれなかったみたいよ、この様子からすればね」

と、ゆうなは俺を見る。

この様子、というのは俺の様子のことのようだ。

俺はあきらだから、気付くも何も今知らされるようなもので……。

「でも、決して不安には思わなかったわ。あかりは今まであんなにも私を好きだって言うてくれたから」

ゆっくりと息を吸い、ゆうなは語り出す。

「嘘が苦手な私と同じように、あかりも嘘を隠すのが下手だから」

特別何かの感情を押し出すでもなく、かといって無表情に淡々と告げるでもない。

「私と楽しそうに過ごしてくれるあかりを見て、不安になんて思う要素はなかったわ」

誰に向けた言葉でも、独白でもない。

ただ溢れるように、ゆうなは言葉を吐き出していく。

「でも、今日は違うのね」

一息溜め、言う。

「今の状況を見て、よく分かったわ。
って」

“そういうこと”なんだ

つまり、ゆうなの言うそれは

「浮気してるんでしょ？」

ハッキリと見抜かれた俺の嘘だった。

「う、浮気なんて……」

「してないって言うの？ この状況で？」

怒りと憎しみ。

感情をそのまま乗せたようにゆうなは言って、視線を巡らせた。

見る先はゆたか。

バスタオル一枚を体に巻くだけの、長身のその人を。

「あかりに好意を寄せている人が、そのあかりの家で裸になっているなんてどう考えても」

「ちょっと待つてくれないか」

ゆたかが制止に入る。

「確かに私はあかりが好きだ。友人としてもそうであり、恋愛の対象としても好いている」

「あら、目の前で告白？」

「そうじゃない」

腕を組むゆうなに対し、ゆたかは首を振る。

「私があかりをそういう目で見ていたのは認める。けど、それと今とは関係ない。私はただお風呂を借りにきただけ。そう言いたいんだ」

すっ、とゆたかは俺とゆうなの間に割り入る。

さも俺を匿うような態度で。

それに、ゆうなは怪訝そうに眉をひそめた。

「お風呂を借りにきただけ、ねえ」

「ああそうさ。事情は先に話した通りだ。だから浮気なんて濡れ衣は」

「嘘ね」

言葉を紡ぐゆたかに被るように、それでいてハッキリとゆうなは告げた。

「そんなのは嘘。大方、咄嗟に考えた言い訳なんでしょ?」

ごくり、と喉を鳴らす音が前方から聞こえてきた。

その主は探るまでもない。

ゆたかは躊躇いがちに口を開き、一度閉じる。

一呼吸分の間を空けて、再度開いた。

「どうして、君は嘘なんて言っただい？」

ゆたかの緊張感が手に取るように分かる。

体が触れ合うほど近くにいるためか、同じく追い詰められた状況にあるためかどうかは分からない。

が、この肌をチリチリと焦らすような感覚は……。

「私はお風呂を借りにきた、と言っている。それを頭ごなしに嘘と決めつけ、汚名を着せるのかい？ 証拠もないと言っのに」

「あなたたちの動揺が、何よりも動かぬ証拠」

端的に告げるゆうなの言葉に、鼓動が跳ね上がる。

「そ、そんな憶測」

「なんてね。それだけならあなたの言うとおりただの憶測よ。……でもそれだけじゃないから言えるのよ」

「……何？」

一歩、ゆうなはゆたかに歩み寄る。

それほど広くない、この脱衣場にただならぬ圧力を加えて。

「菅原さん。あなた、着替えはどこにあるの？」

はつとした様子で、ゆたかが背後にある自分の脱いだ服を見る。

「まさかそこにある脱いだ服が着替えなんて言わないでね。お風呂を借りにきた人が、着替えを準備してこないはずないもの」

また一歩、ゆうなは歩み寄ってくる。

「違う？」

膝から崩れ落ちそうな感覚に襲われた。

「そ、それは……」

ゆうなに迫られたゆたかは、動揺に身を退かせる。

一歩下がり、俺の体とぶつかった。

が、気に留める余裕もない。

「も、元は借りるつもりなんてなかったんだ。でも大学で事情を説明したら貸してくれることになった。だから着替えなんて準備してなくて……」

「よく口が回るのね。まるで嘘の上塗りに必死みたいよ？」

それはゆたかを侮蔑するような言い方だった。

「そ、そんなことは……」

「まあ、あなたの言うことが本当だったとしましょう。そこまで言われると、私も確かめようがないわ。そのときの証拠を見せろって言うわけにもいかないし。でも」

そこでゆうなは視線の先を変更。

俺へ、睨む先を変えてくる。

「あかり。あなたの嘘があるのよ」

あかり。

ゆうなは俺をそう呼び、横に一歩ずれる。

そうして俺との間を挟むゆたかから避けると、こちらに踏み出してきた。

手を伸ばせば触れられる距離にゆうなが迫る。

「シャワーを止めに行く。さっき、そう言ったよね？」

ドキリ、と心臓が跳ねる。

「なのに、どうして？」

「そ、それは……」

「あなたは人が浴びてる最中にシャワーを止めに行こうとしたの？
それとも」

俺が口を挟む隙もない。

続けざまにゆうなは言う。

「その場しのぎの嘘を、私についたの？」

ただ見下ろしてくる冷たい視線。

俺は、それを一心に浴びるしかなかった。

「おかしな話よね。人が浴びてる途中のシャワーを、本人の意思なく止めに行くなんて。常識を考えればありえないわ」

言って、ゆうなは鼻で小さく笑う。

「それこそ慌てて判断力が欠けていたならまだしも……もしそんな理由を聞くわ。どうしてそんなおかしなことをしようとしたのか、ちゃんとした理由をね」

チラリ、とゆうなは視線を、俺から見て右に流す。

その先にはゆたか。

だがゆたかは身動き一つ取れない。

ゆうなが取ることを許さない。

それを見届け、またこちらを向く。

「それとも私に嘘をついたの？ 先に温めておくために流していたシャワーを止めに行く、なんて安易な嘘を」

また一歩、ゆうなは近づいてくる。

もうほとんど距離もない。

抱き合う手前。

キスをする直前。

そんな至近距離にゆうながいる。

けど、

「さあ、あなたはどんな言い訳をするの？」

ゆうなは腰を屈める。

身長の低い俺に目の高さを合わせて、そつと撫でるような手つきで俺の右頬に触れる。

ゆうなの顔が、鼻先が触れんばかりに近くて……、

「嘘をつくなら好きにして。そしたら、私は二度とあなたを信じら

れなくなる」

その言葉に、悲壮の色を感じた。

……圧倒的だった。

何も言わせない。

何も言葉を挟ませない。

ゆうなの迫る態度には、いちるの隙すら見当たらない。

分かっているのだ。

彼女には、現状における全てのことが。

ゆたかが咄嗟に考えてくれたアドリブも。

俺がついてしまった嘘についても。

俺たちが、何をしようとしていたのかも。

だからゆうなは、こんなにも強く言える。

疑ってかかるでも、怒りに狂うでもなく。

真実を追及してくるんだ。

「あかり」

あかりの名を呼び、真っ直ぐゆうなに見つめられる。

息のかかるほど近い。

近いからこそ見透かされる。

心を丸裸にされてしまったような頼りなさで羞恥を感じる。

(……ダメだ)

今さら何を言っても意味を成さない。

どんな嘘をついても、悪い方向にしか働かない。

(もう……終わった……)

頭の奥から、ゆっくり思考が止まっていく。

凍結していくような、石化していくような。

沼に足をとられたとばかり、身動きできずに沈んでいく。

「こんなときでも、あなたは泣き虫なのね」

頬に一筋、冷たい雫が流れ出る。

それは一つにとどまらない。

次々と、決壊したように溢れ出してきた。

嗚呼……泣いている。

俺は今、泣いている。

声をあげなくても。

泣き崩れなくても。

ただ涙を流して泣いている。

……この体は泣き虫だった。

今日の深夜、ゆうなに怒られたらいつの間にか泣いていて。

昼間、ゆうなと気まずくなったら泣きそうに目頭が熱くなって。

元の俺からは信じられないくらい涙もろくなっていた。

けど……打ちひしがれたときには泣かなかった。

大学の最寄り駅でゆうなと喧嘩して置いて行かれたとき。

ゆたかに「元の世界に戻れない」と言われたとき。

打ちひしがる悲しみよりも絶望が強くて。

泣くことなんてまるで考えられないくらい気落ちして……。

なのに、今の俺は泣いてしまっている。

ゆうなに俺のついた嘘がバレてしまって。

その嘘がどんな結果をもたらすのか、想像ついでしまっているの
に……。

打ちひしがれていないのか？

それほど堪えていないのか？

……違う。

比べものにならないんだ。

理由も何もないに。

これから降りかかるであろう結果に。

堪えきれなくて泣いているんだ……。

「本当……私、こんなの望んでなかったのに」

ボロボロと流れ落ちる涙を含め、ゆうなは俺の頬を撫で上げる。

悲壮を色濃くしたゆうなの目を見つめる。

言葉を紡ぎ出したいのに、唇はわなわなと震えている。

聞きたくない。

ゆうなが続けるであろう言葉を、聞きたくない。

聞いたら、終わってしまう。

終わってしまうから、聞きたくない……。

耳を塞ごうと上げた両腕を、ゆうなは優しく掴む。

「聞いて」

先ほどのそれとは一転して柔らかい口調。

それでいて、確固たるものが伝わってくる。

掴まれた両手首が、キュ、と強く握られる。

「私は今でもあかりのことが好き。何にも代えられないくらい愛してる」

ゆうなは目の前にいるのに、視界が滲む。

溢れる涙が、視界をぐちゃぐちゃに破綻させていく。

「でも……裏切ったあなたを許せない。裏切りを欺こうとしたあなたに、すごく憎い」

見つめ合っているのに、それが分からなくなる。

体の芯から冷たくなって、小さく震えてしまう。

「だから」

聞きたくない。

「私たち、別れましょう」

聞きたくなんて、なかったのに……。

じんわりとゆうなの言葉が染み入ってくる。

水面に雫を垂らしたように。

小さいながらも、徐々に。

そして確実に響いてくる。

『別れましょう』

それは交際の破綻。

恋人としての付き合いを解消する、別れの一言。

……聞きたくない、って耳を塞ごうとしたのに。

両手を掴まれて阻止されて。

……分かりたくないって思うのに。

告げられた言葉の意味を、頭が理解してしまう。

涙がとめどなく溢れ出る。

先に流れていた拒絶のそれを洗い流す勢いで、流れ落ちる。

『別れましょう』

ゆうなは言った。

真っ直ぐ俺の目を見て。

涙で視界が歪んでいたはずなのに、分かっってしまう真剣な表情。

嘘じゃない。

嘘なんてつくはずなのに。

嘘じゃない。

嘘だと思ったかった自分が否定される。

そんなの……。

「……嫌、だ……」

声が震える。

体が震えて、心も震えて。

「別れ、たくない……」

目の前にいるゆうなが見れないのが怖くて。

でも涙を拭ける腕はゆうなに掴まれていて。

「別れたくない、よ……」

分かっているのに。

こうしてゆうなは目の前にいるのが分かっているのに。

離れたくない。

心が、そう満たされていく。

頭と心は、やはり別物なんだと思った。

頭で理解しうる状況でも、心は言うことを聞いてくれない。

むしろ心ばかりで動いてしまう。

きっと、心の方が強いのだろう。

俺を突き動かす力が、頭の何倍も。

だから、

「……勝手なこと言うのね」

酷く沈んだゆうなの声を聞いても、

「嫌だ……ゆうなと、別れたくない……！」

嗚咽で言葉になっているか分からないけど、そう言っ

て。掴まれたままの両手を下に振り抜き、払いのけた。

右腕で目を、涙を擦り拭く。

ぼんやりとぼやけながら、ゆうなの顔が見える。

それは、冷たいほど表情を消していた。

「人を裏切ったのに、別れたくない？ 浮気したあなたが言えることなの？」

「浮気なんか」

浮気なんかじゃなかった。

そんなつもりはなかった。

罪悪感があったけど……それでも必要なことだったから。

だから浮気するつもりなんてなかった。

そう紡ぐはずの喉は、

「けほッ」

途端にむせかえる。

興奮して急いた体に歯止めをかけるように、むせかえってしまっ

た。

また涙が滲んできた。

憎たらしいほど、ぶよぶよに視界を歪ませていく。

「待ってくれ！」

その時、聞こえてきたゆたかの声。

見上げれば、

「事情を、私たちに説明させてもらえないか」

涙で見えにくい視界の中、ゆたかはゆうなに迫っていた。

「……事情？」

「ああ、事情だ。私とあきらの、本当の事情を説明させてほしい」

怪訝そうに声色を低くするゆうなに対し、ゆたかは答える。

真剣な声だった。

揺るぎがなく、どこか追い込まれたようにも聞こえる。

涙を拭いて見れば、二人は向き合い、ゆたかがゆうなの肩に両手を置いていた。

身長差からゆうなはゆたかをやや見上げ、眉をひそめる。

「へえ、あなたもこの期に及んで言い訳しようって言うの？ あかりにしても往生際が悪いし……」

「そこだよ」

ゆかたが両肩を掴む手に力を入れたようで、小さくゆうなが震える。

「君は先ほどから“あきら”を“あかり”と呼んでいる。私はそこから勘違いがあると思うんだ」

「は……？」

ゆうなの表情が、険しいものへ。

「意味が分からないんだけど……。あかりはあかりでしょ？ それに、結局あなたは言い訳をしたいだけ。違う？」

「確かに私がこれから言おうとしていることは、君にとって言い訳に過ぎないかもしれない」

けど、

「けど事実なんだ。何故私とあきらがこうなっているか。その真相を知ってほしいと、私は思う」

「真相なんて……ずいぶん大きく出るのね。たかが浮気の言い訳な

のに」

「ああ、大きなことさ」

言い、ゆたかは笑いかける。

「少なくとも、二つの世界をまたに掛けるくらいには大きなことだよ」

「……はあ？」

強く言うゆたかに、ゆうなは変わらず険しい表情を浮かべていた。

「……」

考えるように、ゆうなは右手をあごにやる。

その間にゆたかはこちらに顔を向けてきた。

柔らかくも真剣な表情だ。

「時期尚早とは思っけど、全てを話して構わないよね？ こうなっ
てしまった以上、他に手はないと思うんだ」

ゆたかの言葉に、ようやく今を理解し始める。

ゆたかがこれから話そうとしていること。

それはオカルト研究部の部室で菊地原先生から得た話のことだ。

この世界と、俺の世界の相違点。

全ての人物が性別を変え、相応に名前も違う中で唯一それが適応されない人物。

それがゆうなであることを、今、伝えようと言っただ。

確かに、話すべきだろうと思う。

さっきまでは下手に嘘で塗り固めようとしていたのが問題だったのだ。

ゆたかとセックスしようとしていた。

その一点を隠すためだけに必死になっていた。

けど、言い訳がましくもそれは必要なことだった。

それをきちんと説明できれば、もしくは……。

そうして賛同して頷くが早いか、ゆうなに動きが見られる。

えっと、と小さく言いよんどからゆたかを見上げた。

「なんとなくあなたが言おうとしていることが分かったわ」

「おや、私はまだ何も話していないのに分かったのかい？」

「ええ」

ゆうなは頷き、小さく嘆息を漏らす。

「そうやって訳の分からないオカルトの話をして、私を煙に撒こうって魂胆でしょ？」

「え……？」

声をあげたのは俺。

だが、ゆうなは続ける。

「菅原さん。あなたは得意そうよね、そういうの。オカルト研究部の部長さんなんだもの」

ゆうなのそれは棘のある言い方だった。

嫌みを言うような、攻撃性を孕んだ言葉。

無然とするゆうなに、今度はゆたかが顔を険しくする。

「煙に撒こうなんて気はない。そんなことをしたところで、君に良い印象を与えられないからね」

「あら、世界がどうのこうの話すんでしょ？ 聞いた感じだと、パラルワールドだっけ？ だったら煙に撒くのも同じよ。私、そういう話は苦手だから」

ゆうなは肩をすくめる。

「あかりはあなたと交流があるようだから理解あるみたいだけど、中にはそうじゃない人間もいるの。少なくとも、私はそちらに対しての理解はないわ」

理解がない。

その言葉に違和感を覚える。

些細なものではない。

「ちょ、ちよつと待って」

互いに睨み合うような二人に割って入る程度には強い違和感だ。

何と言っただろう。

何か忘れ物をしてしまっているような、抜けた頼りない感覚に襲われる。

「ゆうなは、その……オカルトに理解がないのか？」

「ないけど」

キツく睨まれる怯えよりも、浮かんだ疑問の方が強い。

「だったら、今日の夜中に言ったことは？ 信じてくれたんだよね？」

今日の日付変更から少し過ぎ。

俺がこの世界に来てしまったとき、俺の立てた仮説「パラレルワールド」をゆうなに話したこと。

そのときのゆうなはどうだったか。

どんな反応をしていたか。

それを思い出すのが早いかな、ゆうなは小さく笑う。

「ええ、理解はしたわ」

そう、ゆうなは理解の色を示していた。

理屈は分からないにせよ、と置いて。

だが、

「そういう設定の遊び。そのときは、そう理解していたわ」

ゆうなの笑いは、俺をあざ笑うように見えた。

「遊び……？」

「ええ、遊び。私はそう思ってたわ」

オウム返しに聞いた俺に、ゆうなは頷く。

「だってそうじゃない？ いきなりあんなことを言われて、そのまま信じるなんて。普通だったらありえないわ」

ゆうなは俺から話を聞いたとき、まるで信じられなかったと言う。

あかりじゃなくて、あきら？

パラレルワールド？

ゆたかの守護霊の話に食い付きが良くなかったことから分かるように、ゆうなはその系統に対する免疫がない。

それは頭ごなしに「ありえない」と否定するほどだ。

だから今日の夜中、俺がゆうなにいくら話そうが、信じるには値しないことだったとゆうなは言う。

だが、そうは言っても俺も真剣な表情。

いつものように「ありえない」と切り捨てるには、あまりにも真面目な様子だった。

それにゆうな曰く、俺は嘘をつくのが苦手。

もし安易な嘘をつこうものなら、どもりがちになる話し方や態度で分かるらしい。

だからゆうなは悩んだ。

ありえないと思いつつも、俺に嘘をついている様子はない。

嘘をつかずに俺の言うことが正しいとしたら……。

そう考えて思い付いたのが、

「“ごっこ遊び”だったのよ」

胸の下で腕を組み、ゆうなは言う。

「パラレルワールドに来てしまったあきらという名前の男があまりに乗り移った。そういう設定でのごっこ遊び。私はそれしかないと思ったわ」

それなら“そういう設定”ということで嘘をついていることにはならないし、ありえないことの起きていない現実として認識できる。

だから、

「私はその設定を理解したの。理由は分からないけど、あかりがそういう遊びをしたがってるんだと思ってね」

ごっこ遊び。

それは、ある設定の基で役になりきる遊び。

いわば、おままごとのようなものだ。

俺は一般の男の子として育ってきたからその経験はあまりないが、全く知識がないわけでもない。

それと言うなら、一つの家庭のくくりの中、父親、母親、あとは人数によって子供など配役が決められ、その設定を守って遊ぶもの。そう認識している。

母親役なら母親になりきって家事を営み。

子供役なら奔放に遊ぶ子供を演じて。

総じて幼児期の遊びのため、そのクオリティは言うまでもないが……。

それを俺が提案したと思っていた……？

確かにゆうなはそう言っていた。

俺から、俺があかりではなくあきらであること。

もしかしたらパラレルワールドに来てしまったのかもしれない、と仮説立てたこと。

それらを聞いて、“そういう設定”の遊びとして認知したと言う。つまり

俺からしたら、ゆうなは俺の話を信じてくれたと思った。

その手の話に理解が薄いことを知りながらも、そうして信じてくれたゆうなをありがたかった。

けど……違う、とゆうなは言う。

あくまで、それは“そういう設定”として理解したまでのこと。

事実とは思ってはなく、俺が頭の中だけで考えただけの

「な、なんだよそれっ」

開いた口は、思わず声が大きくなる。

だが、それを認識しても止まらない。

「俺は、俺はゆうなが信じてくれたと思ったんだ！　なのにそんなふざけてるような」

「ふざけてなんかいいわ」

遮り、ゆうなは言う。

「あなたが真剣だったから、私も真剣に乗ったのよ。あなたのその設定に」

「真剣に乗ったなんて……」

意味が分からない。

そんなくだらないごっこ遊びに、二十歳を超えているゆうなが真剣に乗っかる？

いや、そもそもあかりだってゆうなと同じ年で二十歳を超えているのだから、そんなやつがごっこ遊びなんて幼稚なものを提案するはずがない。

なのにそれを頭ごなしに“そういう設定”としか聞き入れず、なおかつ真剣に乗るなんてことが

「だって、ありえないもの」

胸の前で緩く腕を組み、ゆうなはハッキリとした口調で告げる。

「オカルトなことは現実には起きるはずがないわ。そんなのはフィクションの中だけの話なの。実際にあったらいけないことなの。なのに、あなたは嘘一つつく様子のない表情でそう言うのよ？　だって答えは一つしかないじゃない」

右の人差し指を立て、

「あなたは、何かしらの理由があって“そういう設定”で遊びたかった。違う？」

「ち、違う！」

大きく首を横に振る。

長い髪の鬱陶しさも、今は薄い。

「俺はそんな遊びなんて提案してない！ 第一、なんでそんなことしなくちゃいけないんだよ！」

「それは私が聞きたいくらいよ。今日はあなたの誕生日だったから何も言わずに乗ったけど、今考えても理由が分からないわ」

くそ……。

こうなつては埒があかない。

俺は考えうる仮説としてパラレルワールドを挙げたのに対し、ゆうなはそれをごっこ遊びの設定として把握してしまっている。

要は言つた聞いたの水掛け論だ。

そうなつてしまつては、どちらかが引かない限り平行線から近づくことはない。

が、俺から近づくのはありえない。

曲解したのはゆうなの方だ。

俺はしっかりと自分に降りかかった事実を話し、考えてみた結果パラレルワールドに来てしまったのではないか、という考えに行き着いたことをゆうなに話した。

なのにゆうなはそれを「ありえない」の一言で一蹴し、さらには「じつこ遊びの設定」という訳の分からない結論に至ったと言う。

そんなの……絶対に信じたくない話だ。

ゆうなは俺を、あきらを実在の人物ではないフィクションの人間であると言いたいのだ。

あかりの想像の中だけで生まれ、過剰に信じ込まれ、架空に存在する　二重人格のようなもの。

俺はあくまであかりの想像上の人間であり、あかりが“そういう設定”で考え出した現実には存在し得ない人間だなんて……。

ただ、ゆうなの話には限界がある。

あかりは“そういう設定”で遊んでいた。

それだけだったなら、今の俺は存在していないだろう。

“そういう設定”というだけなら、あきらは今頃頭の中だけの人物のはずだ。

だから自分をあきらだと言い張る俺が存在するはずがない。

想像の産物は、所詮想像でしかないのだから。

だからゆうなのそういった話には無理がある。

無茶苦茶だ。

……が、それを裏付けられそんな考えがないわけでもない。

それは、あかりが思い込みの強い人間だった場合。

思い込みが強い。

つまり、思い込みが強すぎて実際に俺という人格を生み出してしまった可能性だ。

二重人格というのは、そういった思い込みから生まれると聞いたことがある。

多くの例として、二重人格や多重人格になるのは親から虐待を受けていたなどの辛い経験から。

その経験を受けていたのは自分ではない。

自分ではない、他のやつが受けていたんだ。

そう“思い込む”自己防衛、現実逃避によって、新たな人格が生まれるものらしい。

今回のことと言うなら、思い込んでしまったのは“そういう設定”。

あかりが“そういう設定”を実際にあると信じ込んでしまったため、脳内に俺　あきらという人格が誕生した。

そして“そういう設定”で今日九月十二日、俺の誕生日に入れ替わると信じ込んでいた。

だから俺は、何も知らないまま自分をあかりと入れ替わったあきらだと思い込んで……。

なくはない、かもしれない。

いや、下手に超常現象を信じるよりは幾分も信憑性が高いだろう。

たぶんゆうなはこういつた考えで、今の俺を見ているのだ。

今の俺は、あくまであかりから派生したもの。

元はただの思い込みから生まれた、実際にはありえない人物だと。

でも、そんなの……そんなのって、ない。

俺が空想上の人物？

実在しない人物？

ふざけてる。

絶対にふざけてる。

確かに今の俺には、俺自身を証明できるものが何一つない。

身分証を見れば「あかり」と刻まれ、写真には別人の女。

人に聞けば、俺は「あかり」以外の何者でもなく、そこに「あきら」はいない。

あるのは、自分を自分であると信じる自己の思考のみ。

だけど、だからって俺は存在しないことになっていいはずがない。

記憶があるんだ。

物心がついて、小学校中学校、高校で頑張って勉強して今の大学に入って。

そしてゆうなと出会って

こんなにも色濃く残ってる男の記憶が、作り出された偽物のはずがない。

「ごっこ遊びなんて、“そういう設定”なんて、それこそありえない。」

そんなことを言い張られて黙っていられるわけが

「あきら」

俺の名を呼び、肩を叩くのはゆたかだった。

心配そうに眉尻を下げた表情で、優しく諭すように言う。

「落ち着いて。このままじゃ、昼の二の舞になっちゃうよ」

昼の

ゆたかの言葉に、思い出された。

大学最寄りの駅のホーム。

俺とゆうなが口論の末に喧嘩別れしてしまった結末を。

「でも……！」

それを思い出したからといって、この溜飲を下げられるものじゃない。

「ありえない」の一言で俺の存在が否定されようとしているのだ。
他でもない自分の彼女に。

せめて、せめて彼女にだけは信じてもらいたいのが心情というものではないのか。

ゆうなに信じてもらいたい。

たったそれだけのことなのに……。

「ダメだよ」

落ち着かせるようにゆたかは言う。

「そんなに力んだあきらじゃ、本当に二の舞になってしまう。ほら、指を解いて」

「指……？」

ゆたかが俺の手を取り、その指を一つずつ広げていく。

見れば、そこには握り締められていた五指。

指先は白く、力んで血が通っていないのが分かる。

……そんなに力が入っていたのか……。

気付かなかった。

ほんの少しだけ力が入っている気はあったが、まさかこんなに力んでいたとは……。

もし今のタイミングでゆたかが止めてくれなければ、昼と同じくいや、それより酷いことになっていたかもしれない。

下手に力が入っている、というのはそういうことだ。

本人の意図しないところで冷静な判断力を失ってしまう。

そう、例えば今日の昼のように

『別れましょう』

ゆうなにそう言われたあとで喧嘩しようものなら、取り返しのつかないことになるのは明白なのだから。

そして気が付けば、俺の両手の指はゆたかのそれによって全てほだされていた。

腰を屈めているおかげで、ゆたかの顔が僅かに近い。

その距離で、ゆたかは俺を安心させるように小さく笑んだ。

「今は落ち着いて。ね？」

ほだされたのは、両の指だけではなかった。

そう言われた頃には言葉の溜飲を下がりきっており、心に波風はない。

ゆたかが俺を気遣ってくれた。

その事実だけで、だいぶん楽になれた気がする。

と、不意にゆたかは視線を俺からゆうなへ。

「あきらに言っておいてなんだけど、私からも口を挟ませてもらうよ」

表情固く、ゆたかは言う。

「遊びなんてそんな言い方、私も酷いと思う」

決して強い言い方ではないにせよ、真に迫る、責め立てる雰囲気
をまとっている。

まるで俺の気持ちを代弁してくれるように。

「あきらは、真面目に君に相談したんだ。それを遊びなんて軽く流
すのは……」

「あら、あなたは信じてるって言うの？」

ゆうなは驚いたような、それでいて少し嘲笑を含む声をあげる。

「何か証拠があるわけでもないのに、昨日まで何の素振りもなかつ
たのに、口先だけの言葉をそのまま信じるって言うの？」

「話を聞く限り証拠が得られる状況ではないし、昨日まで素振りが
あるわけもない。だから、信じられないことではないよ」

「そうね。本当に起きたのかもしれない。あかりの表情を見れば分
かるわ。冗談を言うようでもふざけているようでもない」

「だったら」

「でも、現実味はない。そんなものを信じるよりも、そういう設定
で遊びたがってる。そう、私は考えたわ」

ゆうなの言葉は揺るぎない。

何か確信を得ているような、ブレない言葉だった。

「さっきも言ったけど、私はあなたたちの言うようなオカルトなこととは信じてないの」

一歩、ゆうなは脱衣場の外に向かって後退りをする。

人の密度の高かった空間が少しだけ空き、ゆうながやや遠くなつた。

「宇宙人とか幽霊とか、神様とか宗教とか。普通じゃありえないようなことが簡単に起きるなんて、ありえない。ありえるわけがないのよ」

「……言い切るね」

少しの間をためて、ゆたかは言う。

「他は知らないが、少なくとも私には霊が見えるよ。おじいちゃんとおばあちゃん。二人がいつも私を見守ってくれている」

そこで視線を、ゆうなから脱衣場の天井。

いや、俺には見えない二人がいるであろう空間に向けられる。

「いないなんてことはない。見えるか見えないかは個人差あるけど、

確かにいるんだ。それを頭ごなしに」

「だったら、」

ゆうなが言葉を挟み、またゆたかがそちらに目を向ける。

「だったら、何でそこに差別があるのよ！」

叫びに近い、声量が幾分も大きくなっていた。

「あなたはその力を望んだの？ 望んでたならおめでとう、そうじゃないかったら何で？ 何であなたがそんな力を持ってるのよ？」

「いや、別に望んでいたわけではいなかったけど……」

矢継ぎ早に繰り出すゆうなに、ゆたかは気圧されているようだった。

「ならどうしてその力があなたにあるの？ あなたじゃなきゃいけない必要があった？ 私じゃダメな理由でもあったって言うの？」

「そんなことは……」

「だから私は信じないの。理由もなしに、望んだわけでもないのに身に付く力なんて、あるわけがない。あるはずないじゃない」

ゆうなは言う。

恨むように、ゆたかを責め立てるように言う。

「そんなの、理不尽じゃない」

言い終え、ゆうなは息をついた。

はあ、と体にたまっていたものを吐き出す。

そして、少しの沈黙。

「……君は、」

口を開いたのはゆたか。

「君は、何かを望んでいたのかい？」

その問いに探り入れる様子はない。

先の間に考え、出た結果を確認するような口調に聞こえた。

「……」

閉口するゆうなに、ゆたかは続ける。

「超常的現象、オカルトなことは信じない。君はそう言っていたね？」

「ええ、信じないわ。そんな非現実的なこと」

「だったら、どうしてそれを望んでいたような言い方をするんだい

「？」

「……………」

またゆうなは口をつぐむ。

ゆたかの話は続いた。

「まるで信じないなら、その力があることを仮定しない。仮定したとしても、どうせありえないものだ」と蹴するはずだ。けど、君の言い方は違った」

一息。

「君の話は　そう、まるで羨むよう。その力が欲しかったのに、自分にはない。そんな現状を理不尽と嘆き、同時に羨んでいるようだったよ」

「……………」

苦虫を噛むような、指摘された箇所に触れてほしくなかったような、苦々しい表情を浮かべていた。

……………そうだ、こんな感じだった。

ゆうなが嘘をつくとき、何か隠しながら話そうとするとき。

彼女は言葉端にそれを隠しきれない。

表情や態度はもちろん、その言葉だけでも知れる。

本当の気持ちが滲み出てくるような言い方をするんだ。

「……ええ、そうよ」

嘘をつくのが嫌いだから。

本音を大事にする子だから、ゆうなは嘘が苦手なんだ。

「確かに、欲しかった。昔は欲しかったわ」

それは、まるで今は諦めてしまったような言い方。

……いや、諦めたのか？

諦めたからこそ、オカルト系の話を信じていないと言っていたのではないだろうか。

だが、今の言葉だけではその経緯までは察することができない。

としたら、直接本人に聞くほか

「その事情、詳しく話してくれるかい？」

俺が思っより一歩早く、ゆたかがゆうなに問う。

やはりゆたかの頭のキレはすごい。

のうのうと考えるしかない俺のすぐそばで、俺よりも早く、そして行動を示してくる。

この場に、俺がいなくてもいいのではないか。

そう考えてしまうほどに。

しかし、ゆうなは首を横に振る。

「何であなたに私のことを話さなくちゃいけないの？　そもそも事情って、元はと言えばそれを話そうとしていたのはあなたじゃなかったのかしら？」

ゆうなは胸の下で腕を組んだまま、ゆたかの顔を見上げている。

俺ほどの差ではないにしろ、なかなか離れた体格差に臆する様子はまったくない。

むしろ余裕を見せるような笑みを浮かべていた。

「あなたが私に言い訳をする。そんな事情を話す、と言っていた気がするのだけど？」

「ああ、確かに私はそう言ったとも。出来ることなら今すぐにも聞いてほしいさ」

「なら、話したらどう？　もちろん」

すっ、と視線をそらした先はゆたかの体。

バスタオルに包まれたそれを見て、

「服に着替えてからね。あかりを奪った憎い相手と言えど、私の目の前で風邪をひかれたら良い気がしないわ」

「はは、確かにそうだ。すまないね、いつまでもこんなはしたない格好でいて」

ゆたかが軽く笑い、ゆうなは薄く笑む。

「いいえ。あなたなんかの裸に何か思う価値もないわ」

……ゆうな、棘キツいなあ。

話の続きは、少しして状況が整ってから。

ゆたかが着てきた服（俺の服を貸そうと思ったが、サイズがあまりにも違いすぎた）を着直し、場所を俺の寝室も兼ねているフロアリングの居間に移してからだった。

俺はベッドに腰を下ろし、ゆたかはその隣に立つ。

ゆうなは対面の壁際に背中を預けて佇み、いつもの所作で胸の下に腕を組んでいる。

向かい合い、視線を飛ばすのはゆたかとゆうな。

身長差からゆたかがゆうなを見下ろす形になっているが、それに負けぬ威圧を持ってゆうなもゆたかに目を向けている。

対等、いやそれ以上。

眼力だけで押し切らん勢いの視線が、ゆうなから発せられていた。

だが、対するゆたかには敵意の一滴もない。

先に口を開いたのは、そのゆたかからだった。

「お待たせしたね。さあ話の続きを始めようじゃないか」

「あら、主導権を握るつもり？ 人から恋人を奪ったくせに」

「そんなつもりはないのだけど……」

ゆたかが苦い表情を浮かべる。

……ゆうなの毒が強い。

それはきつと、嘘をつけないゆうなだから。

今まで向けられたことがなかったから分からなかったが、たぶん、ゆうなが怒るときはこうなのだろう。

溢れ出る怒りや憎しみが、隠されることなく表面に浮き出てくる。

言葉尻の鋭さに恐怖めいたものを感じるも……そういったところでは、ゆうならしさを感じ取れた。

だからだろうか。

時間も置いたおかげもあるだろうが、今の俺はだいぶ落ち着けている。

目元に泣きはらした熱さこそあれ、その元凶が湧き出る感覚はない。

俺は泣き止んでいる。

そう判断する。

「私は君の恋人を奪っていない。君は誤解しているんだ」

「誤解？」

「ああ、そうさ。君は誤解、勘違いしている。私は、私たちは浮気などしていない。それは君の勘違いなんだ」

両手を広げ、ゆたかは必死に弁明する。

誤解を解こうとしてくれているんだ。

だから、俺も同意の証として頷きを見せようと

ゆうなが、小さく鼻で笑う。

「あんな決定的状況を見られて、誤解、勘違い？ バカじゃないの？ あれだけ嘘を塗り固めてたのよ？ 私からすれば、あなたたちが裸で抱き合ってるシーンを発見したのと同じくらいに固いものだと思うわ」

ゆたかがシャワーを浴びていたことを隠そうとしたこと。

そして隠したことを正当化しようと嘘をつき重ねたことを、ゆうなはそう言う。

「……確かに、端から見ればそうなるかもしれない。口早に話したこと全てが嘘だったのだからね。疑うのも無理はないと思う」

「でも実際は違う、なんて言う気？」

「ああ、そうだとも。こうして弁解の余地をもらっているんだ。出来る限り抱かせてしまった誤解を解きたいんだ」

ゆうなが目を細める。

「弁解の余地じゃないわ。これは私の興味。私を裏切ったあなたたちが、最後にどんな言い訳をして見せるのか」

そのまま弓の形にたわむ。

「笑い話にしてほしいもの。こんな辛い話、今すぐにも笑い話にしてちょうだい。あなたの言う事情とやらで、ね」

「笑い話……」

ゆうなの言葉を、ゆたかは小さく繰り返す。

そしてそこから何か得たのか、ふと笑みを見せる。

「そうだね、笑い話にしよう。これはお互いの気持ち着急いて起きてしまったくだらないお話だ。そう、大学を卒業する頃には笑い合おう」

「ええ、少なくともあなたたちのいない場で笑える話になるでしょうね。浮気した女の往生際の悪さ、期待するわ」

互いに笑みを見せ合うも、そこに微笑ましいものはない。

ゆうなから発せられる刺々しい雰囲気のせいだ。

ギスギスときこちなく、居心地の悪い空気が流れる。

「さあ、もう私たちの弁明を始めてもいいかな？」

そんな空気に臆することなく、ゆたかは発言。

だが、

「ええ、いいわ。聞いてあげる。ただし、あなたを除いてね」

「……どういうことだい？」

一瞬遅れて、ゆたかが問う。

あなた、つまりゆたかを除いて……？

「どうせあなたから話を聞いても、うまいこと言い逃れするだけだもの。今までの会話を思い出せば分かるわ。あなたなら安易な嘘も突き通せてしまう。違うとは言わせないわ」

「嘘はつかないさ。さっきのことで懲りたからね」

「そうかもしれないわね」

でも、とゆうなは続ける。

「私は嘘をつかない保証が欲しいの。あなたは平気で嘘をつけるみたいだから」

「だから私を除いて、あきらと話をしよう？」

「ええ。あなたを除いて、あかりと話がしたいの」

「……なるほど」

ゆうなの言葉を聞いて少しの間を置き、ゆたかは言う。

「嘘をつき通せる私より、嘘が苦手なあきらなら信用できる、と……確かにそうかもしれないね」

「でしょ？ あなたと違って、あかりなら嘘をついたらすぐに分かるわ。これ以上ないくらい確かな保証だと思わない？」

ゆうなに向かって頷くゆたかは、今度は視線を俺に向ける。

表情は微笑み。

「私はそれで構わないよ。私が話してもあきらが話しても、変わらないことだからね。より信頼を得られるというなら、それに異論はない」

そこまで聞いて、別の視線を感じる。

ゆうながこちらを見ていた。

「そうね。それが嘘のない事実なら、あなたたちのどちらが話しても変わらないことだもの」

公平でしょ？ とゆうなが言うと、ゆたかが頷いた。

そして、

「あとは君次第だよ、あきら」

「俺、次第？」

ゆたかが頷く。

「私の代わりに事情を 私たちが部室で話したことを話してほしい。そうしたらきっと分かってくれる」

分かってくれる。

ゆたかの言葉が反響する。

「さっきみたいに誤魔化そうという気持ちをなくして、ちゃんと伝えれば」

「ゆうなが、分かってくれる……？」

『別れましょう』

そう言ったゆうなが……。

「もちろん、私を納得させられる内容だったからね」

胸の下の腕を組み替え、ゆうなは言う。

「もしあかりが嫌だったらいいのよ？ 私は無理に聞きたいわけじゃない。引き止められて、渋々聞くだけだから」

「そう。だから、あきら」

ゆたかが俺の目の前に来て、屈む。

両肩に手を置き、真っ直ぐ見つめてくる。

「君はこんなこと望んでいなかったはずだ。ゆうなと別れるなんて嫌だと思う。……だから頑張ってほしい」

肩口まで伸びた黒髪をなびき、長いまつげが微かに揺れる。

すぐ間近まで迫るゆたかに

俺は頷いた。

……ゆたかに任せっぱなしなんて情けない。

頑張らなきゃいけないのは、俺だから。

だから力強く頷いて、

「頑張るよ」

視線をゆたかからゆうなに。

その目を見て、俺は立ち上がった。

俺が両足で床を踏みしめると、合わせるようにゆたかも立ち上がった。

ぐんと高くまでゆたかの頭が持ち上がっていく。

俺の周囲に立つ二人は、この体よりずっと大きい。

真っ直ぐ見た視点でゆうなの喉の辺り。

ゆたかなら胸元が位置する。

背の低いあかりならではの視点だった。

「じゃあ私は外に出るね。二人で話すからには、私は邪魔だろう？」

腰を曲げ、俺の目線に合わせて笑いかける。

視線の先は俺だが、聞いたのは俺ではなかったよう。

は、と小さく息を漏らし、ゆうなが答える。

「そうしてちょうだい。変に入れ知恵されたら嫌だからね」

するつもりはないだろうし、されるつもりも全くないのだが……。

話すのは事実。

さっきみたいに何かねつ造するわけではない、ありのままを話そうとしているだけだ。

ゆたかと俺の認識が共通している以上、何か入れ知恵する必要がない。

……とは言っても、さっきのことがある。

それを思えば、ゆうなには何も言い返せなかった。

だから視線だけでゆたかが部屋から出るのを追う。

玄関まで行き、そこに揃えられた自身の靴を履く。

そこでこちらに振り返った。

「あきら、頑張ってね」

言葉よりも強く頷くことを優先。

それを認めたらしいゆたかは安堵したように表情を緩ませ、体の向きを外へ。

ガチャリとドアノブを回して、俺の家を後にしていった。

薄く、恐らく安物であろう鉄扉が閉まる音。

外からはくぐもった足音の離れる音が聞こえた。

そこで、俺たちは二人きりになる。

俺はベッドの傍らに立ち、両手を体の横で握りしめて。

ゆうなは相変わらず胸の下で緩く腕を組み、背中を壁に預けて立っている。

客観的に見るのであれば、俺は緊張に身を固め、ゆうなには余裕が溢れている。

そんな構図だった。

「で、どうなの？」

ゆうなから切り出す。

「本当に菅原さんが言っていたような事実があるの？ さっきのあれが誤解で、それを私を納得させられるだけの事情が」

威圧的な言葉。

ゆたかに対しては挑発する発言が多かったが、俺に対しては少し色が違う。

質問なのに、口調は問うものではない。

言いたいことがあるなら言え。

そういった圧力。

……たぶん、俺を恨んでいるからなんだろう。

浮気した、って、そう勘違いさせてしまっているから。

だから、初めは短く告げる。

「あるよ、事實は」

「へえ、そうなの」

関心があるのかないのか、曖昧な返答。

が、少し笑みを見せてきた。

「で、今度はどんな作り話で私を裏切るの？」

あざ笑うようできて、自嘲するようでもある笑みを。

「作り話なんかじゃない、これは」

「いいから話してみてよ。今のあかりに信用なんてないんだから。話を聞いて、私が判断してあげる」

「……分かったよ」

すごく悲しい物言いだった。

原因は分かってる。

自業自得だつても理解してる。

けど……胸を締め付ける思いがあるのは確かだった。

「じゃあ聞かせてちょうだい」

ゆうなの促す声を聞き、一度頷く。

小さく息を吸って、大きく吐く。

緊張からか、少し過呼吸になっているようだ。

酸素を与えられすぎた頭が、おぼろげにぼんやりとする気がする。

だがこの緊張は仕方がない。

ラストチャンス。

そう、これが最後なんだ。

今を逃せば、次はない。

きちんと納得させられなければ

ゆうなと別れてしまう。

また少しだけ息を吸って、肺の奥から吐き出す。

……別の世界だったのは分かってる。

けど、ゆうなと別れるのはそんな理屈じゃないんだ。

世界が別だって。

性格に若干の違いがあっただって。

ゆうなはゆうななんだ。

俺の彼女なんだ。

家族と同等以上に大切な存在で。

愛してやまない人。

その彼女を失うなんて……別世界でも、嫌だ。

絶対に嫌だ。

だから、俺に失敗は許されない。

嘘はダメだ。

絶対に知り得た真実だけを話せ。

泣いちゃダメだ。

涙もろい体に流れても、誰も助けてくれない。

怖くて……握った手が震えて……。

吐き出す息が小刻みにしか出せなくて……頭の奥に霧がかつたためまいがあっても。

「今日、ゆうなと別れてからあったこと、最初から話すよ」

俺が頑張るしかない。

ゆうなが頷いて話を促すのを見、

「まず、俺はゆうなと別れたあと」

そらさずゆうなの双眼を見つめ、話し出した。

一つずつ、一つずつ。

間違えることのないように。

自分への確認も込めて、ゆうなに聞かせる。

まず、ゆうなに前置きとして聞かせることは一つ。

俺は“そういう設定”のあきらではなく、本当にあきらだということ。

提示できる証拠なんてないけど……それでもこうして聞かせる前提だから、そう考えて聞いてほしい。

でなければ話が進まない。

だからお願い

そうした嘆願がこうをそうしたのか、ゆうなは渋々ながらも頷いてくれた。

だから少しだけ胸をなで下ろし、続ける。

俺はゆうなと別れたあと、午後からの講義をさぼり、元の世界に戻るヒントを得るためにオカルト研究部部長のゆたかのもとを訪ねた。

それは、俺があかりと入れ替わったばかりの深夜帯に持ち出した「パラレルワールド説」。

その基となる話をしてくれたのがゆたか（直接聞いたのはたくやだったが、同位置の人物であるため大差ない）だったから、俺はそれを頼りにしていたんだ。

だから俺は、今朝から大学に行きたがっていた。

うまくすれば元の世界に戻れる手段を教えてくれるのではないか。

そう希望を抱いてゆたかと会い……砕けた。

『元の世界に戻る方法は分からない』

そう、ゆたかに言われたからだ。

ゆたかは周囲に幽霊が見えると公言しているように、オカルトの知識の大半はそちら方面のもの。

一応部長として幅広くは知ってはいるようだが、その底は浅く、解決法を導き出せそうにはないと断言された。

俺はその答えに愕然としたが、しかしゆたかはあてがあると云う。

それがオカルト研究部顧問である菊地原先生だった。

「へえ、菊地原先生が……」

「もしかして面識あるの？」

「顔は知らないわ。でも話を聞いてもらったことがあるのよ」

顔を知らないのに話を聞いてもらった……？

気にはなったが、ゆうなの様子を見る限り、

「いいから続けて」

話してくれなさそうなので、ゆうなの言う通り続ける。

「ゆうなは顔を知らないって言ったけど、実はその菊地原先生、俺たちと直接会ったことがあったんだよ」

「え？」

「昼のドリアンオヤジ、覚えてる？ あの人が菊地原先生」

「え……嘘……」

なんだかショックを受けたようだった。

「もっと渋いおじさんを想像してたのに……」

……菊地原先生、ゆうなとどんな関わりがあったのだろう。

結構気になりだしたけど、今のゆうなはなんだか怖くて余計な口が聞けなかった。

さて、話を戻して……。

菊地原先生は、いわゆる助っ人的な立場だ。

ゆたかからの応援要請を受け、わざわざオカルト研究部の部室まで出向いてもらった。

そして、先生から教えてもらったことがある。

それは ゆうなが今回の出来事に大きく関わっているであろう、ということだ。

「……私が関わってるの？」

怪訝そうにこちらを見るゆうなに頷く。

「俺のいた世界と、この世界。みんな性別が逆転しているんだよ。俺も、友達も、首相や大統領だって性別が逆になっている。なのに……ゆうなだけが例外だったんだ」

「私だけ、あなたの世界でも女ってこと？」

「そう。今日の夜中の十二時すぎくらいに話しただろ？ ゆうなは俺の彼女だ、って」

「……ええ、確かに言っていたわ」

ゆうなは考え込むように眉根を詰めていた。

しばらくゆうなのその素振りが変わる様子がないので、話を続けようと思い、確認。

「話、続けて平気？」

「ええ、まあ……」

曖昧な返事ではあったが、何とか聞いてくれてはいるようだった。さて、ゆうなが今回のことに関わっているかもしれない。

そういつた憶測は、先に述べたことの異質さからだ。

二つの世界を見比べたとき、ゆうな以外の全ての人間の性別が逆転している。

逆に言えば、ゆうなだけが性別がそのまま。

こんなの、どう想像したってゆうなが関わっているに決まったよななもの。

逆にこんな条件下でゆうなが一切関わっていないとなれば、それこそ異常なことだろう。

「……ちよつと待って」

考え込む表情のままだったゆうなが、こちらに手のひらを向けて制止を呼びかける。

「つまり、何？ 私が原因だって言うの？ 私があなたとあかりを入れ替えさせたとしても？」

「違うよ。ゆうなが直接的な原因ってわけじゃない。だって、ゆうなに心当たりないだろ？」

「当たり前じゃない。私はそんな訳分かんないことは信じてないの。出来るわけがないわ」

「だから、ゆうなが関わっているのは間接的なこと。そう教えてもらったんだ」

「……どういふことよ？」

キッと強く睨まれる。

「もし屁理屈こねて私に濡れ衣着せよって言うなら、今すぐ帰ってもいいのよ？」

「ち、違うよ、そんなんじゃない」

焦りながら首を横に振る。

「そう……まあ、聞くだけ聞いてあげようじゃない」

まだ睨む姿勢を変えないながらもそう言ってくれたゆづなに、少しだけ胸をなで下ろした。

視線を下に。

ふう、と小さく息を吐き出してから、もう一度ゆづなの目を見上げる。

「えっと……」

話すべきは、ゆづなが間接的原因であると仮定した流れ。

菊地原先生に聞いたそれを話すのだが……気を付けなければなら
ない。

それは、ついさっきゆうなが怒りかけた、逆鱗に触れる話にはしないことだ。

あくまで俺はゆうなに聞いてもらっている立場。

もしゆうなの機嫌を損なうようなことがあれば、その場で全てが終わってしまうような可能性さえある。

そんなことにはしたくない。

だから、これからの発言はそういった配慮も踏まえ……しかし真実を話す必要もある。

あくまでゆうなは間接的な原因であることを伝え、決して濡れ衣を着せるつもりはない。

……分かってる。

だから、緊張するな。

心に言い聞かせ、俺は口を開いた。

「間接的って言うのは」

「間接的、という意味合いなら分かってるわ。私がしたわけではないけど、私の影響が何かで起きてしまった。そういうことでしょ？」

「あ、うん……」

「それで？」

促す言葉に、「えっと……」とワンクッション置く。

考えるのは今から話すこと。

その内容にゆうなを不機嫌にさせるものがないかと

「あら、急に歯切れが悪くなったわね」

低い声色のゆうな。

また視線が鋭くなっていることに気付き、心臓が締められたらように苦しくなった。

「どうしたの？ さっきまですらすら話せてたじゃない。いきなり詰まり始めたわね」

それは疑問の声。

だが答える間はなく、

「……あ、そつか。ここから嘘話が始まるのね。へえ、途中から嘘をつけば何とかなると思うたんだ？」

「ち、違う！　嘘なんてついてない！」

長い髪を振り乱して首を横に振るも、ゆうなは表情を睨んだまま変えない。

「なら、どうしてもつたりするの？　あなたは事実を話すだけなんでしょ？　今日の午後、私と別れてから起きたことをそのまま話すだけ。違う？」

「……いや、違うない」

「だったら、さっきのまま普通に話せばいいじゃない。いきなり考え込むような表情になって言葉を詰まらせたら、「嘘を考え始めました」って言ってるようなものだよ」

「そうじゃないっ。ただ……言葉を選ぼうとして詰まっただよ」

へえ、とゆうなは小さく相づちを打つ。

「さっき、ゆうなが濡れ衣を着せようとしてる」って怒ったから……そう思われないように、言葉を選ぼうと」

「ずいぶんとチキンな考えね」

「……え？」

話の途中に割り込まれ、一瞬思考が追い付かなくなる。

「ち、チキンって……」

「逃げ腰な考え、って意味よ」

それは分かってるけど……。

「私に怒られたから、言葉を選んだ？　あなた、仮にも男を語ってるのよね？　なのに、女の私にちよつと怒られただけでそんなにビクビクするなんて……肝がちっちゃいのね」

「なっ……」

「男ならでっかく構えたらどう？　私は男なんか大っ嫌いだけど、男はそういうものなんじゃないかしら？」

気が付けば、ゆうなの鋭い視線はなくなっている。

けど……その代わりは、俺を蔑むようなものだった。

02（前書き）

章整理のために分割しただけなので、以前にお読みになられた方の再読の必要はありません。

(……っ！)

ぐっ、と拳を握りしめる。

目を固くつむって。

ゆっくり深呼吸して。

奥歯を強く噛み締める。

……思っている。

言いたいことも、たくさんある。

けど

「そう、だね……」

「ええ。私にあなたが男だと信じさせたいなら、ちゃんとしてちょうだい。そんなんじゃ、あかりよりも女々しいわよ」

「……ああ、そうだね」

我慢だ。

俺は、もう分かってる。

昼の喧嘩で、さつきゆたかにほだされ、気付いたんだ。

ゆうなが憎まれ口を叩く時、絶対に俺が怒ってはいけない。

気持ちが素直なゆうなは、怒りを抑えられないんだ。

だから、抑えなければならないのは、俺。

俺が抑えなければ、ヒートアップするだけなのだから。

そして、今はもう取り返しがつかない。

昼間の仲違いとは違って、今は……最後、なんだ。

だから、一呼吸。

思う全てを追い出すように、強くゆっくりと息を吐いた。

「じゃあ……」

まぶたを開け、再びゆうなの目を見上げる。

「言葉選びのために、俺は躊躇わない。それでいい？」

「いいも何も、あなたの勝手にしたらいいじゃない」

突き放したような言い方。

「ただ、あまりに嘘っぱかったら口を挟ませてもらうし、酷い言い

分だったら有無を言わせず帰る。それはいいわね？」

「……分かったよ」

頷く。

俺には、これしかないのだから。

「それじゃあ、」

言葉を区切り、そこから話の再開。

「ゆうなが間接的な原因になっている理由を話すよ」

「ええ、どうぞ」

だいぶ和らいだように見えるゆうなの視線と合わせ、頷く。

「まず、ゆうなが直接的な原因ではない理由から」

それはゆうな自身が分かっているはず。

だって、ゆうなにその心当たりがないはずだから。

「ええ、ないわ。もし私があなたとあかりを入れ替えたと言っなら、こんな風にはなっていないもの」

確かに、ゆうなが俺とあかりを入れ替えた原因なら、こんな混乱

した状況にはならないだろう。

現状こそ、ゆうなが俺とあかりに何もしていないという最大の証拠になる。

「だから、間接的にゆうなが関わっている可能性が高いんだ」

「どういうこと？」

「さっき言ったことだよ」

俺のいた世界と今の世界を比べたとき、何よりも気になるのはゆうなの異質さ。

どう考えてもゆうなが関わっているとは思えないのに、当のゆうなは何もしていない。

となれば、残るは……。

つまり、消去法。

ゆうなが関わっているのは確定しているのに、ゆうなが直接何かをしてはいない。

だから残るのは間接的に関わっている場合、となるわけだ。

「私だけがおかしいって言われてるのはムカつくけど……まあそうなるわね」

不承不承といった様子ながらも、ゆうなは頷いてくれた。

「でも、その間接的になってどうということなの？」

ゆうなは問う。

「私が何らかの形で関わってそうなのは分かった。けど、具体的なものが見えてこないのよ。私がどんな影響を何にもたらしてそうだったのか。今の説明だけでは分からないわ」

やはりそうきたか、と思う。

直接的ではなく間接的にゆうなが関わっている。

それが仮定から確信に近づいたとき、思わざるを得ない疑問だ。

俺だって同じことを疑問に思った。

具体的にゆうなはどういう風に関わったのか、って。

けど……、

「それは、分からない」

「……はあ？」

遅れてきたゆうなの呆れたような声。

「分からないってどうということよ。そこが肝心なんじゃないの？」

「うん、すごく大事なことだ」

だけど、

「だけど……そこまで分からなかったんだ」

ゆたかに聞いた。

菊地原先生にも聞いた。

自分でも必死に考えた。

「けど、分からなかった」

何でゆうなが関わって。

どうして世界間の人格入れ替わりが起きたのか。

「分からなかったから、菊地原先生が、それを導き出せるかもしれないヒントをくれたんだ」

そう、これが俺の言いたかったこと。

この菊地原先生のヒントがあったからこそ、俺は微かながら期待を抱いて行動できた。

けど、同時にこんなことにもなってしまった。

それは、

「レズビアンについて学べ。ゆたかとセックスしろ」

淡々と、でもはっきりと告げる。

「そう、菊地原先生に言われたんだ」

俺が言い終わると、途端に沈黙が広がる。

聞こえるのは、俺と呆然とするゆうなの息遣いだけ。

耳鳴りがしそうなほどの静寂に、この部屋が包まれる。

そして、それが破られたのはさらに数秒後。

「えっと……」

眉間を揉み、苦渋の表情を浮かべたゆうな。

「あなた、話が飛躍しすぎてるわよ」

「わ、分かってるよ」

さも俺がおかしくなっているかのように言われた。

「言ったのは俺じゃなくて、菊地原先生だから」

「それは分かってるわ」

ゆうなが「あの菊地原先生が……」と苦い呟きを漏らす。

「けど、今の話が本当なら、それを実行したのはあなたでしょ？」

「うん」

「つまり、あなたもその飛躍しすぎた話に同意して、それに乗ったのよ？　言ってる意味、分かる？」

「分かってるよ」

俺が飛躍しすぎた菊地原先生の意見に乗ったということは、俺はそれに理解を示したということ。

いくら教えを請うた立場と言えど、拒否権はあったのだ。

にも関わらず実行に移したということは、俺自らその案を考えたのも同じこと。

「分かってるじゃない」

「でも、」

確かに、俺もこれは飛びすぎの展開だと思う。

だから俺はそれに引っかかりを覚え、菊地原先生にその理由を迫ったのだ。

結果、納得とまではいかなくとも理解できる解答を得た。

俺のいた世界のゆうなと、この世界のゆうなとの、たった一つの違い。

それが、

「ゆうなが、同性愛者であるか否か」

それだけだったからこそ、

「菊地原先生は「レズビアンについて学べ」と言ったんだ」

それで得たのは「あー……」と気のない返事。

「……ちよつと待って。整理させて」

自身の額に手を当て、定まらない視点でゆうなが言う。

「えっと……つまり、何？ 私がレズビアンで、あなたの知ってる私がそうじゃないから、レズビアンを知ろう。そう思ったの？」

「まあ、そんな感じ」

「それが、私とあなたの世界の私との唯一の違いだから？」

「うん、そうだよ」

世界間を比べたときに浮き出てくるのは、ゆうなが存在。

誰もが性転換している世界で、ゆうなだけが性別を変えていないのだ。

それが世界を比較した際の、ゆうなの異質性である。

そして、そのゆうな自身を世界別に比べて見えてくるのは、本人が同性愛者かどうか。

俺のいた世界では異性愛者だったゆうなが、この世界で俺があかりになっているのと合わせるように同性愛者になっていたのだ。

初めはゆうなの性格にも違和感を覚えていたが、それは単にあきらに対してとあかりに対して、その接し方が違うまでのこと。

人によって接し方を変えるのは、決してゆうなだけの特別なことではない。

それに、こうして話してみればよく分かる。

ゆうなの根の性格は、本音を大事にして、嘘をつけない。

それが全く変わらないのだ。

だからこそ浮いてくるのは、ゆうなの性的指向の違い。

何故、何一つ変わらないゆうながそれだけ違えているのか。

それを知ったとき、俺の求める答えが見えてくる……かもしれない。

故に、菊地原先生は「レズビアンについて学べ」と言ったのだと、俺は解釈している。

「まあ……何て言うのかしら」

額に当てていた手を目元に移し、考え込むように「うーん」とうめくゆうな。

そのまましばらく。

俺の呼吸で八回目の息を吸ったとき、ようやくゆうなは手を下ろし、口を開いた。

「長々と説明してもらって悪いんだけど……私には理解しきれないわ」

ややこしくてちょっと……と濁す。

「だから、同じことを聞くことになるけど、あなたに質問したいのいい？」

「うん、大丈夫」

ゆうなの質問は、おそらく自身の理解を促すためのもの。

それを惜しむ理由などあるはずがない。

俺が頷くの認め、ゆうなは考える表情を崩さないまま質問を投げかけてくる。

「あなたは、自分とあかりの人格が入れ替わった。そう思ってる？」

「うん、思ってる。俺はあきらだ」

「そして、あなたは这个世界ではない別の世界からきたと思ってるのね？」

「それだとファンタジーっぽいけど……うん、合ってる」

そう、と小さく呟いて、少し間が空く。

「なら这个世界に来た、あるいは来させられた理由は？」

「分からない。それを見つけたら、元の世界に帰れるんじゃないか
って思ってる」

「でも私が原因だと考えてるんでしょ？」

「ゆうなのせいだ、とは思ってないよ。あくまで間接的に関わってるんじゃないか、って思ってるだけ」

「それはどうして？」

「どう考えてもゆうなが異質すぎるから。ゆうなだけ他の人と違う
ことが多いんだよ」

「だから私とあなたの世界の私の違う点、レズビアンについて学ば

うと、菅原さんとセックスしようとしてたわけ？」

「まあ……うん、そうだよ」

ここまでで、ゆうなの質問は途切れた。

「うーん……ちょっとずつ分かってきたけど、まだ分からないことがあるわ」

俺がゆうなに説明してきたことの要点をまとめたような矢継ぎ早の質問を終え、ゆうなは言う。

「あなたがしたのは、元の世界戻る方法を模索するため、その手の知識に詳しそうな菅原さんや菊地原先生の教えを扇いだこと。そうでしょ？」

「うん、あつてるよ」

「それで得たのは、菊地原先生からの「レズビアンを学べ」というヒントめいたもの」

頷く。

「じゃあ、どうしてそこから菅原さんとセックスしなきゃいけないことになったの？」

「それは……」

俺とゆたかがセックスをしなければいけなくなった理由

それを言いかけ、言葉が止まった。

喉に何かが突っかかるような、もやっとする感覚。

何だろう……？

セックスの理由、

「そのきっかけは」

それは、菊地原先生がゆたかとセックスすることを義務のように言いつけたことだった。

元の世界に戻るのには制限時間があるはず。

だから手っ取り早くレズビアンについて学ぶために、ゆたかとセックスしろ。

そんな内容だったが……。

「確か、嫌だったんだ」

俺は、その時に良しとしなかった。

勝手に菊地原先生が「絶対にするように！」と言い逃げしていったが、内心、俺は嫌だと思っていた。

菊地原先生がどこかへ行ったあとも、友人であるゆたかとセック

スするのは嫌だ、逃げたいと考えていたはずだった。

けれど……。

「しなきゃいけないことだと思ってた」

菊地原先生が言ってたから。

絶対にしろ、と念押しされてしまったから、半ば義務のように感じていた面もある。

だけど、それだけじゃない。

「ゆたかにも、したいって迫られて……」

ゆたかはあかりのことが好きだった。

それはもう、普段は落ち着いているゆたかが性欲に暴走するほど。

無闇やたらに抱きついたり、襲おうとしたり。

とにかくすごく好きなようで……。

俺とのセックスも、あかりとしたかったというゆたかの願望であつた。

だから迫るに迫られて

「……いや」

首を振る。

確かにすることを決めたのは、ゆたかに「セックスしないと襲う」と脅されたからだった。

けど……この時、俺には逃げたいなんて気持ちはなかった。

緊張感があっても、嫌だと思っこともなかった。

菊地原先生に言われたときには、あんなにも現実逃避に余念がなかったのに、だ。

それはつまり……どういうことだ？

菊地原先生に言われちゃダメで、ゆたかに迫られたら許してしま
う。

それじゃあまるで

「ゆたかが好きだった……？」

試しに口にしてみても、はつきりした。

「いや、違う」

ゆたかは好きだ。

けど、それは友人として。

俺の友人であるたくやの面影を見、また協力してくれたことに対して感じている思いだ。

決して、俺がゆうなに抱いていたそれではなかった。

「それじゃあ一体……」

俺がゆたかに感じていたものは何だったのか。

どうしてゆたかに気持ちを許したのか。

考えてみて……思い出したことがある。

あの時、俺は「仕方ないな」と思っていた。

俺自らが望んでいたのではなく、ゆたかが言ったから。

しなきゃ襲うぞ、と脅されたから。

元から必要が迫られていたから、それで良しとしたんじゃないか？

言わば、流される言い訳のようなもの。

これは自分の意思ではない。

仕方なくそうなったのだ。

そう、さも免罪符であるかのように俺は流されて

「……どうして、」

気落ちしたように、ゆうなは目を伏せている。

「どうして、その時に私を選んでくれなかったの？」

「……え？」

唐突に言われ、何を言われたのか分からなくなる。

けど、

「レスビアンについて学ぶ気だったんなら、すぐ私のところに来て
ばいいじゃない」

「あ……」

ゆうなに言われ、ようやく気が付いた。

俺は、最初から捨てていたんだ。

ゆたかとセックスするのではなく、ゆうなとする選択肢。

協力してくれたゆたかではなく、恋人であるゆうなに協力を得る
選択肢を。

初めから、俺は考えることもしていなかった……。

そうだ……。

俺は見落としていた。

今、ゆうながこうして気付かせてくれた選択肢を見落としていたんだ。

迂闊と言つべきか、軽率と言つべきか……。

迂闊なのは、本来なら第一に入れるべきだったであろうそれを、事もあるうちに今の今まで気付けなかったこと。

軽率なのは、深くまで考えもせずにそれを選び取ってしまったこと。

情けない。

酷く、情けない……。

ゆうなを愛していたんだろう？

大学を卒業したら結婚したいって思っていたんだろう？

ゆたかとセックスするつてときに、ゆうなへの罪悪感を覚えていたにも関わらず、どうして俺は気付けなかった？

気付くチャンスならいくらでもあったはずだ。

菊地原先生に必要を迫られたとき、「彼女がいるから」と断れば良かった。

ゆたかに半ば脅されたとき、「ゆうなとするから！」って強く言えば良かった。

今の顛末の原因を作ったのは、他でもない俺だ。

ゆうなが誤解しているのが悪いんじゃない。

ゆたかに嘘をついてもらったがためにこじれたんじゃない。

初めから俺がこのことに気付き、選択していれば、こんな展開にはならないはずで……。

けど、俺は目を背けていた。

喧嘩したことを辛いと称して正当化させて。

ただ目の前に差し出された、ゆたかとセックスするという選択肢を選んだ。

それが原因で……こんな展開になってしまった。

自業自得という言葉が頭を過ぎって、心に刺さる。

鋭く尖って、抉り込む。

その痛みさえも、戒めにはぬるい気さえした。

「……ごめん、ゆうな……」

まず口をついたのは謝罪の言葉だった。

忘れていた、と言ったらどんな顔をするだろうか。

考えつかなかった、と言ったら悲しむだろうか。

そんなことを考えて出したのが、

「本当に、ごめん……」

謝罪のみ。

言い訳をしない、なんて格好良いことじゃない。

言い訳するのが怖くて……俺は謝る言葉のみを口にした。

そういった俺の気持ちが漏れ出たのかは分からない。

けど、ゆうなは悲しそうに眉尻を下げ、

「あなたの言うことが本当だったとしたら、すごく辛い……」

目を伏せる。

「だって、あなたの一番近くにいたレズビアンは私だったのよ？」

あなたがあかりなら、私はこれまでずっとあなたをレズビアンとして愛してきた。あなたがあきらだと言うなら、今朝、たくさん体を重ねたじゃない」

近くにいた、というのは、決して実際の距離ではない。

それは、心の距離。

「なのに、あなたは菅原さんを選んだ。彼女の私ではなく、菅原さんを選んだ」

ザクリ、ザクリとゆうなの言葉が刺さってくる。

「あなたは浮気なんてしてないって言いたかったんでしょうけど……今ので分かったわ」

一息。

「やっぱり、あなたは浮気していた。私と菅原さん。そのどちらかを選ぶ選択肢で、あなたは菅原さんを選んだのよ」

否定しようと出掛かった言葉と、それをせき止めるように詰まった喉。

何も言い出せない俺に、ゆうなは目を細める。

「……結局、笑えない話だったじゃない……バカ……」

怒っていながらも悲しんでいるような複雑な表情を見せたゆうな。

背もたれにしていた壁から体を離し、一歩俺に近付く。

「もう話さなくていいから」

ぎし、と板の床が軋み立て、またゆうなが歩み寄る。

ゆうなの顔を見上げる俺に、言葉を発せられるだけの余裕はない。

「あなたがあかりでもあきらでも、どうしても良くなったわ。そんなの構いやしない」

また一歩近付いて、俺たちの距離はその二歩分にまで狭まる。

「あなたの長話で分かったのは一つだけ。あなたに裏切られたのが確かだった。それだけよ」

ゆうなの見下す視線は、俺に何も許さない。

反論することも、怯えることでさえ躊躇いを覚えさせられている。

「だから、あなたは話さなくていい。もう聞く耳なんてもってあげないから」

一歩ゆうなは近付いて……距離は十分に縮まる。

片方が手を伸ばせば、難なく相手の体に触れられるような距離までに。

「これで最期よ」

気付けば、俺は息を止めていて……。

一瞬、意識が白く弾ける。

耳には渴いた大きな音。

頬を張られた。

戻った視界は、傾いたもの。

「っ……!？」

衝撃に体がふらつき、右に倒れかかる。

声をあげる暇もなく、たたらを踏む。

うまくいかず、膝をついた。

そのまま四つん這いの態勢になって、見るのは床。

張られた左の頬に手を当てる。

じん、とした感覚はあるも、痛みはない。

何よりも驚きが優先されていた。

こんがらがる思考が、ぶつりと音を立てて千切れる。

頭が真っ白になって、何も考えられなくなる。

「……やめて……」

ゆうなの呟き。

漏れ出たような言葉に、はっと視線をそちらに。

「これ以上、私のあかりを汚さないでよっ!」

叫び。

「私の知ってるあかりはそんな子じゃなかった! こんな風に私を裏切ることなんてなかったわ!」

腕を振り、さらに俺に歩み寄ってくる。

荒く、俺の体の横にゆうなの足。

「いつもいつも男みたいな格好をして、男みたいな喋り方をして私を困らせたけど……それでも好きでいてくれた! 私も大好きだった!」

知らぬ間に俺は尻餅をついていて。

覆い被さるようにゆうなは身を低くし、俺の胸ぐらを掴む。

ゆうながプレゼントしたという白いワンピースを。

「何で！ 何でこんなことになっちゃったの！？ 私の何がいけなかったの？ 私がいじめすぎたから？ それで愛想を尽かしたって言うの！？」

握り込むような掴み方ではない。

まるでしがみつくような、そんな掴み方。

「だからって、いきなりこんな……こんなのって、ないじゃない……っ！」

そのまま倒れ込むように、ゆうなが寄りかかってくる。

「今日……あなたの誕生日なのよ……っ」

ゆうなの掴む胸元には、銀色のネックレス。

「せっかく喜んでくれると思ったプレゼントが、台無しじゃない……っ」

掴む手が離され、弱々しく肩を殴られる。

「デートだって、一生懸命考えてきたのに……っ」

ゆうなの頭が、俺の首もとに押し当てられた。

そのまま押し倒されるような形で、俺たちは床に体を横たえる。

俺は片膝を立てて仰向けに。

ゆうなは馬乗りの態勢で、俺の首もとに顔をうずめて。

……表情を見れなくても、思考が止まっても分かる。

熱い雫が、首に伝ってくるから。

ゆうなが泣いてるって、認識できる。

「……ゆうな」

ほとんど無意識の内に、俺は手を伸ばしていた。

その先は、ゆうなの頭。

……慰めようなんて、おごった考えじゃない。

ただ、ゆうなにこんな風に泣かれたら自然と

瞬間、

「触らないでっ！」

ゆうなに一喝された。

指先がゆうなの髪に触れたかというところだった。

「おかしくなったあなたなんかに触られたくないっ！」

ゆうなが体をそらし、頭を上げる。

泣きつ面を外気に晒して、目元を赤くしている。

「私は、昨日までのあなたが好きだったの！ 今のあなたじゃない！ おかしくなったあなたなんかじゃないのよ！」

「お、おかしくなんか……」

「おかしくなっていないってなら何だって言うの！？ あなたはあかりじゃない？ 別の世界からきたあきら？ バッ力じゃないのっ！？」

床にしていたゆうなの右手が、バンと強い音をもって床を叩く。

「そんなのありえない！ 現実じゃ絶対にありえないことなのよ！」

「ありえなくなんか」

「ありえないわよ！ あなたにそんな力はなかった！ 私にもなかった！ どこから湧いて出たって言うの！？」

もはや俺が口を挟む隙すらなく、

「きつと全部が創作 そう、菅原さんの創作に違いのないのよ！」

「ゆ、ゆたかの……？」

何故、このタイミングでゆたかの名前が出てくるのか分からない。

俺の腹の辺りに馬乗りになっているゆうなが自分の言葉にハツとしたように、しかし興奮をさらけ出しながら声を荒げる。

「そうよ！ 全部菅原さんのせいなの！ だってそうじゃない！
こんなオカルトめいた話、いかにも彼女らしい！」

右手で俺が着ているワンピースを掴み、空いた左手を大げさに振り回す。

「オカルトは彼女の得意分野じゃない！ こんな出来の悪いフィクションなんてお手のものはずよ！」

「ちょ、ちよつと待つ
」

「だから、言うなら彼女が原因なの！ 私じゃないわ、彼女こそが
今を作り出した元凶
」

「待てってばっ！」

ゆうなの両肩を掴み、大きく揺さぶる。

驚いたように目を見開く彼女は、熱に浮かされたように視点が定まっ
てない。

「落ち着いて……一旦、落ち着こう。ゆうな、興奮しておかしくなってるよ」

「おかしい……？」

はは、とゆうなが小さな笑いを漏らす。

「おかしいのは、あかりじゃない。あなたの言うことは普通じゃない……ありえない。そんなこと、ありえっこないのよ」

「俺はおかしくなんて……」

「じゃあ、私の友達に今の話を聞いてもらう？ あなたはあかりじゃない、別の世界からきた男のあきらだ、って。さあ、何人があなたの話を信じてくれるのかしらね」

「それは……」

「それが現実なのよ。あなたの言うことはおかしいの。ありえないことなの」

だから、

「あかり……目を覚まして」

俺の瞳を覗き込むように、ゆうなの顔がゆっくりと近付いてきた。

「あなたはね、あかり。菅原さんに洗脳されているの」

ゆうなどの距離は、鼻先が触りそうなほど。

それだけの間近で、ゆうなはゆっくり諭すような語り口になる。

「さっきまであなたが話してきたこと。それは菅原さんの創作。菅原さんが考えただけの、事実無根の作り話なの」

「っ、作り話なんかじゃ」

遮られる形で、ゆうなが両手で俺の頬を挟み込む。

喋らずに聞いて。

そう言うように。

「彼女、話が上手でしょ？ 私はさっき初めて話したけど、それでも分かる。彼女は話すことに長けた人なのよ」

ゆたかが話すことに長けている。

そう言うゆうなに、確かにそうかもしれないと思った。

「そして、それと同時にオカルトみたいな知識もたくさん持っている。それ系のサークルの部長さんなんでしょ？ なら色々知っているはずだわ」

ゆうなから見た一種の偏見のような意見だが、事実、ゆたかはそれ系統になかなか詳しいところがある。

「だから、私はこう思うの」

一息。

「あなたは菅原さんに、あなたが今話したような設定を吹き込まれ信じ込んでしまった」

頬を挟むゆうなの手に力がこもってくる。

「いわゆる洗脳か、催眠術……あなたは菅原さんに騙されてるの。そうやって、菅原さんの良いようにされかけてたのよ」

そんなこと……。

反論せんと口を開くよりも先に、ゆうなが続ける。

「根拠があるの。今は黙って聞いて」

それはお願いというよりも、強制に近い。

有無を言わせぬ早さで、ゆうなは切り出す。

「どうしてあかりは、私よりも菅原さんを選んだの？」

「え……」

疑問を付けた質問は、前置きのように俺に対して聞くものではな

い。

「自惚れに聞こえるかもしれないけど、あなたが菅原さんを選んだのはおかしいと思う。いつも通りのあなただったら、私を選んでくれたはずよ」

それは俺があかりではなくあきらだったから、と思うも、すぐに止まる。

俺があかりではなくあきらだったとしても、恐らくはゆうなを選ぶことが普通に思えたからだ。

「でも、実際は菅原さんを選んだ。しかも私を選ぶという選択肢を、さっき私に言われるまで気付かなかったような反応まで見せて、ね」

あなたの表情は分かりやすいから、とゆうなは付け加える。

「でも、それっておかしいと思わない？ 普通だったら選ぶはずの選択肢を忘れて、ただの友達だったはずの菅原さんを選ぶなんて……」

それは、セックスをするなら恋人のゆうな、友人のゆたか、どちらを選ぶかというもの。

どちらを普通か、と選ぶとするなら……。

「もちろん、あなたたちが浮気してないのが前提の想像だけど……浮気、してないのよね？」

「うん、うん」

疑い探るような視線がチクリと刺さる。

「ならおかしいって思うでしょ？　あなたが、私よりも菅原さんを選ぶことがおかしいって」

考え……返事は頷きによる肯定。

頬をゆづなの両手に挟まれているため動きは制限されたが、それでも意図は伝わった様子。

「でしょ？」

そう、ゆづなは満足げに笑った。

「だから私は思ったの。これは操られたことなんじゃないか、って」

「操られた……？」

「ええ、そうよ」

すつ、と添えられていたゆづなの両手が離れる。

「だっておかしいじゃない。あなた自身も認める普通の選択肢を思い付きもしなかったなんて……どうかしてるとしか思えない」

例え喧嘩したあとで気まずい関係になっていたとしても、やっぱりおかしい、とゆづなは言う。

「だから可能性は二つ。一つはあなたが私を嫌っていた場合。実は私を嫌っていたって言うのなら、私より菅原さんを選ぶ動機になるけど……」

慌てて首を横に振ると、ゆうなは安心したように笑んだ。

「ならもう一つ。さっき言ったように操られていた場合よ。もちろん犯人は菅原さん。私よりも彼女を選ぶように操ったなら、納得がいくわ」

「そんな……」

ゆたかが、俺を操っていた……？

「具体的な方法までは分からないけど、知識と話術の立派な彼女のことよ。話の流れを彼女の好きなように運んで、あなたの思考を操った。割とありえそうな考えじゃない？」

「そんなはずは……」

「ならきっぱり否定できる？ あなたは、彼女に一切流されずに自分の意見を通して菅原さんを選んだ。そうなの？」

そう言われると……正直、口をつぐむしかない。

実際、ゆたかに流された節がないことはないのだから。

「やっぱりね。あなたは押しに弱い性格だから」

ふふ、と少しおかしそうにゆうなは笑った。

「そして、まだ話は繋がるわ」

ゆうなは馬乗りになっていた態勢から退き、寝ている俺の横に座る。

合わせ、俺も座った。

「あなた、元の世界に戻る糸口を探すために菅原さんに会いに行つたのよね？」

うん、と頷く。

ゆたかに会うために大学に行ったのは、そのためだった。

だから大学に着いたあと、俺は真っ直ぐゆたかのいるオカルト研究部の部室に向かった。

「それは、菅原さんがオカルト話に詳しかったから？」

「うん、そうだよ」

これらは、さっき俺からゆうなに聞かせたこと。

事情を話す過程で、既にゆうなに告げたことだった。

「でもね、実はそれだけじゃないの。ただ彼女がオカルトに詳しくか

ったから、あなたは頼りにしたんじゃない」

足を崩して座るゆうなは、真っ直ぐ俺を見下ろす。

「彼女は　あなたにパラレルワールドについて話した張本人だったから」

それもゆうなに話したこと。

俺がパラレルワールド説を思い付いたのはゆたかの話を過去に聞いていたおかげ。

だからゆたかに元の世界に戻るヒントを得ようと彼女のもとを訪れた。

ゆうなは断言するように、ハッキリと淀みなく告げる。

「あなたがこの世界をパラレルワールドなんじゃないかって言い出したキツカケは彼女よ。彼女があなたにその話を聞かせたから、あなたはその解答に辿り着いたの」

ゆうなの手が俺の頭に置かれる。

そして撫でる動き。

「これって、菅原さんが誘導してるように思えない？」

「ゆたかが、俺を誘導……？」

ほとんどおうむ返しのようになった俺の問いに、ゆうなは頷く。

「ええ。だって、あなたにその考えを持たせたのも、彼女のところに行こうとさせる動機を作ったのも彼女なのよ？ 怪しいと思うでしょ？」

「え、えっと……」

ゆうなの言ったことを脳裏に反芻させ、考える。

俺がパラレルワールド説を　この世界が俺にとっての異世界で、その世界のあかりという人物と入れ替わってしまった、という考えに至ったのはゆたかのおかげだ。

それは、前にゆたかが（実際にはたくやが）パラレルワールドの話をしてくれたから。

だから俺は、割と安直にその考えに辿り着くことができた。

そして、俺がゆたかに会いに行こうと思った理由も、ゆたかの話があったから。

パラレルワールドについて話してくれたゆたかなら、きっと何かしら手助けしてくれるはずだ、と読んでの行動だった。

それをゆたかの企みと言うのは……、

「……どうだろう……？」

確かにこの件に関して、ゆたかはかなり深くまで関わってきてはいる。

それを怪しいと取れないことはないけど……。

まさか、と思う。

まさか俺の話をあんなに親身になって聞いてくれたゆたかがそんなことをするはずがない。

そう思うのが、俺の中で一番に優先される考えだった。

「納得がいかないみたいね」

どうやら俺の表情を読んだらしいゆうなが不満そうに言う。

「うん。なんていうか、ゆたかがそんなことをするなんて信じられないって言うか……」

「そうかしら？」

ゆうなの手が俺の頭から退かされ、肩に置かれる。

「彼女は私に対して平気で嘘をついたのよ？ それもアドリブにも関わらず、堂々とした態度で言ってみせた」

それがどういふことが分かる？ と問うゆうな。

ゆうなが言っているのは、先ほどゆたかがついた「俺の家に風呂を借りに来た」という嘘の件だ。

特に打ち合わせもしていなかった、咄嗟の嘘。

にも関わらず、ある程度は筋の通るものだった。

それが示すこと、というのは……、

「ゆたかは、嘘をつくのがうまい？」

「ええ。そういうことよ」

ゆうなは肯定。

「彼女はいきなりつかざるを得なくなった嘘でさえ、あれほどの嘘をつくことができるの。なら、もし彼女が前もって計画を練って嘘をつくとなったら？」

それはもしもの話。

ゆたかが先ほどついたような咄嗟のものではなく、もっと前から念入りに考え抜いた嘘をつくとしたら

「……すごく、真実味を帯びた嘘になると思う」

「正解」

俺の返答を聞き、ゆうなは俺の頭を一度撫でる。

そこまで聞けば、ゆうなの言わんとしていることの想像くらいつく。

非常に真実味を帯びた嘘をつくことができるゆたかなら、

「そのゆたかなら、俺を騙していたとしても不思議じゃない。って言いたいのか？」

「ええ。私はそう考えるわ」

「そんな……」

ゆたかが俺を騙していた？

俺を騙すことができるかどうかで考えれば、ほぼ間違いなく可。

うまく騙そうとすれば、ゆたかなら詐欺師ばりに働けるだろう。

ゆたかが先ほどついた嘘は、それほどのものだった。

ゆうなに風呂に入っていたところを見られた、一種の決定的な場面であるにも関わらず、焦りはほとんどなく、咄嗟に考えたであろう言い訳も、それだけ聞いたなら納得のしうるもの。

ゆうなに突っ込まれて所々ボロは出たが、それも些細なものだけ。

俺の家に風呂を借りにきたのに、着替えが準備していないのはどういうことか。

風呂を借りた家主、つまり俺に着替えを借りる魂胆ならまだしも、ゆたかと俺では服のサイズが違いすぎる。

だからおかしいんじゃないか、ということだけだった。

しかし、それはあくまで俺の言動を訝しく思ったから突っ込んだだけ。

しかも続けたゆたかの言い訳は、予定外に借りることになったから準備していなかったというもの。

俺に風呂を借りることになったのは、大学で会った俺にその話をし、俺の好意によって借りることになった想定外の行動だった、と言っていた。

こう言われれば真相を確かめる術などないし、理由の説明もできている。

もし相手がゆうなでなければ見破れたかどうか。

また、先にゆうなの対応をしたのが俺ではなく、ゆたかだったら。

それらを考えると、今の結果が著しく変わっていた可能性が高い。

それだけに、ゆたかの嘘をつき通せる力は確かなものだろうことが想像できた。

「整理するために、もう一度一から話すわ」

言うのはゆうな。

フローリングに直接座っていた状態から立ち上がり、側のベッドの縁に腰を下ろす。

その横を、そこに座るのを促すようにポンポンと叩いたので、俺もゆうなの横に座った。

俺よりも頭半分ほど高くにあるゆうなの顔を見上げ、視線が合う。

と、ゆうなの口を開く。

「あなたは、最初から菅原さんに操られているの」

事実を告げるように、確固とした態度。

「最初、あなたは这个世界がパラレルワールドなんじゃないかって考えたでしょ？」

「うん、考えたよ」

「それは以前、菅原さんからその話を聞いていたから。菅原さんの話を思い出して、あなたはその結論に至ったの」

言うなれば、

「菅原さんに思考を動かされた。そうとも考えられるわ」

ゆたかにその話を聞いていなければ、俺はその結論に至れなかった。

混乱するだけ混乱し、ろくな推測もままならなかったかもしれない。

だが、現実にはゆたかからその話を聞いていたおかげで、今の考えにたどり着けている。

ゆたかに方向性を左右されたと言えば、そういうことになるかもしれない。

「次に、あなたは菅原さんに会うために大学に向かった」

うん、と頷き、

「あかりになったばかりで気持ちの整理がついてなくて、本当は大学に行ける状態じゃなかったけど……ゆたかが一番のあてだったから」

「そうね。パラレルワールドの話をしたのは菅原さんだったもの。頼るとしたら彼女が適任よね」

ゆうなが賛同してくれる。

が、

「けど、それも彼女が影響を及ぼしてる行動よね」

俺が大学に行こうとした理由は、前にもあるように、大学にゆたかがいたから。

以前にゆたかからパラレルワールドの話を聞いていたから、唯一のあてとしてゆたかを頼りにしていたのだ。

行動理由として、彼女ほど俺に影響を与えている人物は他にいない。

だから、彼女が俺に影響を及ぼしたと言うゆづなの話は正しいだろう。

次に、とゆづなは続ける。

「さっきあなたから聞いた、私があきらとあかりを入れ替えた間接的な原因になっているって話。これも同じく菅原さんがあなたに吹き込んだから、あなたはそういう結論に至ったの」

ゆたかが俺に吹き込んだ？

そこに反応し、俺は首を横に振る。

「俺に話してくれたのは、ゆたかじゃなくて菊地原先生だよ。言わなかったっけ？」

「ええ、聞いてるわ」

なら、と俺が言うより早くゆづなは続ける。

「あなたに直接話したのは菊地原先生かもしれないけど、その先生を呼んだのは菅原さんでしょ？」

「うん、そうだけど……」

「なら、菊地原先生は菅原さん側の人間ってことになるわ。あらかじめあなたに何を言うのか、菅原さんから菊地原先生に指示しておくことなんて容易だし、逆に私たちはそれを知る余地がない」

「えっと……つまり、菊地原先生が俺にしてくれた説明は、実はゆたかから菊地原先生にそう言うように指示していた可能性があるってこと？」

「可能性があるって言うより、私はそう確信してるわ」

その言葉通り、ゆうなの目には自信が満ち溢れているように見える。

自信を通り越し、それに囚われているようにさえ見えるほどに。

あまりに満ち満ちたゆうなの様子に言葉を失い掛けるも、その瀬戸際で保つ。

「で、でもさ、」

「ここからは俺の反論。」

「可能性は可能性なんだからさ、絶対ってわけじゃないでしょ？」

ゆたかが菊地原先生に指示していた可能性があるなら、していない可能性だってあると思う」

どちらかと言えば、していない方の可能性を信じたい。

それに、

「俺に起こった現象を予測するなんて無理だよ」

俺に起こった現象とは、つまりあかりとの入れ替わりだ。

人格が入れ替わることさえ滅多に起こり得ないことだと言つのに、俺とあかりの間には世界という壁が存在する。

それを乗り越えて入れ替わりが起ることを予測するなんて、予知能力でもなければ無理な話だろう。

まあ予知能力ではなく「起きるかもしれない」と予防線を張っていたのだとすれば、ありえないこともない。

が、その確率が確率だ。

平行世界を乗り越えて俺とあかりが入れ替わる可能性に備えて準備しておくなど、徒労の他ない。

例えるなら、この日本で一般人が流れ弾に備えて常に防弾チョッキを身に付けているようなもの。

そんなこと、滅多にもありえないというのに。

「そんなことないわ」

ゆうなはキッパリ言う。

「だって、あなたを誘導したのは彼女なのよ？ あなたに前もってパラルワールドの話をして、そうなったら彼女の元に赴くように仕向けていた。そこまで準備を万端にしておいたなら、そうなることを予見できていても不思議じゃないわ」

「別に準備万端だったからって、予測してたとは限らないんじゃない？」

俺の反論に、ゆうなは首を横に振った。

「なら、こう考えてみて」

それからゆうなは、おとぎ話を語るような口調で切り出す。

「ある晴れた日、天気予報でも降水確率はゼロパーセントの日中に、傘を差している人がいました。それは日傘ではなく、どこにでもあるような普通の傘。そうね、日除けできないビニール傘を思い浮かべてくれるといいわ」

言われ、燦々と太陽の照りつける道中に、ビニール傘を差している人が佇んでいる情景を思い浮かべる。

「なんか、すつごく変な人」

「ええ。雨も降ってないのに傘を差してるなんて、普通だったら考えられないわ。それも、日除けのためでも何でもないビニール傘。どうして？　って思うでしょ？」

「うん。紫外線避けたいなら黒い傘とか、日傘用のがあるしね」

「そう。でもそれからすぐに雨が降り出すの。小雨なんかじゃない、本降りの大雨がね」

「雨が……」

この話の前提としてあったのは、晴れ渡った日中という天気と、降水確率ゼロパーセントのほとんど確約された晴天。

それを覆して雨が降るといふのは、そうあることじゃない。

しかし、それでもこの話では雨は降り出したという。

「その突然の大雨に、道行く人は大変な目に遭いました。急に降り出した雨に予防もできず、服がびしょびしょに濡れてしまいます」

確かに雨なんて降るはずがないと思っているところに降られたら一溜まりもないだろう。

折りたたみ傘を常備しているならまだしも、そうでないのなら濡れることは必死だ。

だが、そんな中にも例外はある。

「しかし、ビニール傘を差していた人は大丈夫でした。元から傘を

差していたので全く濡れなかったのです。おしまい」

言い終えたゆうなは、そこでふう、と一息。

「どう？ 私の言いたかったこと伝わったかしら？」

えっと、と前置いて考え始める。

ゆうなの言いたかったこと、というのは、今の例え話から伝えようとした概念的事柄だ。

例え話とは、分かりにくい事柄を別の事柄に例え直すことによって、そのニュアンスを伝えようというもの。

つまり、ゆたかが俺とあかりの入れ替わりを予測していたことを、今の例え話に変えてニュアンスを伝えてきているのだ。

だから、今話してくれた例え話について考えてみる。

特徴的、というより話の主体に挙げられていたのはビニール傘を差していた人だ。

降水確率ゼロパーセントの晴天にも関わらずビニール傘を差しているというおかしい行動を取っていたその人。

しかし、それからすぐに雨が降り出すも、事なきを得る。

あらかじめビニール傘を差していたおかげだ。

よってビニール傘を差していた人だけは濡れずに済み、その他の普通にしていた人は濡れてしまう。

そんな例え話の展開から得られるのは……、

「なんか、ビニール傘を差してた人が、雨が降るのを知ってたみたい」

「ええ、そうね」

ゆうなは俺の解答に満足したように頷く。

「普通なら降るわけがないと思って手ぶら、せめて折りたたみ傘をカバンに入れておくくらいの予防しかないわ。雨が降らないのに傘を持ち歩く必要はないもの」

けど、ビニール傘を差していた人は違う。

「でも、その人はビニール傘を差していた。持っているだけでなく、降ることに対応できるように差していたの」

一息。

「そんなの、雨が降るのを予測してたに決まってるじゃない。本人に聞かずとも分かる。予測できたからビニール傘を差してたに決まってるわ」

「確かに……」

そこまで完璧に準備された状態で待機していて、実際に雨が降った。

どうやったのか分からなくとも、何かしらで予測できていたのか、雨が降る低確率に賭けていたのかのどちらかと考えられるだろう。

でなければ、晴天でビニール傘を差していた意味がない。

だから、可能性は二つ。

本当に雨が降ることを予測していたのか、降水確率ゼロパーセントにも関わらず雨が降ることに対して予防線を張っていたのか。

そのどちらかの可能性が高いかと言うと

「予測していた、かな」

どちらも低い可能性だと思う。

けど、さも自信満々にビニール傘を差して待っていた人を目の前にしたと考えると、予測できていたのではないかと勘ぐってしまう。

人の心理とはそんなものだ。

例えその人にそんな力がなかったとしても。

「でしょ！ やっぱりあなたもそう思ってくれるのね！」

よほど俺の意見と合致したことが嬉しいらしい。

飛び跳ねるように喜んで笑うゆうなは、俺の手を取り握手を交わす。

その本当に嬉しそうな笑顔が、なんだか久々な気がした。

つまりゆうなが言いたいののは、ビニール傘の人もゆたかも同じだということ。

ビニール傘の人は、まるで雨が降ることを予測できていたようにビニール傘を差していた。

ゆたかは、まるで俺とあかりが入れ替わることを予知していたように、俺にパラレルワールドについての話をしてくれた。

それが同様と言うのだ。

俺はゆたかの件に関してもゆうなに同意したわけではなかったが……。

ゆうなの嬉々とした笑顔を見ると、開こうとしていた口が酷く開けづらくなる思いがした。

「これで、菊地原先生が菅原さん側の人間だって分かったでしょ？」

今の例え話の件から得たのは、菊地原先生が俺に話してくれた世界についての話や、元の世界に戻るかもしれないという話。

それらがゆたかによって捏造されていたかもしれない、ということだ。

ゆうなからすればゆたかが話を作ったのは確定事項のようだが、俺はちよつと……。

やはり、友人としてゆたかを信用したい面がある。

だから否定の代わりに沈黙で応えたのだが、

「でね、その中でも一番大きいのは」

ゆうなは気に留めもしないように続ける。

「一番大きいのは、レスビアンについて学べ。その指示をしたのも菅原さんだってことよ」

「まあ、そうだね」

菊地原先生の話をゆたかが作っていたなら、それもゆたかが指示していた内容になる。

ゆたかと菊地原先生の関係を考えれば、指示と言うよりも、そう言ってくれるように頼んだのだろぅが……。

とにかくそうしたヒントも、ゆたかが意図していた可能性は無きにしもあらずだ。

でも、それが一番の大きなこと？

意味をはかりかね首を傾げると、ゆうなが補足してくれる。

「レスビアンについて学ぶために、菊地原先生はあなたに何をしろって言ったのかしら？」

「それは」

答えるべく思考を言語化し、そこでハッと気が付いた。

ゆたかとセックスしろ。

俺は菊地原先生にそう言われた。

が、もしそれがゆたかの指示通りだったなら

「ゆたかと俺がセックスしようとしてたのも、ゆたかの企みだった……？」

「ええ、そうよ。そう見て間違いないと思うわ」

俺の言葉の返答に得たのは、自信に満ちあふれたゆうなの頷き。

ゆたかと俺がセックスをしろという指示を出したのは、菊地原先生ではなくゆたか本人。

ゆたかが菊地原先生の協力を得ていたという説を信用するなら、そういうことになる。

菊地原先生が出した最終的な結論は、レズビアンについて学べ、そのためにレズビアンであるゆたかとセックスしろということだ。

もしゆたかが菊地原先生の言葉を指示していたのなら、その結論さえもゆたかが指示したのと同じこと。

だからゆうなの言うとおりなら

ゆたかは、俺とセックスするのを誘導していた……？

「だって彼女、あかりのことが好きだったのよ？ あなたとエッチしたいなんて、動機として十分だわ」

「……確かに」

小さく頷く。

ゆたかは、あかりのことが好きだったのだ。

買ったばかりのケータイであかりを盗撮して、それを待ち受け画面に設定してしまうほど。

時折、冷静さを欠いて性欲に暴走してしまうほど、ゆたかはあかりのことを好きだった。

同時に、あかりとセックスすることを望んでもいた。

俺とセックスすることが決まったとき、あれほど嬉しそうな言動、表情をしていたのだ。

よほど望んでいたことに違いない。

恋人でなくセフレでも構わない、と言っていたほどなのだから。

だから、もしゆたかが俺を操っていたとして、最終目的に俺とのセックスがあつたとしたら

ゆうなと言うとおり、動機として十分なのではないか？

そういう思考が、頭の片隅に巣くつてきた。

「さあ、あなたを欺く力は十二分にある。その動機も確定した。ここまでくれば納得できるんじゃない？」

さも勝ったように得意げな笑みを見せるゆうな。

それに思ふことはあれど、

「……………」

うまく反論を返すことができない。

現に俺のゆたかを信じたい気持ちだが、ゆうなの思考によって侵されてきているからだ。

ゆたかの嘘をつく力は、風呂の件で証明された。

嘘をつくだけの動機は、今の話で結論付いた。

だから、ゆたかが「する」か「しない」か、その選択肢のどちらを選んだのかによって全てが決まってしまう。

もし「する」を選んだのであれば、ゆうなの話は全て事実。

ゆたかの企みによって、俺はゆたかとセックスするという選択を誘導されたことになる。

が、逆に「しない」を選んでいたら、今までゆうなが話したゆたかの疑わしい行動は、あくまで結果的に怪しくなってしまったものであり、他意はなかったということになる。

故に、可能性は二つに一つ。

ゆうなが散々怪しいと言ってきたゆたかの行動は、狙い故の必然だったのか、それとも偶然にそう見えてしまったのか。

その内の一つが、真実。

「私はね、」

ゆうながこちらを見、話す。

「私は、偶然が重なることなんてありえないと思うの。偶然なんて、そう起こりえることじゃない。なのに、それが重なって起きるなんて……どう考えても怪しいわ」

だから、と言う。

「偶然が重なるのは、誰かの作為的なもの。偶然を装った単なる人為的なもののよ」

ゆうなの視線と俺のそれが合致する。

怖いくらいに、寸分の狂いもなく見つめ合う。

「たまたま菅原さんは嘘をつくのがうまくて、たまたま菅原さんがあなたにパラレルワールドの話をして、たまたま菅原さんはあなたに好意を抱いていて」

一息。

「こんなの、ただの偶然のはずがない。絶対に彼女が仕組んだことなのよ」

その言葉に裏を感じることはない。

嘘をつくのが苦手なゆうながこう言えるというのは、それだけ真

に迫っているということ。

確信を得ているのだ、自分の仮説に。

「それにね、」

ゆうなは続ける。

「あなたとエッチするのが確定してからも、彼女は狡猾だったわ」

「狡猾だった？」

「ええ。彼女がシャワーを浴びてるところを私が目撃したときの饒舌さはあなたも分かってるでしょ？」

「うん」

再三挙げられたように、風呂場でのゆたかの嘘は、咄嗟のものにしては秀逸だった。

少なくとも俺では、前もって考えておかなければあの嘘はつけないだろうというほど。

「でも、彼女の狡猾なところはそこだけじゃない。あなたとセックスしようとしていたのがバレたら、今度は私とあなたの仲を保とうとしたのよ」

「え………？」

俺とゆうなの仲を保とうとしたことが、ゆたかの狡猾さ？

確かにゆうなに事がバレたとき、ゆたかは何よりも俺とゆうなが仲違いしないように働いてくれた。

事情を話せば分かってくれる、と自分を除いても俺とゆうなに話す場を作ってもくれた。

それを取り上げて、狡猾だなんて……。

「まあ普通に考えたら、それが狡猾には思えないわね」

俺の表情から察したのか、それともそう思うのを予測してか、ゆうなは言う。

「彼女の行動　まずあなたとエッチしようとしていたのがバレないように嘘をつく。バレないのが一番だからね。疑いの目を向けられたとしても、それを相手の思い違いだって勘違いさせられれば事なきを得るもの」

「う、うん」

「次に嘘がバレてしまった後。彼女は「事情を話せば分かる」の一点で押してきたわ。それだけ、その事情に自信があっただけでしょうね。現にあなたから聞いた限りでは、そこにあなたたちの意思は薄い。仕方なくそう行動していたって言わんばかりにね」

でも、とゆうなは言う。

「でも、それは本当に仕方なかった場合の話。菊地原先生に言われるがまま行動するしかなかった場合だけなのよ」

そこで、ゆうなは俺の両肩に手を置く。

諭すように、力強く。

「あなたはもう知ってるはずよ。そこに仕方なく、なんて彼女には存在していなかった。全ては彼女の思うがままだったってことを」

栗色の柔らかい髪が、微かに茶色掛かった瞳が、俺の視覚野に迫る。

「全部彼女が仕組んだことだった。なのに、彼女はあの場であんな行動を取った。そんなの、一つしかないわ」

またぐつと距離が近付く。

もう少しでも顔を寄せればキスできそうなくらいまで。

口を開く彼女の息が、柔らかく鼻先に触った。

「彼女は自己擁護のために善人を演じたの。私とあなたの仲を壊さないように心掛けた行動に見せかけて、彼女自身の立場を守りにいったのよ」

ゆたかが、自分を守りにいった……？

思いを口に出したのかは分からずとも、ゆうなはその解を頷きを持って返してくる。

そして、

「今の状況を作ったのは誰か、分かる？」

「えっと……」

今の状況というと、ゆうなに本当の事情を聞いてもらっ場だろうか。

今は流れが変わっているものの、元はそういう目的で話をしていたのだ。

だから、そうした場を設けるために働いたのは……、

「ゆたか、かな」

「ええ、そうよ」

浮気紛いのことをし、なおかつそれを誤魔化そうとさえたのだ。

本来ならゆうなを怒らせるだけ怒らせてしまって、こうした弁解の場など与えられるはずもなかった。

そこで頬を張られ、以降音信不通になるという最悪の事態さえありえたかもしれない。

だが、実際にはそうなっていない。

ゆたかが尽力してくれたおかげだ。

どうしても聞いてほしい、事情を話させてほしいと、泣くしかなかった俺に代わってゆうなを引き止めてくれた。

故にこの状況作ってくれたのは、ゆたかということになる。

だが、

「私も騙されかけたわ。一見して、彼女の行動はなかなか誠実に見えるんですもの」

ゆうなは言う。

「でもそこで欺かれちゃダメ。彼女ほど狡猾な人間は他にいないんだから」

肩に置かれていたゆうなの右手が、こちらの頬へ。

優しい手つきで撫でてくる。

「彼女はそうして、あなたに尽くしてるように見せかけていたのよ」

「み、見せかけ……？」

ゆうなの手が、こめかみの辺りからあごの方へとゆっくり撫で下ろされていく。

それは愛撫にも似た感覚。

柔らかい触り方に一種の身震いを覚えた。

「そう。彼女はあなたに見せかけたの。私はあなたの味方だ。こうして彼女と別れさせないために力を尽くしてる、ってね」

言うなれば、それは偽善。

善い行いをしているように見せかけ、腹の中では別の意図があること。

それをゆたかがしたのだと、ゆうなは言う。

「普通、そうした偽善をするなら私に言われたからってこの場から立ち退かないでしょうね。彼女は口がうまいんだもの。どうにかしてこの場に残れば、どうしてもできそうだからね」

確かに、俺に対して偽善を働こうというならこの場に残るのが最良だろう。

大して口のうまくない俺に今後を任せるより、何倍も成功率が違ってくるのだ。

だからそういった偽善で恩を売ろうというなら、ゆたかがこの場にはいないのは非効率な気がしてならない。

だが、ゆうなは続ける。

「でも、だからこそ彼女は私に言われるがまま、ここから去ったのよ」

「そ、そうなの……？」

あえて最良を外した意味。

それは、ゆうな曰く単純なこと。

「ええ。だって一番適した答えを選び続けたら勘ぐられちゃうじゃない。その目眩ましのつもりだったんでしょ」

「え、えつと……？」

意味を飲み込めずに首を傾げると、ゆうなは笑った。

微笑むように、口角を僅かに上げて。

「つまりフェイントよ」

微笑みを称えたまま、ゆうなは言う。

「最善の行動ばかり続けたら、その人が何のために行動しているのかバレバレじゃない。だから、あえてたまに意味のない行動をして見せてかく乱するの」

続けてその具体例。

「ほら、サッカーとかのフェイントと一緒によ。ドリブルでディフェンスをかわすとき、右に避けるために一旦左に動いて見せたりするでしょ？ 本当は右に動くつもりでも、最初から右に動いたんじゃ相手にバレちゃうからね。だから見せかけとして左に動くの。それと同じことなのよ。分かった？」

「うん、なんとなく」

頷き、考える。

それを、ゆうなの言うゆたかの例に当てはめるなら

ゆたかの目的は、俺に対して偽善行為をして恩を売ること。

が、あまりにもあざとくそれを繰り返しては、その偽善に気付かれてしまうかもしれない。

だから、ゆたかはあえて今回の件でこの場から立ち退いて見せ、偽善ではない振りをした。

と、いうことになるだろうか。

そうゆうなに聞くと、

「うん、合ってる。やっぱり私の味方をしてくれるのね！」

と言って抱きつかれた。

後頭部を腕に抱かれて、ゆうなの首もとに顔をうずめる形になる。

「ちょ、ちよつと……っ」

ゆうなの長い髪が鼻先をくすぐり、体の柔らかい感触にドキリと
してしまう。

相変わらずこの抱かれる体格差には慣れないけど……どこか懐か
しい気持ちがして。

押し返そうとする手に力が入らないのが、自分でも分かるようだ
った。

「でもね、これは彼女の唯一のミスでもあるの」

ゆうなは俺を抱きしめたまま、俺の頭の匂いをかぐように鼻を押
し付け、言う。

「彼女からしてみればただのフェイントだったのかもしれない。あ
なたを騙した「事情」という名のついた嘘は、それだけ完成されて
いたからね。彼女がいなくても成功するって踏んでたに違いないわ」

ゆうながしゃべるたび、その唇が俺の頭皮をこそばゆくくすぐる。

「けど、私たちに考える時間を与えてしまった。それが彼女のミス
なのよ」

キュ、と抱きしめてくる力が少し強くなる。

腕ごと抱かれている右手は窮屈になって。

空いている手で押し返そうとしていた力は、もはやゆうなの肩に触れるだけになっていて。

対するゆうなは、俺の後頭部を抱く手でゆっくりと撫でてくる。

何となしにあやされている気分。

「そして、そのミスのおかげで私たちは真実にたどり着けた」

ゆうなは俺の頭から少し離れ、位置を僅かに下げる。

そこにあるのは、俺の耳。

ふう、と小さく吹かれた吐息にぶるつと身震いが起きる。

「う……っ」

くす、と小さく笑んだ彼女は、そつと柔和に囁く。

「もう分かったでしょ？ 悪は菅原さん。全部、彼女が悪いのよ」

「ゆたかが……悪い……？」

彼女の温かい体温からか、それともその安堵からか。

どうしようもなく思考が緩く静止していく。

ゆっくり、ゆっくりと速度を鈍く低下させて。

白く濁ったように曖昧に

「そう。菅原さんのせい。彼女さえいなければ、こんなことにならなかったの」

密着した体から、ほのかに汗の香りがした。

本当に……本当に、ゆたかが犯人なのだろうか？

ゆたかは、俺とあかりが入れ替わったなどという一見して馬鹿げた話を親身になって聞いてくれた。

聞いてくれただけじゃない。

俺と一緒に いや俺を先導するように対策、解決案を考えてくれ、自力では無理だと悟ると助っ人まで呼んでくれた。

それはゆたかの好意に他ならない。

そう思っていたのだが……ゆうなはそれを悪意と言う。

ゆたかと菊地原先生、二人で導き出してくれた現在における最善案。

レズビアンについて学ぶため、ゆたかとセックスをする。

そこに導くためだけに、ゆたかは俺に協力的な態度を見せたのだと。

そんなことがありえるのか？

今まで見てきたゆたかは、全て偽りだったとでも言うのか？

……分からない。

分からないけど、ゆうなの言葉に返せるのは、感情論。

ゆたかはそんなことをするようないやつじゃない。

あるわけがない。

そんな証拠もありはしない否定だけ。

ゆうなの話を聞く限り、可能性はあるのだ。

ゆたかが俺とあかりを入れ替わらせた犯人である可能性は。

状況から考えてゆうなが一番怪しいと踏んだゆたかと菊地原先生の推論と同様に。

「ねえ……」

頭の上からゆうなの声。

密着しているためか、少し痺れるような感覚と共に言葉が伝わってくる。

「あなたはどちらを信じてるの？」

「どちらって……？」

「私と菅原さんよ。あなたはそのどちらを信じてるの？」

信じているって、それはその人自身に対する信用のことか？

それに関してなら、二人とも十二分にある。

ゆうなは嘘をつけない性格だから言わずもがな、ゆたかだってなかなか実直な性格をしていると思う。

あかりのことで暴走してしまうのが何よりの証拠だし、ゆたかならずとも俺、あきららの友達であるたくやも信用にたる人物だ。

だから二人とも信じているし、それを比較しようなど……。

「これは、どれだけあなたに信用されてるかによるの」

「……どういうこと？」

「分からない？」

言葉を切り、ゆうなは俺から僅かに身を離す。

密着はしていないにしろ、抱擁されていると取れる距離。

「私の菅原さんを疑う説は、あくまで推論。私はそれに違いないっ

て思っけどね。それでも人を一発で信じさせられるだけの証拠はない。あなたが渋ってるのが何よりの証拠よ」

一つ息を挟む。

「でもそれは菅原さんの説も同じこと。二つの世界で私だけが性別が変わらないんだっけ？ だから私が怪しいと。そんなの、私と同じ推論よ。決定的な証拠なんてあったもんじゃない。そうでしょ？」

「う、うん……」

せつかく考えてくれたことを侮辱するようで嫌だが、確かにゆうなの言う通りだった。

二つの説共に状況からの推測に過ぎない。

「だからね、」

ゆうなは淡く微笑み、言う。

「これはあなたが選ぶだけ。私と菅原さん。どっちが信用できるかって」

「え、選ぶって……」

ゆうなの言葉に詰まる思いがする。

言葉だけじゃない。

差し迫ったようなゆうなの雰囲気にも当てられる。

「だってそうでしょ？ どちらも同じ推測だけの仮説。そのどちらかを選ぶとしたら、それは挙げた人の信用があるってことよ」

そう……かもしれない。

どちらかの仮説にあからさまな不備があれば別だが、両者共にそれらしきものを見つけることはできない。

仮説自体の信憑性は五分五分といったところだ。

だからもしそこで二つの仮説に白黒つけようと言うなら、判断材料を他に見つけることになる。

例えばゆうなの言う通り、仮説を挙げた本人の信頼性。

極端にするなら、片方は善人、片方は悪人の挙げた仮説。

そのどちらを選ぶか、というもの。

こんなの、どちらを選ぶかなど改める必要もないことだ。

善人は実は腹黒かったなどという引っかけがなければだが。

そしてそれは今回の場合においても同じこと。

仮説自体はどちらも甲乙付けがたい。

とあらばあとはゆうなかゆたかか、そのどちらかで判断するしかないわけで……。

「ねえ、選んで」

優しくも強く、真に迫るようにゆうなは口を開く。

「浮気するつもりなんてなかった。そう言ったでしょ？ あなたは菅原さんに騙されただけ。そう信じるわ。だから私を信じて。彼女である私を信じてよ」

すっと目を細め、伏せる。

「もう裏切られたくない……。今度こそあなたは私を選んでくれるでしょ？ レズビアンについて知ろうとしたとき、私を選んでくれなかったのと違って」

「う……」

良く言っ て頭の良い、悪く言っ て卑怯な聞き方だった。

二つの仮説、そのどちらとも決定打になりうるものがない現状、普通はどちらも視野に入れて模索するはず。

が、それは許されない。

今、何かしらの結論を迫られているのだ。

形式上は、二者択一。

ゆたかを信じるのか、ゆうなを信じるのか。

そのどちらかを選べと迫られている。

だが……負い目を晒されてなお二択と言えるのか。

負い目を決る形になるゆたかの仮説を、俺は選ぶことができる
言うのか。

……そんなの無理だ。

ここで間違えば、本当にチャンスを手放すことになる。

二度と取り戻せなくなる。

そんな状況で望まれない選択肢 ゆたかの仮説を信じるなどと
言えば……。

実質の一択

……ゆたか、ごめん。

ゆたかを信じていないわけじゃない。

けど……ここでゆたかを選んだらダメだと思っただ。

決意を胸に、やんわりと俺を抱くゆうなの顔を見上げる。

「決めてくれた？」

頷くと、俺の肩を抱くゆうなの腕に力がこもる。

「それで、もちろん」

「ああ、ゆうなを信じるよ」

言った。

己の意思に反することはなくとも偽るそれを、俺は確かに言った。

途端、ゆうなの表情が花開いたように笑顔に変わる。

「本当？ 本当に私を信じてくれるのね？」

「うん。俺はゆうなを信じる」

……これでいいんだ。

嘘が苦手と言われる俺でも、この嘘はばれない。

だって、ゆうなを信じている点に偽りはないから。

「良かった……本当に良かったあ……」

安堵の言葉と共に俺を抱きしめてくるゆうな。

先ほどまでの包むようなそれではない。

力いっぱい、何かを噛みしめるようにぎゅうっと抱きしめてくる。

「ゆ、ゆうな……苦し……」

「ありがとう……ありがとう、私を信じてくれて……」

抱きしめる腕の隙間を抜けてゆうなの肩を叩くも、聞く耳持たぬといった様子のゆうな。

息が詰まるくらい苦しい……けど、それもいいか。

言い方は悪いが、ゆうなの仮説はゆうなにとって非常に都合の良いものだ。

浮気未遂に至ったのは事実と前置きするも、俺が自ら望んで浮気しようとしたんじゃない。

ゆたかが言葉巧みに俺の意思をねじ曲げたのだと。

そこまでして、ゆうなは俺自身が潔白であると信じようとしてくれた。

だが、同時に不安でもあったはずなんだ。

何かを固く信じるというのは、同時に疑問に感じてもあるということ。

ゆうなの例で言うなら、俺は自分の意思で浮気したんじゃない。

そんなことがあるわけない。

きつと、ゆたかが作為的に俺を操ったんだ。

と、そんな具合に。

ゆうながあれだけ強く仮説を主張したのは、俺の心がゆたかに移ってるのではないかと思う不安を打ち消すためだったに違いない。

だからこんなにも力強く俺を抱きしめてくれるのは、それだけ俺を思ってくれたということなんだ。

……さすがに、ちょっと苦しすぎる感は否めないけど。

*

ゆうなに力強く抱き締められ、触れ合う肌が汗ばむ頃。

いい加減に息苦しくなり、離してもらおうと口にするが早いか、先にゆうなが口を開く。

「ねえ、ケータイ貸してくれない？」

「ケータイ？ 何に使うの？」

ゆうなを見上げ、首を傾げる。

「菅原さんと呼ぶのに使うのよ。私、菅原さんの連絡先知らないから。あなたなら知ってるでしょ？」

「ま、まあ」

知ってるとは言っても今日知ったばかりだけど、という言葉を飲み込み、代わりに疑問をぶつける。

「どうしてゆたかに連絡するの？」

「問い詰めるのよ」

さっきまでの雰囲気から一新。

ゆたかを疑う仮説を語っていたときのような、確固たるものを持っている目つきに変わる。

「犯人は菅原さん。それは分かりきったことでしょ？ だからここに呼んで問い詰めるの。元に戻せて」

「そんな……」

ゆたかを問い詰める……？

それはゆたかを疑うということ。

正確にはゆたかが犯人じゃないかと仮説を立てたところで疑いはあるのだが、今回のそれは一線を画している。

そんなこと……。

「……できないの？」

ずっとゆうなの視線が鋭くなる。

「私を信じてくれる。そう言ってくれたのよね？」

……俺の答えを聞く気なんてないようだった。

決まりきったことを、ただ順繰りこなしていくだけ。

そんな印象を受けるほど、ゆうなの中でそれが決めつけられているように感じた。

返答として何が正しいのか。

俺はまた、ゆたかを見限るような選択肢を選ばなければいけないのだろうか。

もしゆたかを呼びたくないと言え、ゆうなは裏切られた気持ちになるだろう。

ついさっき、俺はゆうなを信じると言ったばかりなのだ。

それを舌の根も乾かぬ今言え、手のひらを返したような印象を与えてしまう。

出来る限り、そういうことはしたくない。

だが、だからといってゆたかを呼び出していいものか。

ここでゆたかを呼ぶというのは、あれだけ協力してくれたゆたかを、それまでの行為は全て偽善だったに違いないと言い捨てることと同じ。

……そんなの、言えるわけない。

ゆたかは友達だ。

ゆたか本人とは一日にも満たない付き合いでも、あれほど友好的に接してくれたことを思えば、繋がりを浅く思えない。

だから、例えゆたかが犯人である可能性をはらんでいようと、それを直接口にするのははばかれてしまう。

でも……。

「ねえ」

思考を断つゆうなの言葉。

「ケータイ、貸してくれるでしょ？」

疑問が差し迫る。

これは逃げられない問い。

避けられない選択肢。

（……仕方ない、よな）

「……うん」

今はこの選択しかできないけど……ゆうなと別れさせないために
工面してくれたゆたかならきっと。

きっと、俺の気持ちを分かってくれる。

そう信じるほか、俺にはなかった。

部屋は、ある種の緊張に包まれていた。

俺は白いシートがよれたベッドに腰掛けており、自分で分かるほど肩を縮こまらせている。

視線を下に向けると俺の膝頭同士が触れており、あかりの体は内股なんだなと改めて思う。

そして、その正面には立ち佇むゆうな。

こちらに体を向けているが、視線の先は俺ではない。

ゆうなの手元　俺の携帯電話に向けられていた。

携帯電話を操作する電子音のみが部屋を支配する。

ゆうなの白い指が、確実に動作を先へと進ませる。

少しして、ゆうながこちらに携帯電話のディスプレイを向けてきた。

「菅原さんの番号、これでいいの？」

見ると、ディスプレイには菅原ゆたかの文字と、その下に電話番号の羅列。

アドレス帳機能で登録されたゆたかの情報に間違いなかった。

「うん、それで合ってるよ。ゆたかに電話掛けたことないから、その番号で繋がるかは確認してないけど」

「そう、ありがとう」

言って、ゆうなは再び携帯電話の操作に戻る。

といっても二、三度の操作ですぐ通話モードに移行する。

通話開始ボタンを押したのであろうゆうなは、俺の携帯電話を左耳に当てた。

部屋が静かなためか、呼び出し音が微かながらに聞こえてくる。

電話は、すぐに繋がった。

『もしもし菅原です』

ゆたかの名字、そしてその声に間違いなかった。

ゆうなの返答は、ゆたかの声が聞こえてからすぐ。

「もしもし菅原さん？」

『おや、その声は……』

先ほどの呼び出し音同様、ゆたかの声も聞こえる。

その声質はクリアと言えなくても、十分内容を把握できるものだ。

『おかしいな、こちらのケータイにはあかりの名前が表示されていたのだが』

「それで合ってるわよ。今あなたに電話掛けているのはあかりのケータイ。私はあなたの番号知らないからね。あなたに連絡取るために、あかりのケータイを貸してもらってるの」

『そうか。なら安心だ』

確かに今使われている携帯電話は、名義上あかりのものだ。

だが違和感というか、少し前にゆうなからあきは仮想上の存在だと言われたためか、“あかり”と呼ばれることに少なからず抵抗がある。

まあ口を挟むほどのものではないのだが……。

『ところで私に何の用だい？ 私に電話を掛けてきたということは、それなりの理由があるのだろうか？』

「もちろん。実はあなたに戻ってきてほしいの」

『戻ってきてほしい？ それは、私が先ほど出て行ったあの部屋にかい？』

「そうよ。私たち、あなたに聞きたいことがあるの。電話越しじゃ

なく、直接会ってね」

『直接……』

ふと思案するように言葉を切るゆたか。

だが次句を発したのは、思考する間もないほどすぐのことだった。

『分かった、今すぐ出向こう』

その言葉に、ゆうなは僅かに口角を上げた。

……ゆたかが来る。

そう認識した瞬間、心臓がどきりと跳ねる。

嫌な感覚だ。

胸の内を締め付けられるような閉塞感に襲われる。

「そう、来てくれるのね。良かったわ」

『構わないよ。私も私で思うところがあったからね、ちょうどよかった』

「あら、あなたからも私たちに用事があったの？」

『君たちと言うより、あきらにね』

「え……？」

電話越しに聞こえたゆたかの言葉に、思わず声が漏れる。

が、話は俺を置いて先へと進んでいく。

『そういうわけだから、すぐにそちらに行くよ。そうだね……十分もあれば着くと思う』

「分かったわ。待ってる」

『ああ』

そうしたやり取りの後、ゆうなは携帯電話を耳から離し、その通話を切る。

携帯電話のディスプレイは通話時間の表示から待ち受け画面へと切り替わり、ゆうなの手によって半分に折りたたまれ、

「はい、ありがとね」

礼の言葉と共に、俺に手渡された。

片手で渡すゆうなに対し両手で受け取り、膝に下ろす。

半ば放心状態のようだと自分でも分かった。

……ゆたかが来る。

ゆうなの仮説を認めたのは俺だ。

ゆたかを呼ぶよう、ゆうなに携帯電話を貸したのも俺だ。

でも……気持ちの整理はついていない。

ゆうなの言うように、ゆたかが犯人だと決めつけて責め立てるなんて、できそうにない。

不安に思う気持ちが体に伝わり、指先から小さく震えてきてしまう。

体の先から冷えていくような感じがした。

と、不意に体を包む感覚。

正面からゆうなが俺を優しく抱きしめている。

「大丈夫、私がついてる。だから怖がらなくていいのよ。二人でしっかり追及してやりましょうね」

……そうじゃないのに。

*

それから十分、いや十分さえ経っていないのかもしれない。

それほど短い時間で、我家のインターホンが来客を知らせるベルを鳴らした。

……きた。

おそらくゆたかに違いないそれを聞き、俺は腰掛けていたベッドから立ち上がる。

が、同時に隣に腰掛けていたゆうなも立ち上がった。

右手でこちらを制する。

「私が出るわ、待ってて」

返答を聞く様子もなく、ゆうなはすたすたと玄関の方へ歩みを進める。

なんだか手持ち無沙汰になり、結局ゆうなの後を追うことにした。

応答されるのを待っているインターホンの受信機を差し置き、ゆうなは直接玄関へと向かった。

着くなり、覗き穴から外を見る。

「菅原さんのようね」

確認したらしいゆうなは、その手を扉の取っ手へ。

と、不意に動きが止まる。

どうしたのかと思い見ると、ゆうなの視線の先には扉のチェーン。

あの先端の千切れたそれがあつた。

……何か言われるだろうか。

そう思うも、

「……」

ゆうなの口の代わりに開かれたのは、玄関の扉。

ギイ、と微かに軋みを上げながら扉が開いていく。

その開いていく隙間から徐々に見える高身長的女性。

ゆたかが、無表情に立っていた。

ゆたかのその高い身長は当たり前のように相変わらずだ。

確か百八十四センチあると言っていたか。

元の世界の俺の男友達にすら、それほど身長の高いやつはそういない。
ない。

加えて俺はあかりとなり、二回りほど小さくなってしまったせいで、ゆたかとの身長差はかなりのもの。

そのせいだろうか。

なぜか……無表情に佇むゆたかから言い知れぬ圧迫感を覚えてし

まう。

何か責められるような感覚……。

「意外と早かったのね。もっと掛かるかと思ったわ」

しかしそう感じているのは俺だけのよう。

何の気なしに、いや僅かに敵意を表面に出しながらも、ゆうなはゆたかに話しかけていた。

対し、ゆたかは表情を消したまま答える。

「早く着いて当然さ。私からここに向かう道中だったからね。ちょうど良かったんだ」

「ここに来る……？」

疑問をあげたのは俺だ。

「ああ。あきら、君に直接話したいことがあったからね」

そう言えば先ほどの電話越しでもそう言っていた。

俺に直接話したいことと言うと……何だろう？

皆目見当が付かない。

「それより先に上がらせてもらえないかい？ この時期にもなると夜は冷えてね。上着がなくて困っているんだ」

見れば、ゆたかは半袖シャツ一枚にジーンズとラフな格好。

九月中旬の夜ともなれば、残暑厳しいとは言え十分に涼しくなる。

肌を感じる肌寒い外気とゆたかの服装を思い、中に通すことになった。

無論ゆうなからの反対もない。

こうして三人、再び我が家唯一のワンルームである居間に集結する運びとなった。

*

「さあ、話を始めましょうか」

三人が部屋に上がり、それぞれ落ち着いた位置にいつてゆうなが切り出す。

俺はベッド側でゆうなは浴室側、そしてゆたかは玄関側にそれぞれ佇んでいる。

両腕を胸の下で組んでいるゆうなの表情は、僅かに笑みを得てゆたかに向けられている。

「あなたからも話があるようだけど、それは後回しでいいかしら？できればこちらから話したいのだけど」

「いや、待つてほしい」

そこにゆたかが分け入る。

「申し訳ないが、私の方から話をさせてほしいんだ」

「あら、どうして？ そんなに大事な話があるの？」

疑問に小首を傾げるゆうなに、ゆたかはやや大げさとも取れる動きで頷く。

「ああ、君の話を遮らせてもらっただけだからね。私にとって 君にとっても大切な話だよ」

「……私にとっても？」

ゆうなは怪訝そうに眉根を寄せる。

「そう、君にとっても。なぜなら、おそらく君が話そうとしていることと、私があきらに話そうとしていることは同一の話題だからだ」

同一の話題

ゆうながこれから話そうとしているのは、俺たちがゆたかが今回の件の犯人ではないかと疑っていることだ。

それと同一と言うと……。

「ちょ、ちょっと待って」

右手を前に出し、俺が話の流れを切る。

「何でゆうなの話そうとしてることと一緒に思うの？ 俺たち、まだ何にも話してないんだよ？」

俺の疑問は口に出したそのままだ。

ゆたかには、今から話そうとしていることについて何一つ告げた覚えはない。

この話をしようと行動を移してから、あつたのは先ほどの電話と今までの僅かな会話だけ。

それなのに……。

「おや、あきらは忘れたのかい？」

何でもないことのように、ゆたかは言う。

「私には、おじいちゃんとおばあちゃんが憑いているんだ」

「え……？」

ゆたかにその祖父母が守護霊として憑いていることは知っている。

たくやにもそれが憑いていたし、ゆたかから直接話を聞いてお節介焼きなのはたくやのそれと違っておじいちゃんの方であることも聞いた。

だが、それが何だと言っただ？

俺の疑問は、どうしてゆたかがゆうなの話そうとしていることを知っているのだ。

もしゆたかの話そうとしていることとゆうなの話そうとしていることが本当に同一であったのなら、何かしらの手段をもってそれを成したことになる。

その説明を請うて返ってきた答えが、今のゆたかの発言。

ということは……、

「……あ

そこではっと気が付いた。

「何、どういうことなの？」

俺のあげた声に反応し、ゆうながこちらに話しかけてくる。

不機嫌そうにしているのは、恐らくゆうなが嫌いだと明言していたオカルト染みた話題になっているからだろう。

「ほら、前に一度話したことがあるだろ？ ゆうなはあんまり好きじゃない話題だったみたいだけど」

それは、俺とゆたか 正確には俺とたくや が出会ったときの話。

守護霊である祖父母が単独で動き、その授業で抜き打ちテストがあることをあらかじめ知れたあの話だ。

今回の件は、話のそれと酷似している。

つまり、

「俺とゆうなが話していたことを、ゆたかのおじいちゃんかおばあちゃん、あるいはその両方が聞いていた。でしょ？」

「ああ、それで合っているよ」

肯定の形でゆたかが口を開く。

だが、その表情は強く無に固められている。

「本来なら話し合いの結果は君たちから直接聞くべきだった。その場を立ち去った以上、そうするべきだと思ったからね」

けど、と続ける。

「あきらには前にも言ったよね。私のおじいちゃんは、酷く世話焼きなんだ。私の意思に反するほどにね」

「……ちょっと待ちなさいよ」

どきりとするような低い声。

それをあげたのは、機嫌悪そうに目を細めているゆうなだった。

「あなたたち、何わけ分からないこと話してるの？ 守護霊？ おじいちゃん？ そんなの、いるはずないじゃない」

「いないことはないさ。君には見えないだけ」

「うるさいっ！ いないって言ったらいないのよ！」

怒鳴られた声に、思わず体が弾かれたように震える。

ゆうなは強くゆたかを睨みつける。

「前にも言ったでしょ？ そういうオカルトなことは、ありえないの。あっちゃいけないことなのよ」

「……」

あまりに断定的な言葉に、一瞬ゆたかは返す言葉を失う。

少しの間を空けて、ゆたかは口を開いた。

「……だが、おそらく君と私の話は同じことだ。その説明はどうするんだい？」

「盗聴よ」

即答。

「まだ答え合わせをしてないからよく分からないけど、もし合って

たらそれは盗聴よ。盗聴に違いないわ」

そこでゆうなは視線をゆたかから逸らし、上に泳がせる。

「だってそうじゃない。それしかありえないわ。きっと、私たちが預かり知らぬところで盗聴器を付けられたのよ」

「そんなことは」

「黙ってよ」

ゆたかの反論をぴしゃりと断つ。

「ならどうしてあなたはさっき、何の躊躇いもなくこの部屋から出て行けたの？ 盗聴器があるからよね？ 盗聴器があるから、安心してこの部屋から離れられたのよね？」

「……」

「それでもし合っても納得がいくのよ。盗聴器、盗聴器がこの部屋のどこかにあるんだわ。ね、そうでしょ？」

疑問に向けられた視線は、他ならぬ俺だった。

「え、えつと……」

ゆうなに返事を求められている。

そしてそれは、肯定的な返ししか認めてはくれない。

ゆうなのそれは、そういう質のものだ。

だからゆうな側に立つのなら、求められるのは頷き。

添えられるのは、せめて「うん」と一言くらいなもの。

それを求められることに気づきながらも、

「ゆうな……それは、ちょっとおかしいよ」

俺は、躊躇いがちに首を横に振った。

「……なに？」

急激にゆうなの声音が低くなる。

それに言い知れぬ恐怖と不安が渦巻くも、俺の出した答えは変わらない。

「俺にはゆたかのおじいちゃんもおばあちゃんも見えないから、その二人が本当に守護霊なのか、証明することはできない」

けど、

「けど、ゆたかは盗聴器なんか付けていない。付けられる時間なんてなかったよ」

「そうとは限らないじゃない。あなたが目を離れた隙に付けた可能

性があるのよ?」

「可能性自体はあるかもしれないけど……それはすごく低いよ。だって」

話すのは、ゆたかがうちに着いてから出て行くまでの行動。

ゆたかはうちに着き、少しの会話はあったもののすぐにシャワーを浴びた。

そして浴びている最中、ゆうなは訪問があり、浴び終わった直後には俺と会っている。

その後は僅かに三人で話をし、結果、ゆたかはこの部屋を去った。

「これだけ詰まった行動をしていたんだ。盗聴器を付ける暇なんてあるとは思えないよ」

付け加える形で述べるのは、ゆたかがこの部屋に来た理由。

それは、俺がラブホテルの代わりにと勧めたことだ。

ゆたか主体の行動でないのだから、そこにゆたかの意思は入りがたい。

つまり盗聴器を付ける準備をできるはずがないということ。

そのことを告げ終えると、ゆうなは視線を下に向け、押し黙った。

「それにさ、」

返答がないことを確かめ、俺は続ける。

……けど、思えばこのとき、俺は調子に乗っていたのかもしれない。

「ゆうなの言ってた、ゆたかがこの部屋を去ったときに躊躇がなかったって件、それもおかしいと思う」

あれだけ肩身の狭い思いをしていた俺が、止められることなく話せられて気を良くしていたに違いない。

「ゆたかが盗聴器を仕掛けていたから、ゆたかは躊躇いなくこの部屋を出て行けたって、ゆうなはそう言ってたけど、」

そうでなければ、下唇を噛み締め、握り拳を締めていた彼女に気づかないなんて……。

「その前にゆうなはこうも言ってたじゃないか。ゆたかが出て行ったのは、俺たちに真意を悟らせないためだって」

また饒舌に、俺は語りすぎていた。

「これって、なんだか矛盾して」

「矛盾なんかじゃないっ!!」

驚くような声だった。

悲痛に叫ぶような、鼓膜を激しく揺さぶる声。

「矛盾なんてしてない！ 矛盾なんてするわけがない！ 私の中では正しいの！ 私の中ではこれが正しいのよ！」

怒鳴り、続け、繰り出す。

「菅原さんには盗聴器を付ける隙があったわ！ あなたが目を話している隙よ！ 例えば彼女がシャワーを浴びる前の脱衣所。例えば彼女が去る間際、玄関に。あなたはずっと菅原さんを監視してたわけじゃない。なら可能、ありえる話なのよ！」

ぎつと俺を睨み、見下ろす。

「それに盗聴器の準備も可能よ！ だって前々から用意しておけばいいんですもの、わざわざ今日に合わせる必要なんてないわ！ 盗聴する気が前からあったなら全然余裕じゃない！」

恨み、憎むような視線。

「あと彼女が出て行けた理由？ 簡単よ、彼女は真意を隠し、かつ安心できる材料があっただんだもの。矛盾なんてしてない！ 二つの理由が重ねられただけなのよ」

言葉を吐き出す彼女は、それこそ何かに取り憑かれているようだった。

「どう、反論できる？　できるならしてみなさいよ、ねえ！」

「……っ」

口を閉じ、沈黙しか返せなかった。

……ゆうな、どうしたんだ……。

確かに、俺はゆうなの意見に対してぶつかるようなことを言った。それは賛同を求めていたゆうなにとって、さぞ不愉快なことだっただろう。

だが、それはここまで取り乱すほどのことなのか？

怒りに似ているが、それとはどこか性質が違う。

動揺にも近いかもしれない。

そんな激情に、今のゆうなはのまれている。

「返事しなさいよ！」

だん、と強く踏まれた床。

そちらに意識を取られ視線を下に向けた途端、俺の胸ぐらが引つ張り上げられた。

ゆうなが俺に近づき、両手で胸ぐらを掴んだのだ。

「うぐ……っ」

「あきら!」

ゆたかの声が響くも、締められたワンピースの襟元が首に食い込み、言葉が詰まる。

それどころか呼吸をも圧迫する。

強く掴まれているせいで、体ごと持ち上げられて足がつま先しか着かない。

く、苦しい……!

「ゆうな、落ち着くんだ!」

「あなたなんか呼び捨てされる覚えはない!」

引き離そうと分け入るゆたかに、ゆうなは肩でゆたかを押しやる。

「いいから手を離すんだ! そのままじゃあきらが」

「大体何なのよ、さつきから“あきら”“あきら”って!」

意識が揺らいでくる。

白く霧に包まれるように、フェードアウトする感覚。

「この子は“あかり”なの! あなたの言うような“あきら”じゃないのよっ!」

おそらく、その瞬間に俺は突き飛ばされる形でゆうなから助けられた。

が、意識は遠のく。

腰から床に打ちつけ仰向けに倒れ込む感覚は、一枚隔てた向こう側のそれのようだった。

*

黒い空間。

まぶたを閉じたときのような、ほのかに明るくも暗く閉ざされた空間。

そこに、誰かいた。

見えるのは白い姿。

……ワンピース……？

白のワンピースを着ている、背が低く線の細い誰か。

その人が手を伸ばせば届きそうなほど近くに立ち、こちらを向いて何か言っている。

その人の顔は見えない。

見えないけど、どうしてか何か話していることは分かる。

声も聞こえない。

聞こえないけど、その人の言葉は伝わってくる。

『忘れんなよ』

その人の 女の子の言葉。

聞こえた瞬間、霧がかかる。

それは黒い霧。

通常であれば白く見えるはずのその黒いものが、女の子を俺の周りを包んでいく。

あっという間に染まりゆく。

『今度こそ、忘れんなよ』

それが、その世界の俺が意識を失う直前に聞いた言葉だ。

*

目が覚めた。

いや正確には、失いかけていた意識が戻ってきたというべきか。
頬に感じる微かな感触。

意識がはつきりしてくることにその感触も強くなり、頬をはたか
れていることが分かった。

「ん……」

それが俺を起こすためのものだと気づき、まぶたを開く。

一瞬眩しさに目を背けたくなるも、すぐに慣れた。

目の前には心配そうに眉尻を下げきつた表情のゆたかの顔。

「あきら……！」

それが急速に近づき、体を包まれる感触。

ゆたかが抱きついてきたらしい。

途端、

「けほっ……けほっ……」

気が付いたようにむせかえってしまふ。

無理に留められていた空気が暴れているようだった。

それから数回の咳き込みの後、ようやく痙攣するようだった呼吸
器が落ち着き始める。

まだ苦しさが残るが、これはきつと体自体が強くないためだろう。
華奢すぎる体に辟易しながらも、俺は意識を失い掛ける直前の出来事を思い出す。

確か、俺がゆうなに襟首を掴まれた際に首が絞まる形になって…。

はっとして、慌てて首を回してゆうなを探す。

それはすぐ近く、俺を柔らかく抱きしめているゆたかのすぐ後ろに立っていた。

「ゆうな……」

思わず声をかけた途端、

「……っ」

ゆうなは自身の体を抱き、ばつが悪そうに体ごと背けてしまう。

その姿に、胸にチクリと刺さる痛み。

「ゆうな」

今度声をかけたのはゆたか。

俺を介抱するように抱きしめていた体勢から移り、立ち上がる。

位置は変わらず、ゆうなのすぐ側だ。

「……なによ」

低い声音。

だがどこか弱々しく聞こえるそれを発したゆうなは、誰にも向かず壁を正面に据えている。

そのため、表情を伺い知ることはかなわない。

「今のはかなり危ないことだった。それを自覚しているね？」

語りかけ、諭すようなゆたかの言葉。

「詳しく知る由はないが、君があんなに乱れたんだ。おそらく私か、はたまたあきらか。そのどちらかが、君の逆鱗に触れるようなことを言ってしまったのだろう」

だが、

「だが、今のは本当に危なかった。相手が私だったらまだしも、あかりの体の弱さは君が一番よく知っているはずだろう？　なのに、そのあかりの体に入っているあきらに」

「……悪くない」

遮る形で、ゆうなが言葉を挟む。

「私は、悪くないんだから」

「……何を、言っているんだい？」

疑問を投げるゆたかの声には、僅かに怒気を感じた。

「私は悪くない。そう言ったのよ」

対するゆうなは、言葉に感情を乗せることなくのたまう。

瞬間、空気が動く気配。

ゆたかが背を向けるゆうなに迫り、肩に手を置いたのだ。

「悪いとか悪くないとか、私はそういうことを言ってるんじゃないんだ。君の行動がどれだけ危険なことだったかを」

「つまり、私を悪者にしたいんでしょ？」

肩に置かれたゆたかの手を振り払い、ゆうなは振り向く。

見えた表情は、陰。

何かを噛み締めているような、固い表情だった。

「あなたの言い分は、私がどれだけ危ないことをしたかを認めさせたい、でしょ？ それって私が悪かったって認めさせたいだけじゃない」

「そうじゃない。私は」

「違うわいよ。だってあなた、そんな目で私を見てるもの。害悪は私だって、そんな目で」

もしかしたら、それはゆたかの凶星だったのかもしれない。

そう言われた途端、ゆたかは虚を突かれたように黙りこくってしまふ。

代わりに出たのは俺だった。

「……っ」

何か声をかけようと思ったが、詰まった喉からはうまく言葉が出ない。

だから代わりに、俺は立ち上がってゆうなの左腕を引いた。

くいつと、こちらを向くように。

「あかり……」

意に沿って、ゆうなはこちらに顔を向ける。

表情は相変わらず険しいまま、声もどこか弱く聞こえる。

だが、

……“あかり”……。

呼んだ名は“あきら”ではなかった。

その事実と、俺が気を失い掛けた直前に聞こえた言葉。

『この子は“あかり”なの！ あなたの言うような“あきら”じゃないのよっ！』

それが指し示す答えに、胸が詰まる思いがした。

「ゆうな……」

果たして俺は聞こえる声を出せていただろうか。

不安に思いながら自身の喉に手を当てるも、その具合は分からない。

だからこちらに注視してくれているゆうなの視線が答えと信じ、俺は続ける。

「俺は “どっち”？」

ゆうなにとって、俺は“あきら”か“あかり”か。

その質問を、これだけの言葉足らずでもゆうなには伝わる。

そう確信する。

そして、それに対するゆうなの答えも、

「 “あかり”よ」

俺は、分かってしまう。

でも、分かることと納得することは違う。

だから疑問を投げかける。

「どうして？ さっき、俺があきらだって信じてくれたはずじゃ…」

「そんなこと、私は言っていないわ」

ゆうな言葉が俺を断つ。

「私はずっと、あきらは存在しないって思ってるの。他の世界からきたなんて、オカルトじゃない」

「オカルトだって……」

オカルトだって、現に起きている。

そう言いかけて、先ほどゆうながその話題で激変したのを思い出
し、言葉を途切る。

「……でも、ゆうなは言ったじゃないか」

代わりに言うのは、ゆうながしたゆたかを疑う根拠の話。

「ゆたかが犯人かもしれないって疑った一番の理由は、ゆたかの準備が万端すぎたからでしょ？」

一例として、俺とあかりが入れ替わる少し前に、ゆたかが（そのときは俺の世界だったからたくやが）パラレルワールドの話をしてくれたこと。

そのタイミングが良かったため、ゆたかがそれに合わせて企んでいたのではないか、と勘ぐるものだ。

「ええ、そうね」

返事は賛同的なもの。

が、ゆうなの次句は一気に色を変える。

「菅原さんがパラレルワールドの話をしたタイミングが、あなたを“勘違い”させるのにちょうど良いタイミングだったからね」

「勘違い……？」

声が半ば枯れるようになってしまったのは、果たしてどんな理由か。

分からずとも、ゆうなは頷きを見せてから続ける。

「あなたは勘違いしているの。自分はパラレルワールドからあかりと入れ替わったあきらだ、って」

俺が信じているそれを勘違いとするなら……、

「本当は、菅原さんによって作られた偽物の人格なのにな」

それは、俺がゆうなに事情を説明する前から言っていたゆうなの説。

それをまだ言ってくるなんて……。

「……分かってくれたんじゃないの？」

掴んでいるゆうなの左腕を引っ張る。

全く男らしからぬ行動だが、体がふらふらの俺にはこれくらいの行動しか移せない。

「俺は、いろいろとゆうなに説明して分かってくれたと思ってた。なのに……」

「やめてよ、そうやって同情を誘おうとするの」

「ゆうな……」

腕を振るわれ、微弱な力しか残っていなかった俺の手は払われてしまう。

「私は初めから分かったつもりなんてない。あなたから菅原さんに吹き込まれた事情を説明されたときだって、最後に私は否定したわ。それは菅原さんの陰謀だってね」

「……そうか」

ゆうなの言葉に返事したのは、しばらく立ち尽くしていたゆたかだった。

「私は不思議だったんだ。おじいちゃんから、あきらが私を犯人じゃないかと疑い始めてると聞いたとき、いきなり手のひらを返されたような裏切られた気持ちに襲われた。……でも、違っただね」

言葉尻に合わせて柔らかい視線で俺を見るゆたか。

次にそれを送られたのはゆうな。

ただし、俺のときとは違って厳しいものになって。

「ゆうな、君が原因だったんだ。君のその取り憑かれたような態度

が、あきらを惑わせていたんだ」

非常に高い位置から向けられたその視線。

自然と高圧的になりがちなそれを意図的に強く、そして責めるようにするのだから、それは酷く痛い。

こうして直接でない俺でさえ怖いと思ってしまっただけなのだから、ゆうなのそれは俺の想像を超える。

あれだけゆたかに対して臆することのなかったゆうなが、半歩引いた。

「君は先ほど私の視線を害悪を見るようだと言ったね。今それに答えよう。その通りだ。私は君こそ、害をなす悪者だと思っているよ」

酷く冷たく、そして鋭い言葉だった。

「あきらをあきらだ。あかりの容姿をしているが、それは人格のみが入れ替わったため仕方のないことだ」

向き合うゆうなの両肩に手を置くゆたか。

振り払おうとゆうなは身をよじるが、強いゆたかの腕力がそれを制する。

「それを否定するのは、あきらに失礼だ。ここはあかりの世界。

そこに、あきらはたった独りで迷い込んでしまった。その不安を、君は想像することもできないのかい？」

ゆたかの腕の強張りから、ゆたかがゆうなの肩を掴む手に力を込めたのが分かる。

「もし想像できずに今までの発言をしていたのなら、是非自分を鑑みてほしい。そしてどれだけ愚かだったか気づいてもらいたい。だが、もし把握した上であきらを否定していたとしたら」

「……っ！」

さらに力がこもったのであろう、ゆうなが苦痛に顔を歪め、小さく呻く。

慌てて間に分け入ろうと動くが早いか、ゆたかは言葉を言い切った。

「君は、蔑む価値もないくらい最低だよ」

言って、ゆたかはゆうなを突き放す。

その勢いはあまり強くなかったらしく、ゆうなは僅かにたたらを踏むだけだった。

が、問題なのは別。

ゆたかの言葉によって、ゆうなの顔に苦悶が浮かんでいたことだった。

ゆたか……。

言葉にならない思いが胸を打つ。

確かにゆたかは、これまでも非常に雄弁だった。

話すべきことは話すし、それに臆することはない。

やや芝居がかったようなしゃべり方で、ゆたかは今まで口数多く話してきた。

が、今回のそれは大分性質が違う。

悪意。

ゆたかが口にする言葉の中で、初めてそれを感じる類のものだった。

「……なによ」

聞こえるのはゆうなの声。

思考を切り見ると、両拳を強く握りしめ、ゆたかを睨みつける姿があった。

「何よ、何なのよ！ 何であなたに責められなくちゃいけないの！
？ 私は悪くないのに！」

「往生際が悪いね」

対するゆたかは、声色は静かながらも込められた感情に引けを取らない。

「君があきらを困らせ、悩まし、傷つけていたんだ。そんなことを、君は自覚すらできないのかい？」

「自覚も何も私は悪くない！ 私は悪くないのよ！」

「悪くない、悪くない、とそれしか言わないね君は。まるで何かの免罪符にすぎるとだが、その根拠とは何だい？ 是非とも君が悪くない理由を聞きたいものだ」

雰囲気は最悪。

険悪と呼ぶことさえ生ぬるいほど空気は張り詰め、触れている肌が切り裂かれそうな感覚がする。

……止めなくちゃ。

果たして俺が言える立場なのか甚だ疑問ではあるが、それでもこの二人はこうして喧嘩すべきじゃない。

こんな二人を見ていると胸が苦しくなる。

俺が二人をこんなにしてしまったかと思うと、罪悪感が全身を駆け巡る。

俺が、二人を止めなくちゃ……。

体が引きそうになってしまふのは、きっとこの体のせい。

俺よりもずっと体躯の大きな二人の迫力で気圧されてしまっているせい。

けど、なりふり構ってなんかられない。

足を一步前に、向かい合う二人の間に向かって。

口を開き、息を思いっきり吸う。

肺に溜めたそれが許容量の限界にまで達し、注目を逸らすための声量を出すのに充分と判断し、

「二人とも」

「黙ってよッ！」

俺の声をもかき消す叫び声。

今日一番のそれを発したのはゆうなだった。

一瞬その言葉を向けられたのは俺じゃないかと思ったが、ゆうなの視線は変わらない。

つまり、ゆたかに向けられた言葉だった。

「私はあなたなんか責められる立場にないの！ あなたは頭がおかしいのよ！ オカルトなんてありもしない幻を信じちゃってバカみたい！ どうかしてるの！」

「……心外だね」

ぴくりとゆたかの眉が反応する。

「私の頭がおかしい？ それは結構。私の分野に理解のない人間からすれば、私は大層頭のおかしな人間に見えることだろう。そのことについては自覚しているし、理解もしているつもりだ」

だが、と言葉を一度切る。

「ありもしない幻なんて否定するような言い方、それは気に食わないね。私はいい。私は頭のおかしな人間で構わないが 私のおじいちゃん、おばあちゃんを否定するのはやめてほしい。彼らは間違いなく己の意思で存在しているのだから」

ゆうなほど、いや全くといって声を荒げることのないゆたかだが、その威圧感は脅威。

はらんだ怒気の強さはゆうなのそれに負けずとも劣らずで、まるで俺たちの心を握り潰さんというばかりだった。

ぐっ、と握り拳を強くするゆうなの姿が見えた。

見えるゆうなの右手は、強く握られるあまり血の気がなく白んで

いる。

「……調子に乗らないで」

今度の声は、先ほどまでのそれと比べるまでもなく小さなもの。

だが、睨みつけているゆたかに臆している様子はない。

「あなたが正論を言うなんて、許されないのよ」

言葉を小さく区切る。

一言ひとこと、着実に意味を込めていくように。

「あなたみたいないな日陰者は、絶対に大手を振ったらいけないの。日陰者は日陰者らしく、相応に慎ましくしてなくちゃならないのよ」

そこで言い終えたらしいゆうなは下唇を噛み、何かこらえるようにする。

そうしたゆうなの言動に、含まれた意思のようなものを感じる。

何と言えば的確なのかは分からないけど……きっと、今のゆうなの言葉だけでは知れない気持ち。

それが込められている気がして、確かめようと口を開かんとするとき、

「君はずいぶんと理不尽なことを言うんだね」

俺よりも先にゆたかが言葉を発した。

その言葉、雰囲気、俺は二人を止めようとしていた意思が鈍っていたことを自覚する。

「ちょ、ちよつと待って！」

慌てて出た言葉は詰まりかけたが、それでもゆたかの次句を止めるには充分だったよう。

ゆうなに向けられていた視線の幾分か優しいそれがこちらを向く。

ゆたかが俺に何か言おうとするよりも早く、俺は口にする。

「や、やめよう？ こんな風に言い合ってたって何にもならないしさ、雰囲気が悪くなるだけだよ」

聡明なゆたかなら分かってくれる。

そう思って発した俺の言葉は、

「あきらは、ゆうなの肩を持つのかい？」

裏切られた。

「え、いや、そういうつもりじゃないんだけど……」

予想外のゆたかの返答に言葉が詰まる。

俺はただ、これから先さらにヒートアップせんとする二人を止めようとしただけだ。

ゆたかの言葉を止めたのは、その一手目だったから。

それ以外に他意はないのに……。

「なら、今の私を止めないでくれるかい？」

ゆたかは視線をこちらに向けたまま、しかし強さが増す。

「私はゆうなに侮辱されたんだ。それも大層理不尽な、納得のいかない侮辱のされ方をね」

「そんな……」

確かにゆうなの言葉はゆたかを蔑むものだった。

当人のゆたかからすれば、その憤りも納得がいく。

だが、ゆうなの“言動”はそうではなかった。

俺ですら気付けたそのことを、ゆたかが気付けないはずがない。

まさかそこに気を回せるほど冷静じゃないんじゃない……？

「ゆた、　　！？」

声をかけようとした瞬間だった。

俺が認識したのは、ゆたかがこちらに向き、その両手が俺の両肩に伸びてきたところまで。

気が付けば俺はくるりと体の向きを半回転させ、とんと背中に軽い感触。

俺の正面には表情を固く結んだゆうなが立ち、俺の口には大きなゆたかの手。

「んんっ……!？」

思いがけず出した声が封じられていたことで、俺はようやく現状を悟る。

俺は背中向かいにゆたかに抱き寄せられ、左手で口、右手で俺の両肩を抱くようにして動きを制限していることに。

「すまないけど、あきらには少し黙っててもらっよ」

そうしたゆたかの言葉が、俺を封じた動機になった。

「ん、んんーっ!？」

痛みを感じることはないものの、かなりの力で口を押さえつけられているためまともに声を出すことができない。

それはあまりに急な強行。

ゆたからしからぬ行動に、俺は取り乱してしまう。

「んーっ！」

俺を押さえるゆたかの姿勢はあまりに不備なもの。

動きと口の両方を押さえるのに片腕ずつ使っているため、並の相手であれば抜けることに難を覚えることはないだろう。

だが、

(う、動けない……っ)

その相手は誰であろう、貧弱なあかりの体だ。

俺の顔を半分ほど包み込む手にも、両腕の上腕を巻くように抱く腕にも、抵抗の効果が表れない。

身をよじらせようが、背中にあるゆたかの体に後頭部をぶつけようが、俺の腕を思い切りよく振ろうが。

それは、ゆたかにとって些細なものでしかないようだった。

「さあ話を続けようか」

俺が暴れ抵抗している最中にも関わらず、ゆたかは何一つ変わらぬ様子でゆづなに言う。

「……嫌よ」

だが、対するゆうなの動きは否定。

首を横に振り、俺を見やったあとゆたかを睨みつける。

「私のあかりから離れて。あなたなんかに触れる資格はない」

「確かにあかりは君のものだ。所有物という意味ではなく、恋人という間柄の上でね。だが残念なことにこれはあきらだ。決して君のものではない」

「いいから離れ」

「静かにしてくれないか」

ゆうなが声を荒げようとした刹那。

威圧感のみが痺れるように伝わるゆたかの言葉が、それを断ち切った。

「君と問答しようというつもりは一切もない。私はただ、君に怒っているんだ」

続けるゆたかの語気は決して強くない。

だがその一音ずつに確かな、まるで怒鳴られているような迫力を感じ取ることができる。

おかげで俺もゆうなも、ゆたかの次句を止めるに至らない。

「ゆうな、君は本当に最低だ。先ほどまでの言動からしてもそうだったが、今の言葉で確信した。君は見下げ果てた女だよ」

「……勝手に言えはいいいじゃない」

返答するゆうなの声が小さいのは、ゆたかに威圧されているのか、また何か思う節があるのか。

「なら勝手に言わせてもらおう。君は私を日陰者と言ったね？ それは日陰者という言葉の意味、それこそ侮蔑するレッテル貼りであることを理解した上でのことかい？ そうでないのなら今すぐ訂正してくれ。だが、もしそうだったとしたら……」

「意味ぐらい、理解してる」

言い含めたゆたかをよそに、ゆうなは胸の下で腕を組み、視線をこちらから見て右にそらしながら答える。

「オカルトなんてふざけた趣味、日陰者以外の何者でもないじゃない。そんなの、世間から隠れて目立たないように活動していれば」

「

「心外だね」

割って入るゆたかは矢継ぎ早に続ける。

「菊地原先生の言葉を借りるなら、オカルトは確かにマイノリティに他ならない。世間一般からすれば、さぞ奇怪なものに見えてもお

かしくないだろう。だがマイノリティと日陰者は同義ではない。何一つやましいことはないんだ。それを、どうしてなりを潜める必要があると言っんだい？」

そこまで言い切り言葉を止めたゆたかは首を横に振る。

「いいや、ない。そんなものはない。だからそれは君の偏見、差別に他ならない。最低の決めつけだよ、ゆうな」

ゆたかを止めなくちゃ……。

広くゆたかに触れているため、今の俺にはゆたかの些細な動きさえ伝わってくる。

ゆたかが小さく身じろぎするその動きから、話す際の声の振動まで。

ほとんど一心同体になったような気さえするほど、ゆたかの小さな動きまで俺には伝わってくる。

その内に一つ懸念があった。

ゆたかが僅かに震えているんだ。

威風堂々と論破しようとしているゆたからしくない、怯えているようなビクビクした震え。

初めそれは俺を押さえているため、腕を力んだことによるものだ

と思っていた。

だがどこか違う。

震えの中心はゆたかの腕ではなく、その体の方。

それもゆたかの力の入れ具合とは関係なく、しかしゆたかがゆうなを蔑むような言葉を発する度に強さを増す。

これがどういう意味なのかは分からない。

けど、ゆたかを止めなくちゃいけないってことは分かる。

でも、どうやって……？

浮かぶ疑問。

俺の、あかりの貧弱な体で今のゆたかの縛りを解けられないのは、
ついさっき試したばかりだ。

あかりの体なりの本気で、俺はゆたかから逃れようと体を暴れさせた。

でもダメだった。

ビクともしないわけではないが、それでもゆたかは俺以上の力をもって押さえ込んでくるため太刀打ちできない。

じゃあ、どうやって……。

どうやって俺はゆたかを止めればいい？

こうして悩んでいる間にもゆたかは言葉を紡いでいく。

自らを怯えるように震えさせながら、ただひたすらゆづなを傷つける言葉を投げつける。

どうにかして止めなくちゃいけないのに、今の俺じゃあどうにもできなくて……。

ゆづなに言葉を蹴散らしていくゆたかの注意を少しでもそらそうと、俺はゆたかの腕の中で身じろぎをする。

ゆたかの正面に触れている右肩を押し付けるようにし、左側の背中を僅かに空ける。

いつの間にかゆたかに触れ続けていた背中に汗がにじんでいたらしく、その隙間に感じる空気がどこか冷たく思えた。

「？」

そのとき、不意に音が響く。

それは突然のことと理解が追いつかず、もはや何の音が聞こえたのかさえ判断できない。

だがゆたかは言う。

「……こんな時間に来訪者かい？」

「……？」

口を塞がれて言葉を出せないながらも疑問符を出すと同時、間の抜けたような機械音が耳に届く。

インターホン。

それはゆたかの言葉通り、我が家への来訪者を示す音。

それが鳴り響いたのだ。

当然の疑問として、おそらくこの場にいる誰もが思う。

誰が来たのだろうか。

とりあえずの答えとして、俺はここからすぐ側にあるインターホンの受話器を取ろうと体を動かしたのだが、

「あきら、出る必要はないよ」

先ほどよりも幾分か強く体を押さえつけられ、動きを止められてしまう。

「こんな遅い時間に人の家を訪ねるなんて、いくらなんでも常識外れだ。こういうときは居留守をした方がいい」

聞き、確かに納得するところがあつた。

現状で正確な時間を知ることができないが、おおよそ夜も大分ふけているころだというのは推測がつく。

そんな時間に来訪があるなど滅多にないし、それを訝しむのも当然のことだ。

だがそれ以上に、ゆたかの発言には感じるものがある。

私の邪魔をしないでほしい。

そうした意図を、言葉端にピリピリと感じたのだ。

しかし俺はこの来訪者をきっかけにしたいと思う。

この来訪者の相手をするという名分であれば今のゆたかの拘束を解くことができるだろうし、現状を少しでも変えられるかもしれない。

そうした目論見でゆたかを見上げ、目で訴えてみるのだが、

「ダメだよあきら。出てはダメだ。もし君を狙った悪い大人だったらどうする？ 連れ去られてしまうよ？」

そこまで心配することだろうかと思う一方で、やはりゆたかは話の腰を折られたくないんだろうと感じる。

ならばと、ゆうなに助け舟を求めようと視線を向けるが、

「……」

目は合う。

けど、それだけだった。

口を真一文字に結んだゆうなは、ただ俺と視線を合わせてくれるだけ。

そこからは見受けられる感情ははつきりとせず、明確な意思を受け取れない。

ゆうな……？

疑問に思うのが早いのか、ゆたかの声と共にその痺れるような振動が体に響いてくる。

「それよりもだね」

案の定話を戻そうと、かなり強引な切り出しだ。

だがそれを断つように、今度は別の音。

ノック音が響いてくる。

それはドアを拳の関節部分で叩いたような、力は弱くとも音の通る叩き方。

それを二回ワンセットという形で鳴らしてくる。

「……しつこいお客さんだね」

見上げれば、舌打ちでもするんじゃないかと思うほど不機嫌そうな表情が浮かんでいる。

よほど気に入らない割り込まれ方だったのだろう。

その表情に、向けられていないながらも恐怖を覚えるも、

「あきら君にゆたか君、いるんだろう？ 居留守は実に良くないぞ？」

共に聞こえてきた声に、俺のみならずゆたかも驚いた。

その声が、菊地原先生の声だったからだ。

（な、何で……っ！？）

酷く混乱する。

菊地原先生がうちの場所を知っているはずがない。

そもそも今日、初めて会ったのだ。

会った当初はお互いに名前すら知らず、話したきっかけだってゆたかを通してのもの。

なのにどうやってうちの場所が……。

「あきら君ー、ゆたか君ー？ いることは室内の明かりの漏れから分かってるのだよー？」

「……先生、ですか？」

前に躊躇いの間を空け、外にも聞こえるよう音量を上げて聞くゆたか。

「おお、ゆたか君かね？ 返事があつて良かったよ。もしかしたら君たちの愛し愛される行為の真っ最中に訪問してしまったのではないかと心配していたところで」

「んんーっ！？」

言葉が出せないことも忘れて声をあげてしまう。

な、何、人んちの玄関前で言ってるんだよあの先生はっ！

こんな静かな時間、ドアを隔てても聞こえるような声で、よそに聞こえないはずがないじゃないか……！

「……あ、あきら、先生を部屋に上げてもらえるかい？」

どうやらゆたかはこの気持ちを共有できたらしい。

許可を得、解放されたところで俺は転びかけてたたらを踏むも、すぐに玄関まで辿り着く。

急いで鍵を開けドアを押し開けると、そこに一人の男性佇んでい

た。

すれたように古びた紺色の上下スーツに、よれた赤いネクタイ。

それらが包む、腹回りがふくよかすぎるシルエット。

そのいかにもすぎる中年男性らしさこそ、菊地原先生の特徴だった。

「やあ、あきら君。ゆたか君とのセックスは楽しめたかい？」

「んな……！」

右手の平を上げ、決して爽やかとは思えない笑みを向ける菊地原先生の開口一番に絶句してしまう。

しかし固まる俺も何のその、菊地原先生は「失礼するよ」と一言のたまに、俺を押しつけ部屋に上がってくる。

俺がその行動に理解が追いついたのは、菊地原先生が革靴を脱ぎ、フローリングの床をその体重で軋ませてからだ。

慌てて菊地原先生の背中を追うも、先にゆたかを見つけた菊地原先生が口を開く。

「やあ、ゆたか君もどうだったかね？ 無事にレズビアンが何たるかをあきら君に教授できた おや？」

ようやく俺が菊地原先生の横に並んだとき、疑問の声が上がる。

菊地原先生の視線の先はゆうな。

見られたゆうなは、驚きとも軽蔑とも取れる表情を見せているが、

「君は……ゆたか君、もしかして3Pかい？　もしかして3Pであきら君に教授していたのかい？」

途端、空気が凍る。

それは気まずいなんてものじゃない。

空気の鋭さだけで肌が切れそうな、原因でない俺でさえ動悸が上がつてしまうほどの凍てつき。

だが張本人は気にも留めないように、しかし興奮度合いを上げながら続ける。

「ゆ、ゆたか君、そういうことなら何故私に一言もなかったのかね？　驚きだよ、サプライズだよ。しかし私に知らせてほしかったよ」

頬が引きつるのが分かる。

追いつけない、そして理解しえない空気がどんどん凝固していく。

先ほどまでの空気は払拭された。

というよりも壊された。

この、いきなり暴走しちゃってるセクハラオヤジのせいで、もはや原型も残らないほど粉々に。

「……先生」

「すまなかった。いや、本当にすまなかったと思っているよ」

腰に手を当て仁王立ちするゆたかの目の前、フローリングの床に正座をして反省を強要されているのは菊地原先生だ。

その飄々とした表情や言葉に反省の色は少なく思うが、こうして菊地原先生が落ち着いてくれただけで充分だと思う。

……さっきまでの蛮行の数々は酷かった。

空気を読む気配など見せず、俺とゆたかを事後だと思い込み感想を執拗に迫るなどのセクハラ行為。

見知らぬゆうなに対しては、俺とゆたかのセックスに参加した第三者として扱い、もうお祭り騒ぎのように一人で盛り上がり。

それらを止めるため、菊地原先生の後頭部を思い切り叩いたゆたかの行動には爽快感を覚えたものだ。

いや、一応年長者に対する行為ではないと罪悪感も覚えるのだが。

とにかく、現状はすっかりと激変した。

ゆたかは相変わらず怒りっぱなしだが今までのような厳しさはな

く、昼間にオカルト研究部の部室で見たような漫才染みた気楽なものだ。

一方のゆうなは菊地原先生の怒涛のセクハラに気分を悪くしたらしく、黙って俯きながらベッドの隅に腰掛けている。

俺はそのゆうなを心配して寄り添い、とりあえずの形で背中をさすることにした。

それを拒否されなかったのは、きっとゆうなも少しは落ち着いてくれたのだろう。

空気はすっかり弛緩し、そのことに俺は胸をなで下ろす。

こんな酷い形であれ、さっきまでのあれを壊すことができたんだ。

口には出したくないが、それでも菊地原先生に感謝している気持ちがあるのは確かだった。

しかしどうしてか、俺はこの状況に違和感を覚える。

その原因として挙げられる候補は様々だ。

まずゆたかとゆうながお互いを気にしないようにしている沈黙や、大学教授であるはずの菊地原先生が一介の生徒であるゆたかに正座して反省の態度を見せている点。

数時間振りに、介抱の形とはいえゆうなとまともに触れ合えてい

る俺自身も候補ではある。

だが俺が感じるそれは、上記には含まれない気がした。

何というか、雰囲気を感じるような曖昧な違和感ではない。

もっと圧倒的で、気付けた瞬間にあつと声をあげてしまうような決定的な違和感

そのとき、つい先ほどまで怒りの表情を見せていたゆたかと目が合う。

ゆたかの表情は一転しており、何やら思案顔。

考えていた末に、たまたま俺と目が合ってしまった様子だった。

もしかして、ゆたかも俺と同じ疑問を……？

だとするとその疑問は、俺とゆたかの共通項ではないか。

そう考えた次の瞬間だった。

「あ

俺とゆたか、どちらともなくその声を出す。

続けたのはゆたか。

「先生、いつものドリアン臭はどうしたんですか？」

それが俺たちの感じた疑問。

あれほど臭って仕方なかった菊地原先生の異臭が、今はどうしてか全くしていないのだ。

一般人であればそれは至って普通のことであるが、菊地原先生というフィルターを通せば充分すぎる違和感を持つ異常。

一体どうしたのかと、菊地原先生の返答に耳を傾ける。

「ああ、そう言えばこれはゆたか君も知らないことだったね」

あっけらかんとした、さも大したことのないような言い方。

「少し前に入ってきたのだよ、ここからほど近い銭湯にね」

「せ、銭湯ですか？」

俺が思ったのと同じ動揺の声をゆたかがあげる。

銭湯と聞いて思い浮かべたのはゆたかがゆうなについた嘘だがそれは関係なく、次に思ったのはうちの近所に銭湯があっただろうかという思案。

ここからほど近い銭湯に入ってきたと菊地原先生は言ったが、うちの近所にそれらしい銭湯はなかったような……。

「ああ、銭湯だよ。銭湯と言っても下町風情を感じるようなもので

はなく、チェーン展開しているような銭湯だがね。ここの最寄り駅の隣駅だったかな。そのホームに銭湯の看板があったのを見て、ちよつど良いと思い入ってきたのだよ」

俺の顔の出やすさが際立ったのか、それともたまたま菊地原先生の話に被ったのか。

どちらにしても今の話の中で俺の疑問は解かれる。

「つまり、銭湯に入ってきたからあのドリアン臭は取り除かれたんですか？」

「そういうことだね。銭湯でなくとも、体をきちんと洗えば臭いはなくなるよ。しばらくすると元の臭いに戻るのだが」

ゆたかの言葉に菊地原先生はしたり顔で頷くが、

「なら、どうしていつも才力研にくるときは臭いままなんですか」

菊地原先生を批判するように半目になってゆたかは返す。

しかし菊地原先生は軽く笑って返答。

「なかなかゆたか君の厳しい反応が癖になってしまつてね、ついやめられないのだよ。あの辛辣な言葉を受けられるなら臭いくらい我慢しようと思　まあ一番の理由としては、大学付近に銭湯がないからなんだがね」

最後のは嘘だ、絶対嘘だ。

話している途中、ゆたかがマジで怒った顔になったから切り替えただけ。

圧倒的に変態だなあ、菊地原先生……。

はあ、と深いため息をつき、俺はゆうなの背中をさする作業に戻る。

それなりに時間をおいたからゆうなも落ち着いてきただろうが、今の話でまた気持ち悪くなった可能性もある。

というか俺ですら気分を悪くしたのだから、ゆうなも害したに違いない。

だからゆうなを心配する気持ちを第一に、やっぱり大きく感じるゆうなの背中をさすると、不意に呟きが聞こえてきた。

「菊地原先生がこんな人だったなんて……」

それは誰に向けたわけでもない、ゆうなの漏らした呟き。

続く言葉に「私の中の先生像が……」や「こんな最低な男の権化みたいな人なんて……」とあり、そこで俺は気が付いた。

そう言えばゆうなは、菊地原先生と面識があるようなことを言っていたっけ。

しかしそれと矛盾しているようなゆうな自身の呟きや、先ほどゆ

うなと邂逅した菊地原先生の反応もどうもおかしい。

ゆうなが一方的に菊地原先生のことを知っている、あるいはその存在だけを知っているような……？

「菊地原先生、」

今もなおゆたかにきつく睨まれて正座しっぱなしの菊地原先生に、俺はゆうなの背中をさする手を止めずに聞く。

「菊地原先生とゆうなって、もしかして面識あるんですか？」

そのとき、俺のゆうなの背中をさする手に僅かな反応が見られる。

びくりと小さな震えだった。

「ゆうな君と私がかね？ 彼女との面識は……うむ、顔を見る限りではないと思う。私の記憶では、彼女と初めて顔を合わせたのは今日の昼、同じ電車に乗り合わせたときだよ」

今日の昼が初となると、やはりゆうなの呟きに疑念を抱く。

しかし、

「だが、おそらく彼女と話した経験ならあるよ」

「え、それって……？」

不用意だった対応に、俺は問う。

顔を合わせたことはなかったのに、話したことはある？

その疑問に答えた菊地原先生は、

「彼女は匿名、私は実名という形で電話したことがあるんだ」

「と、匿名……？」

ゆうなと菊地原先生が電話で話したことがあるというのも驚きだが、それ以上にその条件、ゆうなが匿名であったことが気になる。

どういうことなのか、それを問おうと口を開くよりも早く、

「せ、先生っ」

びっくりとした震えと共にゆうなは顔を上げ、菊地原先生を止める。

見れば怯えているような表情で、自身の膝に置いていた手は拳を作っていた。

「安心したまえ、ゆうな君。私は無神経な方だが、人を傷つけるような無粋ではないよ」

対する菊地原先生の言葉は優しく、言葉通りゆうなを安心させるよう笑みを向けていた。

無神経なのは自覚あったんだ……と思う一方で、ゆうなにそうした言葉を向けた意味を理解する。

ゆうなと菊地原先生には、他の誰にも言えないような秘密がある。それも、ゆうなからすれば絶対に知られたくないような秘密だ。

「勘ぐってはいけないよ、あきら君」

俺の思考を先行するように、今度は俺に向いた菊地原先生が言う。

「人は誰にも知られたくないことがあるはずだ。そしてそれを無理に勘ぐろうとするのは、あまりに無粋。分かるね？」

「は、はい」

口調には丸みを感じながらも、その実反論を認めないような言い方。

どこかゆたかのそれに似たようなところを覚えながら、俺は頷くしかなかった。

菊地原先生に勘ぐってはならないと釘を刺されてしまった手前、あまり深く考えるわけにもいかない。

考えるだけなら、とも思ったが、悲惨なことに俺は自分の考えを顔に出しやすい質らしいからそれも適わない。

だから代わりに考えるのは、俺に釘を刺した菊地原先生がうちに来た理由だ。

銭湯に入ってから来たというのは俺たちに気を遣ったことだろうが、逆に言えばうちに来るつもりで銭湯に入ってきたことになる。

ならば菊地原先生がうちに来た理由は何なのか。

聞くが早いと考え、俺は口を開く。

「ところで菊地原先生は、どうしてうちに来たんですか？」

「あきら、そんなの決まっているよ」

返ってきたのは、予想外にもゆたかの声だった。

半目のままそれを菊地原先生に向け、

「どうせ先生は私たちにセックスの感想を聞きにきたんだ。先ほどもしつこく聞いてきただろう？　それが目的だったに違いない。セクハラをしにわざわざ赴いたんだよ先生は」

うわ、めっちゃ毒吐いてる……。

さっきの菊地原先生の変態発言ですっかり敬う気持ちを捨てたのか、それとも今までからそうだったのか。

どちらにせよゆたかのきつい発言に、菊地原先生は苦笑を見せる。

「いやあ、相変わらずゆたか君は厳しいね。それが実に癖になるのだが、今の意見には否定させてもらうよ。私がここに来た理由はそ

れだけではない。私がそれだけの理由でこんな夜更けに訪ねるような常識外れの人間だと思ふのかい？」

先生、「癖になる」などと言った舌の根も乾かぬうちにそんなことを言っても、全く説得力ないです。

というか、セックスの感想を聞きにきたのも、うちに来た理由の一つだったんですね……。

「じゃあ先生があきらの家に来た理由は何ですか？」

流れから当然の疑問を半目からさらに細め、もはや糸目のようになっているゆたかが問う。

それにはゆうなも興味があつたようで、返答を待つように菊地原先生に顔を向けている。

だから俺もならうように菊地原先生に目を向けると、

「いやいや、あまり視線を向けなくてくれたまえ。君たちのような美人に揃って見つめられると　　いやすまない、話を続けよう」

ゆたかの表情が睨みに変わっていた。

「私がここに来た理由、それは単純な興味。ミステリースポットをこの目で確かめたかったのだよ」

ミステリースポット。

その言葉のオカルト性にハツとし、慌ててゆうなを見やる。

が、その表情に変化はない。

つい先ほどまでと変わらず、菊地原先生の次句を待つようにそちらに視線を向けているだけだった。

あれ……？　と思う間もなく菊地原先生が続ける。

「ゆたか君やあきら君には話しただろう？　ゆうな君もその様子を見る限り、それとなくは伝わっているようだね。　ここにはミステリースポットがある。姿形は見えずとも、確かにミステリースポットはここにあるんだ」

正座していた菊地原先生は立ち上がり、俺たち三人の顔を順繰り見ていく。

「私はミステリースポットを見たい。今までいくつか“ミステリースポットではないか”と思える場所を見てきたが、今回はその顕著私が推測する限り、確かなミステリースポットがここにあるんだ」

だから、

「私は是非ともそれを見たく思い、ここにきた。一言で言うなら知的好奇心。それで納得してくれるかね？」

なるほど、と菊地原先生の話を聞き、納得の意を添えるように頷

く。

本来なら顧問を必要としないオカルト研究部に率先して活動している菊地原先生のことだ。

あれだけの熱弁を振るえる対象であるミステリースポットがここにあるというのだから、そこに赴こうと思う動機は理解できる。

だが、そこに異議を唱えるよう手を上げたのはゆたかだ。

「先生、それではあまりに確信的な発言すぎませんか？ さもここにミステリースポットがあることを確信しきっているような」

「確信しているよ。ここにあるのだよ、ミステリースポットは確実に」

自信たっぷりといった様子で鼻を鳴らす菊地原先生。

ふん、と鼻息が荒いところを見ると、どうやら鼻が詰まっているらしい。

そこにゆたかは、ですが、と言葉を挟む。

「ですが、先生がここにミステリースポットがあると見たのはあくまで推測の仮定からです。信憑性がないとは言いませんが、そこまで自信満々にされるほどではないと思います」

「仮説だけではないのだよ、ゆたか君」

眉を立て、さらに鼻息を荒くする菊地原先生。

さも、よくぞ聞いてくれたと言わんばかりのリアクションに胸焼けがする。

「これもゆたか君に話していなかったと思うが、実は私には秘密があつてだね」

一歩、二歩を優雅を気取っているようにゆっくりと歩き、俺たちには背を向け壁と正面に向かい合う菊地原先生。

床がギシギシ軋むのはその肥えた体からだろう。

そうして歩みを止めた菊地原先生は語る。

「私には、ミステリースポットを嗅ぎ分けられる鼻があるのだよ」

くるりと振り向き、自身の鼻を指差す。

その動きで少しだけ嫌な臭いがしたのはきつとスーツに染み込んでいた分なんだろうな、と俺は思考放棄。

ゆつなは「ああ……」と小さな嘆きの声を漏らし、ゆたかは半目に。

痛々しいという言葉さえオブラートに包んだ生易しい表現に思えるほど、菊地原先生は独創的だった。

「その様子だと、どうやら君たちは信じていないようだね？」

言い、おそらく不敵に笑いたかったのであろう口元がだらしく歪む。

信じるか信じないかと問われれば、そもそもよく分かりませんと答えそうになる。

菊地原先生の言っていたミステリースポットとは、俺の覚えが正しければ平行世界間にある世界膜の薄い場所。

それを指していた言葉のはずだが……それに臭い？

しかも菊地原先生はそれを嗅ぎ分けられるなどと言われても、まず理解まで落ちてこない。

まあこちらから聞かずとも自ら先を話すだろうと沈黙を守ると、案の定だった。

「まあ君たちがいきなり信じられないのも分かる。大いに分かっているつもりだよ、私は。私は君たちの理解者であろうと常日頃から君たちのことを思い」

「先生、いいから先を」

促すゆたかの声に、菊地原先生は少し寂しそうに「うむ」と答える。

「ゆたか君がそう言うのであれば……ではその証拠として、私は君たちに一つの事実を提示しよう。それは、私がここにいる事実だ」

「……？」

菊地原先生がここにいる事実が、ミステリースポット嗅ぎ分けられる証拠になる？

一見して噛み合わないそれらに首を傾げると、すぐにゆたかが発言。

「どういうことですか？」

それは俺と同じく結論に行き着いていないということ。

しかし菊地原先生は「ふむ」と頷くだけで口を開く様子を見せず、回答を良しとしない。

だから俺は思考を続ける反面、まるで謎解きをしているようだなと思う。

……さて、じゃあどうして菊地原先生がうちにあることが証拠になるのかというと

「あかりの家がどうして分かったのか、じゃないの？」

それはいきなりのこと。

そう発言したのは俺やゆたかでもなく、ましてや答えを知る菊地原先生でもない。

俺のすぐ隣、ベッドの隅に腰掛けているゆうなからの発言だった。

え……、と驚きを声に出したのは俺で、ゆたかも目を見開いてゆうなを見ている。

その中で異質な反応を示したのは菊地原先生だった。

「ゆうな君、それはどういうことなのか説明してもらえるかね？」

身を乗り出すように聞いてくる菊地原先生。

ゆうなは躊躇うように「いや……」と前置きするも、引いてくれそつにない菊地原先生の態度に諦めを見せる。

「じゃあ言いますけど……先生がここにいる事実って言うのは、先生がここに来た経緯のことだと思います」

「と言うと、どういうことだね？」

さらに問われたゆうなは気まずそうに眉をひそめ、解決策としてか俺に向き直りながら話を続ける。

「先生はそのミステリースポットとかいうやつ臭いが分かるんでしょ？ で、あかりの家にはそのミステリースポットがあるっていう前提。なら、先生はその臭いを追ってあかりの家まで来たってことにならない？」

なるほど、と俺は感嘆しながら相づちを打つ。

菊地原先生はミステリースポットの臭いを嗅ぎ分けられる能力の

証明として、菊地原先生自身が今この場所にいる事実を示した。

それは、菊地原先生が俺の家の場所を知らないだろうという前提に由来する。

そもそも菊地原先生と俺が会ったのは今日が初めてだし、俺があきらの頃にも菊地原先生に該当するような人物に面識はない。

だから今日という日までに菊地原先生が俺の家を知ろうとするきっかけはなく、また今日知ろうとしても果たしてどうやって調べる？

個人情報保護が厳しくされている現状、大学の教授だからといって関係のない生徒の住所情報を簡単に見聞きはできないはずだ。

だから菊地原先生がこうしてうちまで来れたのは、ミステリースポットの臭いを辿ってきた末だということに繋がり、その能力の証明……いや証明にしては薄い感はあるが、それでも菊地原先生の問いの答えにはなっているだろう。

「そうだね、ゆうな君の言うとおりだ。やや不備を感じるがそれで正しいよ。いや、実に素晴らしい」

パチ、パチと音をあげた拍手をし、菊地原先生はゆうなに向かって言う。

それはゆうなが正解を言い当てたことへの賞賛の言葉だ。

「何より特筆すべきは、解答を導くまでの早さだね。突発的な問い

ではあったが、いやだからこそ頭の回転の早さが際立ったと言っべきかね？」

菊地原先生が言うそれは、俺もひしひしと感じていた。

ゆうなが、恐らく解答を閃いたであろう最初の発言したのは、菊地原先生が問題を出してからそう経っていない時のこと。

俺がようやく問題の意図を整理しようと考えたや否やということろだった。

例えゆたかが質問をしていたときから先行して考えていたとしても、なかなか早いように思う。

少なくとも俺では追いつけないであろうスピードだ。

……ゆうなって、こんなに頭の回りが良かったんだ。

俺も知らないゆうなの一面を見て感心し、しかしそこで言葉を紡ぐのはゆたか。

「……おかしい」

何か引っかけかりを覚えたように、眉をひそめてゆうなを見ている。

おかしいって？ と俺が問えば、

「ゆうながそう答えられるなんて、私はおかしいと思う」

まるでゆうなでは答えられないはずだ、と言わんばかりの言い方。

「もちろんゆうなの答え自体に異論はないよ。菊地原先生が正解と言っのだから間違いないだろうし、私自身もそれで正しいと思う」

けど、

「けど、それをゆうなが言うのはおかしいんだ。だってオカルト嫌いのゆうなが、ミステリースポットなんてそれらしいものを用いた問題に、冷静さを欠くことなく答えられるわけがないんだから」

ゆたか自身がゆうなを嫌いつつあることもあつてか言葉の端々に棘を感じて否定したくなるが、言っている内容については俺も同意するものだった。

それは俺が先ほどにも覚えた違和感の正体。

「あきらなら分かってくれるだろう？ つい先ほどまで、オカルトに関連した話になるだけで執拗に激情したゆうなが、こんなにも冷静でいられるはずがない。そうだろう？」

振られ、またうつむいて座っているゆうなの横顔を見て躊躇うも、ゆたかに向き直って頷いてみせる。

それを良しと頷き返したゆたかは満足そうに微笑み、小さく息を吐いてからゆうなに視線を向ける。

「ゆうな、答えてくれるかい？ 何も答えたことを問おうというわけじゃない。ただ私たちが解せないことを、少し説明してほしいだ

けなんだ」

言ってゆたかはこちら側に一步寄り、腰をかがめてゆうなの顔を見ようとする。

「……」

その間も俺はゆうなの隣に腰掛けているが、ゆうなは黙って答えようとしない。

むしろうつむいている顔をより伏せて、見られることすら拒否するように動く。

側にいるからこそ聞こえる息遣いは少しばかり早く、いくらかゆうなが焦っているように感じた。

「私も気になる話だね」

そこで声を挙げたのは菊地原先生。

夜になって伸びてきたひげを気にするようにあごに手をやって、

「ゆうな君がオカルト嫌いとは……いやはや、これはどうしたことかね？」

疑わしく思う問いというよりも、ただ興味からの言葉のようで菊地原先生の言葉尻は軽い。

なのに、

「……っ」

俺は見た。

まるで強く責められたように肩を震わせ、縮こまるうとするゆう
な姿を。

しかしそんなゆうなの動揺に気づいていないかのように、菊地原
先生は言う。

「気になる。いや実に興味深い話だ。できることならその経緯につ
いて詳しく聞きたいが、」

いや、そう見たのは俺の勘違いだった。

「その様子では、直接聞くのは難しいようだね」

好奇心を前面に押し出しているもののゆうなへの気遣いは忘れな
いよう。

困った困った、と大して困っているようには見えない棒読みで言
う菊地原先生。

と、不意に声を挙げれば、

「そうだ、ゆたか君にあきら君。私にこれまでの経緯を話してくれ
ないかね？」

また大根役者も驚くような手抜き演技っぷりで、菊地原先生は手を叩いた。

それに思うことはあれど、流れを遮るほどではないと無視。

代わりに、これまでと言うと？ とゆたかが聞けば、

「大学で私と別れてから、先ほど私がここで合流するまでのことだよ。深いことまで聞こうというわけではないが、しかし話してくれるだけ話してくれると、私としてはありがたいね」

と言うのも、

「もしかしたらあきら君の手助けになるかもしれないよ？」

耳に届いた内容に衝撃を受け、俺は菊地原先生を見たまま硬直してしまう。

……俺の手助けになるかもしれない……？

それは、俺が元の世界に戻ろうとすることへの話。

菊地原先生が来てからというものの、いやそれよりも前から停滞し続けていたことだ。

なぜそのことに繋がってくるのかは分からない。

だが、それでも、

「……分かりました」

俺を動かすだけの魅力が、それにはあった。

そこには、ゆうなの言った仮説を信じたくない思いもある。

俺が作られた人格などと言われることの、否定の証拠を掴みたい気持ちもある。

そして何よりも、またすがれるかもしれない頼もしさに、俺は酔っていた。

俺が菊地原先生に言うのは、今までの大まかな流れだ。

細かく言っではきりがないし、今となっては確定的かも怪しいのだが、菊地原先生の言う制限時間も気兼ねする。

だから、流れ良く話すことにした。

まず俺とゆたかが大学でした選択は、菊地原先生の言うとおりセックスはするが、するのは指定外の俺の部屋にしたこと。

「俺の家の方が、ゆうなの家に近くて便利だと思ったんです」

行為の後、ヒントを得てゆうなに会いに行く予定だったからそれが最良に思えて、しかしこの選択が間違いだったと気づくのはそれから先。

着くまでにゆたかと悶着があったが、無事ゆたかにシャワーを浴びさせることに成功し、

「けど、そこにゆうなが来た」

謝りに来てくれたと言ったゆうなに感動を覚えるも、すぐにゆたかとセックスしようとしていた危うい状況に気づく。

気を動転させながらも何とかしようと、風呂場から出たばかりのゆたかと協力して誤魔化したが、

「誤魔化すための嘘がゆうなにバレて……」

浮気未遂と断定され、別れましょう、とゆうなは言った。

俺はそれだけは嫌だと泣いてごねて、ゆたかの説得の協力もあつて俺たちは事情を話すチャンスを得る。

しかしゆうなからの条件で、それを話すの俺単一となり、ゆたかは一度退出してしまう。

だから、俺だけでもゆうなに分かってもらえように事情を説明しだしたのだが、

「それはやっぱり、俺が悪くて……」

浮気になったのはセックスをする相手を、同じくレズビアンであるにも関わらずゆうなを選ばずにゆたかを選択したから。

選ばなかったことこそ浮気なのだと、俺はゆうなに言われて気づかされたんだ。

それから俺は、ゆうなに頬を叩かれ胸ぐらを掴まれて、でもそこでゆうなはこう言った。

「もしかしたら、今までのことは全部ゆたかのせいだったんじゃないか」

俺とあかりの入れ替わり（ゆうなが言うには、それは俺の勘違いらしい）から、俺がゆうなに事情を話すまで。

全てがゆたかの手の平の上で踊らされていたとするなら納得がいくと、ゆうなに諭された。

それは俺の行動理由に逐一ゆたかが絡むからであり、それも意味深に見えるから。

その結果、俺たちはゆたかをもう一度呼んで事実確認をしようとしたのだが、来たゆたかは怒っていた。

ゆたかに憑いている祖父母の幽霊が俺たちの話を聞いており、それをゆたかに伝えていたからだ。

それでも悶着があったのだが、最終的に対立したのは俺とではなく、ゆうなとゆたか。

ゆたかが怪しいのではないかという仮説を発案したのがゆうなだったから、この対立になったのだと思う。

そこで俺にはどうしようもないがみ合いが始まって慌てふためくところで、菊地原先生がやってきた。

「そついう流れです」

言い終えた俺は息をつき、荷が下りたことから肩をなで下ろす。

たった数時間でよくもまあこれだけ濃くなったものだと思う一方で、俺の話した内容に自信のなさも覚える。

俺が話したことは事の簡略であり語弊が生まれかねないのもあるが、時折俺の推測が混じっていることもある。

話の途中で誰かに訂正されるのではないかと勘ぐったが、結果的にゆたかと菊地原先生は黙って聞いてくれ、ゆうなは聞きもしないように身を縮こまらせているだけだった。

ふむ、と俺が話し終えたことを認めるように菊地原先生が言っと、自身の腕を組む。

内の右手を顎にやり、親指側の三本でそこを触り始めた。

聞き終えた菊地原先生は何を言うのか身構えたところで、

「ゆうな君がオカルト嫌いというのは、本人が言っていたことなのかね？」

「あ、はいそうです。そうなんですけど……」

ゆうながオカルトを嫌いだと言ったのは、何も一回だけではない。

複数回、複数の話題に渡ってオカルトなどありえないと豪語していたのだ。

だからゆうながオカルト嫌いであるのは間違いないと思う。

だけど、一つ気に掛かる点がある。

「実はゆうな、オカルトに憧れていたんじゃないかって思うときがあったんですよ」

それはゆうなが最初にオカルト嫌いを明言したときのこと。

確かにゆうなはオカルトはありえないと断言していたのだが、その場にいたゆたかとの問答の末、その話の最後にゆうなはオカルトな能力についてこう言っていた。

『確かに、欲しかった。昔は欲しかったわ』

「や、やめてよっ!」

俺が菊地原先生に告げ終えた直後、叫びに近い声をゆうなが放つ。

しかしそれは一歩間に合わなかったというところで、その事実によゆうなは愕然としたように眉尻を下げた。

その様子は、まるで今の話を菊地原先生に聞かれなくなかったように思えるものだ。

何故そうなのかという疑問は思い出した菊地原先生の言葉によって遮られた。

『勘ぐってはいけないよ、あきら君』

だから俺は待つべきなんだと、今は菊地原先生の反応を待つことにした。

その菊地原先生は、俺が二つ息を往復するだけの時間を持つて考え、次のようにゆうなに聞いた。

「ゆうな君は変わったのかい？ それともまた……」

語尾を濁しながら終えた菊地原先生の言葉に、ゆうなは一瞬の戸惑い。

眉根をぎゅっと詰めたが、小さな頷きで「後者です」と。

途端、気の知れぬ菊地原先生は笑う。

「そうか、それは良かったよ」

声には出さず、ただ安堵したように優しい笑みで。

「ありがとうあきら君、話してくれたおかげで色々なことが掴めたよ。君たちの経緯や私の疑問、これからの指針についてもね」

「ほ、本当ですか？」

「ああ。もちろんそれは私の推測による仮説に他ならないものだがね」

先のゆうなとのやり取りも気掛かりだが、菊地原先生の言葉にそれ以上の魅力を感じて食いつく。

すっかりとした動作で頷いてくれた菊地原先生に、もはや尊敬を

覚えるほどの頼りがいを感じた。

「先生、これからというと、何か具体的な解決法が見つかったんですか？」

「解決法ではない。私は現状の問題点を見つけたんだ」

問うゆたかに対し、菊地原先生はそちらを向いて腰の位置にある両手を開く。

「問題点とは言つまでもない、君たち三人の問題点だ」

菊地原先生は視線を俺たちへと回していく。

まず隣に佇むゆたかを見、

「ゆたか君には個人的願望があり、恐らく有意識ながらも抑制しきれないそれが露わになっている可能性がある」

僅かにだが目を見開く反応を見せるゆたか。

菊地原先生は視線を右に流し、ベッドに座り込むゆうなに。

「ゆうな君は、ゆたか君とは逆に自制しすぎるあまり暴走しているのだろう」

びくり、と肩の震えるゆうなの動き。

さらに流して、ベッドの傍らで立ち尽くしている俺に行き着く。

菊地原先生と視線が合い、やや首を上げながら見た先には、

「だが一番の問題児は君だよ、あきら君」

落胆の色を含んだ菊地原先生の顔があつた。

「君には足りていないものがある。それを端的に言うなら、やる気。それが不足しているように思うよ」

そこで終わるかと思えた菊地原先生の言葉はしかし途切れず、誰かが口を挟む前に、三人に向き直るようにして言った。

「おこがましいとは思うが、これから先は君たちに反省会をしてもらおう。とにかくにもそれからだと私は思うね」

「ちょっと待ってください、菊地原先生！」

反論する口振りをしたのは、予想に反して俺一人。

それに少し驚きはしたが、こちらを向いている菊地原先生に視線を合わせる。

「俺に問題点がないとは言いません。むしろ情けないことばかりしちゃって、どうしたらいいのか分からないくらいだけど……」

語尾につれて下がった顔を持ち上げる。

「やる気が足りないなんてことはなかったです。俺、今日はずっと

戻りたくて頑張ってきたつもりなのに、それをやる気が足りないなんて言い方」

「私の言い方が気に食わなかったから訂正してほしい、そう言いたいのかね？」

「ち、違いますよ。そうじゃなくて……俺はただ、菊地原先生にそういう見方をされてたのがショックで……」

俺が言ったのは本心だ。

確かに大学で菊地原先生と別れて以降、全く進展がなかったことは認める。

俺の情けない失態が積み重なってそうなったことも自覚しているつもり。

だけど……。

単純に言えば、そんな言い方ないじゃないか、ということ。

いくらなんでも「やる気が足りない」なんてことは

「今この場で言い方にこだわる必要なんてないと、私は思うがね。君が納得いかないのなら望む限り訂正しよう。ただし私の根っこは変わらない。訂正しようともそれは上辺だけであるのは、分かっているね？」

聞かれ、どう答えていいものか言いあぐねる。

菊地原先生の言い方にカチンときたのは間違いないけれど、だからといってずっと食らいつくほどのものではない。

無理に押し込められたような窮屈な気持ちに寄せてくるのを我慢して、俺は諦めの意を伝える。

満足そうに頷いた菊地原先生を尻目に、ゆたかは気を落とすように顔を伏せ、ゆうなは関わりたくないように、ベッドに座る身を壁際に寄せているのが見えただけで、そこに思いを馳せられる余裕はなかった。

「先生」

力のない声を出したのは、菊地原先生の隣に佇むゆたかだった。

胸より下の位置で腕を組み、苦い表情を浮かべて菊地原先生を見ている。

「反省会というのはつまり、私たちに自分の本心を暴露しろ、ということですか？」

……本心？

「別に強制はしないよ、ゆたか君。君たちの本心を打ち明けるかどうかは君たち次第だし、私にはそれを従わせる強制力はない。私の言う反省会だって、君たちの協力がなければ開会さえできないものだ」

つらつらと述べる菊地原先生の言葉に、これといった感情を受けることはない。

ただ一つ分かるのは、

「だがそうしてくれた方があきら君にも分かりやすく、これからに繋がると思うがね」

俺たちを誘導しようという意思が見られることだ。

それは暗に導こうという魂胆ではない。

あからさまに誘導していることを見せつけるように、知らしめるように誘導しているのだ。

「現状、私に分かるのは君たちの問題点だ。先に進めなくしているが、んじがらめのような問題点たちがね」

まるでそれは、菊地原先生の提案に乗るかどうかを試しているかのよう。

「だから私はこう思うのだよ。その問題点を片付ければ、それらの先に何か見えるのではないかとね」

乗るも乗らないも、全ては俺たちの自由。

「まあもつとも無駄足で終わる可能性はなきにしもあらずだ。私は予知能力者ではないのでね、考え得る可能性を語ることしかできない。だから、可能性として時間の無駄になることも考えてくれたまえ」

ただし、

「しかし私なら反省会を推すね。希望者がいなければ司会進行も私が勤めよう。私なら第三者の立場からものを言えるからね。怖いものなしてやつだよ」

乗るなら己の意思で来い。

「さあ、暴露満載の反省会。これに自ら参加する意思是、君たちにあるのかね？」

そう言われている気がした。

ゆたかやゆうなの本心がどうか、俺が責められる対象にあるとか。

菊地原先生の提案は、決して甘いものではない。

誰かが促してくれるが故、流されるだけで済まされるものではない。

例えば俺への餌は、元の世界に戻る解決策への繋がり。

ただ一つとなったそれを掴めるかもしれない希望のために、その価値はある。

もう泣かない意思だって、固められる。

けど、ゆうなたちはどうなのだろう？

俺にはある餌が、ゆうなたちにはない。

強いて言うなら、彼女たちの知るあかりが帰ってくるかどうか。

ゆたかなら、パレルワールドの仮説を信じてくれているゆたかなら、それで賛同してくれるかもしれない。

だが俺を、あきらを二重人格のようなものだとしているゆうなならどうだろう。

もし俺が二重人格であるのなら、この場で菊地原先生に頼る必要はない。

病院に通わせる、あるいは時間の経過だけで治るかもしれないそれで、もしゆうなに菊地原先生の言う本心があるとするとしたら、暴露するだけの価値があるとは思えないのだ。

俺とゆたかには、これしかないという限定的な枷があり、だからこそ気持ちを預けられる経緯がある。

けど、ゆうなにはそれがなくて

もしゆうなが欠けてしまったら、まずいのだろうか。

考え、やはりまずいのだろうと思う。

大学で菊地原先生と話した通り、パラレルワールド間の移動を原因とするなら、唯一の手がかりはゆうなのだ。

それを失うというのは、ゆうなが恋人であるという立場もあり、とても耐えられないことのように思う。

だから、俺からどう言えるのか分からないけど、ゆうなにも参加してほしいと考えて、

「ゆうなはどうする？」

ベッドで俺の隣に腰掛けているゆうなに、俺は催促の言葉を投げかけた。

声を掛けて見られたらすぐの反応は、ゆうなの肩が小さく震えたことだった。

ゆうなは何かから避けるように壁際に身を寄せているため、壁とは反対側に座っている俺に半ば背を向けている形になっている。

実質的な座高は今の俺より高いゆうなだけど、そう思えないのはその態度からか。

もう一度声を掛けようと、まずはゆうなの肩に手を触れさせたら、

「い、言いたくないから……」

反射的に飛び出た言葉のようだった。

「私、言いたくないから。菊地原先生にも、菅原さんにも。あなたにだって、言いたくないから……」

言いたくないというのは、言えることがあるのと同じで。

つまりゆうなには、隠していた本心があったということになる。

しかし嘘のつけないゆうなだから分かったそれだが、同時に嘘のつけないゆうなが隠せていたのかという疑問も残る。

どちらかを立てればもう片方が曖昧になる矛盾に似た思考。

底がないから底の見えるそれを止め、俺は自分の意思を確認する。

ゆうなには、菊地原先生の言う反省会に参加してほしい。

俺も参加するし、ゆたかが嫌がったなら頑張って参加してくれるように説得する。

それだけ俺は先の見えない不安に押しつぶされそうで、濡れた藁にもすがりたくて、気持ちが押し上げてきている。

だから俺はゆうなにも参加してほしく思っている。

けど、俺はどうしたらいいのだろう。

菊地原先生はあたかも知っているようなていで話していたが、俺はゆうなの隠し事が何なのかを知らない。

そんな俺が「言いたくない」と突っぱねるゆうなに向けて、その重さも知らないのに無理強いできるのだろうか。

……分からない。

できるのかどうか、どう誘えばいいのか、分からない。

ふるふると首を横に振ったゆうなの柔らかい髪が揺れるのを見て、俺は一度伸ばした手をどうするべきか迷っていた。

迷う手が第一関節分だけ進んで、躊躇って握り拳を作る。

今、ゆうなの肩に触れることで変わることがあるとするなら

「それじゃあ始めようか、あきら」

ゆたかがそう言ったのは、俺の知る限りでは何のきっかけもなかったように思う。

俺から見て菊地原先生の右側、ゆうなの正面に立ちながら俺を見つめている双眼と視線が合うも、俺は何ら反応を取ることができない。

察したようにゆたかは薄く笑みを浮かべる。

「なら、まずは言い出しっぺの私からだ。私の反省すべき点と言うと」

「ちょ、ちよつと待った！」

ようやく声が出た。

「ゆたか、いきなりどうしたの？ 反省会をするなんて、まだ誰も

」

「でも、あきらは参加するんだろう？」

「え……えつと……」

言葉を詰まらせてゆうなを見たが、俺から見えるのは身を固めたゆうなの背中だけ。

「あきら、別にゆうなを構う必要などないよ。反省会なら私たち二人ですればいい」

「ゆ、ゆたか、そんな言い方……」

「ああ、違っただ、あきら。そういうつもりじゃない。反省会をするとしても、今はゆうなには聞いてもらっただけで構わないんだ。ゆうなは元からここにいたし、反省会は勝手にここで行うだけ。ならゆうながここにいても参加した内に入らないだろう？ だからゆうなは参加したくないならしないで構わないし、でも立ち去らずに聞いていてほしいんだ」

「そんな屁理屈みたいな……」

そう言っても、それだけゆうなに聞いてもらいたいというゆたかの意思是伝わってくる。

だから、

「ゆうな、構わないだろう?」

「……勝手にすればいいじゃない。あと呼び捨てにしないで」

「はは、済まないね。あかりから「ゆうな」「ゆうな」とばかり聞いていたから、それで定着してしまったんだ」

二人のやり取りを見守って、その結果に安堵の息をついた。

「さあ今度こそ始めてもいいかい?」

言葉と共に俺の頷き、ゆうなの無言を認め、ゆたかは横に佇む菊地原先生に許可を取るように首を向ける。

主催が認めないはずもなく、菊地原先生の返答にゆたかは満足げに微笑んだ。

そのゆたかが最初に視線を合わせたのは俺で、どうやら俺に話していく形で進めるらしい意図が伝わる。

「どうして話したらいいのか迷うところだが……まずは、私が反省会に挑もうと思った理由から聞いてもらおうか。その方が分かりやすいと思うからね」

「反省会に挑もうと思った理由?」

「ああ、私は自ら反省の場に立とうとしたんだ。それにはもちろん理由がある」

ゆたかは俺が元の世界に戻るための方法を探すのに協力してくれるから、ではやや薄っぺらい気がする。

参加してくれるだけでも自らの悪かった点を晒け出さなければならぬのに、ゆたかはゆうなに対して「聞いてほしい」とまで言っていたのだ。

その動機を改めて話すには十分な理由だろう。

少し間をためたゆたかは、

「私は今の今まで、あきらまやゆうなに謝りたかったことがあったんだ。失っていた機を今ここに得られたと言ってもいいね」

「謝りたかったこと……？」

今日あったゆたかとの絡みを思案し、それは思い付かない。

しかしゆたかは目を閉じて息を吸い込んだかと思うと、俊敏な動作で頭を下げてきた。

曲げられた腰の角度は直角に近く、相当に深い。

耳に掛かっていたゆたかの髪が垂れて揺れる。

俺がそれに驚くが早いのか、

「私はあきらを、あかりの体を抱きたいあまり自分勝手な行動をし続けてしまった。本当に申し訳ない、この通りだ」

「え……ちょ……」

謝罪の意しか込められていない純粹すぎるそれに、理解に至らない俺は惑うしか能がない。

「な、何で今更そんなこと謝るのさ？ それは散々大学で怒ったことだし……」

「それも、なんだよ、あきら」

ずっと頭を上げたゆたかは、衣擦れの小さな音だけ残し、まるで前の行動などなかったように真っ直ぐな直立の姿勢に。

そこから唇に引っかけた髪の毛を右手の人差し指で払い、耳に掛ける。

流し目になったゆたかには、強い憂いを感じた。

「恥ずかしながら、私は自分の欲望が暴走してしまうと見境がなくなってしまう癖があってね、本当にバカなことをしてしまうんだ」

「それは知ってるよ。あれだけ俺を襲おうとしたんだから」

「済まないね、あきら。あの時も謝ったが、今もまた謝らせてもら

うよ。本当にごめん」

今度のは少しだが羞恥の色を含んだ小さな礼だった。

「だが私は先ほど「それも」と言っただけ。そう、私が暴走してしまったのはそれだけじゃなかった。ゆうなは知らないだろうし、その様子だとあきらま分らなかったんだろけど、私は静かに、そして醜い暴走をしていたんだよ」

口調は終始変わらずとも、その雰囲気から重くなっていくのが分かる。

一息の間が空けられた。

それが絶対的な無音を作り上げる。

「私は大学にいた頃から、ゆうなと鉢合わせする可能性を考慮していた」

響いたのは、またしても瞬時には理解に至れない語の羅列だった。

「もう少し噛み砕こう。菊地原先生に私とあきらがセックスするよう提言された瞬間から、この部屋の浴室でシャワーを浴び終えるまで、私はゆうなと鉢合わせしてしまうという最悪のケースを考慮しながらも、その最悪に巡り着かせてしまった愚行を犯してしまっただんだよ」

「ゆたか……それってどういう……？」

「具体的に何をしてきたか、それを話せば分かるかい？」

「う、うん……」

短いやり取りだが、その間にゆたかの話していたことが染み込むように分かってくる。

だが今の俺にはそれが嘘かどうかも判別できず いやゆたかがそう言うからには真実なのだろうが、しかし説得力には乏しい。

俺の中のゆたかの印象から、最悪の事態を見過ごすような失態を犯すとは思えないのだ。

具体的に説明してもらえなら納得に後押しできるだろうが、果たしてそれはどうということなのか。

一番に言いたいことを言い終えたからか細かい説明に移るからか、ゆたかは少し肩をほぐすように動かしてから話し出す。

「具体的と言ってもあまり細かく挙げてはキリがないから、少し大雑把にいくよ。最初に私が工作したのは、先生からあの提言が出た直後だった」

「そんないきなり？」

「そう、まさにいきなりだ。まさか菊地原先生からそんな提言されるとは思っていなかったから度肝を抜かれたんだけど、それは同時に私の心を絶大にくすぐるものだった。私があかりを好きなことはあきらはもちろん、ゆうなも知っているね？」

うん、と返事をした俺の後に続く声はないが、ゆたかはそれも認めたように頷く。

「だから私はあの提言をチャンスと捉え、確実に得ようとすぐさま行動を　あきらに迫るといふ工作をしたんだ」

俺に迫る、と言うのは、

「本来ならセックスをするかしないか選べ、なおかつその相手を私かゆうなで選べたはずだ。三通りの選択肢。でも実際は違っただろう？　それは私があきらに考える間を与えず、すぐに答えを迫ったからだ。だからあきらは、私とセックスするかしないかという少ない二択から選ぶことになったんだよ」

ゆたかは続ける。

「人は焦りを感じたとき、大抵の場合において正常時よりも思考能力が落ちるのが常だ。単純に、焦ると判断ミスに陥りやすいという現象だね。私はそれを利用した」

ゆたかは横に垂らしていた左手を肘から上だけ上げ、人差し指を立てる。

「つまりあきらに「私とセックスしよう」と急激に迫ることであきらに焦りを覚えさせ、思考能力を鈍らせたんだ。私がそう迫ることによって、あきらはずぐに「私とセックスするかどうか」についての選択をしなくてはならないからね。あきらがそれを選んでくれたとき、さもそれが最終選択を終えたように振る舞えば、他の選択肢を潰すことができるのは成り行きだろう？」

一息。

「賭けと言えば賭けだったね。だがあきらに深く考え込む癖があるのを思えば、かなり成功率の高いものだった。ほら、大学で先生と別れてからも才力研の部室で少しの間、あきらは私とするかどうかについて考えていただろう？ 私が缶コーヒーを買って二人で飲んだあのかき、と言えば分かるかな。そのときにはもう、私の目論見は成功していたんだ。だろう？」

「た、確かに……」

あのかき、俺が必死に頭を悩ませて考えていたことは、ゆたかの言ったそのままのことだった。

「だからあのかきにはもう、あきらに思考してもらってもそんなに障害ではなかったんだ。もちろんあまり長い間考えられては、せっかく狭めた選択肢が復活しかねないから、ある程度のところで口を挟ませてもらったけどね」

俺が思い出すのはそのときの情景。

確かあのかき、俺は部室の椅子に座りながら、少しでも時間を伸

ばそうとチビチビ缶コーヒーを飲みながら思考に耽って……。

そう、ゆたかの言うとおりだった。

内容は「嫌なら構わない」といったものだったと思うが、それでも俺はそこで思考を中断させたのはその通り。

その後には自分の気持ちの整理　友達とすることへの葛藤と戦い、決めたんだ。

ゆたかとセックスするって。

「今話したことは私の一番大きな罪だが、先に話した最悪の結果を見過ごしたということとは異なるね。そう、私の罪はまだあるんだ」

立てていたゆたかの左手の指が二本に増える。

「あきらが私とすることを決めてくれた後、当初の予定では同性で入室可能なラブホテルに行く予定だったね。大学からは少し遠いが、同性で入れるラブホテルはそこしかないから仕方ない。けどそこであきらはこう言ってくれた、それなら俺の部屋に来ない？　って」

「うん、言ったよ」

それは、その次の予定としてゆうなと会うことを決めていたから。

当時、喧嘩の最中だった俺とゆうなが確実に会う手段と言ったら直接会う他なく、予想としてゆうなはその時間には自宅にいるだろ

うとなった。

ならばゆうなの家に近いことに越したことはなく、俺は俺の部屋に場所を変えようとゆたかに進言した。

「実は、私はそれに反対だったんだ」

「……え？」

「驚くのも無理ないよ、あきら。だって私はあるとき、自らの欲望に負けてあかりの部屋に押し入ろうとしか考えていなかったんだ。その私が、そのとき既に懸念を抱えていたなど分かるはずもないよ」

そうだ、あのかのゆたかはかなりの暴走をしていたはず。

そのときに懸念　ゆうなと鉢合わせするかもしれない可能性を危惧していたとは思えないのだが……。

「少し話が飛ぶけど、それからしばらくしてここの部屋、私がシャワーを浴びている最中にあきらとゆうなが鉢合わせしてしまったね？　そのすぐ後、私がシャワーを浴び終え、私も対面した。そのときに私がそれを誤魔化そうといった嘘を覚えているかい？」

「うん、覚えてるよ」

簡単に言えば、ゆたかがシャワーを浴びていたのはゆたかの家の風呂が壊れたからで、俺はそのゆたかのために風呂を提供しただけ、というものだったはず。

「あれはね、あらかじめゆうなと鉢合わせする可能性を危惧してい

たからつけた嘘なんだ」

「あらかじめ、と言うと……」

「そう、この部屋であることをあきらに勧められたときだ。いや、具体的にいつからかは問題じゃないね。あきらに誘われてからこの部屋に着てシャワーを浴び終えるまでの間、私はずっとゆうなと鉢合わせするかもしれない懸念を抱きつつ行動していたのだから」

俺の心の内の疑問符を受け取ったのか、ゆたかは表情を少し和らいだものにする。

「これから仮に、私がゆうなと鉢合わせするかもしれない危険を考慮しながら動いていたとして、順を追って話そう。まず私がこの部屋に着いてした行動は何だったか、あきは覚えているかい？」

「最初に……？」

額に手を当て、頭の中を探るように思考を巡らせる。

ええと、あのときのゆたかは玄関先で家の中をキョロキョロ見回した後

「あ……鍵を確認した」

「そう、そういうことだよ、あきら」

ゆたかは体を横に向け、先ほどから腕を組みながら黙って聞いて

いる菊地原先生を挟み、ここからも見える玄関に向かって指を差す。

「私は最初に家の戸締まりを確認した。ただの戸締まりではないよ。おそらく合鍵を持っているだろうゆうなでも簡単に開けられないように、チーロックを確認したんだ。もつともその考えは、チーロックが壊れていたことで無意味なものになってしまったけどね」

だからあのとき、ゆたかは真っ先にうちの壊れたチーロックを発見して……。

「そしたらその後、私はシャワーを浴びる行動に移る。その間に考えられることは山ほどだ。普段あかりが使っているお風呂はこれなのかと思ったり、これからするであろうあきらとの行為を想像もした。そしてゆうなと鉢合わせする危険性を見ていた私は、こうも考えた」

ゆたかは向き直り、俺と視線をぶつける。

「もしも今、ゆうながこの部屋に来たらどうしよう、とね」

ゆたかは自身の両手を体の横に、腰の位置まで上げて少し開く。

「あきら、いきなりだが私についてどう思うかい？ いや何、好きか嫌いかということではない。私の性格について、どんな印象を持っているのか聞きたいんだ。正直にね」

ゆたかの性格……？

本当にいきなり聞かれて戸惑うが、しかしあまり迷うような質問でもないと答える。

「はつきり言えるほど俺はゆたかと付き合い長くないんだけど、ゆたかは堂々としてる印象があるかな。喋り方も、なんか立派だし」

「ありがとう、あきら。誉めてもらうようで嬉しいんだが、実際の私の性格は正反対でね。私は、すごく臆病者なんだ」

臆病者という言葉にゆたかを組み合わせたとき、強烈な違和感を覚える。

それはまさしく正反対と称するのがもつともで、ゆたかがそんな性格をしているとはとても思えないのだが……。

「とても信じられない、といった顔をしているね、あきは」

はつとして自分の頬に両手を当てると、ゆたかに小さく吹き出されてしまう。

「いや、あきはは分かりやすくて助かるよ。皮肉でも何でもなく、純粹にね。この場には、私も含めて本心の読めない人ばかり集まっているものでね」

見ればゆたかは軽い笑みを浮かべ、菊地原先生は寡黙を貫きながらも柔和な表情から同意を受け取れる。

俺の右に視線を向けてゆうなも見たのだが、やはりそちらから見えるのはゆうなの背中のみだったのだけど。

さて、と言うゆたかの声が聞こえ、視線をゆたかに戻す。

「話を戻そう。例えばその信じられない気持ちも、こういった事情になれば信じてくれると思うよ。 今日、あきらと一緒にいた私の行動を思い返してくれれば、私がいかに臆病なのかが分かる、とね」

しばらく続いているように思うゆたかの語りは、まだ止まることを知らず続いていく。

「まず思い出してほしいのは、私から告白したのに、あかりには私があかりを好いていることを知られていない事実だ」

「えっと、ゆたかが酔った勢いで「好きだ」って言ったのに、友達としてとしか取られなかったってやつだよな？」

「な、なかなか私に恥ずかしいエピソードを持ち出してくるね……。まあそれの方がゆうなにも分かりやすいだろう。あきらが言ってくれたように、私は一度あかりに告白している。それもゆうなと付き合う前のあかりにね」

気になって見たゆうなの様子は変わらない。

「だがそれはたった一度きり。しかも酒に酔った勢いでだ。簡潔に告白したのは、それ以上言葉が長ければ言うに耐えられないからで、友達として取られたことを知った後で告白できていないのは、つまりそういうことなんだ」

どうやら今でも苦い思い出らしいそれは、ゆたかの表情を歪ませるだけの力があつたよう。

伏し目がちになったゆたかのそれからは自嘲めいたものが伝わってくる。

「もちろん他にもある。例えばこのあかりの盗撮待ち受けだって」

自身のジープンのポケットから取り出したるは、俺も今日見たばかりのゆたかの新しい携帯電話。

折りたたみ式のそれを開き、見せつけるようにするのは言葉通りの待ち受け画面　あかりを盗撮しただろう写メだった。

「これだって、一度振られたあと私の恋心に気付かれるのを恐れて遠くから撮るしかなかったものなんだ。もちろんあきらに説明したように、その可愛さから思いがけず、という衝動もあつただけだね」

大学では頑なに認めなかったそれを自ら「盗撮」と言うとは、きつとゆたかの中でこの話はそれだけ落ちているものなのだろう。

薄く笑うゆたかの表情に苦みを取れることが、それを雄弁しているようだった。

「これだけ言えば分かってもらえたかな、私がどれだけ臆病者であ

るかを」

「え、えっと……」

「ああ、済まない。優しいあきらには答えづらい質問だったね。別に答えてなくても構わないよ。心の内で考えておいてもらえばね」

それこそ答えにくいと思うのだが、先の質問で答えを濁らせたのは事実で……。

「さあ話は戻るよ。それだけ臆病な私のことだ、ゆうなと鉢合わせすることを意識している状況下で、シャワーを浴びながら考えられる時間がある。となれば、臆病な私はリスクを回避するための思考に逃げてしまうのは必然だろう？」

また返答に困った俺に、ゆたかはくすりと笑う。

「事実、考えてしまったんだ。だから私のような愚鈍な頭でも、ゆうなに対してあの程度の嘘をつくことができた。もし即興で嘘をつかなければならなかったとしたら、あれよりも酷いことになっただろうね」

「……ちよつといいかな？」

別に拳手の必要などないのだが、それよりも俺は引っかかりの覚えた言葉を忘れないように口にする。

「即興……あれって、ゆたかの即興の嘘じゃなかったの？」

もし即興でついた嘘でなかったならば、俺には一つ思い当たる事

実がある。

ゆたかの首が横に動き出すのと同じ、俺は視線を右に、ゆうなに向けた。

「違うよ、あきら。あれは即興じゃない。私がシャワーを浴びながら、あれでも必死に考えた誤魔化し方だったんだ」

びっくり、と見間違いにも思えるゆうなの小さな肩の揺れ。

ゆたかのあの嘘が即興でないとするなら、一つ、歪むことがある。

それは今、小さいながらも確実に反応を見せたゆうなの言っていた、ゆたかを犯人と疑う仮説だ。

「あきら、話を続けてもいいかい？」

「あ、うん、大丈夫だよ」

ゆうなのことを見ていたのを気にしたらしく声を掛けられ、一度この思考は置こうと思う。

「なら続けよう。もはや私のネガティブキャンペーンのようになっ
てしまっているのだが、後少しだけ。今までの話で私がゆうなと鉢
合わせしてしまうことを危惧していたと分かってもらえたと思うけ
ど、そこまでは大丈夫かい？」

「うん、分かるよ」

話題の度に掘り下げられていくので、何となくではあるが。

「ありがとう。なら私の問題点はもう見えるね。そうした危険性を承知していながらもあきらかに助言の一つもせず、そこどころか流されることに甘んじて、流された上でどうにかしようなどと自らの欲に逆らえなかったことだ」

具体的に言おう、とゆたか。

「私はこの部屋に来るという魅力のため、最悪のケースを想定していたにも関わらず黙って見過ごしたんだ。私からちゃんと言っておけば、こんなことにならなくて済んだはずなのにね。あまりに愚直で醜い愚行だよ。ほら、」

言って、ゆたかが取り出すのは先ほどの携帯電話で、あの待ち受け画面が見える。

「これだって私が欲望に流された結果だ。臆病でビクビクしながら撮ったはずなのに、私はいつも見ていたいという気持ちから他人にバレやすい待ち受け画面に設定し、挙げ句にあきらに見つかってしまった。本当、バカで考えなしの行為だ」

考えなし、と言えばそうなんだろう。

あんな写メを待ち受け画面にしていたら、下手すればあかりに見つかる可能性だってあったのに。

と、話していたゆたかの口が真一文字に結ばれる。

背は、元から真っ直ぐだったそれをよりしゃんとさせ、直立に。

「今日のことだって私の考えなしが原因で、またそもそも浮気紛いのことになってしまったのも全て私の責任だ。改めて、本当に申し訳なかった」

それを締めとするようにゆたかの頭が下げられたのだった。

俺が一つ息を吐くだけの時間溜め、それからゆたかは顔を上げる。見られた表情は苦笑いで、また垂れた髪のを耳にかけ直していた。

「私から私の反省点を挙げるなら以上だけど、あきらやゆうなからは何かあるかい？」

「俺たちから？」

「そうだよ、あきら。先生が開いてくれたこれは反省会だ。一方的に懺悔するだけじゃない、聞いてくれた相手からも反省すべき点を受け入れるべきだと思うんだ。そうでなければ反省会にならない」

そうですね、とゆたかが問うた先は菊地原先生。

聞かれた本人は頷き、

「いやあ、ゆたか君は飲み込みが早くて助かるね。うん、実に助かる。だが度がすぎて私の出番がないじゃないか、ん？ いい加減、

私は自分の影の薄さに懸念を抱きつつあるのだが、どうかね？」

「いえ先生は出来る限り存在を薄くしていただきます。女ばかりのこの空間に先生は不適格なので、厚かましくされると迷惑です。極力、ご協力を」

「き、厳しいね、ゆたか君は……」

俺もそう思う。

とりあえず菊地原先生の扱いについては置くとして、反省会の進行としてゆたかの提言は正しいよう。

ならばならって俺も考えを巡らせるべきなのだが……その前に一つだけ。

顔の位置まで右手を挙手し、

「ゆたか、ちよつといいかな？ さっきゆたかが言ってたことについてなんだけど」

「それは受け付けられないよ、あきら君」

遮ったのは菊地原先生。

見れば菊地原先生の表情はとても真面目に固められており、だからこそ今の発言を止められた意味が分からなくなる。

「な、何ですか？」

「分からのかね？ 恐らくこれから言わんとしていた君の発言は、ゆうな君が言つべきことと重複するからだよ」

そうした発言で一番の反応を見せたのは、やはり的にされたゆうなだった。

気が付けば、俺に背中を向け続けていたゆうなは菊地原先生の方に向き直り、視線さえ合わせている。

見える横顔は固く、苦虫を噛み潰したようなそれ。

「……私は、言いませんよ？」

「おや、言わないのかね？」

喉の奥からようやく絞り出したようなゆうなの声に対し、すぐさま菊地原先生はおどけたように肩をすくめる。

「ゆたか君も言っていたが、これはチャンスなのだよ？ 頑固な性格の君からすれば、おそらく二度とないくらいのビッグチャンスだ。主催の私が言つのもなんだが、参加すべきだと思うがね」

「い、嫌です……」

「ほう、なら君はずっとひた隠しにするのかね？ 例えもう二度とあかり君と会えなくなる可能性を孕んでいようと」

「そんなこと……」

「前にも言ったが、これには強制力はないから好きにすると良い。決して私から言うことはないからね、君から言わなければ全ては闇に包まれたままだ。……だが、それでいいとは思わんのだろう？ 違うかね？」

「……っ」

ゆうなは視線を右に、壁へと逸らした。

おかげで再び俺からゆうなの表情を見て取ることができなくなるが、

「き、菊地原先生、あんまりゆうなをいじめないでください。これじゃあ……」

「君はどっちの味方かね、あきら君」

「え……？ そ、それは……」

「私は君の助けになるよう、ゆうな君を説得しているだけだ。君に損はないと思うのだが、何故止めるのかね？」

「う……っ」

菊地原先生を止めたかと問われればそうなのだが、真意は止めるところではない。

こつも責められているゆうなの姿が気の毒になり、そうしたのだ。

けどそれは菊地原先生の厚意を削ぐ形になるのも確かで、目的を優先するなら協力すべきなのかもしれない。

でも、だからってこんな風にゆうなを……。

「あきら君、君は本当に何も分かっていないな。ゆたか君は自らを愚鈍と称したが、私はこう思うよ。この中で誰よりも愚鈍なのはあきら君だとね」

「　　な、何だよそれっ!？」

かつと頭に血が上るのが分かった。

俺自身の言葉遣いにハツとした時には遅く、しかしその熱は冷めない。

「何で菊地原先生を止めたぐらいでそこまで言われなくちゃならないんですかっ？　俺には意味が分かりません」

「少し落ち着きたまえよ。見苦しいと思わんかね？」

「だ、だから……!」

「ストップだ、あきら。あまり声を荒げちゃいけない」

目の前には黒のシャツ。

熱中しすぎて気付かなかったらしく、いつの間にか俺と菊地原先

生の間に割り込むゆたかの姿があった。

ゆたかは俺の方を向いており、いつの間にか中腰になっていた俺の肩に手を置く。

それがきつかけとなり、俺はまたベッドに腰掛けた。

「君は熱くなりやすいんだ。だからそうなたら、すぐ落ち着こうね？」

「でも、菊地原先生が……っ」

「そうだね、私もそう思うよ」

今度は踵を返して菊地原先生の方へと向き直る。

俺から見えるのは、ゆたかの広く真っ直ぐな背中だけ。

「先生、さすがに今のあきらに対する発言には納得がいきません。説明してもらえますか？」

「説明も何も、私は思ったままのことをあきら君に言っただけだよ、ゆたか君。それでは説明にならんかね？」

「なりませんね」

ゆたかが言い放つ。

「それ以前の発言にはそれなりの行動理由があったと理解できます。予測にしかありませんが、先生とゆうなには二人にしかない秘密が

あるみたいですからね。ですが、あきらに対してそんな言い方する必要はなかったんじゃないですか？ あんなけしかけるような、侮辱する言い方……」

「必要はあったよ」

菊地原先生が言い切る。

「あきら君はあまりに物事を把握しなさすぎる。いや本人からすればそんなことはないのだろうが、しかしそうした認識は邪魔ではない。まだあきら君の番ではないが、今のうちからそう教えておくべきだと私は思ったのだよ」

例えば、と前置き。

「先ほど私が止めたあきら君の発言があるね？ あれはあきら君があまりに即決すぎるから止めたんだ。本来ならその点についてはゆうな君が話すべきなのに、わざわざ先んじることはないだろう？ だから私はそれを止めた」

俺から見えるのはゆたかの背中だけだが、それを通して分かる菊地原先生の苛立ち。

いや苛立ちと言うには色の薄く声音も語調も普段と変わらないものだが、しかしそうとしか取れない感情を受ける。

「今のこともそうだ。状況から察する予測にすぎないが、あきら君はゆうな君の秘密について何も知らないはずだ。なのにあきら君は

恐らく同情からゆうな君を庇おうとしたのだよ。そうした行動がゆうな君のためにならないとも知らずに」

「先生……」

「私は間違っているかね？ あきら君はもっと慎重に、自分をわきまえるべきだ。そうだろう？」

それに答える者はいない。

ただ沈黙が流れ、俺は何とも言い返せなくて下唇を噛む。

（まるで、俺が無頓着なことしかしてなかったみたいな言い方……
っ）

まるで、ではないのだろう、菊地原先生からすれば。

俺のした行動は菊地原先生の邪魔。

そうした認識だった。

でも、

「わけ……分かんないし……」

何でこんなに言われなくちゃいけないのか、本当に分からない。

ゆうなを気の毒に思っちゃいけないはずなんてない。

いてもたってもいられない感情に流されたとはいえ、止めちゃい

けないなんてこともない。

責められる理由は、どこだ？

「まだそんなことを言っているのかね？」

冷やかな声が、ゆたかを挟んで聞こえてきた。

「ならば話そうではないか、君の気付いていない反省すべき点について、私の口からね」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2960m/>

俺はレズになりたくなかった

2011年4月3日22時27分発行